
雨の中の薔薇

須藤彦吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の中の薔薇

【Nコード】

N1473R

【作者名】

須藤彦吉

【あらすじ】

「ある男の人のアジトを突き止めて欲しいの」

福岡の裏街で調査事務所を営む俺の下を訪れた女子高生が持ち込んだ奇妙な依頼。未成年の依頼は受けられないが、姪の友人を無下にも出来ず、俺は調査に乗り出すことにした。

そんなときに持ち込まれたもう一つの依頼。17年前に男と出奔した実業家の娘がいつの間にかこの街に戻り、殺人事件の重要参考人として追われているというのだ。元警官という経歴を見こまれ、警察よりも先に娘を見つけて欲しいという老人の依頼を受けて、俺

は失踪した娘のその後を辿り始めるのだが

第1章

1

その少女が入ってきたとき、俺はてっきり隣のモデルプロダクションの来客が開けるべきドアを間違えたのだと思った。校章らしきワッペン付きの濃紺のブレザー、臙脂と紺のレジメンタルのネクタイ、襟先が丸くなった白いブラウス、緑と赤のタータンチェックのフリースカート、紺のハイソックス、濃いワイン色のローファー、黒っぽい革の学生鞆。何処からどう見ても、探偵事務所とは無縁の女子高生だったからだ。

外は季節外れの夕立が降っていて、その残滓がスパンコールのように彼女の肩やポニーテールの黒髪にも残っていた。傘を持っている様子はなかった。もうすぐ一〇月になるうというのに、まさか夕立に降られるとは思わなかったのだろう。

彼女は手にしていたメモと事務所の中を交互に眺めてから、デスクに両脚を放り出して 西日本スポーツ を読んでいる俺に場違いなゴリラを見るような視線を止めた。

「ねえ、ちょっと?」

「モデル志望なら事務所は隣だよ」

「えっ?」

「間違えてウチのドアを開ける娘がたまにいるんだ。ここはビルの管理入室」

俺はそれだけ言って新聞記事に戻った。

見ていなくても彼女が困惑しているのが伝わってきた。無理もあるまい。福岡の繁華街、天神の裏通りにある雑居ビルの三階。五坪ちよつとの手狭な事務所にはマホガニー材のデスクと俺が座っている革張りの肘掛け椅子、それと同じ椅子が来客用に向かい合わせに置いてあるだけだ。パーティションの裏にはキッチンとロッカー、ファイルキャビネットがあるが、それは彼女のいるところからは見えない。他に調度の類と云えば、壁に掲げてあるアンディ・ウォーホルのスープ缶のリトグラフと探偵業の届出証くらいのものだ。前者は貰い物、後者も県公安委員会に書類を何枚か出す必要があった以外は似たようなものだ。

「……ねえ、ちよつと！」

同じセリフだったが、今度は静かな怒気が込められていた。俺は新聞を下ろした。

少女と言ってみたが、彼女にはそう呼ぶのを躊躇わされるような大人びた雰囲気があった。しなやかなラインを描く眉と機嫌の悪い猫のような挑戦的な眼差し。面長な輪郭の真ん中につんと立った形の良い鼻梁が真っ直ぐに通っている。当世の女子高生にしては珍しく念入りなメイクを施している感じではなかったが、ゼリーのようにはぼつてりした唇だけはルージユを引いたように赤かった。スレンダーな均整のとれた体つきで身長は一七センチ前後、その半分以上が脚に見えた。

「何だい？」

「ここってカミヤシロって人の事務所よね？」

「そうだが？」

「じゃあ、あんたがその」「口にはいけない単語のような微妙な間だった。「探偵さん、なの？」

俺はしばらく彼女を見据えてから、新聞を畳んでデスクに放った。

「どつちやらそつらしいな」

「らしいって？」

「言つと怪しまれるか笑われるんで、自分からは探偵と名乗らない

ことにしているんだ。初めまして、当調査事務所、所長の上社龍二だ」

彼女は小さく頷くと、メモをくしゃっと握り潰してブレザーのポケットに押し込んだ。

「ここ、看板も出てないのね。捜すのに苦労したわ」

「そいつは悪かったね。どういう御用件かな？」

「ここって探偵事務所なんですよ。調べて欲しいことがあるに決まってるじゃない」

「確かにそうだな」

俺は彼女に依頼人用の椅子を勧めて名刺を渡した。俺のフルネームと事務所の所在地、電話とファックスの番号、携帯電話の番号とメールアドレス。口さがない友人たちからは「それらしいキャッチフレーズを入れるべきだ」という意見も賜っているが、いいアイデアが浮かばないので、それは募集中ということにしてある。

彼女はババ抜きのパバを引いたような手つきで俺の名刺を摘んでいたが、やがて、生徒手帳に名刺を挟んでポケットに入れた。

どう対応するべきか、〇・五秒ほど考えを巡らせた。

真っ先に浮かんだのはとっとと追いつ返すことだった。彼女の用件が何であれ、そもそも未成年者の依頼は受けられないからだ。

しかし、彼女の用事が必ずしも探偵への依頼とは限らない。彼女は報道研のメンバーで来るべき文化祭に向けて特集記事を書くことを求められていて、その題材に探偵の実態を選んだのかもしれないからだ。まんざらでつち上げのホラ話でもない。去年の夏、本当にそういう目的の中学生が電話をかけてきたことがあるからだ。

一秒後に、俺は話を聞いてみるくらいなら構わないだろうという結論に達した。一つには抱えていた依頼を片付けたばかりで時間を持て余していたこと、もう一つは彼女が着ている制服に見覚えがあったからだ。

「君の名前は？」

躊躇いに似た短い沈黙。

「 真奈。榊原真奈」

「ジエームズ・ボンドみたいな自己紹介だな」

「何のこと？」

「 Bond・ James Bond 今の若い子は007

なんか観ないか」

「 慰めの報酬 なら見たわ。アタシ、映画好きなの」

「なるほど。だが、個人的にはダニエル・クレイグはあまり好きじゃないな。テイモシー・ダルトンがボンドのイメージが一番近いんじゃないかな。ダイアナ妃もそう言っていたそうだ」

「それ、誰？」

「知らないのはどちらだい。ダルトン、それともダイアナ妃？」

「……どっちも。ねえ、ひよっとしてアタシの話、聞く気ないの？ 危うく「そうだ」と言いかけたのを何とかこらえた。」

「そんなことはないさ。何か飲むかい？」

「何かあるの？」

「コーヒー」

「ん……他には？」

「バルヴェニーの12年物がある。グラスも三つ、ちゃんと本棚の裏に隠してある」

「アタシ、高校生なんだけど？」

彼女の口元に一瞬、薄い笑みが浮かんだ。どうやら デイ・アフター・トウモロロー も見たことがあるらしい。

彼女はコーヒーでいいと言った。俺はインスタントをマグカップで二杯淹れた。カップを手渡すと彼女は両手で包み込むようにカップを持った。

「話を聞く前に一つ教えて欲しいことがある。俺のことを誰に聞いたんだ？」

「そんなこと、どうでもいいでしょ？」

「それがあまり良くないんだ。その制服に紅華女学園のものだな？」
真奈の唇がシニカルに歪んだ。

「あんだ、女子高の制服に詳しいの？」

「他にもいろいろと詳しいことはある。これでも博識で通っていてね。時間を計らずにパスタをアルデンテに茹でるコツからアボリジニの雨乞いの儀式の手順まで、何でもござれだ。しかし、その制服を知っているのは別の理由だ」

「へえ」

彼女は少し翳のある笑顔が浮かべた。自分だけが事情を知っていて、それを内心得意に思っているような笑みだった。

「由真に聞いたの。アタシが探偵を探してるって言ったら、自分の叔父さんが天神で探偵事務所を開いてるって教えてくれたわ。すごく頼りになる人だって」

「そいつはどうも。同級生なのか？」

真奈は頷いた。由真と同じなら、彼女も高校二年生ということになる。

脳裏に悪戯つぼく笑う小娘の顔が浮かんだ。徳永由真。かつての同僚の忘れ形見と直接顔を合わせたのはどれくらい前のことだろうか。

「クラスは違うけどね。あの子は普通科、アタシは特進」

「頭が良いんだな」

「子供の頃から塾を掛け持ちさせられてるから、テスト慣れしてるっただけ。由真の方がアタシなんかよりよっぽど悪知恵が働くわ。

あの子とは部活が一緒なの」

「何部だ？」

「空手部」

「あのお嬢様学校にそんなものがあるのか？」

「そう呼ばれていたのは昔の話だって、ママが言ってたわ。OG会の副会長なの」

「なるほど。ところで、由真は君に探偵を雇う理由は訊かなかったのか？」

「訊かれたわよ。親友だもん」真奈は事もなげに言った。「でも、

それはアタシの個人的なことだからって言ったら、それ以上は訊かれなかった。あの子、そういうところ、意外と察してくれるの」

「なるほど」

「……何か言いたいことあるの？」

「いや、別に。昨今ではお互いの私的な部分に踏み込まないのが友情における美德だと聞いたことがあるだけさ。その結果、友だちをみすみす見殺しにしても後悔しないのかと思うこともしばしばあるがね」

真奈は俺を射竦めるように見た。反撃の言葉を捜しているのは確かだったが、彼女は何も言わなかった。代わりに薄いため息を漏らした。

「ねえ、そろそろ話を聞いてくれる？」

「いいだろう。話してくれ」

真奈は考えをまとめるようにほんの数秒、天井に目をやった。

「ある男の人のアジトを突き止めて欲しいの」

「アジト？」

「そうとしか言いようがないわ。要するに、実際に住んでるマンションとは別に持つてる家のこと」

「ほう？」

彼女が言っていることの意味を考えてみた。

女子高生がある男　住居とは別にマンションの部屋か、一軒家を所有できるだけの財力なり社会的地位を有する男　のめぐらを知りたがっている。目的は何か。彼女はその男の愛人で、最近つれなくなった年上の彼氏の動向を知りたいのだろうか。それとも、男に対して弱みを握っていて、カネを巻き上げるべく身辺調査をしたのだろうか。

「その男について、君が知ってることを話してくれ」

「名前は熊谷幹夫。仕事はウチの病院の事務長。自分で経営コンサルタントの会社もやってるって言ってた。歳はパパと一緒にだから五十四か、五十五。住所は冷泉町の　ロイヤル・アルカザール冷泉町

ってマンション。冷泉公園の真向かいだけど、分かる？」

「おそらく。ところで君は今、ウチの病院と言ったな？」

「敬聖会総合病院って知ってる？」

「地行浜の少し手前にあるでかい病院だな」

「それは昔の話。今の本院は愛宕の少し先にあるわ。三年前に移転したから」

俺が知る敬聖会病院はヤフードームやシーホークホテルがあるウオーターフロントに程近い一画にある筈だった。しかし、そう言えばテレビのニュースで、福岡市内に幾つもの系列病院やクリニックスを持つ医療法人が西区の果ての広大な敷地に白亜の大病院をぶつ建てたという話を聞いた記憶はあった。俺もそろそろ生活習慣病やメタボリック症候群で身体にガタが始められる年齢だが、幸いなことに今のところは病気が知らずで来ている。おかげで福岡の病院事情には疎い。

「創立者の三人の医者の一人在アタシのひい爺さんかひいひい爺さんなの。その流れでウチは医者一家なのよね。今の院長はアタシのパパ」

「なるほど。君は敬聖会の院長の御令嬢という訳か」

「……そんな上等なモンじゃないわ」

何故か、真奈は吐き捨てるように言った。

俺はジョン・プレイヤー・スペシャルを一本引き抜いてジッポで火をつけた。黒地に金色のモールドとロゴが入ったパッケージは洒落た棺桶のようにも見える。タバコを吸うことは緩慢な自殺であるという視点に立てば強ち関連のない物でもない。

「他に熊谷氏について知っていることは？」

「あの人、パパの高校の時の同級生なの。パパは医者になって、熊谷さんは警察官になったんだけど、一〇何年か　確か、十四年前に警察を辞めて、今の仕事を始めたって言ってた。ウチの病院に関わるようになったのもその頃からって話だけど、詳しいことはアタシも知らない」

「コンサル会社の名前と住所は分かるか？」

「熊谷総合企画、住所は竹下駅の近く。電話番号は――」

真奈はスマートフォンメモリのメモリを繰って番号を読み上げた。呼び出された番号は局番が“4”で始まる博多区のものだった。

「警官から経営コンサルタントか。華麗なる転身というやつだな」

「そういえば、あんたも警察官だったんだって？」

「由真がしゃべったのか？」

真奈は小さく頷いた。

「熊谷さんのこと、何か知ってる？」

「残念ながら知らない。十四年前なら、俺は県警の薬物対策課に配属されたばかりの駆け出しだった。熊谷の家族構成はどうなってる？」

「独身。バツ一じゃなくて、そもそも結婚したことないんだって。

昔、ママの妹と付き合ってたらしいけどね」

「ママの妹？ ずいぶん他人行儀な呼び方だな」

「会ったことないんだもん。アタシがちっちゃい時に死んじゃったから」

「それはそれは。若くして亡くなってようだが、彼女の死因は？」

「病気じゃないかな。どうして？」

「特に意味はない。ちなみにママの妹の名前は？」

「榊原佳織」

「……ちよつと待った。榊原というのは君の母方の姓なのか？」

「そうよ。ママたちは二人姉妹で男の兄弟がいなかったから、パパを婿養子にしたの。だから院長はパパ、理事長はママなの。それがどうかした？」

俺はレポート用紙に相関図を描いた。福岡でも指折りの大病院を経営する一族がいて、理事長を務める妻と婿入りして院長職にある夫がいる。夫の友人は警察を辞めて経営コンサルタントになり、院長のツテで事務長という要職にまで辿りついた。しかもそいつはかつて理事長の妹と付き合っていたという。そして今、夫妻の娘は探

偵を雇って、ひよつとしたら叔父だったかもしれない男の隠れ家を捜そうとしている。なかなか入り組んだ人間関係だ。

「つまり、君と熊谷幹夫はそれなりに近い間柄にある訳だな？」

「どっちかと言えばね。アタシにも兄貴にも気さくな感じで話しかけてくれるし、アタシたちも本当の親戚より普通に話せるかな」

「お兄さんがいるのか？」

「ウチの病院に勤めてるわ。ERにね。ねえ、アタシは熊谷さんのアジトを見つけて欲しいって言ってるのよ。それなのに、どうしてウチの家族のことなんか訊くの？」

「特に理由はない。ただ、俺と熊谷幹夫の間には、君と君の家族以外に接点らしきものがないんだ。今のところね」

「……ふうん」

真奈は納得したような、していないような顔をしていた。俺はデスクの引き出しからGPS発信機を取り出して真奈に渡した。

「これ、何？」

「熊谷の車の中に放り込んでくれ」

GPSロガーという位置情報記録装置にPHSモジュールを組み合わせてあり、二〇分置きに蓄積されたデータを専用のサーバにメールで送るようになってる。サーバにアクセスすれば車の移動経路を把握できるという訳だ。

俺は装置の操作方法や機器の設置に関する注意点を説明した。真奈は機械に弱いタイプではなく、俺が言ったことを難なく理解した。尤も車の種類には疎いようで、熊谷の車については“黒っぽいイタリアの高級車”と今一つ要領を得なかった。

「しょうがないじゃない、車に興味ないし」

「まあ、そうだろうな。とりあえず、こいつで熊谷の行動範囲を調べれば何か出てくるかもしれない」

「だといいいけど。ねえ、尾行とかしないの？」

「とりあえず今のところはやるつもりはない。尾行には最低でも三人の人員が必要なんだ。最初に言ったように俺は個人営業でね。下

請けに出すととなるとカネがかかる」

「お金ならあるわ」

真奈は学生鞆から銀行の封筒を取り出した。見た目だけでも女子高生が持ち歩くような金額の厚みでないことは明らかだった。

俺はぬるくなり始めたコーヒを一息に飲み干した。

「そいつを受け取る前に、どうしても聞いておかなくてはならないことがある」

「何？」

「君が熊谷の別宅　君の言葉を借りれば“アジト”だな。そいつを捜す理由は何だ？」

「それは……」

彼女の目に嫌な光が走った。この商売ではしばしば見かける目の色だった。依頼人は必ずしも真実を語らない。いや、真実の全てを語らないというべきか。誰だって自分に不利なことや言いたくないことは言わずに避けて通りたいものだ。

俺が黙っている間、真奈も同じように黙って俺をジッと見ていた。二人して黙り込んでいると壁越しにリズムカルに床材を叩く音が聞こえてきた。ちょうど隣のモデルプロダクションで夕方のレッスンが始まる時間だった。自分が管理するビルの悪口を言いたくないが、何せ古い建物なのでちよつと大きな音はまるつきり筒抜けなのだ。

「……それを言わなきゃ、引き受けてくれないの？」

「そういうことだ」

それ以前に俺は子供に雇われるつもりはなかった。一つには未成年者に発行した請求書が正当と看做されることが皆無に等しいこと、もう一つは場末の雑居ビルで覗き屋稼業を営む俺にも“子供を食い物にしない”という程度にはモラルがあるからだ。言い足すなら真奈は俺の“自称・姪”の親友であり、本当に困っているのなら手を貸すことはやぶさかではない。但し、その為には彼女の嘘や隠し事を許すことは出来なかった。

真奈は不服そうに頬を膨らませながら、険しい顔で考えを巡らせ

ていた。俺はゆっくりと時間をかけてJPSの煙を吸い込み、同じくらい時間をかけて吐き出した。そんなことで間をとったところで彼女の感情を逆撫でせずに済む訳ではないが、ないよりはましだろう。

「……いいわ。だったら、他のところに行くから」

長い沈黙の後、真奈は呪詛のような低い声でそう言った。俺は殊更わざとらしいため息をついてみせた。

「他所が引き受けてくれるとは限らないぞ？」

「そうかもしれないけど、アタシには時間がないの。あんたが引き受けてくれないんだったら、そうするしかないでしょ？」

「好きにすればいいさ。だが、後でクレームが出ないように一つだけ忠告しておくよ」

「……何？」

「料金を先払いするなら、未成年者の依頼でも引き受けてくれる探偵事務所は見つかるだろう。だが、そういう輩は油断がならんからくれぐれも気をつけることだ。料金をボツタくられたり適当な報告書で誤魔化される程度で済めばいいが、事と次第ではもっと酷いことになるかもしれない」

「どういう意味？」

「いろいろと調べていると、いつの間にか、熊谷よりも君の周辺に関わる事実がこぼれ出てきたりするものさ。自分の仕事を悪しざまに言いたくないが、探偵と強請り屋の境界線は実に曖昧でね。五〇絡みの警察上がりのオツサンを追いかけるより、君みたいな可愛い女子高生をどうにかした方がカネになると考え始める可能性は意外と高いんじゃないか？」

真奈はさつと顔を赤らめた。

「………そんなの、分かんないじゃない」

「分かるんだよ。君みたいな世間知らずの子をこの業界の専門用語で何というか、知ってるかい？」

「何よ？」

「カモ”っていうんだ」

「最ッ低！」

「褒め言葉と受け取っておこう」

俺はサミュエル・スパイドばりの底意地の悪い微笑を浮かべてみせた。

真奈は怒りの視線を俺に投げつけると、床を踏み抜かんばかりの足音を立てながら事務所を出て行った。俗に“火の出るような視線”という慣用句があるが、もし真奈の視線にそんな力があつたら、俺は黒焦げにされていたに違いなかった。

第2章

2

床を踏み抜かんばかりの足音が去っていくのを聞きながら、俺はパソコンを立ち上げて 医療法人敬聖会 のサイトを捜した。

トップページにある高台から写したような病院全景の写真には、病院というより真新しいリゾートホテルのような豪奢さがあった。所在地は福岡市西区。六本松から移転した九州大学キャンパスの近くで、ここ数年でずいぶんと開発が進んだ地区だ。それ以前の西区と言えば地の果ての田舎だったが、今や市内有数のベッドタウンと化している。

沿革のページには昭和どころか大正時代からの歴史が載っていて、挨拶という項目に榊原誠一という名の院長の写真があった。真奈にどことなく似た精悍な顔立ちの五〇代半ばくらいの男だった。理事長の写真はないが、理事の一覧に榊原姓の人物が二人いる。榊原麻子、榊原祐輔。

真奈の話では敬聖会を設立したのは三人の医師ということだったが、他の理事に共通の苗字はなかった。榊原家が理事長と院長の地位を独占しているところを見ると、他の二家は今はそれほどの力を持っていないようだった。そうでなければ部外者の経営コンサルタントを事務長という要職に迎えることは出来ないだろう。その熊谷幹夫の名前はホームページの何処にも載っていないかった。

俺はスポーツ新聞に戻った。ホークスの記事が紙面の大半を占め

ることで知られる地元紙は、奇跡的な逆転優勝からしばらくの間は喜び一色だったが、最近は一色が一色だがプレーオフを無事に勝ち抜けるかどうかだけが唯一の関心事になっていた。

ホークスはどういう訳かこの制度とおそろしく相性が悪く、ポストシーズンで優勝する力があってもなかなか日本シリーズに辿り着くことが出来ない。今日の紙面にもおそらく第一戦に先発するであろうエースの仕上がりが今一つ良くないことを危惧する論説が躍っている。勝負事というのは始まってみないと分からないものだが、データによるとホークスは過去のプレーオフで第一線をすべて落としている。紙面の反応は無理もないと言えなくもない。

野球面は一通り読み終えた。サッカーにも興味がないではないが、誰かに貰ったチケットでスタジアムに足を運んだ時にサポーターと称する愚連隊もどきの集団に辟易して以来、どうもアビスパには関心が持てないのだ。

Jリーグ創生期に静岡からこのチームが移転してきた頃は、ちょうどホークスがどん底だった時期で、当時の福岡市民はテレビのインタビューに「Jリーグが来るならホークスは無くなってもいい」などと平気で答えていた。しかし、今ではアビスパは一部と二部を行き来するシーズンを繰り返して、市民の関心もそれに伴ってすっかり薄れてしまっている。熱しやすく冷めやすいとは博多っ子の気質を指す言葉だが、ここまで露骨だと笑えるのを通り越して怖ろしくなってくる。

仕方ないのでギャンブル欄の斜め読みに取り掛かった。

いなくなつてから気づいたが、部屋の中には真奈がつけていたらしい柑橘系の残り香が置き手紙のように漂っていた。

それは最後に会った時に由真がつけていたフレグランスにひどく似ていた。誕生日のプレゼントが欲しいという彼女に買い与えたもので、数日後に届いたメールに買って貰った二本のうち的一本を親友にプレゼントしたと書いてあった。それが真奈なのかもしれない。叔父さん、だと？

俺と由真の間に血縁関係は存在しない。おそらく、衆目を憚る俺と徳永夫妻の関係を説明するのを避ける為にそう言ったのだろうが、由真が俺を叔父と紹介したのが初めてではないのも事実だった。俺がそれをひどく嫌っていることも、何らかの形でクレームをつけることも分かっている筈だ。

(ねえ、リュウさん。どうしてあたしのこと、そんなに邪険にするの?)

由真はいつも俺にそう言う。その度に俺はぶっきらぼうな態度で返事を濁す。他人がやっていれば冷笑を浴びせたくなるような陳腐な光景だ。

しかし、俺にはそうすることしか出来ない。

* * *

五年前、相棒だった徳永真司が麻薬事件の捜査中に命を落としたとき、本来、一緒にいるべきだった俺はつまらない電話を掛ける為に奴の傍にいなかった。

電話の相手は他ならぬ徳永の細君だった。

お世辞にも美人とは言えなかったが愛嬌のある顔立ちで、丸っこい大きな目が別の生き物のように気忙しく動いている女だった。男の目から見ればせいぜい“ふつくらしている”という程度の体つきだったが、本人は自分の体型をひどく気にしていて、当時の流行のダイエットの大半に手を出していた筈だ。そのときの電話も、広い意味で言えば彼女のダイエットの失敗に関わるものだった。但し、薬物対策課のエースと呼ばれる夫には言えない類の。

鳴り響く六発の銃声を耳にして現場に駆け付けたとき、俺が目にしたのは血の海に横たわる相棒の姿だった。

たった二人で取引現場を押さえるような危険な執行に及んだ訳で

はない。それは関係者への単なる聞き込みに過ぎない筈だったのだ。徳永の不幸は現場にいたのがタレ込みと違う現実と妄想の区別もつかなくなつたジャンキーだったこと、その男が古びた　しかし、殺傷能力をしっかりと維持した　スミス・アンド・ウェッソンを手にしていたことだった。

弾切れの拳銃のトリガーを何度も引き絞りながらニタニタ笑うジャンキーを俺が殴り殺さずに済んだのは、そいつが異常に打たれ強い身体だったか、そうでなければ奇跡以外の何物でもなかった。

自分がいたら悲劇を食い止められたかどうか。それは今でも分からない。しかし、結果として徳永を見殺しにしたのは紛れもない事実だった。おまけに俺は、徳永の細君が夫の後を追ってダンプカーの前に身を投げることも止められなかった。

それは残された一人娘の養育費を払い続けたくらいで贖える罪ではないのだ。

* * *

芸能面を斜め読みしながら二本のJPSを灰に変える作業に没頭してから、俺は　ナカス・ハッピー・クレジット　の店長の直通番号に電話を掛けた。

「てめえ、何の用だッ！」

店長の猪俣はあらかじめ受話器を掴んで待つていたような速さで電話に出た。誰も挨拶もなく、いきなり怒鳴られるのはいつものことだった。ドスの効いたしわがれ声は債務者を脅かし続けて一〇数年の豊富なキャリアを感じさせた。

「久しぶりだな」

「久しぶりじゃねえよ、ここに掛けてくんなッつてんだろぅが！」

「仕方がないだろう。携帯の番号をやりとりするのは都合が悪いと言つて、この番号を教えたのはおまえだ」

「……そうだったか？」

猪俣は怒鳴り声から一転して声を潜めた。

「でもよ、こつちの番号だって良かアないんだ。カシラがかけてきたときに塞がってたら、後でエライ目に遭わされるんだよ」

「そういえば、この電話は組事務所とのホットラインだと言っていたな」

「何故、てめえがそれを知ってる？」

「前に飲んだときにおまえ自身が言ったんだよ。アルコールが入ると口が軽くなる癖はどうにかした方がいいぞ」

猪俣豪太。元十両の強面の巨漢で、俺が巡査部長に昇進して中洲で交番勤務をしていた時に知り合った男だ。地回りのヤクザとの喧嘩で一般人に怪我人を出してしまい、有力なタニマチのおかげで表沙汰にはならなかったが、事実上の廃業を余儀なくされている。その後、揉めた相手の暴力団の親分に気に入られて斯界に入り、意外と数字に強いという理由でフロント企業の一つを任されて現在に至るといふ訳だ。

俺は翌年に薬物対策課に出戻ったので目立った直接対決はなかったが、取り締まる側と取り締まれる側という敵対関係はずっと続いていた。ところが、妹をオーバードーズで亡くしている猪俣は組の薬物関係の商売を嫌悪していて、いつの間にか俺にそれとなく情報流すようになった。俺の側に与えるような見返りはなかったが、猪俣にしてみれば自分の周りから麻薬でシノギを上げる人間が減ればそれで良かったらしい。

ちなみに猪俣は熱狂的なホークスファンでもあり、年に何度か一緒にホークスの試合を見に行き、そのついでに屋台で酒を飲む関係が続いている。昔は少年野球のピッチャーだったが食が細くて体も小さく、球威よりはコントロールで勝負するタイプだったそうだが、人は変わるものだ。

「で、何の用だ？」

猪俣は繰り返した。ぜいぜいと息が上がっている。力士を辞めても食生活はそのまま、しかし運動量は確実に落ちている。そのツケ

は確実にこの男の心肺機能を蝕んでいる。

「プレーオフの展望について、おまえさんの意見を聞こうと思って」

「ふざけんなよ」

「冗談だ」

「くだらねえ話が見たいだけなら切るぜ。サツと付き合いがあるのが上にバレるとマズいんだ」

「俺はもう警官じゃないよ」

「ああ、そうかい。だったら言い替えよう。サツ上がりの薄汚い覗き屋と知り合いなんて事が世間に知れたら、恥ずかしくて明日から外を歩けねえんだよ」

「人生の裏街道を歩いているくせに何を言ってる」

「うるせえよ」

電話の向こうからは店内のざわざわした物音が受話器から聞こえてきた。一応は県知事の認可を受けた真つ当な貸金業者であり、電話の鳴る音と対応する事務員の声はこの会社にもあるものだ。電話口で債務者を脅しつける怒鳴り声や借金のカタに風俗に売られる女の悲鳴は聞こえない。尤もそれは違法行為をやっていないのではなく、そういう部門が別にあるというだけの話なのだが。

「調べて貰いたいことがある。おまえのところにある警友会名簿に、俺が言う男が載ってるかどうか見て欲しいんだ」

「警友会名簿……ああ、あれか。どうして、俺がそんなことしなきゃならない？」

「おまえがその名簿を手に入れる時、俺が手を貸してやったからさ。俺が必要がある時はいつでも見せると約束したよな？」

警友会 正確には財団法人福岡県警友会は県警退職者による互助組織で、基本的には退職者同士の親睦や福祉を目的としている。世話になるかどうかはともかく、退職した警官は原則として全員入会することになっている。無論、原則というからには例外があり、不祥事により退職した者や退職後の素行に問題のある者は入れて貰えない。その点も含めて元警官の身元を洗うのに警友会名簿以上の

資料を俺は他に知らない。

「だったら、ウチまで見に来いよ」

「サツ上がりの覗き屋が店に出入りしてもいいのか？」

「チツ！」

猪俣は露骨な舌打ちを受話器に送り込んだ。

「……名前を言え」

「熊谷幹夫。退職年度は十四、五年前」

「そんなもん、全部見てられるかよ。分かったら電話する」

受話器を叩きつけられることは分かっていたのであらかじめ耳から離しておいたが、それでもガチャンという耳障りな音は聞こえた。

出かけようと思ったが、その前に片づけておかなくてはならない雑用を思い出した。俺は引き出しから書類を引っ張り出した。

複数の職業を持つ者にとって本業と副業を分けるものが収入の多寡であるならば、俺の本業はビルオーナーということになる。この事務所が入る大名の雑居ビルを始めとして福岡市内に数軒のテナントビルや賃貸マンションを保有していて、立地の良さも手伝って不況のご時世だというのにそこそこの入居率を維持している。大して折り合いが良い訳でもなかった叔父の遺産であり、相続税を納める為に貯えの大半を吐き出すべきかは迷いどころだったが、結果としてはそれ以上の収入をもたらししてくれている。

とは言っても、実際の業務の大半は知り合いの不動産屋に委託していて、俺がやっているのは書類に目を通して決裁印を押すことだけだ。そうでなければもつと早いうちに一切合財を売りに出してしまっていただろう。俺は本質的にデスクワークには不向きな人間なのだ。

いま手にしているのは中洲にあるビルの修繕費に関する明細とその決裁書だった。何度も同じところが壊れるので俺はもつとちゃんとした仕事をする工務店に替えるように言ったのだが、管理会社の営業の坊やは「ビル自体が古いので仕方がないんです」と繰り返すばかりだった。

今一つ納得行かないが書類にサインをして、手早く管理会社にメールを打った。“いつもの場所に書類を預けておくから近くに寄ったときに持っていつてくれ”というもので、いつもだいたい同じ内容なので件名と必要なところだけ変えて以前のメールを使い回している。

俺は戸締りをして事務所を出た。お隣りのモデルエージェントではウォーキングのレッスンが終わったらしく、廊下に出てきたモデルの卵たちがペットボトルを手に談笑していた。悪戯っぽく笑う彼女たちに俺も同じような微笑を返して階段を下りた。

夕立はとつくに上がってしまっていて、大名の裏路地のアスファルトもおおよそ乾き始めていた。陽が落ち始める時刻が徐々に早くなってきていて、空はすでに残照だけの藍色になりかけていた。

俺は一階のテナントの一つである輸入物のセレクトショップに顔を出した。坊主頭の店主はいつものように商売っ気丸出しの笑顔を俺に向けてきた。

「いらつしゃい、リュウさん。またあ、そんなゴッドファーザーみたいな格好して」

「そうか？」

俺はクラシコイタリアのブラック・スーツ、アイヴォリーのシャツ、ソリッドなボルドーのネクタイという格好だった。口さがない知人たちは俺のファッションセンスを“闇金融の取り立て屋”と評する。マフィア呼ばわりも大して違わないだろう。この店主は何とかして俺にイタリアのサッカー選手のプロデュースによるデニムを買わせようとしているのだが、俺は外出するときは基本的にスーツなので彼の目論見は達成されていない。

俺は店主に書類が入った茶封筒を渡した。

「いつもの坊やに渡しておいてくれ」

「了解。ところでリュウさん、ジャケットのいいのが入ったんですよ。リュウさん好みのレザーの渋いのが。袖だけでも通してみませんか？」

「そうしたら、俺が買わずにいられないことを知ってて言ってるんだろ」

「バレたか」

店主はぺろりと舌を出した。俺は調子を合わせて肩をすくめてみせた。

「今度の事件のカネが入ったら見に来るよ」

「またあ。今度、今度って何回すつばかされましたかね。中洲のホステスじゃあるまいし」

「へえ、君らも中洲に飲みに行くんだな。俺が君ぐらいのときは親不孝通りでしか飲めなかつたが」

「これでも結構手広くやってて、たまになら行けるんですよ」

「今度行くときは是非誘ってくれ」

俺はビルの裏の駐車場から愛車、フェアレディZを引っ張り出し、国道道路から渡辺通りに乗り入れた。探偵が乗るには目立ち過ぎるという意見を聞かないではないが、実際の話、これで誰かの車を追尾することなどないので困ったことはないのだ。

ちょうど夕方のラッシュアワーで、福岡のメインストリートである渡辺通りの流れもかなり悪かった。路線バスの停留所が通り沿いにずらりと並ぶ西鉄福岡駅前には特にひどく、同じ色の路線バスだけで一車線を完全に塞いでしまっている。“路上の暴君”の異名を持つ西鉄バスは路上のヒエラルキーの頂点にあり、運転マナーが悪いことで知られる福岡のドライバーからも苦笑いと失笑で語られる存在だ。一般客を乗せて横方向のGを感じさせる運転をするバス会社を俺は他に知らない。

北天神ランプから都市高速に乗ろうとしていると、猪俣から電話が掛かってきた。

「あつたぞ」

「聞こう」

「熊谷幹夫、退職年度は一九九六年。現住所は博多区冷泉町。自宅の電話番号は載ってない。現在の職場は熊谷総合企画。博多区竹下

四丁目。こっちは電話番号も載ってる」

猪俣が電話番号を読み上げた。真奈が言ったものと同じだった。

分かったのは熊谷幹夫が経歴詐称をしていないことと、警察を辞めた理由が不祥事ではないということだ。無論、有力者の後ろ盾で横車を押せばその辺の規則を曲げることも出来るだろうが、そこまですて警友会名簿に名前を載せるメリットはないだろう。経歴に箔が付きそうな医療法人の事務長職を載せず、敢えてコンサルタントの方を載せている理由は不明。

「こいつがどうしたんだ？」

「ちよつとした身辺調査さ。警察OBという話なんでフカシじゃないことを確かめておきたかったんだ」

「ちよつとした？ 警察OBの身辺調査が？」

「興味があるのか？」

「……別に。用事はそれだけか？」

俺はそれだけだと答えた。猪俣は電話を切りそうになったが思い返したように「……そういえば」と言った。

「何だ？」

「前から訊こうと思ってたんだが、上社、どうしておまえの名前はこの名簿に載ってねえんだ？」

「会費が払えそうにないと言ったら、入会を拒否されたのさ」

「つまらねえ嘘をつくな。何か理由があるんだろ？」

「さあな。知りたかったら、探偵を雇って調べてみたらどうだ？」

そう言っつて、返事を待たずに電話を切った。

第3章

3

敬聖会福岡総合病院は福岡市西区、九州大学伊都キャンパス開設に伴って開業したJRの駅の近くにあった。

ホームページを見て抱いた印象はそれほど外れていなかった。郊外型ショッピングセンター並みの広大な敷地に白亜の病棟が整然と建ち並び、ちよつとしたリゾートホテルと間違いそうな豪華な老人保健施設、付き添いの家族向けの宿泊施設、果ては一般客も利用可能な温泉センターまで併設されている。敷地全体にたくさんの樹木が都市開発の辻褄合わせのように植えられていて、けたたましくサイレンを鳴らしながら駆け込んでくる救急車の姿がなければ病院とは思えないほどだ。

俺は 総合管理棟 と銘打たれた一際大きな建物の裏手にある職員用駐車場にZを乗り入れ、スペースを探しているふりしながら停まっている車を眺めた。

大半は国産のセダンやワンボックス、軽自動車だったが、病棟の通用口に隣接する植え込みで仕切られた一画には輸入車や国産高級車が集中して停まっていた。医者と弁護士はドイツ車好きが多いと誰かに聞いた覚えがあるが、根拠はともかく、確かにメルセデス・ベンツやBMW、オペルの割合は高かった。

真奈が言う“黒っぽいイタリアの高級車”に当てはまるのは、ダイクブルーのマセラッティのクーペが一台だけだった。両隣がシル

バーの4ドアのメルセデス・ベンツと古いヴォルヴォのセダンだったせいか、マセラッティのエレガントなシルエットは仕事場にイブニングドレスで現れた女のように浮いていた。他にイタリア車は年式の古いイエローのランチア・デルタHFが一台だけだった。ちょうどランチアがスバルと共にWRCを席巻していた頃のモデルだが、インテグラレかどうかは分からない。実はどちらも同じくらいの価格なのだが、車に疎い女子高生はランチアを高級車だとは思わな
いだろう。

マセラッティとその背後の通用口を同時に視野に入れられるところに一台分のスペースがあった。地面にペンキで“夜勤者専用”とあったが、俺は構わずそこにZを突っ込んで、ハンディカムをダッシュボードにセットした。すでに周囲は暗くなっていて、シートをリクライニングさせて身を隠す必要はなさそうだった。

動きがあつたのは張り込みを始めてから三〇分後のことだった。通用口の自動ドアから出てきた人影が車を捜すように辺りを見渡すと、少し早足でマセラッティに近付いた。ピンと伸ばした人差し指の先でキーホルダーを回しながら、どことなく周囲の目を気にしているような仕種だった。

目を凝らすまでもなく人影は榊原真奈だった。丈の短いワインレッドのライダーズジャケット、脚や腰のラインがはつきり出るスキニーデニム。腰の後ろにヒップバッグを回して、足元はごついライディングブーツ。

真奈はマセラッティのドライバーズシートに乗り込むとポケットから何かを取り出し、シートを倒してリアシートに上半身を突っ込んだ。こちらからだてフロントガラスごしに真奈の尻を眺める形になった。ほっそりした体躯の割にポリウレームのある尻だった。

リアシートで何かをしていたのはほんの一、二分のことだった。真奈は元の姿勢に戻るとスマートフォンを取り出し、険しい表情でしばらく画面を注視していた。そして、何事もなかったようにマセラッティを降りて何かを手にもそそくさと通用口から病棟の中に戻っ

て行った。遠目にははつきり分からないが形はCDのケースに見える。まるで車の中に置きっ放しのCDを取りに来たような一連の動作だった。

俺は自分のiPhoneを取り出し、GPS発信機のデータを記録しているサーバにアクセスしてみた。

すでに一度目の位置情報の転送が行われていた。市内有数の高級住宅地、平尾辺りを出発点に城南線から西新経由で早良街道、そのまま西区へ一直線に移動している。発信機の現在地点は敬聖会総合病院の総合病棟。おそらく次の送信でマセラッティが停まっている地点になる筈だ。

真奈がGPS発信機を使わなければ自分でマセラッティに発信機を仕掛けなくてはならないところだったが、サイコロは俺の目論見通りに転がったようだった。ついでに言えば熊谷の車がマセラッティであることの確認も取れた。

俺は早良署交通課の橘の携帯電話を鳴らした。

「やあ、ずいぶんとお見限りだね」

「場末のスナックのママみたいなことを言うな、気持ち悪い」

「久しぶりなのは本当だろ？」

橘はくつくつと笑った。マイクが背後を猛スピードで行き交う車の轟音を拾っている。事故処理係のこの男が外にいるということは、早良署管内の何処かで交通事故があったということだ。

橘信吾は重度の不眠症を逆手にとつて当直勤務を引き受けることで周囲に恩を売り、その間に俺のような外部の人間に警察の情報を流してちまちまと小遣いを稼ぐ典型的な不良警官だ。県議会議員の娘と結婚していてそれなりの生活をしているのだが、恐妻家のくせに病的な女好きでいつも遊ぶ金に窮している。尤も本人なりのモラルの境界線はあるようで、捜査情報漏洩のような大きなヤマを踏むことはまずない。要するに小者なのだが、俺にとつてはそれくらいの方が使い勝手が良く、しばしば利用させて貰っている。

「おまえの手を煩わすような仕事がなかったんでね。今、いいか？」

「構わないよ。何の用？」

「調べて欲しいことがある。車の登録ナンバーから持ち主を割り出して欲しいんだ」

「小っちゃい仕事だなあ。陸運支局に行けば？」

「そう出来れば、おまえに頼ったりしない」

「そりゃそうだ」

橘の言うように、かつては登録ナンバーさえ分かっていたら陸運支局で持ち主の名前やその住所を簡単に調べることが出来た。しかし、昨今は犯罪への利用の防止や個人情報保護の観点から、登録情報を調べるにはナンバーだけではなく車台番号の下七桁が必要になっている。車台番号は概ねボンネットを開けないと見えないところに刻印されている為、事実上、合法的な手法でのナンバーからの割り出しは不可能ということになる。

「で、幾ら出す？」

橘はまったく悪びれることなく言った。

「幾ら欲しい？」

「照会するだけだから……五千円ってところかな？」

「オーケー。ちよつと待て」

俺はiPhoneからネットバンキングのサイトに接続して、登録している橘の口座に五千円を振り込んだ。

「振り込んだぞ」

三〇秒ほど待たされた。

「オッケー、確認したよ。ナンバーを言って」

俺はマセラッティのナンバーを読み上げた。電話の向こうで橘がそれを復唱した。パトカーに搭載されているコンソールを操作しているのだろう。

「あつた……へえ、マセラッティのグラントウーリズモか。良い車だね」

「車検証には型式しか載ってない筈だぞ」

「僕が何年、交通課にいますと思ってるんだい？」

交通課云々はともかく、車好きの中にはメーカーの型式名だけで車の種類を言い当てる人間がいる。こういう輩と車について話すといちいち聞き返さなくてはならないので面倒だが、たまに役に立つので無下に返すことも出来ない。

「メモは取れるかい？」

俺は取れると答えた。

「所有者は……リース会社だね。福岡トライアルカーズ・リミテッド。所在地は東区香椎」

「ああ、あそこか」

「知ってるの？」

「外車専門のリース会社だ。ずいぶん昔の話だが、社長の娘をMDMAの所持で挙げたことがある。マセラッティの借主は誰だ？」

「使用者はキシカワ・インヴェステイションになってるね」

「住所は？」

「博多区竹下一丁目。ねえ、これっておたくの同業者じゃないの？」

「そうかもしれないが、聞いたことはないな」

「へえ」

“ INVESTIGATION ” 捜査、調査を意味する単語だ。お茶の間に馴染みのある単語ではないので正規の社名に使われることは稀だが、たまに調査会社の社名の英語表記に使われることはある。しかし、少なくとも福岡市とその近郊で営業する探偵社や興信所でその名を聞いたことはない。

それ以上、登録ナンバーから割り出せることはなかった。俺は礼を言っただけで電話を切り、マセラッティの監視に戻った。話しながら横目でモニタを見ていた限りではマセラッティに近づく人物はいなかった。

動きがあつたのは一時間後のことだった。先ほど、真奈が出てきた通用口からスーツ姿の壮年の男と秘書風の女が連れだつて出てきたのだ。

二人は親しげというほどではないが、他人行儀でもないという感

じの距離を保っていた。男はマセラッティのドライバーズシートのドアを開け、手にしていたアタツシエケースをリアシートに無造作に放り込んだ。女はメリハリのあるグラマラスな身体でモンローウオークを決めながら優雅な仕草でパツセンジャーシートに滑り込んだ。

ちょうど携帯電話に着信があつたようで、男は開けっぱなしのドアに手をかけたまま電話で話し始めた。何を言っているのかは分からなくても、押しの強い口調で喋っていることは遠目でも見て取れた。

記憶を懸命に辿つたが見覚えのある顔ではなかつた。しかし、警察上がりと言われれば確かに納得出来る雰囲気は持ち合わせていた。がっしりとアゴの張り出した敵つい顔立ちで、歳は五十台前半といったところだろうか。短く硬そうな髪を逆立てて、同じような質感の太い眉と口ひげを蓄えている。顔の面積に比べて小さく鋭い目が抜け目のなさそうな印象を与えている。太い鼻には明らかに骨折の形跡が見える。右の耳たぶが潰れたように変形しているのは、長らく寝技系の格闘技をやっている人間によくある特徴だった。身長は俺と同じくらいか、少し低いくらい　およそ一七四、五センチ程度だ。横幅も年齢と職業的貫禄に必要な分だけある。

一方、パツセンジャーシートの女は無表情に自分の携帯電話をチエックしていた。丸顔でやや派手目の顔立ち、おそらくパーマがかかっているらしい短い黒髪。流行りのやや細い眼鏡をかけている。電話を終えた男に声をかける表情はやはりそれほど気易いものではなかつた。それは話しかける男に向かつて彼女が小さく会釈をしてみせたことから分かつた。無論、それは職場で周囲の目があるから自重しているというだけかもしれないが。

マセラッティは優雅に駐車スペースから滑り出るとあつという間に職員用駐車場を後にした。

「……さて、と」

カメラを止めて録画を早送りで確認した。必要な画像はちゃんと

撮れていた。俺はZを駐車場から出して、近場で晩飯を済ませられ
そうなどころを捜すことにした。

六本松のマンションに戻ったときには午後十一時を過ぎていた。ファミレスでの男独りのわびしい夕食に時間をかけた訳ではない。那の津通りにある馴染みのカメラ屋に寄って、映像から聞き込み用の写真を作る作業に予想外に時間がかかったのだ。

マセラッティを運転していた男　おそらく熊谷幹夫だろうが、確認は出来ていない　については、元より特徴のある顔立ちなので顔の写り具合や表情で別人に見えることは少なく、どのカットを使うかはそれほど迷わずに済んだ。

問題はパツセンジャーズシートの女だった。病棟から出てきて車に乗るまで、ずっと俯き加減でうまく表情を捉えきれていなかったのだ。車に乗ってから駐車場灯りがフロントウインドウに映り込んでいて、静止画にすると今一つ見づらい画にしかならなかった。あれこれと手を尽くした挙句、ようやく使い物になる写真が出来あがった頃には閉店時間は遠い彼方だった。俺はプリントの代金と割増しの作業料を支払い、店長と巻き添えで居残りする羽目になったアルバイトに缶コーヒートを奢った。店長は満面の営業スマイルを浮かべて「おととい来やがれ」と言った。

女は三〇代の半ばくらい、肉付きのいいふくよかな輪郭、中洲のクラブが似合いそうな男好きのする派手な目鼻立ち、いかにも秘書風の細いセルフレームの眼鏡を掛けていた。髪型はパーマのかかつ

た黒髪のベリーショート、うっすらと脂肪の乗った丸みのある顎と濃いめのブルーのアイシャドウはアメリカのセックスシンボル、ベティ・ブープを連想させた。服装はありきたりなブラウンのパンツスーツに開襟のブラウス。写真では分かりにくいのが、乗り込む前の映像では服越しにも分かるほど胸元が盛り上がっているのが確認できた。足元が映っておらずヒールを差し引いての身長を推測するのは難しかったが、小柄と呼ばれる体躯でないのは間違いない。

この女が正体は今のところは想像するより他にない。普通に解釈すれば事務長付きの秘書といったところなのだろうが、そもそも、いくら大病院でも事務方のトップに秘書が必要かどうかは疑問の余地がある。熊谷には自分で経営する経営コンサルタント会社もあり、そちら側のスタッフというのもあり得る話だった。二人の人間関係は何とも言えない。恐縮するような態度に反してマセラッティに乗り込む女の仕草に慣れがあったのは事実だが、だからと言って、仕事を越える関係があると判断するのは早計というものだ。

GPS発信機のデータによれば、マセラッティは姪浜のロイヤルホストの駐車場に一時間ほど停まってから、東区の千早駅の裏手を經由して市内中心部へ向かい、今は中洲のすぐ東側の冷泉公園の真向かいに停まっていた。真奈によれば熊谷の自宅マンションはその辺りにあるという話だ。

まずは千早駅の裏に何かあるのかを確かめる必要があるが、それは明日でも構うまい。俺はZを駐車場に突っ込んでエントランスまで歩いた。

俺が住んでいるマンションは別府橋通りから裏手に入ったところにある瀟洒な建物で、砂糖菓子を思わせるサンドブラストのかかったベージュの外壁とモスグリーンのベランダが遠くからでも目立っている。手すりの金属の部分も味気ない鉄柵ではなく、アンティークのような飾られたものがあしらわれている。入口の脇のユーカリの木々は来訪者への目印に重宝するが、近所にコアラがないので葉は無造作に生い茂ったままだ。

エントランスホールも小洒落っていて、石畳のような床材とレンガ調のタイルに覆われた壁、蔦を這わせたような無駄にデザイン性の高い入居者用の掲示板がある。郵便受けのネームプレートは真鍮で出来ていて、住人が変わる度にいちいち作り直さなくてはならない面倒な代物だ。天井からはヨーロツパの古城かSMクラブでしか見かけないような鉄製のシャンデリアがぶら下がっている。俺は仕事に疲れて帰りつく度に建築に携わったデザイナーを膝を突き合わせて説教したくなる衝動に駆られるのだが、バブルの終わり頃には掃いて捨てるほどいたその手の輩も今は殆ど生き残っていない。

とは言え、それは俺にとってはいつもの見慣れた光景だった。自動ドアの前で気難しい顔をした女弁護士が俺の帰りを待っている以外は。

「ようやくお帰り？」

植村多香子が言った。コチコチに凝り固まった肛門括約筋を連想させる声だった。

こんな時間だというのに、彼女の身嗜みには一分の隙もなかった。グラマラスとしか褒めようのない大柄な身体を包んでいるのはピンストライプのブラックスーツ。膝丈のタイトスカートとグレーのストッキングが拘束具のように豊満な下半身を締め上げている。福岡地裁の近くに数人で構えている共同法律事務所に所属していて、そこは富裕層相手の財産管理が主な業務なのだが、多香子は元検察官の経験を買われて、顧客のトラブルに際して“法律的助言”という名の横車を押すことをメシの種にしている。示談交渉に入るにあたって入念な情報収集が必要なことも多く、時折、そうした仕事俺に回ってくることもある。

俺は多香子の横を通り過ぎてオートロックの鍵を開けた。

「弁護士先生がこんなところで何をしているんだ？」

「先生はよして。この前の調査のお礼をしてなかったのを思い出して、食事がまだならと思つて誘いに来たの」

「生憎だが晩飯は済ませた。サイゼリヤでペペロンチーノとミラノ

風ドリアを食ってきたんだ。どの辺りがミラノ風なのかはよく分らんがね」

「ワインも飲んだの？ あそこのワインは安い割に美味しいって聞いたことがあるけど」

「らしいな。残念ながら、車だったんで飲んでない」

「そういえば、飲酒運転は嫌いつて言ってたわね」

「嫌いなんじゃない。法を犯すメリットと課せられる刑罰を見比べた時、飲酒運転くらい割に合わん犯罪はないというだけさ」

この辺りの理屈は今さら俺が言うまでもなく、いろんな人間がいるんな場所で繰り返してきただことだ。しかし、博多っ子はこの手の忠告を耳にすると一時的に聴力を失う傾向があるらしく、福岡県は相変わらず飲酒運転事故件数の全国ワースト一位を独走している。

「そういう訳で、申し訳ないがメシは一人で食ってくれ。酒なら付き合わんでもないが」

「私が下戸だつて知つてて言ってるの？」

「そうだったかな？」

ドアを開けて中に入った。多香子は当たり前のように後に続いた。入るなどは言わなかった。そこまでこの女が嫌いな訳ではないからだ。実のところ、彼女にしてみれば俺に邪険な態度を取られる謂れはないのだ。植村多香子が俺のかつての相棒の細君、徳永由実子の姉なのは彼女の落ち度ではない。

エレベータで最上階の自分の部屋に上がった。俺はリビングダイニングの三人掛けのソファの背に脱いだジャケットを放り投げた。シンプルなデザインのスカンジナビアン家具でかつての同居人が新居に持って行こうとしたが、ワンルームには大きすぎるとい理由で泣く泣く置いていった代物だ。俺としては別に興味もなく、邪魔なのでそのうちに売り飛ばそうと思っているのだが、面倒だからという理由でそのままになっている。

多香子はバーバリーのトートバッグを足元に置いて、別の一人掛

けのソファにゆっくりと腰を下ろした。その仕草がぎこちないのは左右のどちらかの膝が悪いからだ。福岡は女子柔道が盛んな土地で、多香子も幼い頃から道場に通っていたそうだが、大学最後の大会で選手生命を断たれるような大怪我を負ってしまったのだという話を由実子に聞かされたことがある。

「相変わらず、殺風景な部屋ね」

「そうかな？」

「いくら寝に帰るだけの部屋でも、せめて、テレビくらいは置くべきだと思っわ。パソコンもないし、オーディオセットもないし。これじゃ、眠れない夜に何にもすることがないじゃない」

「あるさ。本を読めばいい」

「推理小説？」

「昔は。今は哲学書から料理読本まで何でも読むよ。まあ、読んだところで料理はまったく出来ないんだが」

「そうなの？」

「俺にとって料理と理科の実験の違いは、材料をスーパーマーケットで買い揃えられるかどうかの差でしかないのさ。コーヒーでいいか？」

「お願い」

俺はキッチンに行つてコーヒーマシンにミルで挽いた豆を入れ、ポットで給水口に水を注いだ。一〇分ほどかかって出来たコーヒーをマグカップに注ぎ、多香子に手渡した。自分の分にはキャプテンモルガンのラムをほんの少し落とした。コーヒーに入れる酒は好みに分かれるが、俺はブランデーやアイリッシュウイスキーよりも甘みの強いラムの方が気に入っている。

俺は多香子の向かいに腰を下ろした。

「女の子を連れ込んだりしないの？」

「しない。女人禁制なんだ」

「私は？」

「あんたは俺にとって女の括りに入らない。断っておくが褒め言葉

だ

「意味が分からないわ」

「だろうな。言ってる俺にもよく分かっていない。確かなのはかつての同居人が出て行って以来、この部屋にあがったことがある女はあんたと、あんたの妹の二人だけってことだ」

「……そう」

多香子はしばらく俺の顔を見据えていたが、やがて、ひどく疲れ たような薄い溜め息をついた。ふくよかな体型はともかく、多香子と由実子の顔はそれほど似ていないのだが、不意に見せる物憂げな表情だけは驚くほどよく似ていた。

俺が最後に見た由実子も同じような顔をして、同じような溜め息をついた。

* * *

「何だ、これは？」

信じられなかった。いや、信じたくなかった。

しかし、俺の目の前には小さなビニールのパケに包まれた白い粉、“焙り”に使われた痕跡のある灼けたアルミ箔、そして、悪戯を咎められた子供のように怯えて顔を伏せた女がいた。会ったのは久しぶりだったが、もし、それが街角だったなら俺はそれが由実子だとは分からなかっただろう。肌は洗い過ぎて毛羽立ったタオルのように荒れていて、ふくよかだった頬はげっそりとこけていた。目の周りも大きく落ちくぼみ、お世辞にも彫りが深いとはいえない筈の顔には濃い翳がべったりと貼りついていていた。

徳永は何故、妻のここまでの変化に気付かなかったのだろうか。

俺はただ、彼女の夫の間抜けさを呪った。

「……どうするの？ このこと、あの人に言うの？」

由実子は脅えた上目遣いで俺を見た。だが、声には開き直ったよ うなふてぶてしさにも似た響きもあった。

「言える訳ないだろう。一体、どうしてこんな……」

「あなたには分からないわ、リュウ」

「ああ、分からないね。何が不満だったんだ。どうしてシャブになんか、手を出さなきゃならなかった？」

「知らなかったのよ。自分が渡されたのが覚醒剤だったなんて」

体型を気にしてダイエットに励んでいた由実子に、痩せ薬と称してカプセルを渡したのは同じジムに通う女だった。

後から分かったことだが、それは徳永が捜査主任を務める班が摘発しようとしていた密売組織が仕掛けた罠だった。捜査責任者のスキャンダルで捜査を攪乱する、よくあると言えばある手だ。由実子にカプセルを渡した女もまた、覚醒剤を買う金欲しさに由実子を薬漬けにする陰謀に加担させられていたのだった。

俺は由実子の両肩に手を置いた。力任せに掴んでしまいたくなるのを堪えるのにはとてつもない克己心が必要だった。

「いいか、由実子さん。俺の知り合いが飯塚で薬物中毒者の更正施設をやってる。こいつにはいろいろと貸しがあってね、表沙汰にならないように入院させることが出来る筈だ。すぐに入院の手続きをとるから、あんたはすぐに身の回りの物をまとめるんだ」

「そんな……あの人に何て説明すればいいのよ？」

「さすがに事実を伏せたままという訳にはいかないだろう。だが、それは俺が何とかする。なあに、病名なんかどうとでも誤魔化せるさ」

「由実は？ あの子はどうするの？」

「俺が責任を持って面倒を見るよ。あの子はまだ人見知りをするのか？」

「どっちかと言えば。でも、あなたには慣れてるわ。そうなるのにずいぶん時間がかかったけど」

由実子はようやく笑った。燃え尽きる寸前の蠟燭のような弱々しい微笑みだった。

その笑みに応えながら自分がやるうとしていることが正しいのか

どうか、俺は懸命に自問した。警官として取るべき道は一つしかない。覚醒剤取締法違反、所持及び使用容疑での現行犯逮捕。徳永の友人として取るべき道も一つしかない。真実を告げること。

「わたし、もう手遅れじゃないの？」

「馬鹿なことを言うな。確かに楽な道じゃないが、必ず助ける。俺を信じてくれ」

「ねえ、リュウ。どうして、そこまでしてくれるの？」

由実子は救いを求める殉教者のような眼差しで俺の目を覗き込んだ。不思議なことに、何と答えるべきかは瞬時に脳裏に浮かんだ。

今にして思えば、嘘でもいいから「おまえを愛しているからだ」と言うべきだったのかもしれない。仕事にかまけて家庭を顧みない徳永と由実子の間が冷え切っていることは、夫妻の知己であれば誰でも知っていることだった。本当は由実子は赤の他人の俺などではなく、夫に見咎めて欲しかったのだ。無論、確かなこととは言えないのだが。

「親友の妻を助けるのは当然のことさ。そうだろう？」

俺は努めて優しい声で言った。まるで別れ話を切り出したときのように頑なに背を向けて。心の底から落胆した瞳を見返す勇気は俺にはなかった。由実子は冷え切った声で準備が出来たら電話をかけると言った。俺はそうしてくれと答えた。

その日の夜の聞き込みの最中、俺は由実子の準備が出来たという電話をとる為にいるべき配置を離れた。無断でそうした訳ではなく、ちゃんと徳永にそのことは告げた。しかし、その僅かな時間の単独行動中に徳永は命を落とした。

由実子に事の経緯を説明したのは薬物対策課の課長ではなく、殺人事件として事件を担当した捜査一課の管理官だった。デリカシーに欠けるのが相場のキャリア組のボンクラは、彼女の夫が本来とってはならない単独行動をしたこと、その原因が相棒たる俺が職務中に私用の電話を受けていたことにあることを過不足なく説明してくれた。電話の相手が目の前の当人であることもボンクラはしっかり

と伝えてくれた。

ごめんなさい

短いメールを残して由実子が国道をぶっ飛ばすダンプの前に身を投げたのは、翌日の早朝のことだった。自殺なのが明白であることと遺体の損傷が激しかったせいで司法解剖は行われなかった。

一つだけ幸運なことがあったとすれば、おかげで由実子の薬物使用が闇に葬られたことだった。彼女は少なくとも世間体としては、殉職した夫の後を発作的に追った悲劇の妻として三〇数年の短い生涯を終えた。非難があつたとすれば若い娘を残して自殺したことだが、死者を鞭打つことを忌み嫌うこの国の習慣に則り、由実子を悪く言う者はいなかった。

無論、俺との電話のやり取りについて妄想を逞しくする輩は県警の内外に大勢いたが、同じ理由で誰も何も言わなかった。少なくとも表向きは。そして、彼女に向かっては。

* * *

「で、用件は何だ？」

俺は言った。多香子はあからさまな作り笑いを浮かべた。

「だから、一緒に何か食べない？」

「遠慮するよ」

食事の誘いなど最初から信用していなかった。俺と多香子はよほど避けられない事情がない限り、食事を一緒にしたことなどないからだ。

俺はコーヒーをゆっくりと啜った。多香子は俺をじつと見ていた。独身のキャリアウーマンらしくエネルギーギッシュで若々しいが、目許に刻まれた深い皺はそう簡単には誤魔化せない。やがて、多香子は諦めたように短く嘆息した。

「あなたにお願いしたい仕事があるのよ。それも大至急で」

「急ぎの仕事の依頼の割にはアポイントも取らずに待ち伏せか。悠長な話だな」

「私が電話しても、あなたは出ないでしょう？」

「あんたのところの可愛らしいパラリーガルの娘にかけさせればいいのさ。そうすれば、俺だって話くらい聞くよ」

「ディスプレイには番号だけで誰が受話器を握ってるかなんて表示されないのに、どうやって私と彼女たちの区別をつけるの？」

「オスとしての勘」

多香子は鼻先で小さく笑った。それだけだった。

「正直に言っわ。実はつい一時間前まで、この仕事は別の探偵社に持って行く予定だったの。私がアソシエイトのときに勤めていた法律事務所の関連会社があつてね」

「博多第一調査事務所、だな」

多香子が検察官を辞めてしばらくの間、イソ弁 居候弁護士、アソシエイトの同義語 をしていた法律事務所は 博多第一法律事務所 という。そのボス弁護士の弟で十三回連続で司法試験に落ちた男が兄の出資で始めたのが 博多第一調査事務所 だ。弟は弁護士には向いていなかったが経営者としての手腕は悪くないらしく、この不況のご時世でもそこそこ繁盛していると聞いている。

「あそこなら腕も実績もあつて不足はないだろう？」

「ええ。ところが、土壇場でクライアントから調査を依頼する人物についてリクエストを出されたのよ。警察OB、しかも捜査部門にいたことがある人をつてね。そんなの、急に言われても困るんだけど」

「だろうな」

「仕方ないから、先方に条件に合う調査員を回してくれるように頼んだわ。だけど、「いないことはないが急に言われても都合がつかない」って断られちゃつて。そこで

「俺のことを思い出した、と？」

多香子は小さく頷いた。いかにもバツが悪そうな顔をしているが、どうせ演技に決まっているので相手にしなかった。

「プライドに障る話なのは先に謝るわ」

「別に気にしちやいない。依頼の内容は？」

「そこまで話す権限は与えられてないの」

「弁護士ともあるう、あんたが？」

「クライアントが直接会って話したいって言っているの。勿論、その話を聞いてから引き受けるかどうかを判断してくれて構わないし、断ったとしても足を運んでくれた分の謝礼は出すわ」

「クライアントがそう言ってるのか？」

多香子は小さく頷いた。俺はコーヒーの残りを飲み干した。

「あまり愉快的な仕事じゃなさそうだな」

「どうして？」

「弁護士に依頼について話させないのに、話を聞くだけ聞いて帰る探偵に金を払う。クライアント様はそう仰る訳だ。ずいぶんと太っ腹な話だな。それを世間で何と言うか知ってるか？」

「何？」

「口止め料というんだ。真つ当な依頼なら、そんなカネを出さなきゃならない理由はない。まして、そいつは警察出身者、しかも捜査経験者を指定してきた。つまり、それだけヤバい事案ということだ。違うか？」

「まあ、そうね」

多香子はあつさりと認めた。その表情からは先の探偵社に断られた理由がスタッフの都合がつかないからではなく、依頼内容そのものにあることも伺い知れた。尤も追及したところで認めないだろうし、得るものもなさそうなので俺は何も言わなかった。

「それで、大至急ってのはいつの話だ。明日の朝一番か？」

「今からよ」

「……今から？」

「私と一緒に糸島にあるサナトリウムに来て貰うわ。実はさっきか

ら、まだ来られないのかって催促のメールが何通も来ててね」「

「見舞いには非常識な時間だぞ」

「向こうにはそれはあまり関係ないの。不眠症という訳じゃないんでしょけど、夜はあんまり眠れないそうだから。それに、この件についての来客があるのを周囲に見られたくないっていうのもあるのよ」

「ますますヤバそうな話だな」

俺は立ち上がって背もたれのジャケットを引っ掴んだ。二台で行くのかと思っただが、サナトリウムは糸島半島の海側の少し分り難いところにあるとのこと、半ば強制的に多香子の車に乗っていくことになった。

「途中で逃げられると困るから」

「何だ、バレてたのか」

「何年の付き合いだと思ってるの？」

「誤解を招くような表現は控えてくれ。確かに俺はあんたが地検でメスゴリラと呼ばれていた頃から知ってるが、仕事以外で関わったことはほとんどない筈だ」

「確かにそうだけ。で、その何が誤解なの？」

「独身男の一人暮らしの部屋に独身女が入って行って、そういうことを言うと、世間的には二人はデキてるってことになるんだ。写真週刊誌を見る。別々に同じマンションに入って行って滞在時間がそこそこってだけで熱愛と書き立てられる」

「バカバカしい」

「俺もそう思うよ。しかし、騒ぎ立てる側にとっては事実なんてどうだっていいんだ」

「ねえ、リュウ」

多香子の声が冷えた。彼女が俺を“リュウ”と呼ぶときはいつもそうだ。

「あなたはひょっとして、由実子の話をしているの？」

「どうして今、死んでしまったあんたの妹の話をしなきゃならない

？ 俺はただ、その気もないし、その事実もないのに、脇が甘いつ
てだけでつまらないトラブルを呼び込むことがあるとあんたに警告
しただけだ。他意はないよ」

「……そう」

多香子は吐き捨てるように言った。たった一言に込められるだけ
の侮蔑が込められていたような気がした。

日付が変わったばかりのサナトリウムのロビーは、息を殺して何かを見守っているような濃密な静けさに満ちていた。

何を見守っているのかは考えるまでもなかった。俺の母親は夜勤専門の看護婦をしていたことがあるが、明け方に帰ってきたとき、疲れとは異なる翳をしばしばその目に湛えていた。日が昇る前の数時間、朝が訪れるのを待ちきれずに亡くなっていく患者は多いのだそうだ。

糸島半島は福岡市の西側、博多湾の出口を作るように玄界灘に大きく張り出している小高い丘陵地だ。サナトリウムはその海側に面した斜面にあつて、鬱蒼とした森に囲まれている。駐車場からゆるやかに上っていく坂の上にダンスパーティーが開けそうなウッドデッキの前庭があつて、晴れた日にはいかにも日本海らしい重苦しい色の海と、その向こうに浮かぶ壱岐や対馬を見渡すことが出来そうだった。

病院本館は洋館風の瀟洒な二階建てで、あらかじめ知らされていなければペンションかりゾートホテルと言われても信じたに違いない。が、病院はあくまでも病院だった。吹きつける海風が時折、訪問者を脅しつけるように木々を揺さぶる音がする以外は、静養するのにもってこいな環境だった。

「こんなところにサナトリウムがあるなんて知らなかったよ」

「大手の病院が経営してるんだけど、大っぴらに喧伝するような施設じゃないからでしょうね」

俺はロビーを見渡した。外来はないので、受付もどちらかと言えば素っ気ない造りになっている。この時間は誰もいないが、よく見ると監視カメラがあちこちで無人の空間を睥睨していた。警備員が出てこないのは多香子が持っている夜間出入口用のカードキーのおかげだった。

「どちらかと言えばサナトリウムよりホスピスに近いのかしら。ターミナルケアって知ってる？」

「聞いたことだけは」

ターミナルケアとは要するに終末期医療のことで、死に掛けた病人の身体にコードやチューブを突っ込んだり、一本何万円もする薬を湯水の如くぶち込んで“延命治療”という名の拷問を続けるのではなく、身体的苦痛や精神的苦痛を軽減することに主眼を置いた治療を言う。そういう意味では多香子の指摘は正しい。サナトリウムは本来、長期的な療養を必要とする患者の為の療養所を指す。

「何処の病院がやってるんだ？」

「敬聖会っていう医療法人よ」

「……ほう？」

「どうかしたの？」

「いや、別に」

サナトリウムがある糸島半島は前原市に属していて、福岡市の西隣に位置する。敬聖会総合病院がある西区とはお隣さんだ。そういう意味では関連があっても不思議はない。病院をそれらしく見えないう造りにしたがるという点でも通じるものはあった。

「ところで話は変わるが、あなたに一つ言っておかなくてはならないことがあるのを思い出した」

「何？」

「実は今、別件で引き受けている調査があるんだ」

「なんですって？」

多香子は足を止めて俺の顔をまじまじと見た。元々背が高い上に一〇センチくらいのヒールを履いているせいで、一八〇センチの俺とあまり目線が変わらない。

「どうして、それを先に言わないの？」

「言う間もなく、あんたに引つ立てられたからさ。大した調査じゃないんだ。だが、掛け持ち不可なら、俺はここで失礼させて貰うよ。今さら、そんなこと言われても困るわ。まあ、こっちの依頼に差し支えがなければ、大丈夫だと思うけど。念の為にどういう調査なのか、教えて貰えるかしら？」

「そいつは言えない。この仕事にも守秘義務ってヤツがあるんでね。お返しに向こうにあんたのクライアントの依頼を洩らしていいなら、考えないでもないが」

真奈とは正式の契約書を交わしておらず、厳密には探偵業法に言う守秘義務は存在しない。しかし、だから際限なく喋っていいというものでもなからう。その依頼が持ち込まれた経緯に由真 多香子の姪が関わっていることを言いたくない、というのもなくはなかった。

建物の中はシンとしていて、空調は落とされていた。真夜中に院内をうろつく入院患者などいないからだろう。そのせいか、どんよりとした空気の中に病院特有の薬臭さが漂っていた。シンプルな長椅子が並ぶ待合室の奥に背の高い観葉植物で仕切られた一画があって、そこにだけ自動販売機の灯りが煌々と点されている。

自販機の前にほっそりとした人影が一つあった。電源を落とされた分煙機の前で携帯用灰皿でタバコを吹かしていた。

人影は俺と多香子を見つけてこちらを向いた。

「植村先生？」

柔らかく落ち着いた女の声だった。多香子は女に小さく会釈した。

「奥様、こちらがお話しております」

「探偵さんね？」

多香子の言葉を“奥様”が引き継いだ。

彼女は腰まで届きそうな黒髪を丁寧にひつつめて、こんな時間だというのに薄く化粧を施していた。暗がりにあっても目許や口許の周りの皺は隠せていなかったが、それがさほどの老いには見えないタイプだ。整った典雅な顔立ちの中で、細くすっきりと通った鼻筋が気位の高さを主張している。ダークブラウンのニットとカーデイガンのアンサンブル、ベージュのマキシ丈のスカートという地味な出で立ちでも、彼女が着ていれば安物には見えなかった。結婚指輪以外にアクセサリの類は身に着けていない。唯一、華奢な腕によく似合う細い鎖の腕時計をしているだけだ。

彼女は注意深く見ていないと分からないほど少しだけ、俺に会釈した。

「初めまして、原岡の家内です。夜分にお呼び立てして申し訳ありませんね」

「いえ」

俺は自分の名前を名乗り、名刺を手渡した。

「カミヤシロさんとお読みするのね。珍しいお名前」

「よく言われます」

原岡夫人は表書きをさつと眺めただけで名刺を手に握り込んだ。顔は年齢を感じさせなかったが、手は別だった。明らかに老いた女の子だった。

「ご主人は起きておられますか？」

多香子の問いに原岡夫人は小さく頷いた。

「ええ、起きております。というより眠れないのです。明け方にはんの少し、浅い眠りにつくだけで。勿論、具合の悪い時や検査の後などは、疲れとお薬の影響で眠ってしまいますが。本人に言わせるのと、怖いのだそうです」

「何が怖いんです？」

口を挟んだ俺に夫人は曖昧な笑みを見せた。

「死ぬのが、です。眠ってしまったが最後、もう二度と目を覚まさないのではないかと。そんなことを考えてしまうと申しております」

わ

「そんなに病状が思わしくありませんか？」

「あら、植村先生から説明は受けておられないの？」

俺は返事の代わりに肩をすくめた。夫人は多香子に目をやった。

多香子はチラリと俺を見やってから「お話をご主人がされると伺っております」と言った。言い訳がましく聞こえなかったのは日頃の研鑽の賜物だろう。

夫人は少し言葉を選ぶように迷う素振りを見せてから、口を開いた。

「突発性拡張型心筋症というのをご存じ？」

「聞いたことだけは。心肥大の一種ですね。バテイスタ手術とかいうのをやるんじゃないですか？」

俺にとつてバテイスタといえばホークスのさっぱり役に立たなかった助っ人外国人のことだが、そういう名前の心臓手術の存在は知っていた。

夫人は首を横に振った。

「今はもう少し進んだ術式があるそうです。しかし、体力的に手術には耐えられないということで見送られました。後は人工心臓を使うしかないそうですが、そこまでの延命を夫が望んでいないので、今は内科的な処置と痛みを抑えるのが治療の主な柱になっています」

「おかしな話ですね」

スイッチが切れたラジオのように会話が途切れた。

「……どういふことかしら？」

「眠りを拒むほど死ぬことを怖れているのに、一方で受ければ確実に命を長らえる人工心臓の移植は受けたくない。矛盾というのはこのことでは？」

夫人の表情がひどく曇った。ぎゅっと寄せられた眉根が彼女が覚えた不快さを余すことなく表現しきっていた。

「あなたはいつも依頼人にそういう失礼なおことをおっしゃるの、上社さん？」

「まだ何も依頼されていません。それ以前にあなたは何者なのかすら知らされていないんですよ、原岡さん。当然、あなたのご主人の素性もね」

夫人は俺をじつと見据えた。

「……確かにそうですね。自己紹介をさせて戴いてもよろしいかしら？」

「伺いましょう」

隣で無言を通している多香子から、俺の襟首を引つ掴んで投げ飛ばしたがっている気配が伝わってきた。現役時代は内股を得意としていたそうで、俺は一度、取調べ中に暴れたヤクザ者を多香子が真っ逆さまに床に叩きつけた現場を見たことがある。

「主人は原岡修三と申します。私は家内の洋子です。原岡興産という会社をご存じかしら？」

「北部九州一円にガソリンスタンドとカー用品の店を展開している会社ですね。レンタルビデオ屋もやっているんじゃないやありませんでしたか？」

「そうですね。他にも自動車修理工場を幾つかと、損保や生保の代理店もやっております。あと、あまり知られていませんが、レストランも多く手掛けておりますわ。主人の実家は元々手広く商売をやっておりますが、ここまで大きくなったのは主人の代でのことです」

「大したものだ」

皮肉に聞こえないように言うのにはちよつとした技術が必要だった。原岡洋子はチラリと俺を見ただけだった。

「主人は去年、七〇歳になりました。それを機に経営の一線からは身を引いて、会社は後継者として育ててきた人たちに任せることにしたのです。常々、いつまでも自分が口を出し続ける訳にはいかないと申しております。ところが、言ってみればその引退記念のパーティの最中に主人が倒れてしまったのです。拡張型心筋症による心臓発作でした。後で調べれば明らかに兆候はあったのですが、病院嫌いで健康診断の類も口々に受けていなかったので、発見が遅れ

てしまったのです」

「なるほど」

「先程も申しましたが、高齢ということで心臓移植やその他の手術は選択肢にありませんでした。もともと、日本では心臓移植はドナ―が滅多に現れない上に順番待ちなので、最初から諦めていたのですが。主人も今さら他人様の心臓を戴いてまで長生きしなくてもいい、と申しました」

「人工心臓を拒否した理由は？」

「主人の父親は胃癌で亡くなったのですが、その時の延命治療を見て自分はそうまでしたくないという思いがあったそうです。だからこそ大手の総合病院ではなく、こちらで終末期医療を受ける方を選んだのです」

一代で会社を成長させた経営者の話も、その男が引退と同時に身体を壊す話も、その原因が医者に掛かることを嫌って発見が遅れたせいであることも世間でよく耳にする話だった。機械に繋がれて物理的に生きているというだけの延命を拒む患者の話も聞かないではない。しかし、そうでありながら眠るのを嫌がるほど死を怖れる男の話は聞いたことがなかった。

俺の疑問は顔に表れていたようだった。夫人は唇を噛んでから、薄い溜め息を洩らした。

「夫はずっとそうなのではありません。眠れなくなったのはここ数週間の話です」

「ほう？」

「ですが、その話はやはり本人から聞いて戴いた方が良いでしょう。ご案内しますわ」

夫人は踵を返して歩き出した。自分が歩けばそれに付き従うのが当然と言わんばかりの仕草だった。

待合室を出ると長い廊下があった。ブラインド越しに差し込む月明かりと非常口を示すランプの緑色の灯りが光源のすべてだったが、特に障害物もない一本道なので支障はなかった。ただ、突き当りに

あつた内装に不釣り合いな金属製のドアが開いたときには、その奥の明るさに思わず目を叛けずにはいられなかった。

そこは唐突に病院らしい造りでクリーム色の壁は真新しく、リノリウムの緑色の床はピカピカに磨き上げられていた。二手に分かれる廊下の角に緩やかにカーブするカウンターがあつて、中はナースステーションらしく、モニタや様々な機器類、カルテを収めたフアイル棚、ブリーフィングに使つらしいテーブルなどが機能的に配置されていた。左の廊下はすぐに背後のものと同じような金属製のドアで行き止まりになっていた。右の廊下は更に建物の奥へと続いている。

夜間の当直はナース服よりもラガーシャツの方が似合いそうな若い看護師だった。半袖から覗く腕はギリシャ彫刻のように太く、親指の付け根のところできんにスピルさせているボールペンが爪楊枝のように頼りなく見えた。バランスをとろうとするなら棍棒のようなペンを握らせる必要がある分厚い掌だった。

看護師は書き掛けの書類から目を上げ、座っていた椅子から立ち上がった。原岡夫人に小さく会釈して、多香子にも同じ仕種をした俺にだけ、首をへし折るのにどの程度の本気を出さなくてはならないかを測るような目を向けてきた。

「そちらの方はお見舞いですか？」

「お客様です」

「申し訳ありません、奥様。この時間に来客を病室にお通しするのは、規則で禁じられています」

「どういふことですか？」

夫人は静かに言った。丁寧な口調だが、その方が他人を威圧出来ることを知っている人間の丁寧さだった。男は一瞬だけ怯んだように首を竦めたが、すぐに失点を取り返そうとするように過剰に胸を張った。

「規則ですから」

「聞いたことがないわ、そんな規則」

「原岡様については、これまでそういう機会がありませんでしたので。ご入院されたときにお渡ししたパンフレットには書いてあるんですが」

「そんなもの、いちいち読む訳ないでしょう」

「それは」

看護師は押し黙った。言葉の続きが“私どもの落ち度ではありません”なのは明日の昼飯を賭けてもよかった。夫人は苛立たしそうな目で看護師をねめつけた。

「危急のことなのです。貴方で判断できないのでしたら、理事長と話しましょうか？」

「いえ……」

「でしたら、余計な事を言わずに通しなさい」

夫人はピシヤリと言い放った。看護師は渋々、廊下の奥を手で指し示した。“どうぞ”と言わないのが最後の矜持のようだった。

ナースステーションの横を通り抜けながら、俺はその出口を見た。例えば俺がさつき、一気に駆け出して奥へ向かおうとしたら、出口に差し掛かったところで彼の全体重を乗せたタックルを喰らうことになっただろう。物々しい警備員を置いていない代わりに、彼のような男が門番の役目も果たしているのだ。

「困ったものです。融通が利かなくて」

病棟へ続く廊下を歩きながら、夫人は憤懣やるかたないといった調子だった。ヒステリーを何とか抑えているといった風情だ。

俺は返事の代わりに曖昧に頷いて見せるだけにしておいた。こういう女は平衡を失いかけたやじろべえのようなもので、持ち堪えさせる為に出来ることは刺激しないことだけなのだ。多香子も俺と同じ考えらしく、何事もなかったように夫人の後ろを歩いていた。

（ホント、余計なことしか言わないのね）

囁くような声で多香子が言った。頭蓋骨の厚さを目測するような目が俺を睨んでいた。慣れっこなのでどうということとはなかったが。

第6章

6

原岡修三の個室は広さこそそれほどでもなかったが、造りはスイートルームも顔負けの豪華さだった。壁には磨き上げられたローズウツドの羽目板が貼り巡らされ、柔らかい間接照明が暗幕のような重たそうな質感のベージュのカーテンを淡いオレンジ色に染めていた。調度類はいずれもヴィクトリア王朝風のアンティークで、とりわけ二つのカウチに挟まれたチェスターブルは値打ち物に見えたが、そんなものが病室にある理由は良く分からなかった。アロマキャンドルの仄かな香りが部屋を満たしていて、物々しいモニターや医療機器がベッドを取り囲んでいなければ、まず病室には見えないだろう。「どうぞ、楽になさってください」

夫人が言った。俺はジャケットを脱いで手に持った。ネクタイも緩めたかったが、さすがにそれはまずいだらうと思いついた。

夫人はベッドサイドに歩み寄って夫に声をかけた。多香子その際に俺の耳元にそつと口を寄せた。

「お願いだから、妙な減らず口を叩かないでよね」

「失礼なことを言うなよ。俺は普通の減らず口しか叩かない」
「後で覚えてなさいよ」

夫人がこちらを向き直った。王に謁見を許すような目つきで近づくように合図された。俺と多香子はベッドの足もとに立った。他は機械に占領されていて場所がなかった。

「あなた、探偵さんがいらっしやいました」

「……ああ」

かすかに衣擦れの音がした。

ベッドはクイーンサイズほどあったが、それに見劣りしない堂々たる体躯の老人だった。言葉を発する準備のような咳払いをすると、喉の奥にひっかかるような雑音が呼吸に混じって聞こえてきた。痰を出す為と思しき管が喉から出されていて、そのせいのようなだったが、顎や首周りに纏わりつく贅肉のせいかもしれない。

「起こしてくれ」

夫人がヘッドボードに手を伸ばした。苦悶の声のようなモーターの唸りと共にベッドの上半分がゆっくりと持ち上がった。

連想したのは貰い物のクラシックのCDのブックレットにあったリヒャルト・ワーグナーの肖像画だった。ざんばらの豊かな白髪、込められるだけの苦悩と気難しさを押し込めたような彫りの深い顔立ち。顔は皺だらけで病人らしい土気色をしていたが、太い眉の下の双眸は燃え残りの炭に残る熾火のように爛々と輝いていた。

「……わしが原岡だ。君が、わしが望んだ男なのか？」

「だと良いのですがね」

左腕に硬いものが当たる感触があった。多香子の肘だった。予想していたので億尾にも出さずに無視することが出来た。

夫人がさつき渡した俺の名刺を夫に見せた。原岡修三はしばらく誤字脱字を捜すかのように表書きにじつと視線を注いでいたが、やがて、納得したように頷いた。贅肉の揺れでかろうじて分かる微かな動きだった。

「……洋子、彼と、二人にしてくれ」

夫人はせっかく用意した飲み物を断られたときのような心外そうな表情を夫に向けた。

「私はいてはいけないんですか？」

「これから話すことは、おまえにとって決して愉快的話じゃない。それは分かっているだろう」

「私は構いませんわ」

「わしが構うんだ。植村先生、君も席を外したまえ」

「えっ？」

「二度、言わねばならんかね？」

追い払う手つきこそしなかったが、目つきはそれと同じか、それ以上に女弁護士を軽んじているように見えた。

当然のことながら、多香子は引き下がらなかった。

「お言葉ですが、私は上村の代わりにこちらの方をお連れしました。立场上、同席させて戴くべきではないかと」

「必要ない。話は家族の内々に関わる事柄なのでな」

「ですが」

「君と議論する気はない。わしが頼んだのは、信用のおける探偵を紹介してくれることで、したり顔で口出しをすることじゃない」

原岡はピシヤリと言い放った。受付時間ぎりぎりの役所の窓口でもここまで言わないだろうというほどのきっぱりした拒絶だった。

息を呑んでいたのはほんの数秒のことだった。多香子はすっと一歩下がり、丁寧に会釈してみせた。

「分かりました。上社さん、ロビーで待ってますから」

渋々とはいえ、多香子が引き下がったのはそれがクライアントの意向というのもあるが、俺がICレコーダーで依頼人との会話を録音していることを知っているからだ。ネクタイピンに高感度マイクを仕込むという古典的な方法だが、他に妥当なマイクの仕掛け場所を俺は見つけていない。

夫人が俺に、夫が水を飲みたいと言ったときの為の給水ボトルの在り処を説明してから、二人は静々と病室を出ていった。

扉が閉じられると、原岡は大きな鼻孔から憤然と息を吹き出した。「女というのは、どうしても、ああやって出しゃばりたがるのだろうか」

「それが女性の専売特許とは限らないでしょう。何事にも自分の息が掛かってないと我慢ならないという人種は多いですよ」

「確かにそうだな。わしもかつてはそうだった」

「今は？」

「遠くまで息を送れるように見えるかね？」

原岡は目だけで俺にベッドサイドのパイプ椅子を勧めた。俺は椅子を持って近づき、彼の傍らに腰を下ろした。原岡は小さく息をついた。

「君のことは少し調べた。県警の薬物対策課にいたそうだな？」

「一番長くいたのはそうです。その前は機動捜査隊、その前は管区機動隊にいました。一応、交番勤務も経験してます。短い間でしたがね」

「そんなことはどうでもいい。警察を辞めたのは五年前。同僚の刑事の殉職に責任を感じて、依願退職したと聞いている」

やりすごすつもりだったが、鼻で笑うのを止められなかった。

「残念ですが、そんな立派な理由ではありません。自分が組織に向いていないことに気付いたんですよ。協調性とは無縁でしたね」

「確かに、わしが話を聞いた相手は君のことを、優秀だったがスタンドプレイに走りたがる癖があったと言っていたよ」

「始末書をコレクションする癖もありました。あなたにそんな戯言を吹き込んだのは権藤警視ですね？」

「どうして、わしが話を聞いたのがその権藤某だと言えるんだ？」

「スタンドプレイ云々などと世迷い事を言いそうなのが、県警ではあの爺さんしかいないからですよ。他の元上司や元同僚に話を訊いたのなら、彼らはこう答えた筈です。“ 上社？ ああ、同僚を見殺しにしたばかりか、その女房に手を出してたのがバレて警察を辞めさせられたヤツだろう？” とね」

原岡は今度ははつきりと頷いた。

「話を聞いたのは君の推測通り、権藤という男だ。これでも九州の財界にはまだ顔が利くのでな。そこから県警の上の方にいる男に君を詳しく知っていそうな男を紹介してくれと頼んだら、権藤警視を紹介してくれたんだ」

「なるほど」

俺が警察を辞めた時の直属の上司だった男は権藤康臣という。定年間の今は警務課の広報関係の部署のそれなりのポストに収まっている筈だ。叩き上げの警官の常として横方向の人脈に富んでいて、餌場を争う野良犬並みに縄張りに煩い警察組織にあつて、その根回しの巧みさと調整力は群を抜いていた。その反面、顔の広さを頼られて厄介事を持ち込まれることも多かったが。現場を離れた今もその辺りは変わらないらしい。

「自分のことを調べられて面白くない、といった顔だな？」

原岡は目を細めて口許を歪めていた。

「そうでもありません。家族の内々に関わる事柄　あなたの言葉を借りればですが、その手のデリケートな話をするのに相手を信用出来るかどうか、確かめずにいられないのも無理からぬことでしょう」

「皮肉のつもりかね？」

「どう取られても構いませんがね。ただ、それだけの影響力をお持ちでしたら、俺のことを調べるよりも優秀な刑事を一人、都合して貰った方が良かったのでは？」

「そう出来たらそうしたかったよ。ああ、誤解せんでくれ。君を軽んじている訳じゃない。そう出来ない理由があるんだ」

「弁護士から聞いていますよ。警察で捜査経験のある探偵をご所望だそうで」

「ああ」

原岡修三は言葉を切るとしばらくの間、そこに答えが書いてあるかのようにじつと天井を見上げていた。その目に何が映っているのか、俺には分からなかった。

「君は」

雑音交じりの声があった。喉の奥で肉挽き器を回しているようなゴツゴツした声だった。

「何です？」

「タバコはやるかね？」

不意の質問だった。俺はシャツのジャケットからJPSのボックスを取り出して見せた。

「いいタバコを吸っているな。ずっとかね？」

「昔はキャメルを吸っていました。しかし、製造がRJレイノルズからJTに移って大幅に味が変わってしまったまいてね」

「わしも昔、キャメルの両切りだった。今の軽いタバコなんか足元にも及ばない代物だった」

「菊池寛が愛したタバコ、というやつですね」

「ああ。と言つても、禁煙したのはもう二〇年近く前の話だが。身体を壊して家内に命とタバコのどちらを取るのかと迫られてな。本当は「タバコに決まってるだろう」と言いたかったが、バブルが弾けてすぐの頃で、会社を生き残らせる為に死ぬ訳にはいかなかったんだ」

「立派な決断だと思います」

世辞ではなかった。おそらく俺には止められないだろう。

原岡はノロノロと手を動かし、サイドテーブルの上の紅茶のカップを指した。水が飲みたいのかと思つて夫人から教わつた給水ボトルに手を伸ばそうとしたら、老人は苛立たしそくに顔を横に振つた。

「違う。下の皿を取りたまえ。灰皿代わりにするんだ」

「吸うつもりなんですか？」

「馬鹿なことを言うな。この身体で肺に煙を入れようものなら、悪霊に憑りつかれたように咳き込む羽目になる。君が吸うんだ。わしはその煙の匂いを嗅ぐだけでいい」

「……いいんですか、そんなことをして？」

「ライターに手を伸ばしながら、何を言っている」

俺はトラウザーズのポケットに手をつ突っ込んでいたが、ジッポを取り出す為ではなかった。俺も携帯用の灰皿くらい持ち歩いていて、それを取り出す為だった。原岡は共犯者を見つけた泥棒のような目で俺を見てニヤリと笑つた。

俺はJPSに火をつけて、原岡の顔に直接当たらないようにゆっ

くりと煙を宙に漂わせた。原岡は首を持ち上げて、JPSの濃いクリーム色の煙を女の香水を嗅ぎ分けるような顔つきで鼻から吸い込んだ。少したけ喉に引っかけたような咳が出たが、大騒ぎをするほどのことはなかった。

咳が収まると、原岡はドツと身体をベッドに預けた。

「他人を使つて悪徳を愉しむようになってはおしまいな」

「愉しめるだけの命があればこそ、でしょう。何故、人工心臓を受け入れようとしななんです？」

老人は俺をねめつめた。弱つていても本来の気質の苛烈さを感じさせる視線だった。

「残りの生涯をベッドの上で機械に繋がれて生きること、どれほどの意味がある？」

「生きなくてはならない目的がないのなら、それでも構わないでしょうね。しかし、あなたはひどく死を恐れていると聞いています」

「洋子が言ったのか？」

俺は頷いた。原岡は唾を吐き捨てるような顔をした。だが、口からは何も飛び出さなかった。

「君は、法に触れる可能性のある依頼でも受けてくれるか？」

「どの法に触れるかにも寄りますがね。しかし、法に触れない依頼しか引き受けないんだったら、俺の商売は成り立ちません」

「“Trouble is my business”か？」

「名刺にそのフレーズを入れておくべきか、いつも迷うんです。ひよつとして、今のタバコはその試験だったんですか？」

「つまらないことをいう男だな、君は。確かに、機械に繋がれてでもわしは生きなくてはならないようだ。少なくとも、目的は果たすまでは」

「目的？」

答えの代わりに再び皺だらけの手が持ち上げり、液晶テレビが置かれた台の上の写真立てを指差した。

俺は立ち上がってその写真を眺めた。若き日の原岡修三と洋子夫

人とは異なる顔立ちの若い女、そして、快活な笑みを浮かべる小学生くらいの女兒が仲睦まじそうにフレームに収まっていた。

「わしの娘を捜し出してくれ。香織が　わしの娘が警察に追われているんだ」

原岡は内臓から声を搾り出すようにそう言った。意外なことに枯れ果てた井戸の周りの土のような皺に囲まれた目の端に小さな涙が光っていた。

「頼む。香織を救い出すまで、わしは死んでも死にきれんだ」

第7章（加筆修正）

7

およそ一時間後、俺と多香子は姪浜のロイヤルホストにいた。

そこは奇しくも熊谷幹夫とその連れの女が食事をした店だったが、特に思惑があつてのことではない。糸島から市内中心部に戻る途中に最初に目に付いたというだけの話だ。

腹は減つていなかったもので、俺はドリンクバーでコーヒーを取つた。こだわりのコーヒーとのことだったが、妙に焦げ臭いだけで味は他のファミリーストランで飲むものと大差はなかった。

多香子はこの店のオニオングラタンスープがお気に入りとのこと
で、さつそくオーダーしていた。“マリリン・モンローがジョー・
デイマジオとの新婚旅行で福岡に滞在した時に三日連続で食した”
という触れ込みの一品だ。但し、普通のロイヤルホストで提供され
るのはマスプロダクト版であり、本物は大濠公園の湖畔にあるレ
ストラン花の木 なるロイヤルグループの高級店でしか食べられな
いとされている。

俺も花の木には何度か行ったことがあるが、実は件の代物をオー
ダーしたことはない。もし同じ味だったら目も当てられないからだ。
「で？」

多香子は鼻から盛大にタバコの煙を吐き出した。注文した料理が
届くまでの間を、ヴァージニア・スリムのメントールを灰に変える
作業で潰すことにしたらしかった。

まだ一〇分も経たないのに、多香子の前の灰皿には吸殻が二本転がり、もうすぐ三本に増えようとしていた。中条きよしの歌によればタバコの吸殻の形で嘘が見抜けるらしいが、多香子の不機嫌さを計る場合はさらに分かりやすかった。ペースが極端に上がるだけでなく、しかめっ面で口の端に横啜えするようになるからだ。若い女がやれば蓮つ葉でだらしなく、年嵩の女がやればひどく貧乏くさく見える仕草で、多香子もその例外ではなかった。

「何がだ？」

「しらばっくれるんじゃないわよ。依頼の内容を話しなさいって言うてるの」

「探偵業法のおかげで俺たちにも守秘義務つてもものがある、と言わなかったか？」

「どうせ守つてないんでしょ」

「人聞きの悪いことを言うな。というか、その吸い方はやめる。いよいよ嫁の貰い手がなくなるぞ」

「……煩いわね、セクハラで訴えるわよ」

やれやれ、女のヒステリにつける薬はない。多香子の不機嫌は主に俺がICレコーダの録音を聞かせることを拒んだことが原因だった。

「本当に原岡から何も聞かされてなかったのか？」

「そうよ。そもそもこの件は私じゃなくて、所長の方の上村に来た話なんだから。それをあのヘタレが厄介事っぽいからって言って、私に押し付けたのよ」

多香子の法律事務所の代表は多香子とは字違いの上村という気の弱そうな男の弁護士が勤めている。法曹資格だけでなく会計士や税理士の資格も持っているという実務のエキスパートだそうだが、揉め事はからつきしで、弁護士法人の設立に際して資金の大半も出したのはその手の仕事を押し付ける人材を欲していたからだ、というのが多香子の人物評だ。四〇代後半になっても浮いた噂一つない堅物とのことで、俺は以前、「モテない同士で結婚すればいいのに」

と言ったことがあるのだが、身の竦むような目で睨まれたので以降は口にしていない。

オニオングラタンスープが届いたので、多香子はタバコを消した。ウェイトレスが立ち去るのを待つて俺は口を開いた。

「しょうがないな、何を話せばいい？」

「取り敢えず、あなたが話しても差し支えないと判断したところまで。原岡氏があなたに何をさせようと構わないけど、顧問弁護士側としては何も知りませんでしたって訳にはいかないのよ。それに弁護士の手を軽く見て欲しくないわ。手を貸せることだってある筈よ」

「違うない」

今のところ、まだ思い浮かんではいなかったが、弁護士の職権を利用できれば楽に事が運ぶ局面が来る可能性はあった。

「依頼の内容だが」

俺はJPSを揉み消して手帳を開いた。テクノロジーがどれだけ進歩して身の回りのものが電子化されていこうと、聞いたことを即座に書き留める手帳の役目だけは取って代わることは出来ない。

「原岡修三の娘、原岡香織の所在を突き止めて欲しいとのことだ。十七年前、付き合っていた男と駆け落ち同然　　というか、一〇〇パーセントの駆け落ちで出奔、その後、東京都墨田区の弁当屋で働いていたことが分かっているが、原岡が連れ戻そうとしなかった為そのまま東京で暮らしているものだと思われる。しかし、その弁当屋はおよそ十四年前に火災で焼失して廃業。以後、従業員の行方は知れない」

「十七年前？　原岡香織って今、何歳なの？」

多香子はスプーンで飴色のたまねぎを器用にすくって口に運んだ。質問の為に食事を中断する気はなさそうだった。

「三十六歳。父親は娘の現在の年齢を整然と言えたことに妙に誇らしげな顔をしていたよ」

「あの世代の父親にとっては、娘の誕生日をそらで言えるだけで立派な家族サービスなのよ。うちの父親もそうだったわ。　　という

ことは、当時、原岡香織は未成年だった訳ね？」

「そうなるな。三十六マイナス十七、イコール十九歳。生まれ月によつては十八歳かもしれないが、いずれにしても二十歳は迎えていない」

「未成年の娘をほつたらかし？ ひどい父親もいたものね」

「そこには原岡家の家庭の事情というやつが絡んでいる。原岡修三の家族構成は洋子夫人と娘が二人。上の娘は絵里、下は百合。今の夫人は後妻で、原岡香織は天逝した先妻、原岡奈津子の娘だ。ちなみに今の娘と同じ年齢で亡くなっている」

「それもスラスラ言えたの？」

「言葉尻が頼りなかったがな」

多香子の口元に酷薄な笑みが浮かんだ。弁護士や探偵、刑事、その他、他人の不幸に関わり合いになることが多い人種は、どうしても遺族という人種にシニカルな目を向けがちになる。

「つまり、こういうことね。原岡香織は再婚した父親、継母、その娘たちとあまり折り合いがよくなかった。そこで彼女は恋人と一緒に福岡を出奔した。向かった先は東京。当時はまだバブルで日本中が浮かれてた頃で、田舎から出てきた若い二人が暮らしていくのも今ほど難しくなかったでしょうね。一方、父親は家出した娘の行方は調べた」

「探偵を雇ったそうだ。ミー・アンド・ユー総合調査事務所という」

「なに、そのけつたいな名前？」

「馬鹿にしたものじゃない。東京の本社と、大阪、名古屋、札幌、仙台、広島、松山、福岡に支社を持つてる大手だ。と言っても、大阪と名古屋以外は地場の探偵事務所と提携して社名を名乗らせているだけだな。この件は福岡支社が請け負って、調査は出奔前を福岡、東京での所在調査を本社が担当した」

「どれくらいの時間が掛かったの？」

「原岡の話では三カ月程度とのことだ。東京に向かったことが分か

つた後は人海戦術でやればかなり期間を短縮できた筈だが、万が一にもターゲットに追われていることを気づかれないようにとのお達しがあったおかげで、かなり慎重な調査になったんだとさ」

「逃げられないようになってこと？」

「というより、そもそも原岡修三は無理に娘を連れ戻すつもりは最初からなかったらしい。だから、何よりも娘に追っ手の存在を勘付かれることを恐れた。要は所在地さえ把握しておけばいい、という考えだったのさ」

「その割には、その後の火災のことなんかはまったく把握してなかったのね」

「ご指摘はご尤もだな。実は娘の居場所が割れてから、後妻の現夫人が何度か、夫に内緒で継子の様子を見に行っていたことが発覚してね。夫人は友人でもあった先妻の娘の現状を自分の目で見ておきたかっただけだと主張したが、原岡は聞き入れなかった。ちよつど身体を壊していた時期で気弱になっていたというのもあるのかもな。いずれにせよ、原岡は夫人に今後の接触を禁じたばかりか、自分でやらせていた定期的な確認作業も止めさせてしまった」

「やることが極端ね」

「ワンマン経営者なんてそんなものさ」

俺はコーヒを飲み干した。お替りを注ぎにいくのが面倒だったので後は水で済ますことにした。多香子はスープボウルをきれいに空にしてしまっていた。

「運転は私なんだから、飲みたければ何かオーダーしてもいいわよ？」

「どうせ俺の払いだからだろ」

「食事を奢るつもりだったって言わなかったかしら。原岡氏の娘が家出した経緯や、その後のこともだいたい分かったわ。ただ、どうして今になってなの？」

「死を目前にして、娘に一目会っておきたくなつたからじゃないのか？」

「出鱈目言わないで。もしそうまでして娘に会いたいなら、人工心臓の延命手術を拒否する訳ないじゃない。しかも、今になってやっぱり受けるつもりって言い出すなんておかしいわ」

原岡は俺との話が終わると夫人と弁護士を病室に呼び戻した。その席で彼は出来るだけ早いうちに人工心臓の移植手術を受けるつもりだと言い出し、二人をひどく驚かせていた。

「この先は犯罪絡みになるぞ。もし、関わり合いになりたくなければ、ここまでにしておいた方がいい」

俺が言つと多香子は驚いたように目を瞬かせた。

「……ひよつとして、心配してくれてるの？」

「馬鹿なことを。俺は公安委員会に登録を消されてもモグリでやれば済むが、あんたは法曹資格を止められたら商売上がったらどう。責任を取って無理やり籍を入れさせられた挙句、毒を盛られてないかと毎日心配して過ごすのは御免だ」

「ああ、そう。妹だけじゃ飽き足らず、ついに姉にまで手を出したって噂されるのが嫌なのかと思つたわ」

「俺は由美子に手なんか出してない」

「分かつてるわよ、そんなこと」

くだらない当て擦りの応酬は無駄に気力を削いだだけだった。俺は思い直してグラスワインの赤を一杯オーダーした。届いたワインを一息に飲み干したくなる衝動に駆られたが、この後の予定もあるので我慢した。

「原岡香織は警察に追われているんだ。一週間前に須崎埠頭のラブホテルで起きた殺しのことは知ってるか？」

「知ってるわ。中年男が包丁で全身をメッタ刺しにされて殺されたんだつたわね」

「全身は言い過ぎだ。刺されたのは主に胸から腹にかけて。刺し傷は二〇数箇所だったかな」

「大して違わないじゃない。男の身元がなかなか割れなくて苦労してるって聞いてるけど？」

「何処の情報だ、それは？」

「検事時代の知り合いが中央署にいてね。今は現場から離れて内勤やってる子なんだけど、たまにコーヒをたかりにうちに顔を出すのよ」

「なるほどね。しかし、そいつは最新情報じゃない。男の身元は割れた。名前は浦辺康利。三十八歳。出身は北九州市戸畑北区。住所不定、無職。ここ数年のうちに指紋を消す手術を受けていて、それで身元の確認に時間が掛かったらしい。決め手になったのは十八年前、暴走族時代に凶器準備集合の従犯で挙げられたときの掌紋が残っていたことだった」

「えらく古い記録ね」

「ああ。しかも掌紋は指紋と違ってデータベース化されていないからな。照合は鑑識の連中が一つ一つ、手作業でやったそうだ」

「へえ。というか、その情報こそ何処から？」

「原岡は警察内部に友だちが多いらしくてね」

「なるほどね。で、それと原岡香織に何の関わりが？」

「香織の駆け落ちの相手が、殺された浦辺康利なんだ」

多香子はしばらくきょとんとした顔をしていた。

「それで？」

「実は二人が福岡を離れて以降、浦辺が福岡で生活していた実態が確認できない。身元が分かりそうな遺留品はすべて持ち去られていて、運転免許などをどうしていたのかはまるつきり不明。残されていた衣服が福岡のデイスカウト系の店でしか売ってないものばかりだったんで、生活の拠点が福岡にあることは間違いないものばんだが。ちなみに浦辺康利の最後の住民票は東京都江東区。香織が働いていた弁当屋がある墨田区と隣同士だ」

「指紋の手術は何処で？」

「モグリの医者か、海外でやったかだ。仮に国内で受けていたとしても、それを名乗り出る美容外科はいないよ。犯罪に片足突っ込んでますと自分で喧伝するようなものだからな」

「そうでしょうね。でも、警察は十七年前のころうじて確認できる時代に関わりがあったと言う理由だけで、原岡香織を参考人扱いしているの?」

「参考人じゃない。重参だ」

重参 重要参考人。捜査畑の人間の認識では逮捕状を取っていないというだけで、事実上の被疑者のことを指す。

「根拠は?」

「殺害現場から原岡香織の指紋が検出された。どうやら彼女も暴走族と関わりがあったらしく、何度か補導されている。浦辺の検挙の際にも取調べを受けているようだ」

「指紋が浦辺殺害時に残されたものである証拠は? 彼女は福岡の出身だし、こっそり帰省して宿泊費を浮かす為に普通のホテルじゃなくてラブホテルを使った可能性だってあるでしょ?」

「弁護士らしい見事な屁理屈だな」

俺は思わず笑った。しかし、弁護士は必要があればもっと珍妙な屁理屈を平気でこねる。しかも法廷で。

「しかし、今回に関してはその可能性は途轍もなく低い。現場のホテルの部屋はリニユールの直後で、残されていた指紋の大半は工事に従事した作業員のものだった。無論、リニユール直後に極秘帰省中の香織が部屋を利用した可能性もまったく否定は出来ないが、常識的に考えて無理があるよな」

「なるほど、あなたが言った意味が分かったわ」

多香子は空のスープポウルを下げさせ、灰皿を目の前に置くと再びヴァージニア・スリムに火をつけた。機嫌は収まっている筈だったが、啜え方は依然として横啜えだった。

「この状況下で原岡香織の行方を捜すってことは、警察に喧嘩を売ることだわ。分かっている?」

「分かっているつもりだ」

「それに、仮に先に見つけることが出来たとしても、彼女の逃亡に手を貸すようなことになれば犯人隠避罪よ。指示した原岡修三は親

族だから但し書きの適用を受けて罪に問われないけど、あなたは間違いなく後ろに手が回る。それも？」

返事の代わりに頷いてみせた。

「俺は彼女を見つけて居所を原岡に知らせるだけだ。無理に連れ戻したりはしないし、メッセージを届ける役目もしない。当然、逃亡の手助けもしない。被疑者の居所を警察に知らせなかったことを罪に問うことは、この国の刑法では出来ない筈だ」

「確かに出来ないわ。でも、あなたの元同僚たちはどう思うかしら？」

「今さらどう思われても関係ないよ。俺の評価は五年前に地に墮ちている。依願退職で退職金が出たのすら、本来なら奇跡の範疇なんだ。目の前の薬物犯罪を闇に葬ろうとしたんだからな」

「それは由美子を助ける為だったんでしょう？」

「だとしても、だ」

刑事の職責は俺に由美子を見逃すことを許さなかった筈だ。法律もそうだ。いかなる理由があろうとも、麻薬に溺れておきながら司直の手を逃れて隠遁することを許すものではない。俺が由美子を匿い、密かに薬物から彼女を救い出そうとしたのは“由美子を刑務所に送りたくない”という俺の個人的な感情によるものだった。それまで、多くの薬物中毒者を塙の向こうに追いつき落としてきたというのに。

「ねえ、リュウ。あなたは、自分が間違ったことをしたと思っているの？」

多香子は俺の目を覗き込んだ。

俺がこの女を避ける本当の理由は、彼女が由美子の姉だからではない。お世辞にも美しいとは言えない女だが、石を投げ落としてもいつまでも水音のしない深い井戸のような黒瞳に引き込まれそうになるからだ。

そして、由美子を守れなかったことについて、彼女に対しても罪の意識を持っているからだった。

「間違っていたかどうか、俺には分からない。法律を守ることが必ず正しいとは限らないからな。だが、後悔はしている。俺はあの時、たとえ徳永の職を失わせることになっても、由実子を正当な方法で救い出すべきだったんだ」

多香子は大袈裟に嘆息した。

「なのに、あなたは今、警察に追われる女を救い出そうとしているわ」

「俺は誰かを救おうとなんかしていない。しているとしたら、それは死ぬ間際の老人の魂だ。原岡は俺に娘を見つけて出してくれと言った。しかし、娘を助けてくれとは言わなかった」

「単なる言葉のあやじゃない？ それに、由実子と同じことの繰り返しになるかもしれないわ。あなたはそれに耐えられるの？」

「ならないよ。俺はそんなに馬鹿じゃない。人は自らの過去に復讐する為に生きているんだ」

「誰がそんなことを言ったの？」

「決まってるだろ。俺だよ」

俺は残りの赤ワインを一息に飲み干し、勘定書きを手にとって立ち上がった。

第8章

8

「 ホントに家まで送らなくていいの? 」

多香子はドライバーズシートの窓から心配そうな顔を覗かせた。

BMWは中洲のど真ん中を横断する明治通りと飲み屋街を縦断する中洲大通り その名に反して一車線の一方通行路だが が接する角にあるミスタードーナツ前に停まっていた。九州最大の歓楽街とはいえ、平日の深夜二時になると人通りも車の流れも少ない。もう一つ南側の国道道路沿いに比べれば下世話なネオンの灯りも少なく、車の窓越しに話す男女に目を向けるような物好きの姿も見当たらなかった。

「 待ち合わせ場所がここなんだから、仕方ないだろ 」

「 と言うか、こんな時間に待ち合わせって何? 」

「 相手はこの時間が仕事なんだよ。誰もが九時五時で働いてる訳じゃないさ 」

「 分かってるけど 」

待ち合わせせというのは嘘だ。俺は熊谷幹夫の自宅を確認しておくつもりだった。中洲から熊谷のマンションがある冷泉町は本当に目と鼻の先で、歩いていける距離なのだ。それにアルコールを入れてしまっているの、家に帰ると外には出られなくなってしまう。

「 この調査報告書は私が持っていていいの? 」

多香子は大判の茶封筒を俺に見せた。

「そうしてくれ。預かり物だし、俺はコピーで充分だ」

多香子は小さく頷くと封筒を自分のバッグに差し込んだ。上のフリップを玉紐で閉じるマニラ封筒で、色はすっかり褪せて角は擦り切れしまっている。表側の下に別の封筒から切り抜かれた ミー・アンド・ユー総合調査事務所 の社名と各支社の所在地を印刷した部分が貼り付けてあった。十七年前に原岡修三が娘の所在地調査をさせたときのもので、気を利かせて夫人があらかじめ用意しておいたのだそうだ。洋子夫人が元は原岡の秘書だったことは後で多香子が教えてくれた。

BMWは短くクラクションを鳴らして車列に滑り込んだ。俺はミスタードーナツに入ってコーヒーを買い、一番奥の席に座った。

報告書は十数ページに渡って綴られたA4の冊子と写真で構成されていた。

写真は妙齢の女性を遠くから隠し撮りしたものだ。十七年前のもので、年月の経過を考えると人を尋ねて歩く役に立つかどうかは疑わしい。

写真で見る原岡香織は、何処にでもいそうな十九歳の少女だった。丸みを帯びた活発そうな顔立ちで、アーモンド型の黒目がちな目許と八重歯の覗く口許には人目を惹きつける愛嬌があった。背景との比較から類推すると体躯はやや大柄、胸元はメロンを詰め込んだかのように大きく盛り上がっている。それ以外のパーツもボリューム満点だった。特にバックショットのデニムの尻ははち切れそうなほどだ。

写真の殆どは彼女の東京での生活の様子をロングショットで捉えたものだった。工作中的の香織はセルフフレームの眼鏡をかけて、黄色っぽい おがた屋 という屋号が入ったエプロンをしていることが多かった。店の前に停まった軽のワンボックスに弁当を積み込んでいる姿や、弁当を買いに来た客に対応している姿もある。中には同僚らしき女性たちと談笑しているものもあった。それだけで彼女の東京での生活を推し量ることは出来ないが、印象だけで言えば、楽

ではないなりに充実した生活だったように思えた。

報告書は失踪から発見までの経過を時系列に並べたものだった。

それによると、原岡香織は十七年前の夏、高校の一年先輩の浦辺康利と一緒に男の車で福岡を出ている。浦辺の在学中から付き合いはあったようだが、本格的な交際に発展したのは香織の卒業後だったようだ。当時の香織を知る職場の同僚（福岡医科大学付属病院の看護婦。香織は高校卒業後、看護専門学校の実習生として働いていた）は、香織の勤務明けに浦辺が車で迎えに来ていた場面を度々目撃している。その他、二人の交際を裏付ける証言が幾つか並んでいるが、共通するのは二人の交際が真剣なものだった。少なくとも周囲からはそう見えていたことだ。

二人が駆け落ち先に東京を選んだのは、浦辺の二年先輩の友野という男が東京でレーズ関係の仕事をしていて、車好きの浦辺がその先輩のツテを頼って業界に潜り込もうと思ったからだそうだ。浜田省吾の唄に影響された訳ではなかったらしい。

その後、浦辺は友野の紹介で江東区にある自動車修理工場に、香織はその近くにある弁当屋にそれぞれ住み込みの仕事を見つけたことになる。未成年の二人ではアパートを借りることもままならなかっただろうから、これは妥当な選択と言える。

香織は弁当屋で経営者夫婦に気に入られ、元々のしっかりした性格もあって新しい生活にも馴染み始めた。

問題は浦辺の方で、どういう訳か修理工場をすぐに辞めてしまい、香織の住み込み先に転がり込んだらしかった。そのあたりから二人の関係は急速に冷え込んだようだ。ミー・アンド・ユーの探偵が香織を捕捉したのは駆け落ちから約三か月後のことだったが、その時点では二人は破局しており、浦辺は一人で福岡に帰ってしまった。彼のその後については何も書かれていない。

俺は報告書のコピーをテーブルに置いた。

考えるべきことがあった。良く出来た報告書だが、どういう訳か二人が駆け落ちに至った理由が書かれていないのだ。香織の本心が

浦辺との将来ではなく居心地の悪い家を離れることであつたとしても、それだけで順調だつたと思しき看護師の仕事や人間関係を振り棄てたとは考えにくい。まして、浦辺の側には差し当たつて理由が見当たらないのだ。無論、情に絆されて付き合つてしまつたことは充分考えられるが。案外、離別の理由もそのあたりの温度差にあつたのかも知れない。

俺は篠原謙一の携帯電話を鳴らした。

「……篠原だ」

いつもと同じ無愛想な声だつた。福岡ビジネスリサーチ社という興信所の代表をしている男だ。大の電話嫌いで通つていて、誰に対してもこんな物言いをする。電話マナー講習会のチケットを送つてやるべきだろうか。

「福岡県調査業協会の事務局はこの番号でよかつたですか？」

「なんだ、そつちの用事か。だつたら、協会の代表番号にかける」

「この時間じゃ誰も出ないでしょう」

「だからつてどうして俺に？」

「あなたが協会の幹事だからですよ」

福岡県調査業協会はいわゆる調査業者の業界団体だ。公益法人の認可を受けた全国組織の地方単位協会という位置づけであり、一応は真つ当な組織ということになっている。

尤も調査業者として営業するのに加盟は義務付けられていないし、入つたからといって特にメリットもない。せいぜいホームページに団体加盟を謳える程度だ。従つて、公安委員会に届けを出していても加盟していない調査業者も少なくない。まして、届けを出していないモグリも多いとあつては、実際に加盟しているのはほんの一握りということになるのだが、それを指摘すると篠原の機嫌が悪くなるので言わないことにしている。

ちなみに俺は事務所を開くときに世話になつた先達に騙されて加盟してしまつている。先達とは電話の相手のことだ。業界関係者に多い警察OBの一人なのだ。

「いったい何の用だ？」

「教えて欲しいことがあるんですがね」

「言ってみる」

「ミー・アンド・ユー総合調査事務所の内田って男のことですが、何か知ってますか？」

十七年前の調査内容は大きく“佳織が福岡を離れて何処へ向かったのか”を調べた部分と、東京に向かったことが発覚して以降の“東京の何処で何をしているのか”を調べた部分に分かれていた。後者を担当したのは東京本社所属の守山直樹という男で、前者を担当したのは福岡支社の内田雄三という男だった。

「知ってるよ。昔、機捜で一緒だった」

「警察上がりなんですか？」

「まあな。といつても、もう退職して十七、八年経ってる筈だが」

「どんな男ですか？」

「どんなって……まあ、仕事は真面目だったぞ。内田がどうかしたのか？」

「いえ、ちょっと昔の調査の掘り起こしみたいな依頼を受けましてね。それが内田さんの仕事だったもので」

「奴なら今でも同じ会社にいる。連絡をとってやろうか？」

「出来れば」

篠原はアポイントが取れたらメールをくれると言った。俺はお願いいたしますと答えて電話を切った。

冷泉公園前の通りには土居通りという立派な名前があるのだが、俺が知る限り、その名を口にする福岡市民はいない。

公園は博多部と呼ばれる狭義の博多のど真ん中であって、冷泉町一帯も中洲と間近ながらその猥雑さとはかけ離れた閑静な街並みになっている。福岡名物の屋台はこの公園の近辺にもいくつか出てい

て、中には名物と呼ばれる店もあるのだが、盛り場とはちょっと呼ばない。

iPhoneの画面が正しければ、俺は熊谷幹夫が住んでいるロイヤル・アルカザール冷泉町の前にいる筈だった。件のマンションはロイヤルを名乗るのはいささか気負い過ぎだとしても、閑静な街並みに相応しい風格を持つ十一階建ての分譲マンションだった。マンションの駐車場は敷地と建物の一階部分を占めていた。市内中心部のマンションには夜になっても住人が帰っていない物件が少なからずあるが、ここはそうではないらしい。駐車スペースはほぼすべて埋まっていた。

熊谷のマセラッティは表通りからは見えにくい隅の一角に停められていた。GPS発信機の記録では午後一〇時過ぎに近所のコンビニエンスストアまで往復しただけで、後はずっと停まったままになっている。無論、それは熊谷が帰宅後にずっと家にいることを証明するものではないが、歩いていける距離でも車を使う無精者であることは教えてくれていた。

俺はそつとマセラッティに近付き、エンジンフードに手を伸ばした。熱はとうに失われてしまっていた。

その時、俺の携帯電話が鳴った。先程、掛けた電話のコールバックだった。

「お疲れさん」

「うるさいよ、真夜中に何度も電話掛けやがって。何の用だ？」

木戸はいつものようにせかせかせかした口調で言った。木戸照之。西日本新聞社会部の遊軍記者で、俺がまだ警官だった頃に知り合った男だ。奴の個人的なトラブルに手を貸してやったのがきっかけで付き合いが始まり、俺が警官を辞めた今でもお互いを情報源としてキープする関係が続いている。

「今、いいか？」

「駄目なら電話掛けねえよ。どうした？」

「ここ一週間のことだが、県警の捜一が動くような事件がなかった

か？」

「奴さんたちが動かない日なんてないよ。今はアレだ、例の件だろ」
「例の件？」

「先週、須崎埠頭のラブホテルで殺しがあつただろうが。中央署に
捜査本部が立つてる」

「やつぱりあれか」

「……おい、上社。おまえ、何を知ってる？」

木戸の口調が険しくなった。

「いや、今のところは特に何も。ちなみに動いてるのは誰の班だ？」

「桑原警部の班だ。おまえのお友だちだろ」

「誰が誰のお友だちだつて？」

自分の声に剣呑な響きが混じるのが分かった。

捜査一課と薬物対策課は相手にしている犯罪の方向性が違うので、
縄張り争いで喧嘩をすることもなければ、逆に捜査協力で信頼関係
を築き上げる機会もあまりない。そういう意味では俺と桑原警部

桑原幸一の間にも負の感情が芽生える要因はなかった。

俺と桑原の間に決定的な亀裂を走らせたのは徳永真司の件だった。
彼を撃ち殺したジャンキーとそれを仕組んだ男を捜査一課の獲物と
して搔つ攫つていったのは百歩譲るとしても、俺が持ち場を離れた
経緯を知った上層部が穩便に事を収めようとするのを妨害する為に、
配属されたばかりの若いキャリアの管理官を唆して、由実子に事件
の構図を説明させたのが他ならぬ桑原だったのだ。

結果として人を一人、死に追いやったことに桑原が痛みを感じて
いるかどうか、俺は知らない。

「たかだかと言っちゃ何だが、ケチなチンピラが一人殺された
程度の事件で県警捜一強行犯係のEースを投入するとは、何か裏が
あるのかね？」

木戸はぼやきとも疑問ともとれる口調で言った。尤も俺は何も言

わなかつたので、問いは電波の途中で宙ぶらりんになった。被疑者が財界の有力者の娘だから、というのが考えられる理由だが確かな事は言えない。

「今、ケチなチンピラと言ったな。被害者について何か分かっているのか？」

「さてね。ウチの記者クラブ詰めの中は警察発表以上のことは掴んでいないな」

「誰なら掴んでいるんだ？」

仕返しのように会話が途切れた。勿体ぶっているのを見せつけたのが見え見えの沈黙だった。俺は根負けしたふりをしてわざとらしく溜め息をついた。

「いいだろう。こっちのネタを一つ提供するよ。警察は被疑者について何か発表しているか？」

「今のところは何も。現場から逃げた女がホテルの監視カメラに映っていたとは聞いているが、割り出しには至っていない」

「割り出しは済んでいて、警察はすでに重要参考人としてその女を追っている。名前は原岡香織。原岡興産のオーナー、原岡修三の先妻の娘だ」

「ニュースソースは？」

「原岡修三本人だ。原岡は財界の関係者を通じて、県警内に耳を持つてる」

「なるほど。桑原警部を当てたのは圧力対策か」

「だとすれば、上はかなりやる気だつてことになるな」

原岡修三本人は言わなかったが、多香子によれば原岡家の外戚には政治家が数人いて、特に原岡修三の従弟は先の政権交代前は与党県連の影のドンと言われた実力者だった。地方政治レベルでは福岡は今でも保守王国であり、件の従弟も未だに隠然たる影響力を行使しているとの噂もある。

いざとなれば原岡は警察に圧力をかけることも厭わない 捜査本部を指揮する県警刑事部長あたりがそう考えるのも無理はなかつ

た。

木戸が電話の向こうで小さく鼻を鳴らした。

「教えてくれたのは有難いが、迂闊に突っつけないネタだな。あそこの会社はウチの新聞にずいぶん広告を出してる」

「ずいぶん弱気な事を言うじゃないか」

「俺にだって家族がいるんだよ。下の娘が私立の中学に入ったばかりでね、何かと物入りの時期にクビになるのは避けたい」

「好きにすればいいさ」

俺としては原岡香織の名前が表沙汰になるのが遅れるほど都合が良い。万が一、全国指名手配でもされると手が出し難くなるからだ。「で、そっちは？」

木戸は小さく咳払いをした。

「浦辺については何も知らん。というより、警察もこの男の生活実態についてほとんど何も掴んでいないという話だ。それは知っているな？」

俺は知っていると答えた。木戸はもう一度、咳払いをマイクに送り込んできた。

「俺からの情報だとは誰にも言うな。約束しろ」

「ずいぶんな前置きだな」

「いいから約束しろ。浦辺康利は福岡では別の名前で暮らしていた。別の戸籍で、と言った方がいいかもしれないな」

「なるほど。そいつの名前は？」

「タカダヤスアキ」

木戸は字を説明してくれた。高田泰明。

「何者だ？」

「本人はフリーライターだと言っていたが、俺が知る限りではその名前で発表された記事はないし、地元の出版社に出入りしていた形跡もない」

「じゃあ、何を書いてたんだ？」

「右翼のお抱え作家をやってた時期もあるらしいが、本業は強請り

屋だ。他人の弱みにつけ込んで小銭を稼ぐクズ野郎だよ。奴が書く記事は一点もので、現金やバーターの情報、相手が若い女なら身体と引き換えに相手に渡ることになってる。もし、取引に応じなければそれは告発文というタイトルでマスコミや警察、相手が個人の場合には勤め先の人事部に届けられたりするんだぞうだ」

「いつ、誰に刺されてもおかしくない商売だな」

木戸の失笑が聞こえた。

「浦辺の擬装はどの程度のものだったんだ？」

「ほぼ完璧と言って良かったんじゃないか。俺の目は欺けなかったが」

「自慢にしか聞こえないな」

「自慢したんだよ。実際の話、当の本人すら自分が浦辺康利だっことを忘れてたんじゃないかな」

「どうやって見破ったんだ？」

「それは企業秘密だよ」

今度は含み笑いが洩れてきた。

「まあ、それはいい。おまえ、高田の出回り先を知らないか？」

「出入りしていた店なら知ってる。親不孝通りにある アクア って店だ」

「どんな店だ？」

「パブというかショットバーというか、要するにジュースマがいのカクテルの類を飲ませる店と思っておけば間違いない。奴はその店を事務所代わりに使っていた。あ、そうそう。そこでは奴は岸川って名前で通ってる」

「どういうことだ？」

「さつき、おまえが言った通りのことさ。奴はいつ、誰に命を狙われてもおかしくない商売をしている。かなり危ない橋も渡ってたらしいからな。だから、普段から幾つもの偽名と変装を使い分けていたのさ」

「なるほど。……しかし、おまえ、ずいぶんとそいつのことに詳し

いんだな」

「取材の成果ってやつだよ」

「その成果とやらは、どうしておたくの紙面に反映されないんだ？」

「俺がこの事件の取材班に入ってないからさ。訊かれてもいないネタを流すお人好しはこの業界にはいないのさ。じゃあな、そろそろ切るぜ」

木戸は返事を待たずに電話を切った。

親不孝通りという珍しいその名前は、かつて、この通りの北端に二つの予備校が向かい合わせに建っていたことに由来している。この全長四百メートルほどの通りがそこへ通う浪人生たちの通学路であり、同時に彼らの遊び場だったという訳だ。

当時は 大人の中洲 と 若者の親不孝通り という住み分けがされるほど栄えた繁華街だったこの界隈だが、東京資本の大手予備校の進出や少子化の影響等からランドマークだった予備校が相次いで倒産してしまい、時を同じくして若者向けの店が賃料が安い大名や今泉、警固へと移転していったことから徐々に廃れてしまった。一時期は中洲周辺から流れてきた風俗店やスナックなどが増えてそれなりに賑わっていたこともあったが、今となっては夜はほぼゴーストタウンになり下がってしまったている。

木戸が教えてくれた アクア という店は今でもマリア通りと呼ばれる、かつて マリアクラブ という巨大なディスコが建っていた路地の近くにあった。

狭い土地に無理やり建てたゴテゴテしたペンシルビルの六階で、店内にはコンクリートが剥き出しの内壁にクリスチャン・ラッセンのポスターがこれ見よがしに飾ってあった。照明が海底を連想させる碧いライトに統一されているのは店名に因んだものだろうか。カウンターの奥の壁には若い頃のジャン・レノの顔を大写しにしたポ

スターが貼ってあった。間違いなく、グランプルーのワンカットの筈だが、どのシーンかは思い出せなかった。

天井に吊られたBOSEのスピーカーからはレゲエもどきのゆったりしたリズムの音楽が流れていた。タンクトップ姿の男がジャン・レノのポスターの前に立って、音楽に合わせたような緩慢なリズムでシェイカーを振っていた。ライトのせいでネガに映った人物のような肌の色に見え、白目や歯が不必要に浮かび上がって見えた。

客は俺の他にはカウンターにいるまだ未成年と思しき少女の二人連れと、それに声をかけている同じ年頃の少年の三人組だけだった。少年たちは少女たちを遊びに行こうと誘っていて、少女たちは年齢に似合わない巧みさでそれをはぐらかしていた。彼らは若者向けの店にふらりと現れた中年男に一瞬だけ訝しそうな表情を浮かべたが、すぐに自分たちの関心事に戻っていった。

少年の一人がカウンターの男にテーブルに移っていいかと訊き、男は薄笑いを浮かべてどうぞと応えた。

「すみませんね、ガキばかりで」

五人が移動するとカウンターの男が声をひそめて言った。男は井上と名乗り、俺の名前を訊いてきた。俺は桑原と名乗った。

「いつもこんな感じなのかい？」

「そうですね……。オープンしたときはもうちょっと上の年代を狙ってたんですが、あんなのばかり来るんですよ」

「君がこの店のオーナーなのか？」

「ええ、まあ。どうしてですか」

「アルバイトもおかずに全部一人でやってるようだから。結構大変なんだな」

「バイト代も安くありませんからね。と言っても、女の子が一人いるんですけど。今、お遣いに行ってます」

「内装も君の趣味？」

「ええ。これでもサーファーなんですよ」

井上はレジの横に立て掛けてあるサーフボードを指差して笑った。

「何にします？」

「カクテルは何が出来るんだ？」

「まあ……大抵のものは。あんまり難しいのはアレですけど。前にパパ・ドーブレがどうか言われて、何のことか分からなかったことありますよ。ダイキリって言えば分かったのに」

「じゃあ、俺もそれに負けなくらい珍しいのをオーダーしないと
な」

「ちょっと、やめて下さいよ！」

「冗談だよ。ジントニツクを頼む」

井上は安堵したような笑みを浮かべた。ロングアイランド・アイステイーを頼んでいたらどんな顔をしただろうか。おそらく断られていただろう。材料を入れてステアするだけのカクテルだが、レシピがとにかくややこしいのだ。

井上は氷を満たしたゴブレットにギルビーのジンを注ぎ、何処のブランドか分からないペットボトルのトニクウォーターを豪快に注いだ。煮込み料理を書き回すような手際でステアし、タップパーから取り出したレモンスライスを飾ると、俺の前にコースターと一緒に置いた。

「どうぞ」

「ありがとう」

ジントニツクはノンアルコールかと思うほどジンの味がしない代物だった。これで一杯八〇〇円はぼったくりと言ってもいいだろう。

井上はカウンターと酒肴を作る為の小さなキッチンを往復しながら、テキパキと仕事をこなしていた。時折、愛想と猜疑心が同居した小さな目が俺を値踏みするように動いていた。テーブル席の少年の一人が大声で生ビールを頼んだ。井上は小さく舌打ちしてビールサーバの方へ歩いていった。

俺は店内を見回しながら浦辺康利の痕跡のようなものを探した。

個人の趣味というものはあるだろうが、メニューや雰囲気、客層の面から考えても三〇代後半の男が好んで出入りするような店ではな

かった。浦辺はここで何をしていたのか。

そんなことを考えていると、店のドアが開いてピンクのTシャツにデニムという出で立ちの女が入ってきた。日焼けした肌に腰のあたりまで伸びた栗色の髪。小柄で歳はせいぜい二十代初めといったところだった。両手に中身がぎっしりと詰まったスーパーの袋を提げている。

「おかえり、エミ」

「ただいまー。あ、いらっしやいませっ！」

俺は笑ってグラスを掲げて見せた。エミと呼ばれた女は俺に挨拶すると、そそくさと奥のキッチンに入ってしまった。

「可愛い子だな。君の彼女？」

「分かりますか？」

井上は満面の笑みを浮かべた。それまでと別人のような邪気のない笑みだった。

「ところでお客さん、桑原さんだったっけ。ウチのこと、誰に聞いてきたんですか？」

「知り合いに聞いたんだ。どうしてそんなことを気にするんだ？」

「いや、気にしてる訳じゃないですけど……。お客さんの着てるものが、あんまりこの辺を歩いている人の格好じゃないから」

「どの辺にいそうな感じに見える？」

「中洲 じゃないな。西通りとか大名、今泉、あの辺りですかね。この辺はガキばかりで、あいつらみたいな格好の奴ばかりですから」

井上はテーブル席の方に顎をしゃくった。

「でも、あんなのでも来てくれなきゃ。親不孝も、俺らが学生の頃はずいぶん賑わってたんですけどねえ……」

「そうだな」

俺はグラスを空けて、もう一杯同じものをオーダーした。井上が空になったグラスを引こうと手を伸ばした。

その時、井上の太い上膊部に入っているタトゥーが目にとまった。

灼けた褐色の肌と碧い照明のせいでそれまで見えていなかったのだ。髑髏をデフォルメした特徴的なデザインで、空洞の筈の眼窩に描かれた丸い眼が奇妙な愛嬌を振り撒いている。

「……なるほど」

「えっ、何か言いました？」

「いや、何も」

不思議そうな顔の井上に向かって、俺は愛想笑いを向けた。男の顔はまったく覚えていなかったが、タトウーには見覚えがあった。

「トイレは何処だい？」

「あつちの仕切りの奥です」

井上はテーブル席の向こう側にあるパーティーションを指した。俺は礼を言っただけでスツールを降りた。

いつの間にか、テーブル席は少女たちだけになっていた。少年たちはパーティーションの裏で作戦会議中の真っ最中だった。横を通り抜けるときに彼らの会話が耳に入ってきた。どうやら誰もタイムリーヒットを打つことが出来ず、延長戦にもつれ込む羽目になったらしかった。

俺は吹き出しそうになるのを堪えながらトイレで用を足し、眠気と酔いを醒ますために顔を洗ってペーパータオルで滴を拭いた。それから、彼らが出て行くまで外の気配を伺った。

生憎だが、俺は延長十二回まで付き合うつもりはなかった。仕事柄、他人の話を聞かされることは苦にならないが、それはあくまでも調査の進展に関わる場合の話だ。

トイレを出るとBGMが止まっていて、店内はエアコンの唸りが聞こえるほど静まり返っていた。

井上はテーブルの上を片付けて大量のグラスをカウンターの奥へ運んでいた。俺はスツールに戻った。グラスが新しくなっていて、さつきよりは少しだけマシなジントニックが入っていた。トレイの上に積み上げられた食べ残しを無造作にバケツに放り込むと、井上

は流して乱暴に手を洗った。

「ここは煙草を置いてるかい？」

「すみません、ストックは置いてないんですよ。買ってきましょうか？」

「JPSを頼むよ」

エミがキッチンから出てきたので、彼女に五百円玉を渡した。跳ねるような足どりで出て行く後ろ姿を見送ってから、俺はおもむろに井上に直球を投げた。内角高めのブラッシングボール。

「なあ、最近、岸川は来たかい？」

「誰ですって？」

井上はタオルで手を拭きながら俺の前に戻ってきた。

「岸川だよ。常連だろ」

「なんだ、桑野さんの知り合いってヤスさんなんですか？」

「いや。教えてくれたのは、また別の知り合いだ」

井上の顔から表情が消えた。

「誰です、その知り合いって」

「誰でもいいだろう。ここは紹介状がないと入れないのか？」

井上はしばらく俺の出方を伺うように曖昧な顔をしていたが、俺が動かないでいるとわざとらしく肩を竦めてタオルを放り投げた。

「悪いけど閉店時間だ。帰ってくれ」

「表には午前五時までと書いてあったが？」

「それは俺が決めることだ。嫌なら力づくで叩き出すぞ」

「よせよ、最近のキレやすいガキじゃあるまいし。井上 いや、

本名は石川だったな」

井上は音が聞こえるほど大きく唾を飲み込んだ。

この男を最後に見たのは、俺がまだ警官だった頃の話だ。暴力団に属さずに大麻やMDMAを捌いていた密売グループのリーダー格だった男で、名前は石川徹といった筈だ。大麻の不法所持の現行犯で二回、売った相手が検挙されて芋づる式にアジトに踏み込まれて一回検挙されている。それとは別に青少年保護育成条例で一回。十

一年前に挙げられた時にはグループ内の肅清絡みの傷害と不法監禁、連れ込んでいた女子中学生に対する暴行　警察に踏み込まれた時には懸命に腰を振っている真っ最中だった　といった具合で、他にも余罪がテレビショッキングのおまけ並みについてかなり長い実刑を喰らった筈だ。

「……誰のことだよ、それ？」

俺は井上のよく動く小さな目を真っ直ぐに見据えた。

「しらばっくれるんだったら、腕の可愛らしいタトゥーを何とかしてからにするんだな。俺はおまえが挙げられた時にその場にいたんだよ。おまえにとつては大勢いた警官の一人に過ぎないだろうが。いつ出てきたんだ？」

「知らねえよ、人違いだろ？」

「しらばっくれても無駄だと言ってるだろう。悪いが、下手な芝居に付き合つてやれるほど暇じゃないんだ。その様子だと、彼女には昔の経歴を話していないようだ。隠し事は良くないぜ。自分で言えないんだったら、俺が懇切丁寧に説明してやるうか？」

「このクソ野郎……」

井上は疎ましそうな目を俺に向けた。しかし、それだけだった。

「　あんだ、ヤスさんの何なんだよ？」

「友だちと言つただらう？」

「だつたら、自分で連絡すればいいじゃないか」

「連絡が取れないから訊いてるのさ。おまえだつたら、別の連絡手段を持つてるんじゃないかと思つてね」

「ねえよ、そんなもん。俺からヤスさんに連絡取ることなんかねえし」

「分かつた、その件はいい。ところで一つ訊くが、この店は本当におまえのものなのか？」

「ここは俺の店だ。……ヤスさんにも出してもらつたけど」

「にも？」

俺はわざと大きな声で言った。俺が知っている井上　石川徹は

自分の店を持つ為に金を貯められるような殊勝な心根の持ち主ではなかった。

「そんな力ネ、何処で都合したんだ？ まさか、今でもクスリを取り扱っているんじゃないだろうな？」

「馬鹿なこと言うな。もう、そっちの仕事はやってねえよ」

「そいつは結構。だったら、どうやって店を出せるだけの力ネを貯めた？」

「あんたに関係ないだろ？」

「大ありさ。昨今、薬物対策課の検挙率がえらく落ちてるらしくてね。何でもいいから薬物事犯の検挙に繋がる情報が欲しいらしいんだ。なに、おまえに身に覚えがないなんて話はどうにだってなるから心配するな」

「てめえ……」

井上は再び目を剥いた。一瞬、殺気じみた光が宿ったように見えたが、それはすぐに消えた。見た目ほど荒っぽい男ではない。最後の検挙の時も、必死で逃れようとする仲間を尻目にさっさとお縄についた諦めの良さが際立っていた。

井上は俺から目を逸らすと、グラスに水を注いで一息に飲み干した。

「ほとんど全部、ヤスさんに出して貰ったよ。内装工事というところで、三〇〇万くらいだったかな」

「なるほど、強請り屋ってのは儲かるんだな」

「強請り屋？」

「奴が手広くやってる仕事の一つさ。おまえには何をやってると言っていた？」

「俺には興信所をやってるって……」

「初耳だな」

二つの意味で言った。俺が人付き合いが悪いことを差し引いてもこの業界は狭い。岸川の名でやっていたか、それとも戸籍上の高田の名でやっていたかは分からないが、いずれにしてもその手の良く

ない噂の持ち主の動向がまったく耳に入ってこなかったというのは不思議だった。

それと同時に、俺の脳裏に不可解なイコールが浮かび上がってきた。熊谷幹夫のマセラッツィの借り主の会社はキシカワを名乗っている。

偶然か、それとも何かの関わりがあるのか。

「ところでおまえ、どうやって岸川と知り合ったんだ？ おまえの周辺人物は検挙した時に調べた。関係者を芋づる式に引っ張りあげなきゃならないからな。しかし、その中に岸川なんて男はいなかった筈だ。知り合ったのは出所後か？」

「……そうだよ。出てきてしばらく仕事がなくて、しょうがないから競艇場でフラフラしてたら、あっちから声をかけてきたんだ。暇なら自分の仕事を手伝わらないかって」

「仕事？」

「大したもんじゃない。ヤスさんは車の運転が出来ないから運転手とか。そうしたら、今度、店を出すからやってみないかって言われて」

「なるほどな。ところで岸川のヤサは何処だ？」

「知らねえよ。あんた、一体何者だよ？」

「岸川の友だちだと言っただろう。名前は上社」

「……さっき、桑原って言わなかったか？」

「どちらかは本名で、どちらかは偽名だ。好きな方で呼んでくれていい」

「どつちでもいいよ。ヤスさんなら、もう一週間以上来てないんだ。本当だ。そんなに珍しいことじゃない」

「最後に来たのはいつの話だ？」

「えーつと……一週間くらい前の夜じゃなかったかな。仕事が大詰めであんまり寝てないとか言ってたな。何の仕事ですかって訊いても、曖昧な顔するだけで教えてくれなかったけど」

「興信所の仕事は手伝ってなかったのか？」

「パシリみたいなことならやったことあるけどな。そもそも、事務所に行ったことないんだよ。ああ、でも、一度だけヤスさんが誰かと話してるとこ、偶然見かけたことがある」

「詳しく話してくれ」

「いや、ホントに見かけただけなんだ。一ヶ月くらい前かな。珍しくスーツ着てホテルのコーヒールウンジにいたんだ。ヤスさんの場合、ちゃんとした格好したって真っ当な感じには見えないんだけど。で、何て言うか、ツンと澄ましたオバハンと話し込んでた」

「幾つくらいなの？」

「四〇　ひよつとしたらもつと上かもな。女の歳を当てるのは苦手なんだ。身なりが良くて上品な感じだったけど、顔は引き攣ってたから、まあ、二人が仲良しには見えなかったね」

言葉尻が少し調子に乗り始めている感はあるが、気持ちよくしゃべらせた方が得策と考えて何も言わなかった。

「ところで、おまえはそんなところで何をしていたんだ？」

「ホテルでブラフェやって、エミが見に行きたいって言ったんだ」

「ブラフェ？」

「ブライダルフェスタ。披露宴の料理が食べられたり、ウエディングドレスのファッションショーがあつたりするやつだよ」

「なるほど」

俺はもう一度店の中を見回した。井上の襟首を締め上げてやってよかったが、そこまでしてこれ以上の何かを聞き出せるという確証はなかった。それにそろそろ女が戻ってくる時間だった。

俺はスツールを降りた。

「幾らだ？」

「……何がだよ？」

「ジントニツク三杯分の値段さ。ジンは二杯分しか入ってないような気がするが」

井上はじつとりした眼差しで俺を睨んでいた。やがて吐き出すように二千円だと言った。俺は財布の中で邪魔になっていた弐千円札

をカウンターに置いた。

「あんた　　上社さんって言ったっけ。昔のこと、エミにしゃべらないでくれよ。俺、あいつのことは本気なんだ」

「そのようだな。安心しろ、必要がない限りは黙っている」

「必要？」

「おまえが今後、俺の質問に答えなかったり、嘘をついたりしなければってことさ。あと、誰かに告げ口をしなければ」

「しねえよ、そんなこと」

「そう願っている。そうだ、いろいろと質問に答えてくれた礼にいいことを教えてやろう。岸川は明日も来ないよ」

「………どういう意味だ？」

俺は答えずに店を後にした。

第10章

10

翌朝、俺は懇意にしている東京の探偵社に電話をかけた。十七年前の駆け落ちの経緯とその顛末を説明し、連絡を取りたいという家族の依頼でその後の足取りを辿って欲しいと頼むと、進藤美穂子は二つ返事で引き受けてくれた。

「暇な訳じゃないのよ。リュウくんの仕事だから引き受けるの」
盆の暑さで溶けかけの落雁のような甘ったるい話し方だった。俺は苦笑いが漏れるのを必死でこらえた。

「ありがたいですね。依頼人は余計に費用がかかっても構わないと言っています。大至急でお願いしますよ」

「相変わらず堅苦しいのねえ。前回の調査報告書とやらは？」

「今からファックスで送ります。写真はメールに添付して。十七年前のもので、どれだけ参考になるか分かりませんがね」

「ないよりはマシってとこかしらね」

彼女は報告する事が出来たら携帯電話へメールを入れると言った。俺はそうしてほしいと答えた。

もっと話を続けたそうな口ぶりだったが、話し始めると辞め時を見失ったメールのように延々と話す羽目になる。俺は三日分の調査料を振り込むことを伝えて電話を切った。女性に好意を寄せられて嬉しくないことはないが、自分の母親と同一年ではさすがに食指が動かない。

俺はデスクトップを立ち上げて、事務所に来る前にCD ROMに焼いてきた原岡香織の写真から人相のはっきりしたものを選んでメールで送った。それから、調査報告書をファックスに差し込んで送信ボタンを押した。一枚ずつ読み込まれていくのを横目に見ながら、インスタントコーヒーをカップに入れてポットの湯を注いだ。

朝刊の社会面には 福岡ラブホテル殺人事件の被害者、身元判明の見出しが躍っていた。警察発表が重要なところを伏せてあるからか、身元が割れるに至った経緯や浦辺康利とは何者なのかなどは一切書かれていない。秘密の暴露を期待してのことだろう。犯人しか知り得ない情報を伏せておいて、被疑者特定の決め手にするのは警察の常套手段だ。

コーヒーを啜りながら漠然と考えを巡らせていると、携帯電話に篠原からのメールが届いた。頼んでおいたアポイントが取れたことを知らせる内容だった。抱えていた調査が終わったばかりなのでいつでもいい、と言っているとのことだった。

人と会う予定は幾つかあったが、いずれも昼から午後にかけてだ。その前に十七年前の報告書についての疑問を晴らしておけるのは悪くなかった。俺はデスクトップの電源を落として出かける準備に取り掛かった。

最初に向かったのは博多駅南のビル街だった。

高層ビル と言っても福岡は空港が中心市街地に隣接している関係であまり高くない が建っているのは駅前の大博通りや住吉通りに面した一等地だけで、一つ裏の通りに回るだけで背が低い同じぐらいの高さのビルが延々と建ち並ぶ福岡ならではの光景を目にすることになる。駅の南側に広がる一画には大小様々な会社がひしめいていて、オフィス街というよりは雑居ビルと賃貸マンションが雑然と入り混じった街並みになっている。

俺はフェアレディZを目についたコインパーキングに突っ込んで、報告書の封筒にあったパシフィックハイツ博多駅南 に向かった。福岡が太平洋に面していないことは百歩譲るとしても、“ハイツ”を名乗るのは無理がある古びた賃貸マンションだった。エレベータはなく、俺は塗装が剥がれた手摺りを頼りに階段で三階まで上がった。

廊下の一番奥、三〇六号室のドアに ミー・アンド・ユー総合調査事務所 という素っ気ないプレートが掲げてあった。それがなければ何かの事務所とは思えない店構えだった。郵便受けは各部屋にあつて、一〇時近くだというのに朝刊が挿し込まれたままになっていた。ドアの横に廊下に面した部屋の窓があつた。分厚そうな遮光カーテンのせいで中の様子は伺えない。窓枠の格子にはオレンジ色の派手なフレームのマウンテンバイクが、自転車の防犯チェーンで嚴重にくくりつけてあつた。

呼び鈴を鳴らすと少しの沈黙の後、ドアが開いた。

「誰だ？」

顔を覗かせたのはシミが浮いた弛んだ肌の男だった。おおよそ五〇代の半ばくらい、がっしりした顎とえらが張った押し出しの強い顔立ちだが、薄くなつた頭髪と鼻先に引つ掛けた黒縁のセルフフレームのせいで貧相な印象が拭えない。出で立ちはラコステのポロシャツとベージュのチノパンツというラフなものだ。痩せているのに腹だけがぽっこりと出っ張っている。

「内田さんですよね？」

「そうだが……誰だい、あんた？」

「上社といます。十七年前の調査に関する事で、お話を聞かせて戴きたくて来ました。福岡ビジネスリサーチの篠原さんから連絡がいつてると思いますが」

「ああ、何かそんなこと言つてたな。入れよ」

男は無愛想に顎をしゃくるとさっさと奥の部屋に戻った。俺も後に続いた。

短い廊下の奥はリビングダイニングになっていた。四人掛けの応接セットがあつて、反対の壁際に事務机と書棚があるだけのこじんまりしたレイアウトだ。ソファに座るとちょうど見上げることになる位置に公安委員会発行の探偵業者の営業届出書が掲げてある。奥にはもう一つ部屋があつたが、そのドアは閉じられていた。

内田はコーヒーメーカーからマグカップにコーヒーを注いだ。砂糖とミルクが要るかは訊かれなかった。きよるきよるとキッチン周りを見渡して何かを捜しているようだったが、やがて小さく首を振って応接セットに戻ってきた。

「茶うけの買い置きがない。悪いな」

「お構いなく」

俺はコーヒーに口をつけた。美味くもなく不味くもないおざなりな味だった。内田はソファにどっかりと腰を下ろした。

俺が名刺を差し出すと内田も名刺をくれた。内田雄三、肩書はミィ・アンド・ユーの福岡支社長となつているが、俺の事務所と同様に他にスタッフがいる気配はなかった。支社と言いつつも独立採算制の別会社で、実際はただの提携先という形態はこの業界では珍しくない。本社は名前を貸しているだけで幾分のロイヤリティが手に入るし、いざというときは地方スタッフをこき使える。支社側は自分で広告やインターネットのウェブサイトを運営しなくていいし、自分で営業活動をしなくても仕事が入ってくるというメリットがある。

内田は息を吹いてコーヒーを冷ましにかかった。

「俺が昔、警官だったことは聞いてるか？」

「篠原さんから伺いました。機捜に長くおられたそうですね」

「ああ。奴とは何年か一緒にやつてた。同期なんだ。あんたも薬対にいたんだって？」

「五年前まで。篠原さんとは制服組の時に一年だけ同じ署にいました」

「そういう繋がりか。あいつは機捜から捜一、その後は緊急指令室

に転属になつて」

「博多署の地域課長になられました。それから県警の捜二に異動されましたが、そこで身体を壊して退職されたんです」

「そうだったな。ちょうど奴の子供が高校受験だったから、どうするつもりかと思つて心配したよ。仕事の出来る男だから何処に行つても大丈夫だろうとは思つていたが、まさか、あの堅物がこの業界に入つてくるとは思わなかった」

「その時には、内田さんは今の仕事に？」

「……まあ、な。ちよつといろいろあつて」

内田が警察を辞めた経緯は篠原から耳にしていたが、あまり

いや、かなり 人聞きの良くない話なので知らないふりをした。

「さて、本題に入るうか。俺が十七年前に手掛けた調査のことだったな。当時の報告書があるつて話だったか？」

俺は報告書のコピーを手渡した。内田は眼鏡を掛け直してページに目を通し始めた。

「覚えていますか？」

内田はチラリと俺を見て、再び報告書に視線を落とした。

「覚えてるよ。俺がこの仕事を初めてすぐ 多分、三件目くらいに手掛けたもんだ。今の時代に駆け落ちなんてなと思つたが、誰にだつて都合つてもんがある。これがどうした？」

「父親から再度、娘の所在調査の依頼がありましたね。急な用事で連絡を取る必要があるんですが、報告書にある墨田区の弁当屋がなくなつていて、娘の所在が分からなくなつています。目下、東京で追跡調査中なんです。実はこっそり福岡に戻つてきているような形跡がありましたね」

「こっそり戻つてきたんなら、そつとしておいてやりやいいだろうに っつて、それを言つたらこの仕事は成立しねえか。何が訊きたいんだ？」

「まず、当時の娘の環境ですね。職場、交友関係、その他。父親にとつて既知のことだから報告書から省かれてるんでしょうが、重要

な情報なので」

「細かいことまでは覚えてないぜ？」

「覚えている範囲で結構です」

内田は眉根を寄せて記憶を探りに取りかかった。

「まず、仕事は報告書に書いてある通り、福岡医科大学の附属病院で看護婦　いや、今は看護師って言わなきゃなんねえのか。そいつをやってた。高校を出てから入った看護系の専門学校の提携先でな。実技はそっちに出向いてやるって形式だったようだ」

「彼女が看護の仕事を選んだ理由は？」

「父親には『早くにおつ死んだ母親の看病のときにそっちに進みたいと思つた』と説明してたんじゃないかな。まあ、俺は違ふと思うが」

「何故です？」

「専門学校には寮があつたからさ。今は建て替えでどっか遠くに移つちまつたが、当時は上川端のアーケードの近くにあつたんだ。寮と言っても門限もなけりや中洲の盛り場は目と鼻の先、おまけに男を連れ込むのもご自由になって感じだつたみたいでな。遊びたい盛りにはもつてこいだつたらうよ」

「しかし、全寮制だつた訳ではないでしょう。父親がよく入寮を認めましたね」

原岡家の邸は東区の香住ヶ丘というところにある。街中とは言えないがJR、西鉄の路線がすぐ近くを通っていて、博多区と東区の境にある福岡医科大学附属病院へ通勤するのにわざわざ寮に入る必要性はあまりない。

「確か、実習で夜遅くなつたり、逆に早朝から授業があつたりして家から通うのは大変だからつてのが理由だつた筈だ。お袋さんが『女の子の夜の独り歩きは危ないから、学校の近くに住んだ方がいいんじゃないか』と言って、ずいぶん後押ししてたつて聞いた覚えがある」

内田の言つお袋さんとは原岡洋子のことだ。当時、すでに後妻と

香織の関係が断絶状態にあったのなら、彼女が先妻の娘を追い出す口実に飛びついたとしても不思議はない。

「学校での様子はとうだったんです？」

「真面目にやっていたみたいだぜ。悪口を言った人間はいなかったんじゃないかったかな。原岡の娘と寮で同室だった娘がやつかみ半分にごちゃごちゃぬかしてたが。ほれ、娘には男がいたからな。浦辺とかいったっけ」

「駆け落ちの相手ですね。かなり真剣に交際していたようですが」

「あの年頃の惚れた腫れたがどの程度真剣なのか、俺には理解出来ねえけどな。ただ、二人の仲が良かったことは誰もが認めてた。周辺の親しい人間には、男の収入が安定したら結婚するつもりだと言っていたらしい」

「そこなんですよね」

内田は僅かに眉を顰めた。

「何がだ？」

「報告書を読む限り、二人が駆け落ちなんて古風な手段に訴えなければならぬ理由が見当たらないんですよ。そうでしょう？」

内田の顔が急速に曇った。俺は構わずに続けた。

「交際を反対されていた訳でもなく、会おうと思えば二人はいつでも会うことが出来たんです。勉強や実習で忙しかったのは事実でしょうが。まして、彼女は結婚の条件に浦辺の収入の安定を挙げていた。駆け落ちした先でそれを手に入れるのがどれほど難しいか、考えるまでもないでしょうに」

「……言いたいことは分かったが、それはつまり、俺の調査に文句をつけてるのか？」

「そうじゃありません。実際、二人は駆け落ちしているんですからね。俺が言ってるのは、二人がそこに至った別の理由があったのではないかということですよ」

「ほう、そいつは一体何だ？」

「あなたならそれをご存じじゃないかと思ったから、俺はここに」

るんですよ」

「やっぱり文句じゃねえか」

内田は獲物を威嚇するブルドッグのような顔で俺を睨みつけた。

「てめえ、上社とかいったか。篠原の紹介だからって、いい気になるなよ？」

「そんなつもりはありませんが」

さて、どうしたものか。

展開はだいたい予想した通りだったが、あまりにも予想通り過ぎて、内田の首根っこを押さえる準備が出来ていなかった。この後を考えると実力行使に及ぶのは避けたいところだ。

内田を宥める手がないものか。そう思った時、奥の部屋のドアが開いた。

「……んー、うっさいなあ……」

顔を出したのは丈の長い薄手のキャミソールにショーツというしどけない格好をした少女だった。

とっさに思い浮かんだのは昨日の女子高生だったが、彼女が一倍大人びていたことを差し引いても目の前の少女はやけに幼く見えた。ウエストのくびれに欠ける典型的な幼児体型で、そのくせに情事の後を思わせる奇妙な気だるさを漂わせている。

「おいッ、何やってんだ！」

内田はとっさに物凄い剣幕で吼えた。しかし、少女は動じる様子もなく、起き抜けのぼんやりした表情でリビングを見回した。

「ユウくん、どうして怒ってるの？」

「どうしてもこうしても、客が来たから出てくるなって言っただろうがッ！」

「だってえ……」

「まあまあ、そんなに怒らなくてもいいじゃないですか」

「てめえには関係な」

割り込んだ俺に内田は喰ってかかろうとした。しかし、急に棒を飲んだような顔で沈黙してしまった。少女は内田の娘でもおかしく

ない年頃だった。しかし、そんな筈がないことは篠原から聞かされていた。俺の表情でそれが伝わったらしい。

「ミキ、お客さんが来てるんだ。奥に引っ込んでろ」

「……トイレ」

「さっさと行け」

「はあい」

フローリングの床にぺたぺたと足音をさせながら少女は廊下の向こうへ歩いて行った。内田の膨らみかけていた怒気はすっかり萎んでしまっていた。

「ユウくん？」

内田の顔がさっと朱に染まった。頑なにあらぬ方に顔を向け、俺の方を向こうとしなかった。しかし、急に振り返ると浮気がばれた亭主のような顔で釈明に取り掛かった。

「いや、あんた誤解してるよ。あの子はそんなんじゃない」

「篠原さんが心配されていましたよ」

俺は言い訳を容赦なく遮った。内田は茫然とした顔を俺に向けた。

「……何を？」

「あなたが性懲りもなく、同じことを繰り返しているんじゃないかってね。先日、あなたが高校生くらいの歳の少女と歩いてるところを見かけたです。傍目にはとても仲の良い親子に見えたそうですが、生憎、あの人はあなたに娘がいないことを知ってますからね」

「……チッ」

この男が将来を嘱望されていながら職を追われたのは、捜査中に知り合った少女と不適切な関係を持ったことが原因だった。そういう性癖の持ち主のようで、それ以前から似たような噂はあったらしい。

実を言えば、内田が十五歳の少女と同居していることは彼の性癖と共に知らされていたし、表の派手なマウンテンバイクのおかげで少女が出掛けていないことも確信できていた。昨夜から他人の弱みに付け込んでばかりいるのは気のせいということにしておこう。

やがて、少女がトイレから出てきて奥の部屋に入ってしまった。虚ろな目で幼い同居人の後ろ姿を追っていた内田が唐突に頭を掻き毟った。

「話を戻してもいいですか？」

「……あ、ああ。何の話だった？」

「二人に駆け落ちする切迫した理由が見当たらない」

「そうだったな。ああ、確かにあんたが言うように、理屈に合わない部分があるのは認めるよ。だが、娘の周辺からはトラブルを抱えていたというような話は聞こえてこなかった。それに何と言っても若い男と女のことだ。周りには理解出来んこともあつただろうし、他に理由も見当たらなかったんだ。俺の経歴を知ってるなら、俺が聞き込みで手を抜かないことも知ってるだろう？」

「そのようですね」

それは事実らしかった。

「では、男の方のトラブルで福岡を離れる必要があつて、娘がそれに巻き込まれたという可能性はありませんか？」

「うーん……いや、それもどうか。男の方は人畜無害というか、およそ誰かと悶着を起こすようなタイプじゃなかった」

「浦辺康利の人物面も調べたんですか？ 報告書には彼のことはほとんど書いてありませんでしたか？」

「当然だろう。依頼人が知りたかつたのは娘の居所であつて、娘の彼氏の身の上じゃなかったんだからな。まあ、俺も二人の行き先を洗い出すのに、男の人となりを知る必要があつたから調べたつてだけだが」

そう言いながらも、内田の表情からは警官の矜持の残りカスのようなものが垣間見えた。どんな理由で群れを追われても猟犬は一生猟犬なのだ。

「浦辺康利について覚えていることは？」

「細かいディテールはさすがにな。確か、糟屋郡の方にある三交代製の機械工場に勤めていて、勤務態度はそれなりに良かった筈だ。

と言っても、最後は無断欠勤の末にトンスラしてるんで直属の上司はキレてたが。ギャンブルもやらなけりゃ酒も弱かったと聞いているし、はつきりした額は分からんがカネも貯め込んでたらしい。原岡の娘以外の女の影もなかった。典型的な朴念仁って奴だよ」

「結婚相手には最適の人材ですね」

「だな。しかし、そう考えると、余計に駆け落ちする必要性がなくなってくるな」

内田が本当の理由を知らないのであれば、それ以上、聞ける話はなさそうだった。俺は当時の関係者の中で連絡先が分かる人間がないかと尋ねた。

「十七年前の話だぜ？」

「あなたは捜査に使ったメモ帳を捨てない人だと聞いています」
「篠原が言ったのか？」

俺は頷いた。内田は小さな溜め息をついてソファから立ち上がると、事務机の一番大きな引き出しを引っかき回し始めた。俺はすっかりぬるくなったコーヒーに口をつけた。

「そういえば内田さん、岸川って名前の同業者を知りませんか？」

「誰だつて？」

「岸川です。下の名前は分かりません」

「うーん……どうだろうな。そう言われてピンとくるような奴はいねえな。篠原は何か言ってたのか？」

「協会に登録のある探偵社ではないそうです。公安委員会に届けが出ていますかどうかは、今調べて貰っていますが」

「この業界、モグリが幾らでもいるからな。ああ、あつたあつた」

内田は安っぽいビニールの表紙がついたメモ帳を手に戻ってきた。指に唾をつけてページを繰るとあるところで手を止め、そのページのコピーをとってくれた。

「さっきの話に出た、やつかみ屋のルームメイトの実家の住所と電話番号だ。名前は平野弥生。今でも連絡がつくかどうかは保証でき

ねえがな。あと、こっちが看護学校の電話番号。今でもやってるから普通に通じる筈だ」

「助かります」

「礼を言われるほどのことじゃねえよ。それより、一つ思い出したことがある。と言っても大したことじゃないが」

「何です？」

「男がクルマ好きだったっていうのは事実だが、報告書にある、レース関係の仕事に就きたいなんて大それたことを考えるほど熱心だったってのは、ちよいと怪しい話なんだ」

「根拠は？」

「奴が東京に乗って行った車は“ハチゴ”のレビンだぜ？」

いわゆる走り屋御用達の車にトヨタのプリンター・トレノとカローラ・レビン。型式番号AE86から通称“ハチロク”と呼ばれる車があるが、そのダウングレードがそう呼ばれていた筈だ。

「他人の車の趣味をとにかく言いたかねえが、あれはハチロクと同じ形でも中身はまったく別物のドン亀さ。レースに興味がある人間が選ぶ車じゃない。俺は浦辺の東京に知り合いつてのがその先輩しかいなくて、適当な口実をでっち上げたんじゃないかと思う」

「あり得ない話ではありませんね」

「だろ？」

俺はもう一度、礼を言って立ち上がった。内田は玄関まで俺を送りに来た。礼を尽くしているというよりは早く俺を追い出したいような感じだった。無理からぬことではあった。

「岸川って奴のことは気にかけておこう。分かったら篠原に連絡するよ」

「ありがたいですね」

「なあと、同じ警官。いや、元警官同士だからな。その代わりに言っちゃあ何だが」

「彼女のことは誰にも言いませんよ」

内田は気味が悪いほど相手を崩した。その表情は茹であがったヒ

キガエルを連想させた。

どうしてこのくたびれた中年男が親子ほども歳が離れた少女を惹きつけことが出来るのかはちょっととした謎だった。解き明かそうという気にはならなかったが。

第11章

11

「……んー、もしもしイ？」

にわかには信じがたい話だが、内田が教えてくれた平野弥生の電話は鳴らすと同時に繋がった。俺としては番号が生きているかどうかを確かめたかったただけだった。思わぬ幸先の良さだったが、心の準備をしていなかったおかげで少しばかり焦った。

「平野弥生さん、ですか？」

「そうだけど。どちらさん？」

「突然すみません。私は上社という者ですが……」

「聞いたことない名前ねえ。どっち関係の人？」

起き抜けらしい声は砂をまぶしたようにザラザラしていた。俺の推測が正しければ典型的な二日酔いの症状で、しかもそれに慣れている人間の気だるさだった。

「実は、あなたの看護学校時代の同級生のこととお電話しているんです」

「んー……」

しばらくの沈黙。

「同級生っていつても、大勢いるけど？」

「原岡香織さんを覚えていますか？」

「ずいぶん懐かしい名前ねえ。あの子、元気にしてるのかしら？」
さて、それはどうだろうか。

「香織がどうかしたの？」

「実は彼女の父親から、彼女の居所を確認して欲しいという依頼がありましたね。あなたとは寮でルームメイトだったと聞いています」「なるほどね。あんた、警察の人？」

「調査会社の者です」

「へえ……つてことは、探偵さんなんだ？」

俺はそうだと答えた。彼女は世間一般の人間が探偵という珍妙な生き物に出会ったときにせずにいられない幾つかの質問をして、俺はそれに答えた。彼女の声には隠しようのない好奇心が表れていた。目はすっかり覚めてしまったようだった。

「でも、香織はまだ学校に通ってた時に、付き合っていた男と駆け落ちしたわよ。お父さんと話したんなら知ってると思うけど。今は確か、東京にいるんじゃないかかったかしら」

「ところが、彼女の勤め先だった弁当屋がいつの間にか廃業してしまして。それで連絡がとれないという訳なんです」

「あらら。まあ、一〇何年も経てばいろいろと変わっちゃうわよね。でも、あたしが最後に香織と連絡取ったのは相当、昔のことよ？」

受話器の向こうでライターの石を擦る音がした。

「相当というのは？」

「うーん……。ああ、看護学校の担任が亡くなった時に『自分は行けないから香典出しとして』って電話で頼まれた時ね」

「それはいつの話ですか？」

「一〇……二年前。あたしが医科大の附属病院を辞めてすぐ後のことだったから。いやあ、大喧嘩したばかりの師長やら先輩やらと顔合わす羽目になって、気まずいことこの上なかったわ」

彼女は同意を求めるようにせせら笑った。俺はご希望どおりにお義理に小さく笑った。

多香子に調べて貰ったところによれば、福岡医科大は南区大橋にある私立の医科大学で、香織や平野弥生の母校である看護専門学校は同じ学校法人が経営する系列校ということになっている。卒業生

の多くがそのまま実習先の大学付属病院に勤めるケースが多いのはある意味当然のことだし、とかく人手不足になりがちな業界にとっては安定したリクルート機関でもある訳だ。但し、どうという訳か、附属病院は大学からかなり離れた博多区と東区の境に建っている。「香織さんの近況とか、何処に住んでいるとか、そういうお話は？」「したかったんだけどねえ。生憎、ちようどいろいろ忙しい時でゆつくり話せなくて。また電話するっていうから連絡先も訊かなかつたんだけど」

「なるほど。ところで、香織さんはどうやって担任の先生がお亡くなりになったことを知ったんでしょう？」

「……そう言えば変な話ね。その時は気付かなかつたわ」

「心当たりはありませんか？ 例えば、他の同窓生で連絡を取っていそうな人がいるとか？」

「あり得ないことはないと思うけど。でも、あたしは知らないわ。こんなこと言っちゃなんだけど、香織ってあんまり友達付き合いのいい方じゃなかったから。それにほら、女って彼氏がいるときは、どうしても友だちと遊ばなくなるじゃない？」

「確かにそうですね」

「それにあの子、他にも」

平野弥生は何かを言いかけて、ふつと言葉を止めた。

「どうかしましたか？」

「ううん、何も」

彼女は唐突に声を顰めた。

「それよりさ、この電話って長くなる？ あたし、これからちよつと用事あるのよね」

「それはすみませんでした。もし宜しければ、平野さんの都合がつかうときで構いませんから、会ってお話を聞かせて戴けませんか？」

「それって新手のナンパ？」

「いえ、そういうつもりでは」

「冗談よ。そんなあからさまに困った声、出さなくてもいいじゃないな

い」

彼女はからからと笑った。しかし、その口調には確かに失言を後悔するような響きがあった。

「あたし、夜は自分でお店やってるの。そっちに来てくれるんだったら、話してもいいわ」

「今夜、伺いますよ」

平野弥生は店は雑餉隈だと言った。俺は店の名前と目印の幾つかを確認して電話を切った。

続いて看護学校にも電話をかけてみた。こちらは内田が言った通りの通常営業をしていた。但し、電話に出た係の人間は“生徒の個人的な事柄はお話できない”という木で鼻をくくったような対応に終始した。予想していたことではあった。個人情報保護法の施行以来、世の中は個人情報という代物に対してなかなか収まらないヒステリー状態にある。学校関係は特にそうなのだ。

時計は十一時半を指していた。次の約束の時刻までは少し時間があつた。

一旦、事務所に戻ろうとしていると携帯にメールが届いた。東京の進藤調査事務所からだつた。女ボスの方ではなく、実際に業務を切り盛りしている娘婿からだ。用件は短く 電話をくれ というものだった。

俺は進藤敦司の携帯電話を鳴らした。

「リュウさん、お久しぶり。元気？」

体調が悪い時に耳にしたら苛立ちそうな快活な声。歳は俺と違わない筈だが、言葉遣いも含めてやけに若々しい。

「急な頼みごとで悪いな」

「気にしなくていいよ。ところで早速、報告があるんだけど、いいかな？」

「言ってくれ」

俺は携帯の録音ボタンを押した。

「まず、俺たちはあんたからの依頼を受けて、例の おがた屋の

所在地に行ってみた。墨田区の東向島。ちょうど今、スカイツリーをぶつ建ててる辺りって言えば分かるかな？」

「学生時代は東京にいたから、多少の土地勘はあるよ。それで？」
「結論から言うとおがた屋は存在しない。文字通り、何の痕跡もなく消滅している」

「区画整理にでもぶち当たったのか？ それとも、スカイツリーに踏み潰されたのか？」

「残念ながらどちらでもないね。今から十四年前、火災で弁当工場と隣接する経営者夫妻の家、その庭にあつた従業員の寮が燃えちやつたんだ」

おがた屋が火災で焼失していることは原岡の話で既知の事実だったが、俺は意図的にそれを進藤美穂子に伝えていなかった。先入観を持って調査に当たって貰いたくない故の方便だ。

「近所の和菓子屋の御隠居によれば、東京大空襲並みの大火事だったらしい。建物は跡形もなく灰になり、今は跡地にどこぞのゼネコンが高層マンションがぶつ建ててる」

「おがた屋の面々は無事だったのか？」

「気の毒なことに火の回りが早くて、ほとんど全員が逃げ遅れたらしい。火災が起きたのは深夜二時で、朝が早い仕事と言つてもまだ寝静まつてる時間帯だったんだ。おまけに戦後すぐに建てられたバラック小屋みたいな工場だったらしいからね。建築基準法、消防法、どちらもとても満たしていたとは思えない。まあ、東京の下町には今でもそういうのがたくさんあるけどさ」

「そりやまた、何と言つべきかな」

「ご愁傷様、だろうね」

香織がその火事に巻き込まれて死亡という結末なら、これ以降の調査は探偵ではなく恐山のイタコの出番ということになる。しかし、香織はその二年後に平野弥生に電話をかけている。俺はそのことを進藤に教えた。

「希望が湧いてくる話だね」

「だと良いがな。火事の原因は？」

「今、部下に図書館で縮刷版を当たらせてるよ。御隠居の話じゃ不審火説が有力らしい」

「穏やかじゃないな」

「確かにね。でも、考えてみてよ。当時は東京二十三区、何処に行っても地上げの嵐だった。立ち退きを拒否した家が放火されるなんてことは珍しくなかったんだ」

「墨田区で？」

「馬鹿にしちゃいけない。あの辺はベッドタウンなんだよ」

それはそうかもしれないし、実際に跡地にマンションが建っている訳だが。

「とにかく、近所の聞き込みは継続中。従業員がみんな寮に住んでたってことはないだろうから、関係者は必ず見つかると思う。火事の生存者が見つかるといいんだけど」

「生存者がいたのか？」

「御隠居情報によるとね。住み込みの女性従業員が夜中にぐずってた子供をあやしてて、たまたま起きてたんだってさ。近くの都立病院に担ぎ込まれたそうだから、特定するのはそんなに難しくないと
思う」

「詳しい経緯が分かったら知らせてくれ」

「了解」

電話を切って、俺は思わず大きなため息をついた。

弁当屋がなくなっていることは分かっていたが、当時の関係者が全滅に近い状態なのは予想外だった。進藤が見つ付けてくれるとは思
うが、罹災した人間がそのごたごたの最中の赤の他人のことを逐一
覚えているとは限らない。ハードルは予想以上に高かった。

次の約束は天神地下街だったので、警固に戻ってZをビルの裏手の
駐車場に突っ込んだ。事務所には上がらずに国道道路を渡り、大
名小学校の通りまで歩いた。

その並びにある古いマンションの三階に主に地元の風俗雑誌で仕

事をしているカメラマンがいて、そいつに原岡香織の顔写真を作らせるのが目的だった。長浜の写真屋に持ち込むことも考えたが、デジタル加工をするとうしてもコンピュータにデータが残る。多香子の忠告どおり、下手をすれば後ろに手が回る可能性があることを考えると一般人は巻き込みたくなかった。

目当ての部屋には表札代わりに井芹健二という男の名刺が電話番号を塗りつぶして貼ってあった。通路に面したトイレの窓が少しだけ開けてあって、そこから日本語とも英語ともつかないヒップホップが聞こえてきた。

あまり認めたくないのだが、この手の音楽はどれも同じに聴こえる。ここ数年、その傾向は強まりつつある。

呼び鈴を鳴らすと音楽が止まって、ドタドタという忙しない足音がそれに代わった。井芹はチェーンロックの長さだけ開いたドアの間から顔を覗かせた。まだ三十代前半の筈だが、顔中にくすんだ翳がべつたりと貼り付いていて、ほとんど俺と同世代に見える。

「なんだ、あんたか」

「ご挨拶だな。仕事を持ってきてやったのに」

一度ドアが閉まってチェーンロックが外れる音がした。ボサボサの髪を掻きながら、井芹は俺を招き入れた。

わざとそうしているんじゃないかと疑いたくなる寝癖だらけの頭髪とは裏腹に、ワンルームの部屋は掃除が行き届いていた。一昔前はカメラマンの家には必ず暗室があってツンと鼻をつく現像液の臭いがしたものだ。デジタルカメラの普及でそれらはすべてマッキントッシュにとって代わられている。井芹はマックの前に、俺は部屋の真ん中にあつたキューブ型のソファに腰を下ろした。

「で、仕事ってというのは？」

「コイツから聞き込み用の顔写真を作ってくれ」

俺は香織の写真入りのCD ROMを渡した。井芹がコンピュータを操作すると香織の写真がサムネイルで表示された。中に一枚、ロングショットにしては真正面から表情を捉えているものがあつた。

暑い時期のものなのか、香織は首にタオルを巻いて、黒いタンクトップにデニム地のハーフパンツというラフな格好をしていた。胸元には“PLAYBOY”のロゴとラビットヘッドが躍っている。タンクトップはピチピチで、胸の膨らみがより一層強調されて見えた。井芹はヒュウと下卑た口笛を吹いた。

「ずいぶんとダイナマイトなお姉ちゃんじゃないか。こういうの好きなんだよなあ。最近は風俗でも腰の細い女が多くてさ」

「おまえの好みに合わせてリクルートしてる訳じゃないだろうからな。ごちゃごちゃ言わずにさっさとやれよ」

「ハイハイ、もっとカネになる仕事かと思ったよ」

井芹はブツブツ言いながらマウスを操作した。レタッチソフトが起動して香織の顔がディスプレイに大写しになった。俺は立ち上がって井芹の背後から画面を覗き込んだ。

「ずいぶん荒いな」

「もともとの画質が悪いからな。あまり拡大はできないぜ。ドット画みたいになっちゃう」

「顔の識別ができればいい」

井芹は色調を変えたりトリミングを調整したりを繰り返した。俺はソファに戻った。

そういえば、朝から熊谷の動向をチェックしていないことを思い出し、俺はiPhoneを引っ張り出した。

熊谷のマセラッティは西区の敬聖会総合病院の敷地内に停まっていた。考えてみれば当たり前の話で、事務長というからには基本的に院内で仕事をしている筈だし、外出には社用車を使っている可能性もある。ついでに言えば、真っ昼間に隠れ家に寄る用事があるとも思えない。

俺はアプリを終わらせて壁一面を占めている本棚を眺めた。その中から井芹が仕事をしている風俗誌のバックナンバーの一つを手にとった。

「へえ、あんたもそんなに興味があるんだな」

井芹は画面から目を離さずに言った。

「俺だつて嫌いじゃないさ。眺めるだけならな。ところで、女の子の写真の下に載ってる年齢とかスリーサイズってのは本当なのか？」
「まさか」

プリンタが起動するブーンという音がした。井芹は吐き出されてくる印画紙をじっと見詰めていた。満足のいく出来だったらしく、何度も頷きながら俺に寄越した。

ヒュー・ヘフナーのお目がねにかなうかどうかは大いに疑問だったが、アップになった香織は思っていたよりも端正な顔立ちをしていた。痩せていれば父親譲りの敵めしい感じになるのかもしれない。
「いい出来だ」

俺はポケットからあらかじめ小さく折っておいた弐千円札を取り出して渡した。井芹は露骨に舌打ちしながら受け取った。

「これっぽつちかよ」
「一〇分も働いてないだろうが。時給一萬円の仕事なんて、それこそ風俗嬢くらいしかないぜ」

「ちえっ。最近、いろいろと払いが多くて懐が敵しいんだよな」

ふと、俺の脳裏に名案が浮かんだ。

「だったら一つ、アルバイトしてみるか？」

「……何だよ、急に」

この男は今でこそ地方でカメラマンをしているが、かつては東京の雑誌社で写真週刊誌の専属をやっていたことがある。尾行経験がある上に本職の尾行要員ほどの経費はかからないとなれば、真奈の仕事をやらせるにはもってこいの人材だった。別件の仕事を抱えていることは原岡には説明してあつて、必要ならその分も自分が払うから香織を捜すことに専念するように言われているのだが、さすがにそういう訳にはいかない。

俺は敬聖会の事務長の身辺調査を請け負っていて、とりあえず三日間の尾行を引き受けるならバイト代を払うと言った。井芹は顔の半分でほくそ笑みながら、残りの半分で警戒するという器用な真似

をしてみせた。

「危ない相手じゃないんだろうな？」

「見つかりさえしなければな。それ以前におまえ、選り好みが出来る立場なのか？」

「うっせえよ」

俺は井芹のiphoneにアプリを転送して、データサーバにアクセスできるように設定した。仕事が終わった後はサーバ側のパスワードを変更すれば済む。経費として一万円は渡したがそれ以上の前払いの打診はきっぱりと断った。その経費にしたところでこの後、銀色の玉を眺めながら瞑想しているうちに全部なくなってしまっただ。

俺は筋違いの恨みがましい視線を無視して井芹の部屋を後にした。

第12章

12

次に向かったのは北天神にある不動産屋だった。

ごく大雑把に言えば天神地区を横断する幹線道路のうち、海側から三本目の昭和通りより北側が北天神ということになるが、狭い意味では親不孝通りとその一帯を指す。夜は寂れた盛り場であるこの界限にはもう一つの顔があつて、メイド喫茶やアイドルショップ、インターネットカフェ、マンガ専門店、フィギュア専門店、モデルガンショップ、その他、オタク街を形成するのに必要なものが一通り揃っているのだ。詳しいことは知らないがローカルアイドルのグループまでいて、この辺りのイベントスペースを根城に活動しているのだそうだ。“九州のアキバ”を名乗るには街の規模と家電量販店が欠けているが、それは少し南下した天神で補えるので問題ではないらしい。

目当ての不動産屋は事務所や貸店舗といった業務用の物件を得意としている店で、一般客を呼び込む必要がないからか、ビルの六階にあつた。実は俺が所有するビルの管理を任せている会社なのだが、普段の書類の行き来は営業の坊やを介してしか行っていないので、訪れたのはずいぶん久しぶりだった。

タベ　　というか、今朝早く　　にアクアを訪れた帰り、物件を管理している不動産屋の確認はしてあつた。空き物件には入居者募集の張り紙がしてあるし、そうでなくてもエントランス近辺には必

ず管理会社の連絡先は掲示されているものだ。それが自分に関わりのある会社だったのは運が良かったとしか言いようがない。

一般企業より少し遅い昼休みで社員は出払っていて、事務所にいたのは営業の坊やだけだった。勿論、そうなることを狙ったの訪問だった。

「上社さん、急に何ですか？」

坊や 中村が言った。吊るしの紺色のスーツすら着せられた感が丸出しの痩せっぽちの体躯、根の暗そうな細面、キノコを連想させる形の無造作な髪型。書類のやり取りを頼むセレクトシヨップの店員の間では“シユンスケさん”という渾名で通っていて、日本代表戦は必ずスポーツバーで観戦するサッカー好きである本人は秘かに気に入っているらしい。由来が苗字ではなく貧相な顔立ちなことを本人だけが知らない。

どうでもいいが、俺はこの男の下の名前をどうしても覚えられない。人間、興味の無いことは覚えれないということだろう。

「急にじゃないだろ。ちゃんと連絡はしておいた筈だ」

「そうじゃなくて、急に店子の管理情報を見せるだなんて、どういうことですか。しかも言われたとこ、上社さんの物件じゃないじゃないですか！」

「ごちゃごちゃ煩いな。急いでるんだ、早くファイルを持ってこいよ」

「無理ですよ。こんなのバレたら、俺、クビですって！」

「誰もいないし、第一、今どきコンピュータ管理にもなっていないのに、どうやってバレるんだよ。おまえが自分でしゃべらない限り、バレやしないよ」

「いや、でも……」

「もしバレても、俺が庇ってやるから。ちゃんと社長に言ってやるよ」

「……ホントですかあ？」

「やんちゃだった若かりし頃、仲間たちと悪さをするたびにこの手

のやり取りを繰り返したものだ、この手のいじめられっ子体質の人間は社会に出てからも同じ目に遭う宿命にあるのだろう。遭わせている俺が言うことではなからうが。

中村はブツブツ文句を言いながら、顧客管理台帳と書かれた分厚いクリアファイルを持ってきた。

「第三舞鶴ビルの六階でしたっけ？」

「アクアという店だ。物件の借り主の情報が知りたい」

「ハイハイ……あつた、これだ」

ファイルが俺の方に向けられた。

台帳の右のページにはアクアが入居している物件の詳細、見取り図、家賃などの基本情報を記した物が入っていた。三〇坪の広さで賃料は月に十六万。賃料の下落幅が大きいとされる北天神界限でも飛びぬけて安い。居抜き物件だったらしく什器類は前の入居者からまるごと引き継がれているが、それも只同然になっている。保証金と内装工事代、酒や備品類を買い揃えても、開業資金はせいぜい二〇〇万といったところだろう。格安の出物と言っている。

安い理由は備考欄にあった。告知事項有りとされている。

「ここ、人が死んでるんですよ」

中村は眉を顰めた。陰鬱な顔立ちがさらに暗いものになった。

「三年くらい前かな。当時はナイトって言うんですか　いわゆる、ホストクラブみたいな店だったんですけどね。そのナンバーワンに貢いでた女が、閉店後に忍び込んでそのホストを刺し殺した挙げ句、自分も焼身自殺しちゃいました」

「おやおや」

「幾ら安いっていっても、あんまり縁起が悪いってしばらく借り手がつかなかったんですけどね。一年くらいは空室だったのかな」

俺は左のページを見た。

物件の契約は二年前、借り主は井上徹となっていた。住所は糟屋郡志免町。高田泰明の名もその偽名である岸川の名も、当然、本名の浦辺康利の名前も一切出ていない。何故か、紹介者の欄には横線

が引つ張つてあつた。

「これは？」

「うちもずいぶん、次の借り手を捜してくれないとカネにならないつて言われてたんですけど、なかなか見つからなかつたんですよ。そうしたら、オーナーさんが自分で借り手を見つけて来てくれたんです」

「なるほど。おい、それなのに、仲介手数料はしっかり取つてるじゃないか」

「通常の半額ですよ。それに、何もしてないつて訳じゃないんです」
中村は少しムツとしたような顔をしていた。確かに引き渡しに際してやることはいろいろあつただろうし、毎月の賃料の回収といった業務もある。

保証人の欄には“桐島沙耶香”とあつた。住所は福岡市東区千早四丁目、ガーデンシティ千早A棟三〇一号室。

岸川がやっていたと言う興信所とキシカワ・インヴェステイゲーションの関係に続いて、また一つ、奇妙な合致が見つかった。そこは昨夜、熊谷幹夫が同乗者の秘書然とした女を送つていった住所だつたのだ。

予想していたことではあつたが、自分で借り主を見つけてきたという第三舞鶴ビルのオーナーは、当時のことをよく覚えていなかった。彼は赤坂の中央区役所近くの持ちビルの一つの一階で喫茶店を経営していて、俺はサイフォンで淹れられた美味くも不味くもないサントスを啜りながら話を訊いていた。

「えーっとね、誰かの紹介だつたんだよねえ……。直接の知り合いじゃなくてさ、当時のうちの店子の知り合いの、もう一つ知り合いつて感じでさ」

禿頭の人の良さそうな顔をした初老の男は眉間にしわを寄せて記憶を探っている様子を見せたが、真面目に脳細胞を働かせるつもり

がないのは傍目にも明らかだった。なかなか借り手がつかない物件を押し付けられただけで充分で、紹介者の素性はどうでもよかったのだろう。

「井上という男には会ったんですか？」

「会ったよ。何て言うか、昔はやんちゃだったんだろっけど、今は真面目にやってるって感じだったんで安心したのを覚えてる。隣にいた保証人の女の人がいかりした感じだったのもあるんだろっけど」

「女性？」

「恋人じゃないかな。いや、それにしても、少し歳が離れてたかな？」

昨夜のエミはしっかりと印象を与える女ではあったが、どう着飾ったところで井上より年嵩には見えない。

俺は聞き込み用の写真から、マセラッティの助手席の女のものを取り出した。

「この女性ですか？」

店主はカウンター越しに首を伸ばして写真を見た。

「ああ、この人だね。もうちょっと髪が長かったよな気がするけど」

「名前を覚えていますか？」

「さあ……？細かいことは不動産屋さんに任せてるから」

他に訊けそうな話は見つからなかった。俺は礼を言って代金を払い、喫茶店を後にした。約束の時間がそろそろ迫っていたからだ。

第13章

13

天神地下街はその名の通り、天神のメインストリートである渡辺通りの真下を南北に走る地下街だ。

周辺のビルのほとんどと接続していて自由に行き来が出来るのと、西鉄福岡駅や地下鉄の二つの路線の駅の乗り換え地点でもある為、人通りが多く常にごった返している。劇場をイメージしたという通路が暗くて店舗がライトアップされた演出は独特のものだ。床は石畳を、壁には煉瓦を、天井に蔦の這う紋様を配した空間は、製作者の意図するヨーロッパの街並み云々はともかくとしても、騒がしい街の喧騒とは一線を画した雰囲気を出している。

俺はその南側、二〇〇五年の地下鉄七隈線の開業に際して延長されたブロックにいた。地下街の南端には市営地下鉄の天神南駅の入りがあって、その目の前にはスターバックスがある。権藤康臣は待ち合わせの場所にそこを指定してきていた。どうしてスタバなのかという問いには「フラペチーノが飲みたいからだ」という答えが返ってきていた。俺に言わせれば酒豪の権藤とフラペチーノはイチローとレフトフライくらい縁がなさそうなものだが、好みは変わるものらしい。

平日の昼下がりの割に店内は混んでいた。俺はカフェラテを買って店内を見回したが、権藤の姿はなかった。少し遅れるかもしれないとは聞いていたので、気にせず席をとった。

先に用事を済ませておくことにして多香子に電話をかけた。

「どうしたの？」

「頼みたいことがあるんだ」

俺は今朝からの調査で判明した事柄をかいつまんで説明した。その過程で不可思議なイコールが生まれたことを説明する必要もあって、俺は榊原真奈の依頼についても多香子に話した。

「それで？」

「桐島沙耶香の住民票と戸籍謄本が欲しい。キシカワ・インヴェステイションの登記簿はこっちでどうにかなるが、戸籍謄本は俺じゃ手も足も出ない」

「お友だちの代書屋さんに頼めば簡単に手に入るんじゃないか？」「いつの時代の話をしてるんだ」

一昔前ならば多香子が言うように他人の戸籍謄本を手に入れるのはそれほど難しいことではなかった。代書屋 行政書士は職権により他人の住民票や戸籍謄本の取得が認められているのだが、食い詰めた行政書士が探偵や借金取りから取得を請け負うアルバイトをしていたり、酷い場合には申請用紙そのものを横流しすることもあったからだ。しかし、近年は窓口での申請者の身分確認の厳格化や不正取得を理由に資格停止などの行政処分が下るケースが多くなり、以前のように気軽に応じる行政書士はいなくなつた。

「住民票はともかく、戸籍謄本は本籍地が県外だつたら時間がかかるわよ？」

「そのときは仕方ないさ。よろしく頼む」

「何となく、あなたのもう一つの調査に利用されてるような気がするんだけど」

「それを言うのなら、本来、まったくの別件の筈の調査で関係人物が重なり始めていることを不審に思うべきだな」

「それはそうね。あなたの見解は？」

「一つなら偶然もあり得る。だが、二つ重なつたらそれは必然だ」

「真奈ちゃんっていつたかしら、その子。彼女があなたを知つたのは由真の紹介なんでしょう？」

「本人はそう言っていた。だが、それが真実であるとは限らない。彼女が俺を知ったのが由真の口からというのは真実かもしれない。だが、それ以前に何らかの形で俺を知っていた可能性がないとは言えないからな。それについて一つ確認しておきたいんだが、原岡修三に俺を紹介したのがあんただってのは本当の話か？」

「どういうこと？」

「原岡が最初から俺をリストアップしていた可能性はないのか、と言っているんだ」

「……どうかしら。でも、私に探偵を紹介しろと言ったら、あなたの名前が出てくるのは必然と言えるかもしれないわね」

「最初は余所に話を持って行ったようだが」

多香子は盛大に鼻を鳴らした。

「だから、土壇場になって条件をつけたりしたのかもね。あなたじやない別の探偵を寄越そうとしたから」

「最初から俺を指名すれば済んだ話なのに、回りくどいな」

「保険を掛けたかったのかもね」

「何の？」

「義理のある仲介者を挟んでおけば、あなたが依頼を断り難くなるでしょ」

「そんなものかね」

俺が多香子に何の義理があるのかは敢えて触れなかった。

「でも、彼女と原岡家の間には何らかの接点があるの？」

「それは分からない。原岡修三が入院しているのは榊原家が経営しているサナトリウムだが、いくら院長の娘でもあそこに入入りしているとは考えにくい」

「じゃあ、どういうことなのよ？」

「彼女に訊いてみるしかないだろうな。まあ、話してくれば、だが」

「そうする予定は？」

「今のところは無しだ。何せ、連絡先も訊いてないんでね」

「どうしてそういうとこ、詰めが甘いの？」

「余計な御世話だよ」

多香子の実の姪 由真のことだ に訊けばどうにでもなることだし、多香子はそうしようと言ったが、俺は曖昧に押し止めて電話を切った。由真に対する俺の屈折した感情は多香子の知るところだったし、由真が父方の親戚に引き取られて以降、多香子と由真は微妙に縁遠くなっているので無理に訊いたりはいしないだろう。

俺はスーツの内ポケットから二つ折りにした封筒を取り出した。喫茶店で話を聞いた後、立ち寄った法務局で手に入れたキシカワ・インヴェステイションの法人登記簿だった。

それによればキシカワ・インヴェステイションは二〇〇〇年設立の調査業を目的とした特例有限会社で本店所在地は福岡市南区塩原一丁目、資本金は三〇〇万円となっている。塩原は熊谷の経営コンサルティング会社がある博多区竹下からだといふ鹿児島本線のJR竹下駅を挟んだ反対側にあたる。

特例有限会社とは二〇〇六年の新しい会社法施行の前に存在していた有限会社が、新法施行後に株式会社に移行するに際して、従来と同じ取扱いを受けるとされる会社のことだ。役員の任期の制限がなかったり、決算公告をしなくていいなどのメリットがある。また、旧会社法では株式会社は取締役を三人と監査役を置く必要があったが、有限会社では取締役は一人で良く、監査役も必要ない等の簡素な機関設計となっていた。

その取締役欄には高田泰明の名前があった。偽名の岸川名義でないのには理由がある。取締役の法人登記をするには市区町村が発行した当該人物の印鑑証明書が必要であり、架空の人物を登記することは出来ないからだ。住所は博多区住吉三丁目、住吉神社の参道前にあたる一画だった。

予想されていたことだったが登記簿に熊谷幹夫の名前はなかった。有限会社の所有権を意味する持分 新法においては株式 の内訳は記載事項ではなく、キシカワ・インヴェステイションが高

田泰明のものだったか、実質的に熊谷の支配下にあつたのかは外形からは判別出来ない。とは言え、熊谷が乗り回しているマセラッテイはこの会社にリースされた物件であり、無関係である可能性は皆無なのだが。

書類を封筒に戻して、メールチェックを済ませておくことにした。届いていたのは二件。

一件目は井芹からの。今、ターゲットを確認。秘書っぽい女とメシ食いに行くみたいだけど、つけた方がいいか？ というものだった。届いたのは三〇分ほど前で、今さら返信しても無意味なので放置することにした。まさか、桐島沙耶香と昼下がりの情事を楽しむ為の部屋が件のアジトということはないだろう。

二件目は篠原からだ。公安委員会に届けのある探偵社に岸川なる人物の会社、及び、個人は存在しないという内容だった。昼前にミー・アンド・ユーの内田から「一つ心当たりがあるから調べてみる」という連絡があつたことも付記してあつた。内田の幼い同居人について二人の間でどんな会話があつたのかは書いてなかった。

カフェラテを啜っていると、目の前にプラスチックのカップを手にした痩身の男が立った。

「……早かつたな」

降ってきたのはガソリンでうがいをしたような嘎れ声だった。

胡麻塩頭の角刈りは、前に会つたときより塩の割合が増えていた。太い眉の下のぎよろりとした眼差し、物心ついた頃から苦虫を噛み潰し続けているに違いないシニカルに歪んだ口元。以前はいかにも中間管理職らしいメタボリック体型だったが、何年か前に胃潰瘍を患って以来、着ぐるみを脱いだのかと思うほど痩せてしまっている。内勤になってからは毛嫌いしていたネクタイを大人しく締めるようになっていて、今もダークブラウンのスーツとベージュのシャツに光沢のある青いペイズリー柄のネクタイを合わせていた。仕事中は緩めないという結び目が下がって襟元のボタンが外れていることからすると、この逢瀬の為に早退してきたらしい。

「約束は二時半だった筈だ」

「出る時につまらん用事で呼び止められたんだ。だいたい、堅気の人間は仕事してる時間だぞ。おまえみたいにフラフラしてれば話は別だが」

「フラフラは酷いな。俺だってちゃんと働いてる」

「覗き屋なんか仕事のうちに入るか」

権藤は向かいの椅子にどっかりと腰を下ろした。

「そう言えばこの前、あんたの奥さんとばったり会ったよ」

「あいつと？」

「喉元過ぎればじゃないが、ちょっと調子がいいと病院に行くのを嫌がって困るって言ってたぞ。いい歳なんだから、子供みたいなことと言って奥さんを困らせない方がいいんじゃないか」

「つまらん話をしおって。それより、おまえの方こそどうなんだ。

久しぶりに会ったんだ、時候の挨拶くらいするもんだろ」

「時候の挨拶？ ああ、初雁の姿に秋を感じる頃ってやつか」

「誰がそんなくだらん口上を述べると言った。第一、福岡に住んできて雁なんぞ何処で見るんだ」

「知るか、そんなこと。じゃあ、何を言えって言っただ？」

「徳永の娘のことに決まっとするだろうが。俺とおまえの間に他にどんな話題がある？」

「俺の健康のこととか」

「誰が覗き屋風情の身体など心配するか」

「だろうな。まあ、元気にしてるみたいだぞ」

「みたい、とはどういう意味だ？ ちゃんと面倒を見ているんだろっ？」

「由真の面倒を見ているのは叔父夫婦だよ。俺は養育費を払っているだけさ」

俺は毎月、由実子が使っていた口座に由真の生活費と学費、積み立てなどの雑費、塾や習い事の月謝、それとは別に由真名義の口座に小遣いを入金している。由真の口座の残額が減っていることはた

まにしかないが。しかも使ったときにはわざわざ丁寧な報告と礼のメールがくる。

「しかし、たまには会っとなるんだろう？」

「必要があればね。しかし、そんなことは滅多にないよ。そんなに心配なら、自分で会いに行ったらどうだ？」

「馬鹿なことを言うな。俺がどの面を下げた徳永の娘の前に立てると言っただ」

「俺よりはマシだろう」

「……ふん」

権藤は犬のクソを踏んだような渋い表情を浮かべた。俺の仕事ではたまに見かける表情だった。思い出したくない過去と強制的に向き合わされるとき、人はよくこんな顔をするものだ。

*

*

*

徳永夫妻の相次ぐ死後、県警上層部はスキャンダルにならないように細心の注意を払いながら事後処理を行うように関係各所に指示を出した。司法解剖はされなかったが、監察官室の連中は由実子の薬物使用の事実を掴んでいたのだ。

何故、すぐに知らせなかった。シャブ中の更正がどれほど難しいか、おまえたちが一番良く知っているだろうに。

片岡という名のやけに白い貌をした監察官の言い草を、俺は昨日のこのように思い出せる。

確かにそうなのだ。法廷で覚醒剤との訣別を誓いながら同じ罪で手錠をかけられて連行されていく人間を、俺は数え切れないほど見てきた筈だった。強制的に絶たれてもそうなのだ。克己心など期待する方が間違っている。

なのに、俺はそれを由実子に求めた。俺は自分がいれば由実子を

立ち直らせることが出来ると勝手に思い上がった。

悪いのはおまえだ。責任は背負って貰うぞ。

片岡の言葉の意味を知ったのは、査問の為の会議から解放されて課に戻ってきたときだった。いつもしかめっ面をしている古株の親爺がニタニタと笑いながら俺を間男呼ばわりしたのだ。俺が相棒の目を盗んでその妻と不倫関係にあったのは、驚くほどの速さで既成事実と化していた。

俺と由実子の仲を疑う噂が横行したのは小さな嘘で大きな真実を覆い隠す為だった。そして、その噂を流す指示を受けたのは他の誰でもない、当事者の刑事たちの管理責任を問われた県警薬物対策課長の権藤だった。

悪く思うなよ。

その言葉は俺ではなく徳永に向けるべきものだった。

権藤の意を汲んで俺は誰に訊かれても肯定も否定もしなかった。当時、大人の情事の意味が分かる歳でなかったことを差し引いても由真は何かに感じていたようだったが、俺は彼女に対しても沈黙を押し通した。

リュウさん、ホントのこと、教えてよ。

向けられる無垢な視線は生涯で味わったことのない針の筵だった。しかし、それは権藤にとっても同じだったに違いない。由真に真実を告げなかったという点で俺と権藤は同罪だからだ。

母親がシャブ中だったというよりも不倫の方がまだマシという理屈もあるだろう。しかし、権藤康臣という男はそんな誤魔化しを自分に向けられるような男ではなかった。

*

*

*

「……ところで頼んだものは？」

話題を戻すと権藤はジツと俺を見据えた。

「その前に訊いておきたいことがある。おまえ、元公安の人間を調べて何をやる気だ？」

「何も。俺はただ、熊谷幹夫が住所とは別に持っているヤサを調べてくれという依頼を受けて、ターゲットの予備知識が欲しいだけだよ」

「誰がそんな依頼を？」

「言える訳ないだろう、そんなこと」

「探偵に守秘義務なんかないぞ」

「あるよ。探偵業の業務の適正化に関する法律、その第一〇条に“正当な理由がなくその業務上知り得た人の秘密を漏らしてはならない”と規定されてる」

「くだらん。だいたい、いくら辞めちまったと言っても、刑事のことを外に洩らせる訳なんかないんだ」

「ほう、原岡修三に辞めた刑事のことをペラペラ喋った人の台詞とは思えないな」

「誰が誰に喋ったって？」

「しらばっくれても無駄だ。何だったら、俺と原岡の会話の録音を聞かせてやろうか？」

俺はお返しに権藤の顔を見返してやった。権藤はバツが悪そうに顔をしかめた。

「……仕方ない、特別に教えてやろう」

自分の論理を振りかざすところは昔とまったく変わっていない。この男は現役の時、被疑者の取り扱いに問題があると怒鳴り込んできた名うての人権派弁護士に向かって「奴らの人権などハードルに過ぎない」と言い放ったことがある。飛び越えられない時は蹴り倒

せばいいという意味らしい。

権藤は擦り切れた革のビジネスバッグから大判の茶封筒を取り出した。儚い抵抗のようにわざとらしく勿体ぶってから、それを俺の前に置いた。

俺は封筒を手に取った。中にはA4に印刷された熊谷幹夫の人事データが入っていた。

それによると熊谷は福岡県久留米市の出身で、地元の小中高を卒業後、東京の私大に入学している。家族構成は父母と妹が一人。幼少時から柔道をやっていて、高校の時はインターハイにも出場している。大学卒業後、国家公務員二種試験に失敗した後、一年の浪人を経て福岡県警に採用。警察学校と地域課の交番勤務、機動隊といった具合に概ね普通の警官と同じ道を歩いていて、各所での成績は概ね良好だったようだ。二年目の交番勤務の時にラリって包丁を振り回したヤクザを取り押さえて最初の本部長表彰を受けている。

その後、県警刑事部捜査第二課に配属され、幾つもの事件の捜査本部で目覚ましい成果を上げている。主だったものは北九州の機械部品メーカーによる外為法違反事件で、第三国を経由する不正輸出のからくりを押収資料から読み取り、おまけに海外逃亡を図ろうとした会社幹部を空港で取り押さえるという金星を挙げている。他にも華僑系地下銀行を使ったマネーロンダリング事件、筑豊地方の国有地売却に絡む贈収賄事件。地元の大物代議士が関わったと言われる。で事件の構図を洗い出す重要な役目を担ったとされている。巡査部長に過ぎない若輩としては過度の重用とも言えるが、それに見合う実力と年齢に似合わない政治力を発揮して実績を積み上げていったようだ。

公安課へ異動したのは三〇歳の時だ。当時の階級は警部補。理屈の上では可能でも、実際はほぼ不可能レベルの昇進速度だ。そしてこれを機に公式の記録は途絶えている。公安課の活動内容は極秘であり、これ自体はあり得ないことではなかった。

最後の一行は十四年前、三十九歳で依願退職したことを示すもの

だった。理由は一身上の都合。特に不祥事の類を起こしたような形跡はないが、これも公安という組織の性質上、記録に残らない事実がある可能性はある。賞罰については本部長表彰が七回、戒告処分が一回。いずれも捜査二課時代のものだ。不思議なことに公安に移ってからは昇進しておらず、退職時の階級も警部補のままだった。「十四年前に辞めた男だし、そもそも公安の人間だ。資料には通り一遍のことしか残ってなかった」

権藤はフラペチーノをちびちびと口に運んでいた。

「ということは、資料に載っていない情報が存在することだな？」
「誰がおまえに人の言葉を裏読みすることを教えたんだ？」

「さあ、誰だろう？」

「……ふん」

面白くなさそうに鼻を鳴らすと、権藤は老眼鏡をかけて手帳を開いた。

「まず、捜二時代についてはそれほど目を引くエピソードはない。途轍もなく優秀な刑事だったことを除けばな」

「当時、戒告処分を一度受けてるな」

「捜査方針を巡って管理官と掴み合いの喧嘩をやらかしてのものだ」「捜二の管理官と言えばキャリア組がお遍路さんで廻ってくるポジションだな。よく戒告程度で済んだものだ」

「まあな。しかも、後に熊谷を公安に引っ張ったのがその時にぶん殴られたキャリアだというから驚きだろう。何処かの県警を廻ってから福岡の外事課長で戻ってきた時に、当時の本部長と直談判して異動させたんだとさ」

「拳で語り合った仲という訳か」

「その辺はどうだかな。とにかく、熊谷に関しては少なくとも刑事部でとやかく言う人間はいない。一部、やつかみの声を除けばな」

「付き合いがある人間は？」

「奴が警察を辞めてからはほとんどいないようだ。刑事部に関して、だが」

「公安は？」

「分かる訳がなからう、そんなこと」
「確かにそうだな」

逆に言えば、刑事部にコネがあっても経営コンサルタントの仕事には役に立たないことの証でもある。警察における花形部署と思われがちだが、意外とつぶしが効かないのが刑事という仕事なのだ。

「公安に移ってからのエピソードは？」

「残念ながら何も と言いたところだが、面白い話が二つほど聞けた。まず、公安で熊谷が何と呼ばれていたか」

「何だ？」

「“四課の熊谷”だとさ」

「……県警の公安は三課までしかなかった筈だよな？」

「その通り。一瞬、外事課のことかと思っただが、教えてくれた奴によると違うらしい」

「どういう意味だ？」

「何をしているのか分からない、という意味さ。所属は公安二課だったが、奴は警視庁公安部から直々に指示を受ける立場にあったそうだ。まあ、そもそも県警の公安は警視庁の出先機関みたいなものだから、それ自体は不自然とまでは言えないがな。一時期、課内では熊谷がそのうち、警視庁に引き抜かれるんじゃないかとまことしやかに囁かれていたそうだ」

「もう一つは？」

「そんな熊谷が警察を辞めた理由だ。どうやら女絡みらしい」

「スキヤンダルということか？」

「そういう訳じゃなさそうだ。付き合っていた女が自殺して、それを自分の責任だとひどく苦にしていたらしくてな。仕事もまったく手につかなくなり、それまで冠婚葬祭以外では一度も休んだことがなかった男が一週間もの無断欠勤をやらかした。上司の計らいで有給扱いで処理されてるんで記録には残ってないが」

「女の名前は？」

「そこまでは分からん」

俺はその名を知っている。榊原佳織。榊原真奈の母親の妹にあたる人物だ。

「他に何か分かったことは？」

「警察時代に関してはこんなところだ。あとは奴がやっている経営コンサルタント会社の略歴が資料にあった」

「何でそんなものが？」

「おまえみたいな下っ端は知らんだろうが、辞めた刑事が何をしてくるか、ちゃんと調べてるんだよ。問題を起こしてくれたときにまったく把握してないと上から文句を言われるからな」

「俺も調べられているのか」

「ファイルくらいはあるかもな。紙の無駄だと思うが。熊谷の場合は公安上がりってこともあるだろうよ」

「……で、熊谷の会社は？」

「社名は熊谷総合企画、所在地は博多区竹下。アサヒビールの工場のすぐ近くだ。株式会社になっていて取締役は熊谷本人と両親。監査役は榊原誠一という男になっている。誰だか分かるか？」

「さあね。後で調べるよ」

権藤は眼鏡越しに鋭い一瞥を投げつけてきた。疑うことが仕事であり、本能でもある刑事の眼差しだった。

「何か掴んだようだな」

「どうしてそんなことが分かるんだ？」

「俺がどれだけ、おまえのを見てきたと思ってる。おまえには合点がいったときにやる癖があるんだよ」

「どんな？」

「それを教えちゃ面白くないだろうが。とにかく、俺に調べがついたのはこのくらいだ。ところで原岡修三の娘の件だが、依頼は受けたのか？」

「それを訊いてどうする？」

「どうもしない。退職金と年金を棒に振るような危ない橋を渡る気」

はないんでな」

「こつちにもその気はないよ。今日の埋め合わせはそのうちに」
「生意気なことを抜かすな」

原岡はバッグを手に取ると席を立った。俺はそのままで見送った。権藤は店の出口で二本指を額に掲げる、今どき誰もやらない挨拶をして歩き去った。

住吉の高田泰明の自宅へ向かうべきか、それとも塩原のキシカワ・インヴェステイゲーションを見に行くべきか。

高田のヤサはもう少し暗くなつてからの方がいいだろう。俺は国体道路でタクシーを拾つて竹下に向かった。

博多駅の南側、どちらかと言えば隣の竹下駅に近い街中にアサヒビールの博多工場があつて、目の前には地表を走る鹿児島本線と新幹線の回送列車を利用した博多南線の高架が上下に並んで走っている。周辺には築年数が進んだ雑居ビルが多く、一等地には事務所を構えられない細々とした会社が集まつている。住宅地でもあるのだが近くにあまり学校がないので学生の姿は多くなく、騒がしい感じはしない。

熊谷総合企画が入居しているビルは駅へ向かう竹下通り沿いにあつた。塗り直したばかりのクリーム色の六階建てで、一階はスカンジナビアの輸入雑貨を扱う店とジャマイカン・カラーの看板の古着屋、それより上の階にはワンフロアに三つか四つずつの会社が営業をしている。権藤がくれた資料によれば熊谷の会社はこの二階にあるのだが、看板が出ていないので二階の何処かは分からなかつた。ビルの裏は駐車場になつていて、奥まつた角のスペースにマセラッティ・グラントウーリスモが窮屈そうに停まつていた。熊谷幹夫のいや、キシカワ・インヴェステイゲーションがリースを受けて

いる車だ。

これがあるということは近くに井芹がいる筈だった。俺は奴の携帯電話を鳴らした。

「……何だよ、ちゃんと仕事してるぜ」

「そんなことは聞いてない。俺も奴の車の近くにいらんだ」

「そういうことか。 ああ、いたいた。 あんた、ホントに探偵に見えないな」

「余計なお世話だ」

井芹は熊谷の事務所の向かいのビルにいるらしかった。呼びつけるほどのことではないし、二人でいるところを見られるのも得策ではなかった。俺はここまでの報告を求めた。

「病院を出てから、一度、前原市内方面に向かった。立ち寄ったのは糸島医師会病院と、併設されてる糸島地区夜間急患センター。滞在時間は合わせて三〇分くらいかな。その後、市内に戻ってマリノアでお食事。俺は駐車場でマセラッティに張り付いてたんで、何処で何を食ったかは不明」

「それはどうでもいい。相手はどんな女だ？」

「見た感じは三〇代の半ばってところかな。丸顔の派手で男好きのするタイプだ。髪型はパーマのかかった黒髪のベリーショート。スタイルは出るとこは出て、引っ込むべきところはちゃんと引っ込んでる。服装は白のブラウス、青系のタータンチェックのヴェスト、膝丈の紺のタイトスカート、灰色のストッキング、黒いパンプス。あと、AVに出てくる女教師みたいなセルフフレームの細い眼鏡をかけてる」

「……そのどの辺が秘書っぽいんだ？」

「病院の事務長が一般の職員連れて、外にメシ食いにいかないだろ。それは確かに一理ある。服装を別にすれば女の特徴は桐島沙耶香と合致していた。」

「食事の後は？」

「天神の福岡銀行の前で女を降ろしてる。女はそのまま銀行に入っ

ていった。マセラッティは国体道路経由で冷泉公園の向かいのマンションに停まった」

「そこは熊谷の自宅だ。どれくらい停まっていた？」

「一時間つてとこじゃないかな。それくらいで女がマンションまで歩いてきた。途中までバスかもしれないが」

「女はマンションに入ったのか？」

「ああ。聞いて驚けよ。女は自分のバッグからキーホルダーを出して、合鍵でオートロックを開けて入っていった。かなり手慣れた感じだったぞ」

「どの辺が？」

「何もかも。普通、自分ちでもないのにインターホンも鳴らさずに鍵は開けない。いくら合鍵を持たされていたってな。つまり、女は日常的に男のマンションに出入りしてるってことになる」

「それを写真週刊誌的に表現すると？」

「“熱愛発覚”」

熊谷の私生活がどうであろうと俺には無関係だが、奴が警察を辞めた経緯を思い起こすと、時間の経過とそれに伴う感情の風化というものを感じずにはいられない。

「それから？」

「すぐに二人で下りてきてここへ直行。そろそろ一時間になるが、他に人が出入りした形跡はなし。俺がいるところから事務所の中がほんのちよつと見えるんだが、二人とも何やらデスクワークにいそしんでるようだぜ」

「おまえの聲が残念そうに聞こえるのは気のせいかな？」

「気のせいじゃないよ。ところで大将、この後、俺はどうすればいい？」

「仕事は継続中だ。もうしばらく張り付いててくれ」

「了解」

その後の調査はひとまず井芹に任せて、俺はキシカワ・インベスティゲーションの所在地に向かった。地図では近くに見えるがJR

の高架の向こう側の川沿いで、結構歩かなくてはならなかった。

洒落た名前に反して、目当てのリバーサイド塩原レジデンスは川沿いに建つごくありふれたワンルームの賃貸マンションだった。築年数もかなり進んでいて、コンクリートの外壁には葡萄の房のようなひび割れがあちらこちらに走っていた。エントランスにはちやんとオートロックがあつたが、駐輪場に繋がる内側からしか開けられないドアの足元に拳大の石が挟んであつて、出入りは自由に出来る状態になつていた。鍵を忘れて出掛けるくせのある住人の誰かの仕業だろう。

キシカワ・インヴェステイションの住所はこの三〇五号室になつていた。俺は階段で三階に上がった。各階には長い外廊下があつて、三〇五号室は階段とエレベータから見えて奥から二番目の部屋だった。

古めかしい鉄製のドアは風雨に晒されて錆だらけだった。フィツシユアイの少し下の淡いグリーンの塗装がA4サイズくらいの大きさに灼け残っている。手を触れてみると僅かにテープのような粘着物の手触りがあつた。剥がしてからそれほど時間は経っていないらしい。ドアの横に格子のはまった窓があるがカーテンはなく、曇りガラス越しにも部屋の中がらんとしているのが見て取れた。

周囲に人影がないことを確認してドアノブに手をかけた。当然、鍵が掛かつていた。

さて、どうしたものか。

鍵はよくあるディスクタンブラー錠で、開けようと思えば開けられないことはない。警官という仕事は犯罪者と最前線で対峙する仕事であり、基本的に敵対関係にあるのだが、同時に取調べという名の濃密なやり取りをする間柄でもある。俺は薬物対策課に行く前に半年だけ所轄署の刑事三課で窃盗犯を追い回したことがあり、そのときに事務所荒らし二〇年のキャリアを持つ爺さんからピッキングのコツを教わつたことがあつた。

但し、それをやるにはやはり人目を避ける必要があつた。暗くな

って出直そうかと考えていると、隣の三〇六号室のドアが開く気配がした。

「あー、すぐ行くからさ。悪かったって言ってるじゃん。分かった分かった、今日は俺の奢りでいいよ」

言い訳をまくし立てながら出てきたのは、中肉中背のどこにでもいそうな朴訥とした若い男だった。サイケデリックな色合いでバラク・オバマの顔をプリントしたTシャツとスリムなストレートデニム、足元はコンバースのクラシックなバスケットシューズ。

彼は俺を見かけるとギョツとしたような表情を浮かべた。そして、それはすぐに訝しげなものから関わり合いになるのを避けるようなものに変わった。彼は俺に小さく会釈をして横を通り抜けようとした。

「あー、君。ちょっといいかな？」

彼がもしそのまま立ち去ったら、追いかけるつもりはなかった。しかし、彼は足を止めた。

「……何ですか？」

「ちょっと訊きたいことがあるんだ。君のお隣さんについてなんだが」

「知りませんよ。付き合いもないし」

「だろうね。昨今は珍しいことでもない。えーっと、斉藤公則くんか」

「えっ？」

不意に名前を呼ばれて彼は驚いたように目を丸くした。どの部屋もドアの横に表札を入れるスリットがあって、彼はそこに律義にフルネームを書いたプレートを差し込んでいた。俺はそれを読んだだけだ。

「……あなた、誰なんですか？」

「上社というものだ。ちょっと事情があって、三〇五号室で商売をしているキシカワという男を探しているんだ」

「警察の人ですか？」

「以前はね」

「ここで自分は探偵だと名乗っても失笑されるだけだろう。斉藤は怪訝そうに目を細めた。

「すみません、ちょっと急いでるんです。彼女との待ち合わせの時間を間違えちゃって」

「それは大変だな。時間はとらせないから、幾つか質問に答えてくれるとありがたい。もちろん、礼はするよ」

「礼？」

「彼女のご機嫌をとるのに、軍資金はあって困らないだろう？」

「いや、別に僕は」

斉藤は心外そうに口許を歪めた。しかし、申し出を突っぱねて立ち去る気配はなかった。

「……何を訊きたいんですか？ 言っときますけど、お隣さんとはほとんど口を利いたことはないんですよ」

「しかし、見かけたことくらいはあるだろう？」

「そりゃ、たまには。……ホントにたまにですけど」

「どんな男だった？」

「えーっと、だいたい四〇歳くらいのすっごく顔色の悪いオッサンでした。背は僕と同じくらいですけど、僕よりずいぶん軽そうな感じ」

「君は何センチの何キロだ？」

「一七〇の六十二」

浦辺康利の身体的な特徴については何も掴めていないが、後で確かめる機会があれば参考にはなる。

「他に何か特徴は？」

「そんなにしげしげと見たことないんですけど。……ああ、目立つのは左の手の甲にあるでっかい傷跡ですかね。人差し指の付け根辺りから斜めに一本」

彼は右の人差し指を左の手の甲の上に走らせた。

「古傷って感じだったけど、そう言えば、癖みたいに反対の手で触

つてましたね。僕の彼女がそれを見て、そんなに気になるなら手袋すればいいのって言ってました」

「彼女の言う通りだな。この部屋に出入りしていたのは、傷跡のある男だけかい？」

「うーん……。たぶん、そうじゃないかと思えますけど。でも、僕も学校とかバイトでいないことも多いんで」

「こんな男を見たことは？」

俺はズームアップした熊谷の顔を斉藤に見せた。

「……どうかな。僕は見たことないです」

「そうか。ところで、そのドアに何か貼ってあったらしいんだが、何が貼ってあったか知ってるかい？」

「えっ？」

斉藤は三〇五号室のドアを見た。

「あれっ、白いプラスチックの板が貼ってありましたけどね。キシカワ何とかって書いてある……。いつ剥がされたんだろ？ 毎日、前は通るけど気がつかなかったな」

「まだ、接着剤の粘りが残っている。そんなに前じゃない筈だがね」「ですよ。この前の日曜日にゼミの先輩が遊びに来て、隣は何やってんだって話をしましたから」

「一週間以内ということだな？」

斉藤はうなずいた。しかし、それは住人の仕業ではあり得ない。

その時には浦辺康利は司法解剖に付されるべく、九大か福大の法医学教室の冷蔵庫にいた筈だ。

「すまないが、ちょっとだけ君の部屋に上げてくれないか？」

「どうしたんですか？」

「ベランダからお隣さんの部屋の中を覗きたいのさ。ひよっとしたら、お隣さんはここを引き払ったのかもしれない」

「まあ、構いませんけど……」

約束に遅れていて断られるかと思ったが、斉藤は親切にも部屋に入れてくれた。後で渡すつもりだった五千円札を財布から引き抜い

て彼に渡した。

部屋は短い廊下にユニットバスとおもちゃのような小さなキッチンがあつて、その奥が俗に言う狭間の一〇畳という、ワンルームマンションとしてはおくありふれた間取りだった。男の一人暮らしにしてはきちんと片づけられているし、変な臭いも籠っていない。家電製品が全体的に古めかしいのは賈い物が多くを占めているからだろう。

当然のことながら隣も同じ間取りの筈だった。だとすれば、いわゆる一般的な意味で探偵事務所としてここを使うのは難しい。強請り屋の仕事に必要なものが置いてあつた場所と考えるのが妥当なのだろうか。

俺はスリッパを借りてベランダに出た。洗濯機置き場はあつても洗濯物を干すのにも苦勞しそうな小さなベランダだった。隣の部屋とは防火用の仕切りで区切られている。火災のときはこれを突き破つて隣室へ逃げるようになっていたのだが、このベランダの狭さでは整理整頓が苦手な隣人がいたら即座に逃げ場を失うに違いない。

錆と剥がれかけの塗料が服につかないように借りたバスタオルを柵にかけて、俺は大きく身を乗り出して三〇五号室を覗いた。部屋はもぬけの空だった。夕暮れの陽射しのせいで部屋に舞っている埃まで見えたような気がした。

「どうですか？」

斉藤は自分も覗きたそうな顔で言った。俺はバスタオルを彼に渡した。

「夜逃げ屋本舗を雇つたらしい。君はここに住んでどれくらいになる？」

「二年半ですね。今年、三回生なんです」

「にも関わらず、奴とは滅多に顔を合わせていないだろう。奴にとつてここは生活の拠点ではなくセーフハウスだった可能性が高いな」

「セーフハウス？」

「隠れ家のことさ。身近に置いておけないものを隠しておいたり、何らかの事情で家に帰れない時にほとぼりを冷ましたり。郵便物の受け取りに使うこともある」

「……そういえば」

「何だ？」

「いつだったか、郵便配達が書留か何かを持ってきてたことがあるんです。その時、受け取ったのが見たことのない女の人でした」「それはひよつとして、この女じゃないか？」

俺は桐島沙耶香の写真を見せた。

「たぶん、間違いないと思います。こんなしつかりした格好じやなかったですけど」

「どんな格好だったんだ？」

「薄い部屋着のワンピースでした。肩ひもがなくてベアトップみたいになってて、何て言うか、なまめかしい感じでした」

「難しい言葉を知ってるな」

斉藤は褒められているのかどうか分からないように目を瞬かせた。これ以上、空っぽの部屋を眺めていても意味はなかった。念の為に携帯のメールアドレスを載せた名刺を渡して、彼女が何か知っていたら教えて欲しいと頼むと斉藤は二つ返事で了承した。素直で気のいい若者なのだ。

俺は礼を言っつて斉藤の部屋を辞した。

階下に降りて木戸の携帯電話を鳴らした。夕べと違ってすぐに繋がった。

「もしもしッ！」

俺は思わず携帯電話を耳から離れた。背後で工事現場のような爆音が鳴り響いているせいか、木戸の声は怒鳴り声に近かった。微妙に裏返っているのは本人も自分の声を聴きとれていないからだろう。「おまえ、何処にいるんだ？」

「何だつてッ？」

諦めて電話を切ろうとしたら爆音が少し遠くなった。それでようやく、音の正体が下手糞なデスメタルバンドが放つ騒音だということとが分かった。一生懸命演奏しているであろう当人たちには申し訳ないが、とても音楽とは呼べない代物だった。

「ああ、悪い悪い」

爆音は遠くに去り、木戸の声のトーンも元に戻った。

「どうしたんだ、照和で殺人事件でも起こったのか？」

「馬鹿言え、あそこがDMCもどきのバンドなんかステージに上げる訳ないだろう。取材で行橋のライブハウスにいるんだよ」

「……おまえ、社会部の人間じゃなかったのか？」

「監督と起用法で揉めて、FAで文化部に移籍したのさ」

木戸はしばらくの間、自分のスタンスに無理解なデスクに対する

愚痴をこぼした。どこまで本気で言っているかは分からないが、スタンドプレイの多い木戸が扱いにくい部下なのは事実だ。これまでも似たような形で違う部署に追いやられたことがある。その都度、社会部に復帰している辺りは木戸が優秀な記者である証拠と言えるのかもしれない。

「で、何の用だ？」

「浦辺康利の左手に古傷があるかを知りたい」

短い沈黙。

「……どうして俺がそれを知ってる？」

「今のところ、俺の周りでおまえが一番、浦辺のことに詳しいからさ」

「言ってる意味が分からんな」

「しらばっくれるなよ。おまえが何故、事件の担当でもないのに浦辺のことに詳しいか、俺が気付いていないとも思っているのか？」

再び沈黙。さつきよりは少し長かった。

「こいつは驚いたな。俺はどうして、あんな安っぽい強請り屋風情について詳しいんだ？」

「おまえ自身が奴に強請られたことがあるからさ」

「はあ？」

俺は構わず続けた。

「おそらく、浦辺は新聞社に情報源が欲しかったんだろう。記事にはならなくても情報が渦巻いているし、浦辺みたいな連中にとつてはデータベースは宝の山だ。そこで白羽の矢を立てられたのが木戸、おまえだった。おまえは浦辺に自分から手を引かせる為に、逆に奴の弱みを握ろうと奴の身辺調査をした。違うか？」

確たる証拠があつて言っていることではない。しかし、外していない自信はあつた。木戸照之には表沙汰に出来ない性癖がある。有り体に言えば同性の恋人がいるのだ。

無論、昨今は同性愛者に対する理解も深まっているので、それがバレたからといって即座に社会的地位を奪われることはないだろう。

しかし、細君と二人の愛娘との仲睦まじい家庭はそうはいかない。カムフラージュの為に結婚した江川紹子似の細君はともかく、溺愛していると評判の可愛い娘たちに白眼視されることは木戸にとって死に等しい筈だ。ちなみに知り合った直後、俺は木戸に「男が好きなくせに娘を溺愛するのは矛盾していかないか？」と訊いたことがあるのだが、思わず身が竦むような目で睨まれたのでそれ以上のことは訊けなかった。

木戸はかつてないほどの舌打ちをマイクに送り込んできた。

「ちえっ、おまえの質問なんかに答えなきゃよかった。……あつたよ、刃物でザツクリ切られたでかいヤツがな」

俺は斉藤に聞かされた傷跡の特徴を話した。木戸は間違いないだろうと答えた。

「どうして出来た傷か、知っているか？」

「本人はヤクザと喧嘩して出来たものだと言ってたが、本当のところは中洲の違法カジノで負けが込んで、取り立てに来たカジノの用心棒につけられたものらしい」

「浦辺はカネに困っていたのか？」

「安定した収入が期待できる商売じゃないからな。浮き沈みは激しかっただろうさ」

「そいつは変だな」

「何が？」

「親不孝通りのアクアの開店資金は浦辺が出しているんだ。正確なところは分らんが、ざっと二、三〇〇万つてところだろう。しかし、おまえの話を聞くと浦辺にそんな余裕があつたとは思えない」

「それ以前に人に金を貸してやるような男じゃないよ。金を無心することはあっても」

そのあたりは木戸の人物評のバイアスもかかっているから断定は出来ないが、不自然なのは確かだ。

「奴について、他に何か知っていることはないか？」

「高田泰明という男の経歴」

「聞こう」

「高田泰明つてのは北九州市の小倉北区か南区のどつちかの出身で、歳は浦辺と同じだった筈だ。学校まで一緒だったかどうかは分からんが。地元じゃちよつと名が売れたヤンキーで、高校を出ると同時に地元の指定暴力団にスカウトされて業界入り。その後、傘下の組を渡り歩いたが、十三年ほど前に組の金に手をつけてぱったりと消息を絶つた。ところが、その三年後に不意に福岡に現れて興信所を開いている」

「空白の三年間の足取りは？」

「ビビディ・バビディ・ブー」

おそらくその魔法使いはトカレフを持っていて、本物の高田泰明は鉛玉で体重を増やして関門海峡辺りに沈められたのだろう。

浦辺康利が高田泰明にならなければならなかった理由は分からな。浦辺自身に何らかのトラブルがあつて、姿を消す必要に駆られたのだろう。ただ、内田の話によれば浦辺の身边にそこまでの危地に追い込まれるような要素はなかった筈だ。少なくとも原岡香織と共に福岡を離れるまでは。

だが、仮にその後何かあつたとしても、依然として辻褄が合わない点はあつた。裏社会では戸籍売買も普通に行われている取引の一つだが、素人が買いたいと言つて買えるようなものではないからだ。トラブルを起こして消されたヤクザ者の戸籍となれば尚のことだ。

そこには工員上がりの朴念仁とは遠く離れた世界の住人の助けが必要だった筈だ。

脳裏に浮かんだのは元公安の警察官のいかつい顔だった。

「 上社？」

「……ああ、悪い。ちよつと考え事をしてたんだ。ところでおまえ、高田の会社について調べたか？」

「勿論、調べたさ。だが、何も出てこなかった。仕事をしている形跡がないんだ。新人の坊やに仕事の依頼の電話をさせてみたら、嫌

々そんな感じで話は聞いてくれたが、待ち合わせは見事にすっぱかされたよ。俺は高田の会社は、奴が自分の名前を出したくない調査のときに使っていたんだろうと思ってる」

「他に出入りしていた人間はいなかったのか？」

「実態のない会社だからな。スタッフとか、そういう人間はいなかった。当の本人もいつもいた訳じゃないし。　ああ、でも、女が留守番してたことがあったって不動産の管理会社の奴が言ってたっけ。ホステスみたいな感じの色っぽい女だったらしい。浦辺の女じゃないだろうがな」

「どうして、そんなことが言える？」

「奴が俺のご同輩だからだよ」

「浦辺が？」

少なくとも十七年前の浦辺康利は原岡香織の恋人だった筈だ。

長い年月の中で同性愛に転向するような出来事があったのだろうか。そういう変化があるものなのか、筋金入りの女好きを自認する俺には皆目見当がつかないが、木戸が言うのなら嘘ではなからう。

逆にそうであったからこそ、世間にひた隠しにしている木戸の性癖を浦辺が嗅ぎつけることが出来たのかもしれない。

「女の素性は調べなかったのか？」

「当然調べたさ。名前は桐島沙耶香。下の名前がウチのカミさんと同じなんでよく覚えてる。聞いて驚け、西区に敬聖会ってでかい病院があるだろう。あそこの事務長付きの秘書だ」

「ほづ……」

俺は驚いたふりをしてみせた。

浦辺が最近何をやってたかについては、木戸は本当に何も知らないと言い張った。木戸にとっては俺も自分の秘密を握る側の人間であり、最初の段階で知っていることを話してくれなかったことを考えると鵜呑みには出来ない。だが、浦辺が死んだ今、少なくとも奴に関して嘘をつく必要性はなかった。

「ところでおまえ、結局のところ、どうやって浦辺を引き下がらせ

「たんだ？」

「大したことじゃない。奴とのやり取りの中でわざと口を滑らせたのさ。“キシカワさん”ってね。それつきり連絡してこなくなつた」
「なるほど」

俺は取材中に時間を割いてくれた礼を言った。木戸は露骨な舌打ちで応えた。

「じゃあな、俺は仕事に戻るよ。おまえに悪意がないことは分かつてるが、不愉快だからしばらく連絡してこないでくれ」

俺はそうすると答えて電話を切った。タクシーが拾える竹下通りまで歩いて戻りながら、俺は何度も携帯のディスプレイに写る桐島沙耶香の写真に目を落とした。

写真にその人間の内面は写らないが、時に切り取られた一瞬の表情が被写体の人間性を雄弁に語ることもある。ズームアップさせた桐島沙耶香の俯き加減の静かな微笑みは、一見、有能で従順な秘書に見えるが、どことなく憂いを帯びた蠱惑的なものにも見えた。そういう意味では斉藤の“なまめかしい”という評は実を的を得ていた。

但し、そこにあるのはベティ・ブープのような健康的なセックスアピールではなかった。

中洲の南側に広がる博多区住吉、美野島一帯には二つの顔がある。一つは日本三大住吉の一つである住吉神社の門前町という顔だ。樹木に囲まれた境内と周辺の閑静な街並みは、そこが九州最大の盛り場のすぐ近くとは思えないほどだ。

もう一つは県下最大級の指定暴力団の門前町という顔だ。二次団体、三次団体の事務所は言うに及ばず、彼らのフロント企業である土建業、建築業の会社も数多く軒を連ねている。

元々、博多駅前地区と天神地区のちようど谷間にあたるこの限界は微妙に都市開発に置いて行かれた地域であり、町全体が昭和で時が停まったような雰囲気の色濃く残している。表通りに面しているところには背の高い立派なビルが建ち並んでいるが、その裏側は軽量鉄骨のアパートや木造建築の民家がモザイクのように狭い土地にひしめき合っている。喩えは良くないが、俺はこの光景を見るとハリボテのセットとその裏側を連想してしまう。

そういう土地柄もあって、家賃は市内中心部にしては驚くほど安く、時折、進学や就職で福岡に出てきた若者が不動産屋の口車に乗って入居したりするのだが、そう遠からざる時期に夜更けに騒いでいるところを尋常ならざる雰囲気を漂わせたご近所さんの来訪を受ける羽目になる。この辺りで悪さをする人間が少ないのは、単に住人の主だったところがその筋の人間であるか、その関係者であるからに過ぎない。

曲がり角の電柱に貼り付けられた緑色のプレートを見ながら、タクシーの運転手は車を狭い路地に乗り入れた。俺もスマートフォンロードマップで位置を確認した。大まかなブロック表示しか載っていないが目印がないよりはマシだった。

「……これですかね？」

「これだな」

運転手が示した先にはスレート壁の古びたアパートがあった。刺すような西日に晒されて建物全体が風化しつつあるような印象だった。他人の住まいを悪く言うてはいけないと思うが、暮らし向きの良い人間の住むところではなさそうだった。

俺はキシカワ・インヴェステイションの登記簿を取り出した。高田泰明の住所はサンコーポ美野島、部屋番号は二〇六。なのに、並びには部屋は五つしかない。

「四号室がないんですね。それだけ古いつてことですか」

いかにも詮索好きそうな運転手だったが、こちらから特に話すことはなかった。俺は料金を払ってタクシーを降りた。

鉄製の手すりがついた階段を上るとカンカンと硬い足音が響いた。まだ日が沈むのには早く、影は足元に長く伸び始めていた。

二〇六号室のドアの横には錆びついてペンキの剥がれた郵便受けがあつて、名前を書いたプレートを差し込むスリットに横書きの名刺が差し込んであつた。

俺はそれを引き抜いた。岸川英一、キシカワ・インヴェステイション代表。業種が分かるようなことは書かれておらず、電話番号も固定ではなく携帯電話のものだった。メールアドレスもソフトバンクモバイルのドメインになっている。多重債務者や日雇い労働者名義で契約された、いわゆる飛ばし携帯かどうかは分からないが、料金未払いを理由におよそ二ヶ月程度で使用できなくなるものを名刺に印字するのはあまり効率的とはいえない。知人の誰かに契約させたものである可能性の方が高いだろう。

浦辺は殺害されたときに該当する携帯電話を持っていたか。おそ

らく持っていただろう。しかし、現場に身元の割り出しに繋がる遺留品はなかったとされている。ということは、今頃は持ち去られた先でスクラップと化している筈だ。

当然のことだがドアには鍵が掛かっていた。力任せの蹴りを三発ほど叩きこめば破れそうな木製のドアで、下の方に配達された新聞を差し込む為のスリットがあった。今も夕立が降ってきた時の為にビニール袋で包まれた西日本新聞の夕刊が突っ込んである。

おかしな話だった。浦辺が殺害されて以降、ここは無人の筈だからだ。少なくとも一週間分の朝刊と夕刊が溢れていなくてはならない。新聞配達の連中は受け取られていない前日の新聞を持ち帰ったりはしないし、日常的に他人の新聞受けから新聞を引き抜く習性の隣人がいれば、浦辺もそれなりの対策をしていただろう。

つまり、浦辺康利には同居人か、定期的に通ってくる何者かがいることになる。普通に考えれば女ということになるのだが、木戸の弁によれば相手が男ということもあり得る。

不法侵入を試みるにしても、部屋に出入りする人間を監視するにしても、陽が落ちきらない今の時間帯は動きようがなかった。

他に出来ることは聞き込みしかない。俺は階段を下りて一階の一番奥、一〇六号の管理人の部屋のドアを叩いた。

「はい？」

顔を出したのはそばかすだらけの素顔を晒した四〇絡みの女だった。枯れ草のような色の髪を頭頂部で団子のように纏めて、恰幅の良い身体を赤い袖のラグランスリーブのＴシャツと赤いジャージのハーフパンツで包んでいる。リングサイドにいれば新日本プロレスの若手でも通りそうだ。手には大手スーパールのプライベートブランドの発泡酒の缶が握られている。一本目ではないらしく、さして近づいてもいない俺のところまでアルコールの臭いがした。

女は視線を上下させて素早く俺の身なりを吟味した。そして、当然の帰結のように舌打ちをしてみせた。

「……誰だい？」

「何が？」

「今度はウチのどの部屋の住人が借金を踏み倒そうとしてるのかって訊いてるのさ。あんた、借金取りだろ？」

誰もが口を窮めて糾弾する俺のファッションセンスも役に立つことがあるらしかつた。内心忸怩たるものがないではないが、せつかなので女の勘違いに便乗することにした。

「二〇六号室の岸川という男だ」

「……あたしには高田って名乗ってたけどね。ああ、でも、会社はそういう名前だったっけ。偽名で契約するなんて、いい度胸してるわ」

「偽名は岸川の方だよ。本人確認はしなかったのか？」

「契約は不動産屋に任せてるからね。ああ、でも、そう言えば身分証明書のコピーは貰ったっけ。よく見てないけど」

「見せてくれ」

「えっ？」

「そいつを拝ませてくれ。礼はする」

「あんたのそのグローブみたいな手で殴られる以外の？」

俺は財布から五千円札を一枚引き抜いてみせた。女はドストドと足音をさせて部屋の中に歩いていき、プラスチックの表紙のクリアファイルを持って戻ってきた。乱暴な手つきでページをめくる。

「こいつだよ」

「間違いないか？」

「あんた、獲物の顔も知らないのかい？」

呆れた声は無視して示されたページを見た。高田泰明名義の住民基本台帳ネットワークのカードのコピーだった。

白黒なのでコントラストが強調されて病的に痩せて見えたが、総じて言えば二枚目の部類に入れても良さそうな甘めの顔立ちだった。やや天然パーマ気味のくせ毛をボサボサに伸ばして、顎の下にだけうっすらと髭を生やしている。眉は太く、その下の眼差しは目尻が下がっていて柔和に見えるが、実物はもう少し鋭く見えるのかもし

れない。鼻は細い鷲鼻で幾分小さめの口許とよくバランスが取れている。

「こいつの左手を見たことがあるか？」

「手？ さあ、どうだろう？」

「甲に大きな傷がなかったか？」

「あつたような、なかったような……」

「どっちなんだ？」

女はニタリと笑った。さらに金を引き出そうとしていることは明らかだった。

払えない訳ではなかった。俺のギャラとは別に原岡からは潤沢な経費を支給されているし、金を惜しむ必要はないとも言われているからだ。ただ、あまり簡単に言い値に応じていると不都合な点が増えてくる。

俺は手を伸ばして女の胸倉を掴んだ。Ｔシャツが伸びて実際にはそれほど首が締めりはしないのだが、その分だけ拳が眼前に迫って圧力は増す。

喚き出すかと思ったが、女はジッと俺の顔を見返したただけだった。度胸が据わっているというよりは、恐怖に対する感性が磨滅しきつたような印象だった。

「なんだい、あんたも女に暴力を振るうクチかい？」

「必要に迫られればね」

「ふん、最低な男だね。 あつたよ、ブラックジャックのサンマ

傷みたいなのでつかいのが」

「間違いないか？」

「嘘言つてどうなるんだい」

俺は掴んでいた手を離れた。財布に手を伸ばし、樋口一葉の代わりに福沢諭吉を引き抜いて渡した。女は恨みがましそうな目で俺を睨んでいたが、口許はだらしなく笑っていた。

「痛めつけるんだったら、余所でやっつくれよ。それでなくても安普請なんだ、あんたみたいなのに暴れられたら床が抜けちまうよ」

「よくあるのか？」

「は？」

女は俺が自分の頭の場所を訊いたように訝しげな顔をした。

「何が？」

「借金取りが住人を訪ねてことがあるのか、と訊いてるんだ」

「あたしに訊くことじゃないだろ。自分たちが日頃から哀れな連中にどんな追い込みをかけてるか、胸に手を当てて思い出してみるといいさ」

「そんな連中に部屋を貸して、家賃は回収出来ているのか？」

「期日までに払わなかったら即刻出て行って貰うだけさ。本当だよ。先月も一人、金策がつかないって泣きついてきたのがいたけどね。その日のうちにすぐそのゴミ捨て場に家財道具一式、捨ててやったさ」

「……そんなことをして、よく無事に住んでいるな」

「いっそ、逆恨みで火をつける奴が出ないかなって思ってるんだけどね。そうしたら、火災保険でまとまったカネが入ってくるだろ。」

でも、そんなガッツのある奴はいないよ。そんな奴はこんな掃き溜めみたいなとこに流れてきたりしないのさ」

ガッツという言葉の使い方が誤っているような気がしたが、指摘するのはやめておいた。

「高田は一人で住んでいたのか？」

「そうだね。でも、通ってくる女がいたよ」

「この女か？」

桐島沙耶香の写真を見せた。女は眉根を寄せて覗き込んだが、すぐに首を横に振った。

「ぜんぜん違うよ。もっとすらつとした、男みたいな娘だったね。」

いつもジーパンにシャツつて感じで」

「娘なのは間違いないのか？」

「どつという意味だい？」

質問はすぐに下卑た推測に変わった。女はワイドショーに釘づけ

の主婦でもやらないほどニンマリと笑った。

「ああ、そういうことかい。へえ……あの男、そういう趣味なんだね」

「そういう噂を聞いたことがあるというだけだ。実際、俺は高田の相手を見ていない」

「でも、そう言われてみれば男でもおかしくなかったよ。あの俳優に似てたんだ……ほら、韓国の映画で、大道芸人が二人で怖い王様を笑わせなきゃならなくなるやつで、そのうちの一人が男なのに女みたいに綺麗で」

「王の男 のことだな。似てるのはイ・ジュンギか。切れ長の目で涼しい貌をしている」

「それだよ、それ！」

女は韓流好きらしく、その俳優の名前が出てきたことにやけに興奮していた。二人組の大道芸人が王を批判する芝居をして不興を買い、死刑を逃れるには暴君で知られる王を笑わせなくてはならなくなる。二人のうちの女形芸人がなんとかそれに成功し、二人は王のお抱え芸人になるのだが、やがて、宮廷を舞台とした陰謀劇に巻き込まれていく そんな内容の映画だった筈だ。

「イ・ジュンギはしょっちゅう来ているのか？」

「ほぼ毎日。昨日も来てたっけ。男はよく一週間くらい留守にすることがあったけど、そういうときも毎日来て部屋の掃除したり、洗濯したりしてた。いっそのこと、一緒に住めばいいのって思うくらいだよ」

「何故、二人はそうしないんだ？」

「あたしが知る訳ないだろ、そんなこと。男が怪しい商売をやっているからじゃないのかい？」

「どこら辺が？」

「そう言われても困るけど……。ヤクザ者じゃないと思うけど、だからって堅気には見えなかったからね。そうじゃないのかい？」

「まあ、そうなんだが」

浦辺の仕事については木戸から得た情報だけで自分で確認した訳ではなかった。木戸が信用できないということはないのだが、好き嫌いも含めて、利害関係者のバイアスの掛かった話を鵜呑みにはできない。

高田の部屋を見せて欲しいと言うと、女は露骨に顔をしかめた。

「そんなことしてどうするのさ？」

「実は高田が一週間ほど前から姿をくらましてるんだ。誰も行き先を知らないし、当然のことだが電話にも出ない。とんずらするような兆候はなかったんだが、そうしたのかもしれない。そこで、俺に奴を捜してくれと依頼があつたんだ」

「……あんた、借金取りじゃないのかい？」

「俺が貸してる訳じゃない。貸してるのは花岡組系列のヤミ金さ。その店の長と俺は飲み仲間だね」

花岡組とは猪俣が所属する暴力団のことだ。何なら猪俣がしたたかに酔つ払つて財布の中身をキヤバクラの床にぶちまけたときにせしめた奴の名刺を見せてやってもよかつたが、女に疑っている様子はなかつた。

「鍵を貸さなかつたら？」

「ドアの横の壁に穴が開くかもしれないな」

「あんたならやりかねないね」

女は性病検査の検体を扱うような手つきで小さな鍵を持って戻ってきた。

「鍵はこれだよ。ただ、手荒な事はしないでくれ」

「そうしよう」

「それと、これは一応、管理人としてはやっちゃいけないことなんだよ。それなりの見返りは欲しいね」

「脅されて仕方なく鍵を開けたことにした方が、あんたの立場としてはいいような気がするんだが？」

「言われなくても分かつてるさ、そんなこと。でも、それはあんたがしゃべらない限り、誰にも分からないことさ。そうだろ？」

「違くない」

俺は福沢諭吉をもう一枚引き抜いて女に渡した。女はフンと鼻を鳴らして、鍵を俺の掌に落とした。

警官時代からの習慣に則って白い手袋をしてから、安普請のドアに設えられた安物のドアロックを外した。出来るだけ音がしないようにゆっくりドアを開けたつもりだったが、ギシリと蝶番の軋む音がするのは止められなかった。

部屋はコンパクトな造りだった。ドアの右手にユニットバス、左手に狭いキッチン。奥は四畳半、そのさらに奥に六畳間。キッチンは剥がれかけのクッションフロアだが、奥の間はいずれも畳敷きだった。構造上、襖を閉じてしまえば四畳半に窓はないのだが、襖は外されて壁に立て掛けてある。代わりに鴨居にハンガーが鈴なりになっていて、掛けられた衣服が不完全ながらカーテンの代わりに務めていた。

室内は拍子抜けするほど片付いていた。キッチンも掃除が行き届いていて、男の一人暮らしに付き物の不潔な感じはまったくしない。俺の自宅のキッチンもかなり綺麗な方だという自信があるが、それは単に家でほとんど食事をしないからに過ぎない。

一方、この部屋の主は自炊派のようである。調理道具も食器類も一通り揃っていた。流し台の奥に鍋やフライパンを乾かす為のカゴがあった。その中にはル・クルーゼの黄色いオーバルまであった。

俺が何故、女性に大人気のキッチンウェアについて知っているのかと言うと、去年、結婚した権藤の娘への祝いに買ってやった。正確に言うと彼女の父親に買ってやれと強要された。からだか、それはともかく。

玄関の脇に靴箱があったが、中に収まりきれない分は三和土に出

されていた。履き込んだ感じの茶のローファーが一足、ナイキとノ
ーブランドのスニーカーが各一足。

「ん？」

二足のスニーカーはサイズが違っていた。ナイキは二八・〇、ノ
ーブランドは二六・〇。ちなみにローファーは二七・五だった。サ
イズの開きからするとローファーとナイキは同一人物のものだろう
が、ノーブランドは別人の靴だった。通ってくるイ・ジュンギのも
のだろうか。

俺は靴を脱いで部屋に上がった。

衣装ケースや箆笥の類はどれもホームセンターで売っている安物
ばかりで、それらはすべて手前の四畳半に集められていた。掃除機
や近頃はあまり使わなくなっただであろう扇風機、一方、まだ出番が
来ないファンヒーターなどのかさばる家財類も一か所に集めてある。
お世辞にも風通しの良い物件ではなく、この部屋は若干の埃っぽさ
があった。

俺は適当に箆笥状の衣装ケースを開けて中を覗いた。中にはクリ
ーニングから帰ってきたままのビニール袋で覆われたスーツが並ん
でいた。サイズ表記はY体の七号。メーカーによって多少異なるが
標準体型よりは細身、身長は一七五センチ程度ということになる。
鴨居からぶら下がっているシャツ類もシルエツトは細身で、浦辺康
利のおおよその体型は身長は俺よりやや低く、体重は大幅に少ない
という事が分かった。

次に一つだけ置いてあった木製の箆笥の抽斗を一つづつ開けてい
った。

大きな抽斗には男の一人暮らしにしてはやや多めの衣服が、種類
ごとに丁寧に折り畳んで収められていた。三〇代後半の男にしては
全体的に若づくりというか、チャラチャラしたデザインのものが多い。
井上がいうところの“ちゃんとした格好をしてもちゃんとして
見えない”という印象を裏付けるものだった。

目当てのものは二つある小さな抽斗の上の段から出てきた。二冊

の預金通帳と実印だ。印章のシルエットはキシカワ・インヴェステイゲーシヨンの法人登記簿と一緒に交付を受けてきた法人代表者の印鑑証明と同じだった。

預金通帳は一つが会社名義のもの、もう一つが高田泰明名義のものであった。どちらも金の出入りは多く、ここでざっと眺めただけで詳しいことを把握するのは難しそうだった。俺は通帳と印鑑をジャケットの内ポケットに放り込んだ。紛れもない窃盗だが実際に窓口で金を引き出そうとしない限りは露見しないだろうし、それ以前に被害者は既に死亡している。

他に高田泰明の身分に関するものは出てこなかったし、当然、浦辺康利の痕跡も見つからなかった。仕事に関するものも出てこない。家に仕事を持ち帰らない主義だったのだろうか。

俺は奥の六畳間に入った。

こちら男の一人暮らしにしては片付いていて、部屋の真ん中に座卓があつて壁際に地上波デジタル対応の真新しいテレビがある以外はめぼしいものはなかった。ベッドはなく、畳に布団を敷いて寝ていたようだった。その場合、得てして布団は敷きつ放しになるものだが、浦辺はきちんと毎日布団を畳んで上げる主義だったらしい。不思議な事が一つあつた。キシカワ・インヴェステイゲーシヨンの事務所はもぬけの空だったのに、何故、この部屋は荒らされていないのだろうか。誰の仕業であるにせよ、ここを突き止めるのはさして難しいことではない。法人登記簿に載っているのだから。

人目があるというのは考えられる理由だった。無論、事務所の方にも人目はあるが、あちらは引越し業者を使って荷物を運び出しなくても誰も不審には思わないだろう。しかし、ここは違う。本人がいないところで何かしようとするれば周囲の人物に少なからず勘ぐられることになる。

もう一つ、別に理由があるとするれば浦辺の恋人の存在だった。その男が恋人の死を知っているかどうかは分からないが、仮にまだ知らなかった場合、迂闊な対応をして警察に掛け込まれたら遺留指紋

から住人が浦辺康利だったことをわざわざ知らしめる結果になる。

俺はもう一度、六畳間の搜索に取り掛かった。テレビラックの下にはHDDレコーダと古めかしいVHSのビデオデッキがあった。テレビとレコーダの電源を入れて録画内容を確認してみたが、バラエティ番組と月曜九時のくだらない連続ドラマが定期的に録画されている以外にはめばしいものはなかった。カメラ入力のジャックにコードが繋ぎっぱなしになっているが、対応するハンディカメラの姿はない。

本棚の類もなく、部屋の隅に紐で縛って廃品回収に出す予定の雑誌類があるだけだった。いわゆる“オネエ系”と呼ばれるファッション誌ばかりで、浦辺に女装癖がある場合を除けば恋人の所有物と考えるのが妥当だった。浦辺の所有らしき本や雑誌はない。実際はどうであれ、自称ルポライターであれば調べ物や参考にする文献の一冊くらいあってもよさそうなものだが、それらはすべて塩原の部屋に置いてあったのだらう。当然、仕事で使っていた筈のパソコンの類も見当たらない。

そんな中で俺はテレビ台の下にプラスチックの薄っぺらいケースのようなものを見つけた。引っ張り出したそれはデジタルのフォトフレームだった。携帯電話会社が売っているもので、メールに画像を添付して送信するとそれらをスライドショー形式で表示するものだ。

電源を入れて画像を表示させた。

枚数は多いが、そのほとんどは風景を撮影したものだだった。住吉界隈の雑然とした街並みを撮ったものもあれば、中洲かどこかのビルの屋上から夕暮れの空を撮ったものもある。総じて福岡市内で撮影されていて、そうでないのは毎年十一月に佐賀平野で行われる国際バルーンフェスタで、早朝に飛び立とうとしている気球の一団を写した勇壮な一枚くらいだった。モブを除けば人を写したものは皆無に等しい。

そんなスライドショーの最後の数枚を見て俺はぎょっとした。素

人芸にしてはなかなかよく撮れていた風景写真から、インターネットのアダルトサイトでしかお目にかかれなような卑猥な交わりを写したものに変わったからだ。

とっさにスライドショーを止めるスイッチを見つけて、俺は代わりに画像のサムネイルを表示させた。風景写真が三十二枚、それ以外の写真が八枚。

その八枚はいずれも浅黒い肌をした逞しい男と、対照的に色白で華奢な体つきをした、一見すると女にも見える男のセックスの場面を写したものだ。浅黒い男が色白の男を様々な体位で組み敷いていて、それを手にしたカメラで撮影している。色白の男は眉根をギョツと寄せて口許を歪めていた。それが苦痛によるものか、快楽によるものかは写真からは判別出来ない。

それでも分かることはあった。組み敷かれている側の男はサラサラのボーイッシュなショートカットといい、大陸系の整った顔立ちと切れ長の眼差しの組み合わせといい、管理人の女の話に出てきたイ・ジュンギ似の男に違いなかった。下半身の手術は行われておらず、体位によつては肛門に突き刺されているモノよりもいきり立った逸物が見える。

挿入された側が前立腺を刺激されることで勃起し、ときには射精することもあるのだという話を聞いたのはトルエンを密売していた少年グループの事情聴取のときだった。ラリって訳が分からなくなつて仲間のカメラを掘るケースは意外とあるものなのだ。

それはともかく、俺は組み敷いている側の男にも注目した。当然のことだが顔が写つておらず、言える事はこの部屋の住人にしては四肢が太く、腹がポッコリと出ていることだけだった。後背位で挿入しながら相手を押さえつける左手の甲にも傷跡は見当たらなかつた。浦辺でないことは間違いないが、ホモセクシャルかバイセクシャルであるという以外は何処の誰かはまったく不明だった。

さて、これは何を意味しているのだろうか。

データが収められているSDカードの取り出し口を捜すのは一苦

劣だったが、何とか壊すことなく小さなカードを取り出すことが出来た。俺はそれを財布の小銭入れに放り込んでから、フォトフレームをあつた場所に戻した。契約者情報などを調べれば何か分かる可能性はあつたが、そもそも携帯電話会社の中に内通者を抱えていない身では不可能なことだった。念の為に裏面の製造番号を控えておくだけにした。

他に何か、手掛かりになりそうなものを捜したがそれらしきものは見つからなかった。気になるのは高田泰明宛ての郵便物がまったく見当たらないことだったが、これは奴が日常的に郵便物の送り先を塩原のマンション宛てにしていれば不思議なことではない。市や県から送られてくるものにしたところで郵便局に転送の手続きをしておけば問題はないのだ。

だったらいつそのこと、高田の住所も塩原にしておけばこの部屋が存在自体を嗅ぎつけられはしなかつた筈だが、そうしなかつた理由も想像できなくはない。自宅開業の形をとるには代表者と社名が全然違うことなど、法人登記を依頼する司法書士に不審に思われる材料が多かつたからだ。多香子が言っていた行政書士の例と同じく、以前はそんなことは気にせず依頼を受けてくれる司法書士は大勢いたのだが、ペーパーカンパニーが犯罪の温床になるとして法務省や司法書士会などが指導にあたっていて余りに怪しいケースは断られたり、最悪の場合は当局に通報されることもあると聞く。

俺は自分が手を付けたところを出来るだけ元に戻してから、浦辺の部屋を後にした。時間にして三〇分もいながつた筈だが、随分と時間がかかつたような気がした。

管理人に鍵を返すと彼女はジロリと俺に顔を見上げて「何か見つかつたか」と訊いた。俺は「特に何も」と答えた。期待はしていなかつたらしくドアは俺の眼前で猛烈な勢いで閉じられた。彼女自身の言葉を証明するべくドアの周りの壁やドア自体が猛烈に揺れた。ドリフのセットだつたら今頃、俺の頭上にいるんなものが降つてきていたに違いなかつた。

住吉通りでタクシーを拾うべく、俺は歩き出した。

俺が心配していたのは主に浦辺の恋人と鉢合わせをすることだったが、それは杞憂に終わった。

それなのに俺の心が奇妙にざわつくのは、SDカードの中の妖しい写真の存在だった。情事の相手がどう見ても浦辺でないのは単に彼が尻軽なだけかもしれないが、そうであれば、浮気の証拠が浦辺の部屋のフォトフレームに転送されているのは理屈に合わないからだ。誰しも、すべての行動に理屈が通っている訳ではないにしても、ほぼ毎日、部屋に通って浦辺を待っている従順さとはやはり相容れないだろう。

出来れば浦辺の恋人の身元に繋がる何かを見つけたかったが、あの部屋にそれらしきものは見当たらなかった。あろう筈がなかった。

雑餉隈といえば、福岡でも指折りの難読地名として知られている。ちなみにこれで“ざっしょのくま”と読む。太宰府方面へ向かう筑紫通り沿いの下町で、駅周辺は短いアーケードを含む商店街、その周りにはごくありふれた郊外の住宅街だ。この土地の他に有名な事柄といえば、武田鉄矢の実家のタバコ屋か、ソフトバンクの創業の地であることか、かつては隆盛を誇ったネオン街　正確には風俗街があつたことくらいだろうか。

中洲の南新地がソープランド街だったのに対して、こちらはファッションヘルスやピンクサロンが大半を占めていたが、度重なる当局の浄化作戦の前に今では古びた店が数軒を数えるのみとなっている。近くに陸自の駐屯地があつて今でも飲み屋街としての顔は保ち続けているのだが、賑わいの面では昔とは比べるべくもない状態だ。タクシーを降りて、平野弥生が経営する　ボニー・アンド・クライド　に電話を入れたのは午後八時を少し回った頃だった。飲み屋に顔を出すには幾分早い時間帯だったが、彼女が他の酔客の世話に忙殺されて話を訊けないなどという間抜けな事態は避けたかった。

「……ホントに来るの？　こんな時間に？」

彼女の声の囁れ具合は朝よりは幾分マシだったが、カラオケで欧陽菲菲と葛城ユキ以外の曲が歌えるとは思えなかった。

「早い時間の方が都合がいいかなと思つたんですが」

「そうね、まだ誰も来てないし」

寿町というめでたそうな名前の裏路地には、アパートや雑居ビル、普通の民家に混じってテナントが飲み屋ばかりのビルがポツリポツ

リと建っていた。俺がこの辺りでも飲んでいたのは相当昔のことだが、当時の記憶と比べてもネオンの灯りは間引きし過ぎた畑のように減っていた。ネオンというのは不思議なもので、ある程度集まっていなると余計にうらぶれた印象を与えることがある。この界隈はまさにそんな感じだった。

平野弥生の店はそんなビルの一つの四階にあった。改装工事を終えてさほど経っていないのか、周囲のビルよりは真新しい印象のビルだった。

エレベータで四階に上がると、やけにテンションの高そうなカラオケの歌声が廊下まで洩れ聞こえてきていた。シンディ・ローパーのハイスクールはダンステリア だったが、場違いと言っては失礼にあたるのかもしれない。声はマホガニー材の色合いを模した合板のドアの奥からで、ドアには B O N N Y & C L Y D E と書かれた銀色のプレートが貼りつけられていた。綴りは正しくは” B O N N I E ” だが、その程度の間違いなら目くじらを立てることもないのだろう。

ドアを開けると軽やかにカウベルが鳴った。ちょうどサビの部分で、声の主は “ g i r l s - - t h e y w a n t t o h a v e f u n , o h g i r l s j u s t w a n t t o h a v e f u n ” とシャウトしていた。

「 あら、いらっしやいませえ 」

俺はよほど驚いた顔をしていたのだろう。マイクを握っていたカウンターの女はバツが悪そうに目を瞬かせて、とっさに商売用の朗らかな笑みを浮かべた。

「 あっ、ひよっとしてカミ…… 」

「 上社です。平野弥生さんですか？ 」

言い淀んだ先を続けると彼女はそうだと答えた。

豊満な体つきの三〇代半ばくらいで、厚ぼつたい二重瞼と揃いで眺めたような見事な団子鼻が目を引く女だった。ヌードカラーにグロスをたっぷり塗った唇も分厚くぼってりとしている。言葉のニュ

アンスは一〇〇パーセント日本人のものだったが、トロピカルなサマードレス姿はサモアかタヒチの現地人にしか見えなかった。

店内は典型的なスナックだった。ダークグリーン系の毛足の長い絨毯が敷かれ、ワインレッドのソファとガラステーブルで設えられたボックス席とカウンターがある。弥生の背後の棚にはカミュやカティサーク、サントリー・ローヤルのボトルがずらりと並んでいた。

彼女はマイクを切ってカラオケを止め、手ぶりでスツールを勧めてくれた。俺はそこに腰を下ろした。

「何にする？ 勿論、飲むんでしょ？」

「マツカランの一〇年を水割りで」

壁に貼られたボトルキープのメニューによればマツカランはこの店で一番高い酒だった。ボトルに掛ける札に俺の名前を書く彼女の口元には、控えめだったがはっきりと笑みが浮かんでいた。

薄い浮彫が入ったコリンズグラスが籐を編んだコースターに置かれた。俺はグラスを口に運んだ。

「ねえ、あたしも一杯戴いてもいい？」

「どうぞ。平野さんはずっとここでお店を？」

「やあね、苗字でなんか呼ばないでよ。弥生でいいわ」

弥生は小鉢に盛られたキュウリの浅漬けとポテトサラダを俺の前に置いた。そして、自分のグラスにマツカランを注いだ。

「乾杯」

小さくグラスを掲げる仕種をして、弥生はジュースを飲むような勢いでウイスキーを喉に流し込んだ。俺は思わず嘆息した。シエリ一樽で熟成させるマツカランがシングルモルトにしては口当たりの良い酒なのは事実だが、彼女ほどの飲みっぷりを見せる飲み手は男でもなかなかいない。

「そうね、病院を辞めたのが十二年前だから……自分でやり始めてからはかれこれ一〇年くらいかな。水商売はもつと長いけど。非番の日だけのアルバイトのつもりだったのよ。それがいつの間にか、こっちが本業になっちゃった。看護の仕事が嫌だった訳じゃないん

「ただ、人間関係がいろいろと面倒だね」

「今朝の電話でもそんな話をされてましたね」

「オナナの園だから。まあ、ドクターがいるから男だっているんだけど、あれはあれで」

「弥生の口元に小さな苦笑いが浮かんだ。」

「と言うと？」

「看護師を狙ってるドクターがいるからね。独身だったら玉の輿なんだけど、そうじゃないのもいるし。というか、そういうのばっかりなの。でもね、そんな奴に限って病院の中で実権握ってたりするから厄介なのよ。断るといろいろ嫌がらせしてきたりして」

「セクハラというやつですか」

「そうね。でも、訴えたってどうにもならないし、結局は看護師が泣き寝入りよ。上社さんってそういう調査を引き受けたこと、ある？」

「飯塚にある割と大きな総合病院から、内科部長と業者の癒着の証拠を掴んでくれという依頼があつて、患者になりすまして入院したことがありますよ。調査の過程で本来の容疑以外に薬物の横流しやら、看護師へのセクハラの実事がボロボロと出てきましたね」

「何処に行つてもあるのね、そういう話って」

「弥生さんはそういう被害には？」

「あるけど、そんなに多くはなかったわ。あたしってそういう対象には見えないのかな？」

「少なくとも、泣き寝入りをするような気弱なタイプには見えませんね」

「そうかなあ？」

それからしばらくの間、話題は弥生の愚にもつかない昔話に終始して、俺はマツカランをちびちびと舐めながらそれに相槌を打つことに終始した。話の内容は主に病院という閉鎖社会において医師がどれほどの権力を持っていて、自分たち看護師や技師がどれだけ下働き扱いで虐げられているかというものだった。ちなみに弥生もそ

うだが、医師を除く医療関係者は総じて会話の中で医師のことを“ドクター”と呼ぶ。敬称ではないが失礼には当たらず、尚且つ“先生”のように持ち上げるニュアンスがないのでストレスを感じないというのが理由だと、昔の飲み友だちのレントゲン技師が言っていた。

「香織さんはどうだったんです？」

弥生は一瞬、真顔になった。しかし、すぐに元の朗らかな表情に戻った。

「……あの子はモテたわね。こう言っちゃなんだけど、不思議なくらい。胸は大きいけどそんなに可愛い訳でもないし、どうしてかな。まあ、あたしも他人のことは言えないけどさ」

弥生はグラスを呷った。

「でもほら、香織には彼氏がいたからね。言い寄られても相手にはしてなかったみたいよ」

「本当ですか？」

「……どういう意味？」

「いえ、今朝の電話でのあなたの一言が気になっているもので」

「あたし、何か変なこと言ったっけ？」

「香織さんは駆け落ち相手の男性とは別に、他に誰かがいたようなことを」

「うそ、そんなこと言ってないわ！」

「そうでしたかね」

俺が投げた釣り球は胸元一杯のブラッシングボールだった。弥生は不良患者を見るような曖昧な笑みを絶やさなかった。

「だいたい、香織を捜してるっていうのに、どうして昔のことばかり調べてるの？」

「他に手掛かりがありませんのでね。それに、どうしても腑に落ちないことがあるんですよ」

「……なに？」

「その前に簡単に事情をお話ししておきましょう」

俺は事の経緯の差し障りのなさそうな部分をかいつまんで弥生に説明した。香織の駆け落ちの相手が今泉のラブホテルの殺人事件の被害者であること。改装から間もない現場の部屋から香織の指紋が発見されたこと。警察が香織を重要参考人として追っていること。警察よりも先に娘を見つけ出す為に父親が俺を雇ったこと。

「香織は福岡に帰ってきてるの?」

「その可能性は少なからずあります。そして、俺の疑問もそこにあります」

「どういうこと?」

「香織さんが福岡に帰ってきているのなら、何故、この街に彼女の生活の痕跡がないのかということですよ。ご家族とは折り合いが良くなかったという話なので、実家に寄り付かなかったのは理解できます。しかし、あなたのような友人にもまったく知らせずにいる理由はないでしょう」

「それはそうね……。あの子、東京で何か悪いことでもしたのかな?」

「その辺りは何とも言えません。考えられるのは、彼女が何らかの理由で偽名を使って生活している可能性ですがね」

「何らかの理由って?」

「それを知る為に、俺は彼女の過去を洗っているんですよ」

「そういうことなのね。あたし、あれからいろいろ思い出してみただけ」

「何をです?」

「香織のことよ。最後に会ったのがいつだったかとか、何を話したかとか」

「興味深い話ですね」

「大したことは話してないわよ。ねえ、お替りを戴いてもいい?」

俺は構わないと答えた。弥生はロックグラスを手に取ると、無造作に氷を落としてマツカランを注いだ。

「香織と最後に会ったのは」「弥生は遠くを見るような目をした。」

「あの子が福岡を離れる前の日の晩だったわ。話したいことがあるからって、吉塚駅の近くにある居酒屋に呼び出されたの。同じ部屋に住んでるっていうのに」

「何故、吉塚だったんです？」

「病院の近くだったから」

「そういえば彼女たちが通っていた看護学校の実習は系列の私立医大の附属病院で行われていて、それは博多区と東区の境にあった。吉塚は目と鼻の先だ。」

「どんな話を？」

「うーん、まあ、彼氏と東京に行くことにした、学校は辞める、親には何も話してない　そんな話じゃなかったかな。あの頃、あたしは二十歳で香織は一つ下だったけど、何て言うのかな……そんな大それたことをするって言うてる割には、すっごく落ち着いてたのを覚えてるわ」

「発作的な思い付きではなかったということですか？」

「あたしの印象だけだね」

「駆け落ちの理由は訊かなかったんですか？」

「もちろん訊いたわ。付き合つのを禁止されてる訳でもないのに、そんなことしなくつたっていいじゃない」

「彼女は何と？」

「ちょっとトラブルがあつて、福岡にいられなくなつたって……どんなトラブルかは、結局教えてくれなかったけど」

「どちらのトラブルですか？」

「どちらの？」

「香織さんか、それとも交際相手の男か」

「そういう意味ね。香織よ。本当は一人で福岡を離れるつもりだったんだけど、浦辺くんがそれなら自分も行くって譲らなくて、二人で行くことになつたんだって」

「あなたは浦辺康利と顔見知りだったんですか？」

「まあ、そうね。一緒に遊んだりとか、そういうことはなかったけ

ど。香織がそういうのをあまり好きじゃなくてね。こっちにしたって、独り身なのに仲の良いところ見せつけられるのは面白くなかったから、ちよつど良かったといえれば良かったわ」

内田は弥生をやっかみ屋と評していたが、こういう発言を受けてのことだろう。

「それでも、香織が補習で寮に缶詰にされたときに　あの子、あんまり成績良くなったからね。デートをすっぱかすことになっちゃって、映画のチケットが無駄になるからって代打で行ったことはあるわ」

「ほう?」

「その後、ご飯も食べに行つて、ちよつとだけお酒も飲んだっけ。でもね、彼つて今で言うところの典型的な草食系だったから、危なっかしい雰囲気とはまったく無縁だったわ」

弥生の口調からは浦辺の紳士的な態度を褒めているのか、自分に興味を示さない朴念仁を非難しているのかはよく分からなかった。いずれにしても、浦辺の態度の裏に彼の性癖が横たわっていることは間違いないだろう。しかし、そうであれば浦辺が香織と同道する理由も今一つ説得力を欠いている。

「あなたがご存じの範囲で構いません。浦辺について知っていることを話して下さい」

「そうねえ……」

弥生は答えの書かれたカンニングペーパーを捜すように店の中に視線を彷徨させた。考え事の間、彼女はグラスをぐいぐいと呷っていた。マツカランはたった数口でほとんどなくなっていた。

俺はボトルを手にとつた。弥生は少しバツが悪そうな顔をしてみせたが、遠慮はせずに俺の前にグラスを差し出した。彼女のグラスになみなみと注ぎ足し、自分の薄くなつた水割りにも少し足した。

「まあ、一般的な意味で言えば良い人だつたと思うわよ」弥生は少し顔を赤らめて嘆息した。「見るからに優しそうだつたし、実際にそうだつたらしいわ。ひよろつとして頼りなさそうな感じはしたけ

ど。でも、あれはホントはかなりやんちゃしてたんだと思うわ」

「やんちゃ？」

「悪かったってこと。一度、箱崎埠頭でやってた族の集会で浦辺くんを見たことがあるの。付き合ってた彼氏がそういうの好きで、たまに見に行ってたの。そこに浦辺くんがいたのよ。案外、特攻服がサマになってたから驚いたわ」

「一人でいたんですか？」

「まさか。似たような格好のお仲間と一緒によ」

俺は違う意味で訊いたのだが、香織が弥生に自らの経歴を話していないらしいことは分かった。

「仕事は何してたんだっけ……。ああ、何処かの機械工場に勤めてたのかな。三交代だから香織となかなか時間が合わなかったみたいけど、都合がつくときは眠い目をこすりながら寮の裏の空き地に来てたっけ。白黒のツートンの八チロクの中で二人で話してたわ」

「健全なお付き合いだったようですね」

弥生は目を細めて、俺の言葉を否定するような曖昧な笑みを浮かべた。

「子供じゃないんだから、それだけってことはないわよ」

「肉体関係はあったと？」

「そりゃあ、あたしだって実際の現場を見た訳じゃないけど、まあ、そういうのって何となく分かるじゃない？」

「なるほど。香織さんと浦辺の付き合いは長かったんですか？」

「高校の先輩後輩だって聞いているわ。でも、二人が付き合い始めたのは香織が卒業してからだって話よ。浦辺くんって高校のサッカー部のエースで、女の子のファンも多かったらしいんだけど、香織はスポーツにはまったく興味がなかったらしいから」

「浦辺も同じことを言っていましたか？」

「どういうこと？」

「二人の馴れ初めについて。そういう話は彼とはされていませんか」

「？」

「うーん……ちょっとだけしたかな。でも、だいたい同じことを言っただと思うわ」

「それだと、ちょっと不思議なことになりますね」

「何が？」

「あなたのお話によれば、浦辺は香織さんの意思に反して家出に付き合ったそうですが、その為に彼は仕事を始めとして色々なものを捨てることになった筈です。わずか半年の交際でそこまでしますかね？」

「そういう気持ちに時間は関係ないんじゃないかしら。若気の至りっていうか、そういうのってあると思うわ」

彼女の言う通りかもしれない。或いは二人の繋がりはその以前からで、交際も本当はずっと長いのもかもしれない。周囲にそれを伏せた理由はともかく。

話の切れ目を待っていたように弥生の携帯電話が鳴った。弥生は目顔でちょっと待っていてくれと合図して、俺の前を離れた。カウンターの奥には扉があって、そこから裏の非常階段に出られるようになっていているのだ。

その間にメールをチェックしておくことにした。尾行中に暇を持って余したらしい井芹からのメールが五件、東京の進藤からのメールが一件。俺は進藤のメールを開いた。

内容は昼に電話で話したことを詳細に文面にしたものだ。十四年前の一九九六年、おがた屋の工場と敷地内の経営者夫婦の家、隣接する社員寮が火災で焼失し、経営者の緒方啓一郎、百合子夫妻、啓一郎の母親のぬい子、住み込みの従業員五人の計八人が焼死したことや、不審火で捜査が行われたが犯人に結び付く物証が出なかったことなど。借地だった工場跡は更地にされて中堅ゼネコンに転売されたが、その際に不明朗な取引があったとかで問題になったが、火災と直接の関係はないようだ。従業員の一人が夜泣きする子供をあやそうと庭に出ていて難を逃れているのは間違いないが、通勤し

ていた従業員が見つからない為、今のところ、生存者の身元や行方は不明のまま。現在、鋭意調査中とのことだった。

順当にいけば難を逃れた一人が原岡香織である可能性が高い。だが、そうであれば一緒に難を逃れた赤ん坊の行方はどうなったのかという疑問が湧いてくる。いずれにしても、そこは進藤の調査の進展を待つしかなかった。

メールには添付ファイルがくつついていた。株式会社緒方商店の登記簿謄本をPDFにしたものだった。スマートフォンの小さな画面で見るのは難儀だったが、拡大と縮小を繰り返しながら何とか目を通した。経営者の緒方信一郎、ぬい子夫妻に相続者がいなかった。で弁当屋はそのまま廃業しているらしいが、解散登記が為されていないので登記簿上は休眠会社になっている。それ以外に特に不審な点はなかった。

弥生が戻ってくる気配はなかった。俺は進藤敦司の携帯電話を鳴らした。

「ほい、お疲れさん。メール見てくれたかい？」

夜になってもテンションの高さは変わらなかった。俺は見たと答えた。

「苦戦してるみたいだな」

「手掛かりがなさすぎる　　と言っても諦めちゃいないがね。何か質問かい？」

「登記簿を見た。不明朗な取引と言うのはいったい何だ？」

「監査役の際に柏木照美という人物がいるだろ？」

「登記簿を見た。確かにその名前がある。」

「柏木家はおがた屋の土地の地権者なんだ。照美は創業時の出資者の一人、柏木以蔵の娘にあたる。先代の二人は同じラバウルからの帰還兵らしくて、緒方の初代が商売を始めるときに土地を現物出資して株主になったらしい。それを火事の後、娘が会社の解散をせざるに売っ払ったつてのがメールに書いてた不明朗な取引ってやつさ。出資した以上は会社の財産だからね」

確かに法令上は背任罪が成立する可能性がある。しかし、ここでも十数年も前の経済事犯を論じても始まらない。

「柏木照美と連絡はつくのか？」

「一応ね。但し、話が聞けるかどうかは分からない。心臓が悪いとかで入院してて、家族でも面会の許可が下りないことがあるらしいんだ。時間がかかることは覚悟しておいて貰った方がいいな」

「仕方ないな。縮刷版はどうなった？」

「和菓子屋のご隠居情報によると東京新聞に詳細な記事が載ったという話でね。今、うちのスタッフが懸命に捜してるよ」

確かに縮刷版を読むのは骨の折れる作業だ。急かしても始まらない。

「他に何か、手掛かりになりそうなことは？」

「お義母さんのツテで向島署に当時の捜査資料が残ってないか、当たって貰っているよ。保管期限はとくに過ぎてるからちよつと心配だけど」

「その件だがくれぐれも用心してくれ。香織の最終の住民票が何処にあったかは分からないが、浦辺の住民票は東京にあったし、香織の周辺への聞き込みで二人の駆け落ちは既に警察の知るところと考えるべきだ。迂闊につつ突くと蛇が出るかもしれない」

「その点は考慮済みだ。上手くやるよ。心配には及ばない」

「手を煩わせて申し訳ないな」

「仕事だからね」

進藤は新しい情報はその都度メールを送ると言って電話を切った。

しばらくして、弥生は俺の前に戻ってきた。

「ごめんなさいね。いつも来てくれる常連さんが「店を開ける前に一緒にメシでもどうだ」なんて言うのよ」

「邪魔しましたかね？」

「そんなことないわ。良い人なんだけど酒癖が悪くてね。あんまり

関わり合いになりたくないの」

彼女の空いたグラスにマツカランを注いでやると、弥生は少し戸惑ったような顔をした。

「あら、あたしばっかり飲んで、あなたはぜんぜん飲んでないじゃない」

「そんなことはありませんよ」

「嘘ばかり」

飲んでも構わないのだが、そういう気にはならなかった。俺はまだ、この店を訪れた目的を果たしていないからだ。

「知ってることを洗いざらい話してくれるんだったら、ボトルを空っぽにしてくれても構わないんですがね」

「……何のこと？」

「今朝の電話のことですよ。あなたは『それにあの子、他にも』と言いましたね？」

「言っていないわよ。また、そんないい加減なこと」

「嘘じゃありませんよ。何なら、録音をお聞かせしましょうか？」

「えっ？」

グラスを口に運ぼうとした弥生の手が止まった。俺に向けられる視線が険しくなった。

「探偵の仕事では、電話で話した内容というのは結構重要でしてね。可能な限り、録音することになっているんです」

「……へえ、そんなことするんだ？」

「何か問題が？」

「電話を録音されて良い気持ちができる人はいないわ」

「残念ながら、人に好かれるのは探偵の仕事ではないんですよ」

「そうみたいね」

朗らかとしか褒めようのない弥生の真ん丸な顔が不快そうに歪んでいた。

「言ったわよ、確かに。それがどうかした？」

「続きを聞かせてください」

「何だったかしらね。寝ぼけてたんで、何を言おうとしたのかよく覚えてないわ」

「その割には、さっきは俺が言ったことをきっぱりと否定しましたね？」

弥生は答えなかった。代わりに性質の悪い酔っ払いを見るような目で俺の顔を見据えた。グラスの中身を俺にぶちまけるかどうか迷っているようにも見えた。

逡巡の時間はそれほど長くはなかった。

「……話してもいいわ。でも、あたしが喋ったっていうのは秘密にしてくれる？」

「約束しますよ」

弥生は疑うような流し目を向けてきたが、それ以上は言わなかった。代わりに空のグラスに表面張力に挑むようにマツカランを注いだ。

「さっき言ったトラブルの話だけど。香織は話してくれなかったけど、実はだいたい知ってるのよ。その……誰彼かまわずに言いふらしたりしちゃいけないって思ってた、それで今朝の電話みたいな言い方したんだけど。実は香織は妊娠していたのよ」

「妊娠？」

「あの子、いわゆるぽっちゃり型だからお腹が大きくなっても目立たなくて、周囲には気付かれてなかったみたい。でも、あたしは何となく怪しいと思ってたの。夜中に急にトイレに駆け込んだりしてたし。それで悪いなと思ったんだけど、あの子の机をこっそり開けたことがあるの」

「何が出てきたんですか？」

「産婦人科の診断書。確か、妊娠二〇週目だったかな」

「安定期ですね」

「何でそんなこと知ってるの？」

弥生の目が驚いたように丸くなった。子供がいない俺がそんなことを知っているのは“被疑者が拘留中に流産して出血多量で死亡し

た事案で報告書を書く為に調べたことがあるから”という殺伐とした理由があるからで、決して避妊に失敗したことがあるからではないのだが、それはともかく。

「診断書を見つけたのはいつ頃でしたか？」

「あの子に東京に行くって言われた日の……二週間くらい前じゃなかったかしら」

ということは駆け落ちしたのがおよそ二十二週目。ミー・アンド・ユーの東京スタッフが香織を捕捉したのがその約三ヶ月後、三十四週からせいぜい三十六週ほどか。

「これを見てください」

俺はおがた屋の店先で働いている香織のスナップを弥生に見せた。

「あら、懐かしいわね」

「元看護師から見て、その写真の香織さんは臨月に見えますか？」

「普通に考えたら……違うわね。でも、元々が大柄で太り気味な人の場合、そういえばまたちよつと太ったな、くらいにしか見えないことも珍しくないわ。冗談で『妊娠したんじゃない？』なんて訊くことはあっても、本当にそうだななんて思わないものだし。たまに家族に内緒で産んだ子供の遺体を捨てた女子高生が捕まったりするじゃない。あれも周りは妊娠してたことにまったく気づいてなかったりするでしょ？」

まあ、確かにそんなこともある。

「香織さんの場合は？」

「ちよつとお腹周りがすつきりし過ぎかな。早産で産まれたか、東京に行って墮ろしたかのどちらかでしょうね」

「なるほど」

脳裏を過つたのは進藤との会話だった。おがた屋火災のたった一人の生き残りは子供をあやす為に外に出ていて難を逃れた。それが香織だったのだろうか。

それはそれでもいい。だが、根本的な疑問は放置されたままだった。

「しかし、そもそも、香織さんの妊娠の何がトラブルだったんでしょうか？」

「えっ？」

「未婚女性の妊娠は確かに只事ではないでしょうが、それほど珍しいことでもありません。避妊に失敗した経験があるカップルなんて、春吉のラブホテル街で石を投げれば幾らでも当たりますよ？」

「失敗しないに越したことはないけどね。だから、そこが“他に”なのよ」

「……子供の父親が浦辺ではない？」

「そういうこと。でも、父親が誰かなんて知らないからね。……やあね、本当よ？」

「嘘だなんて言ってますよ」

「口ではね。でも、目が言ってるわ。刑事は疑うのが商売。そうでしょう？」

「刑事だったのは昔の話です。あなたは香織さんの子供の父親が誰かは知らなくても、それが浦辺康利ではないことには確信がある訳ですね」

「……まあ、これは時効かしらね」

弥生は目配せに似た意味ありげな笑みを浮かべた。

「何がです？」

「さつき、浦辺さんと映画とご飯だけって言ったけど、ごめんなさい、あれ、嘘なの。一度だけ、彼と寝たことがあるのよ」

「……ほう？」

「中洲でお酒飲んで、そのまま勢いで春吉のラブホに転がり込んでね。まあ、香織に悪いなって思わないではなかったんだけど、その……勢いってヤツ？」

「よくあることですね」

追従の笑いが求められているようだったので、その通りに笑った。弥生は悪戯っぽくウインクした。サモア人にしか見えない濃い顔立ちの割には艶っぽかった。

「でね、何て言うのかな……。彼、童貞じゃなかったみたいだけど、あんまり慣れてない感じでね。だから訊いたのよ。香織はさせてくれないのかって。彼は香織とはそういう関係になってないって言うていたわ。香織がさせてあげなかったのか、浦辺くんがしたいって言い出せなかったのか、その辺は教えてくれなかったけど」

「それはいつ頃の話ですか？」

「あたしが香織の診断書を見つかる一ヶ月くらい前。だからよ。そこから二人の間が進展したとしても」

「妊娠二〇週には間に合わない」

「そういうこと」

そもそも、浦辺はバイセクシャルだったのだろうか。

今のところ、それを否定する材料はない。但し、そうであれば香織と肉体関係を持つのが順当な流れではないのだろうか。香織が浦辺の性癖に嫌悪感を持っていて自分に触れさせなかった可能性もなくはないが、それでいて一緒に逃避行に及ぶとは考えにくい。

そして、一つ明らかかな事実がある。香織の妊娠が事実だとすれば、彼女には浦辺康利の他に男がいたということになるのだ。

「彼女を妊娠させた相手に心当たりは？」

弥生は力なく首を横に振った。

「分からないわ。妊娠してたことは知ってたんだから、訊けば良かったんだけど。でも、どうしてか訊きそびれちゃってね……」

その時、背後で荒々しくカウベルが鳴り、スーツ姿の一団が店になだれ込んできた。弥生は俺の背後に向かって朗らかな商売用の笑みを向けた。

どうやら辞去のタイミングのようだった。俺はクレジットカードを弥生に渡した。伝票にサインを促しながら弥生は俺の目を覗き込んできた。

「最後に一つ、あたしも質問していい？」

「コロンボみたいですね。何です？」

「さっきみたいな口の利き方して、あたしがへそを曲げたらどうす

るつもりだったの？」

俺は答えの代わりに薄く笑ってみせた。

どついう風に話が転がるにせよ、弥生が知っていることを話してくれることには確信に似たものがあった。本当に話したくないのなら、最初から俺をここに呼ぶ筈がないからだ。

第19章

19

駄目で元々と思いながら原岡が病室に隠し持っている携帯電話を鳴らすと、原岡は拍子抜けするほどあっさり電話に出た。

「報告を聞こう」

俺は昨夜からつい先程までに分かったことを、幾つかの不都合な点を端折りながら順を追って話した。原岡は微かに相槌を打つだけで口を挟むことなくそれを聞いていた。それから二、三の意味に通じなかったことを質問して、俺はそれに答えた。現役のときも同じように黙って部下の報告に耳を傾けるやり方だったのだろう。無闇に話の腰を折る上司も話し難いものだが、じっと耳を傾げるだけの上司も威圧的でやり難いものだ。

「香織に子供がいたとはな……」

原岡は魂を吐き出すような溜め息をついた。

「過去形で話すのは意図があつてのことですか？」

「何がだ？」

問い返した後、意味が通じたように原岡は沈黙した。苦虫を噛み潰しているのだろうか、幸いなことに電話なので目の当たりにせずに済んだ。本当は俺を噛み潰したくて仕方ないのは間違いなさそうだった。

「父親は誰なんだ？」

「何とも言えませんね。診断書にはそこまで書いてなかったそうなので」

浦辺康利の性癖に関することは端折った事柄の一つだった。父親

が受ける衝撃を慮った訳ではない。まだ確証がないからだ。

「しかし、あの子が付き合っていたのは浦辺とかいう男だろう」

「民法には”婚姻中に懐胎した子供は夫の子と推定する”という規定がありますよ」

「何が言いたい？」

「付き合っているから、二人の間の子供とは限らないということですよ」

「……自分が何を言っているか、分かっているのか？」

「そのつもりです」

娘が殺人事件の重要参考人であるだけで充分に打撃を受けているこの男に、この上、娘が恋人以外の男の子供を身ごもるような身持ちの悪い女だという可能性を示唆するのが人でなしの所業であることは分かっている。しかし、依頼人に希望的観測を与えて慰めることは俺が受け取るギャラには含まれていない。

原岡は小さな咳払いをした。

「……まあ、いい。香織の子供はどうなったんだ？」

「現在、東京の調査を請け負っている男が行方を追っています。ちなみに平野さんに香織さんが働いている写真を見てもらいましたが、あの時点で彼女のお腹に子供はいなかったようですね。東京で早産で生まれたか」

「何だ？」

「墮胎という選択をした可能性もあります」

「……君は本当にデリカシーに欠ける男だな」

「残念ですが、それは売り物ではありませんのでね。とりあえず、今日の報告は以上です」

「……分かった」

原岡の薄い吐息が受話器から漏れ出てきたような気がした。

話は途切れたが回線は繋がったままだった。沈黙の中に言葉を選んでいるような雰囲気を感じて、俺はそのまま待った。しばらくして、原岡が小さな咳払いをした。

「香織は……見つかりそうかね？」

「申し訳ありませんが、まだ、彼女の影を踏んだとは言えませんね」
「……君は正直だな。全力を尽くすとか、もう少しですとか、もうちよつと愚にもつかない気負いを見せてくれるのかと思っていたが」
「それをお望みですか？」
「いや」

明日の夜も報告してくれと言って原岡は電話を切った。

俺はスマートフォンアプリを起動した。熊谷のマセラッティは動いていなかった。俺は井芹の携帯電話を鳴らした。

「俺だ。状況は？」

「女のマンション。六階なんで何してんのかは見えねえよ」

「部屋の灯りは？」

「点いてる。だからって、二人が服を着てる証にはならねえけど」

井芹は自分の言ったことに小さくせせら笑った。無視しても良かったが、労いの代わりに調子を合わせてやることにした。

「俺も明るいところでやるのは嫌いじゃないがな」

「あの、熊谷とかいう男もそんな感じだ。しかし、一番好きそうなのはあの女さ」

「桐島沙耶香？」

「ああ。ありゃ、かなりの性悪だぜ」

「根拠は？」

「パパラッチとして培った長年の勘ってとこかな」

今度は俺がせせら笑う番だった。この男に本当にそんなものが備わっていれば、今頃、福岡で体を売る女たちの半裸を撮ることで生計を立てている筈はないからだ。

井芹は俺の笑いの意味を違う意味にとったようで、その後もくだらない講釈を続けた。話が適当に途切れたところで俺は今日の調査の終了を告げた。

「明日は空いてるか？」

「悪いが午前中から撮影が入ってる。中洲に新しくオープンするガ

ールズバーのパネル写真なんだ。まあ、ガールズバーって言っても
そう名乗ってるだけで、中身はまるつきりキャバクラだけだな」
「そうでなければパネルは要らんだろうな。何時くらいから都合が
つきそうだ？」

「夕方だと思う。現場は西新にあるスタジオだから、終わったら病
院に待機するよ」

「そうしてくれ」

熊谷幹夫が事務長としての程度の実務をこなしているかは分か
らないが、そう毎日、席を空けられる訳でもないだろう。その間の
動きはGPS発信機で追うしかない。俺は井芹にご苦労さんと言っ
た。井芹は盛大に鼻を鳴らして電話を切った。

ちょっと早めの夜食、あるいはとんでもなく遅い夕食を済ませて
事務所に戻ったのは一〇時半を回る少し前だった。

原岡に言ったように、俺はまだ香織の影の一端にも触れる事が出
来ないでいた。たった一日でどうにかなると甘い見通しを立ててい
た訳ではないが、焦りを感じずにはいられなかった。この調査には
“香織が警察に拘束される前に”という大きな制約があるからだ。
まだ試合中だと思っていたらいつの間にかロスタイムだったなどと
いう間拔けな事態は避けたいところだが、肝心の時計が俺の視界に
は存在しない。

タイムリミットまでどれだけの余裕があるのか。それを知るには
警察の捜査の進捗状況を知る必要がある。しかし、それは口で言う
ほど簡単なことではない。あらゆる警官の犯罪の中でも情報漏洩は
とりわけ忌避される罪の一つだからだ。紛れもない組織への裏切り
行為を働いた者に待つのは、麻薬に手を染めた者ですら味わうこと
のない徹底した冷たい扱いなのだ。故に捜査本部に属するものを転

ばせるにはそれに見合う報酬か、その地位を脅かすに足る脅迫材料かのいずれかが必要になる。俺にはどちらの持ち合わせもなかった。もう一度、アクアに井上をいたぶりに行こうかなどと考えながらビルに入ろうとしたら、隣のモデルプロダクションの女社長が階段を下りてきた。かつては自身もモデルだったと聞いているが、京塚昌子を彷彿とさせる丸々とした容貌にその面影は見当たらない。

笠原美代子は俺を見つけると目を真ん丸にしながら駆け寄ってきた。

「ちょっとリュウちゃん、何処行つてたのよ！」

「やあ、お疲れさん。今日はもう終わりがいい？」

「終わりがいいじゃないわよ！」

笠原は顔中のパーツを総動員して台所でゴキブリと出くわしたような表情を作り、俺のジャケットの袖を強く引っ張った。

「…………どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないわよ！ リュウちゃん、あの人、何者なの？」

「誰のことだ？」

「貴方のところのお客さんよ！ ウチの子たちが怖がっちゃって大変だったんだから！」

俺は三階の窓を見上げた。廊下はビルの表側に面していて、俺の事務所がある突き当たりの手前に動く影が見えた。こんな時間に俺の事務所を訪れる人間はまずいない。多香子が俺を待っている可能性はあったが、彼女を見て笠原がこんなに脅える筈もない。

「どんな奴だ？」

「痩せてて、天然パーマの男の人。スーツは着てるけど、あんまりちゃんとした仕事の人には見えないわ。あれ、何？ ヤクザ？」

「えらい言われようだな。何かされたのか？」

「そういう訳じゃないけど…………。ニコニコ愛想笑いしてきたりもしたんだけど、それがかえって怖いっていうか、不気味っていうか…………。」

とつさに浮かんだのは浦辺康利の住基カードの写りの悪い写真だった。

いっそのこと、本人の口から詳細が訊ければ話が早いのだが、などと馬鹿げた考えが脳裏をよぎった。しかし、さすがの浦辺もすでに火葬済みの身体では俺の事務所を訪ねるのは無理だろう。そうすると、笠原が言った特徴に該当する人間の心当たりは限られてくる。笠原は尚も不安そうに眉根をきつく寄せていた。たまたま夜のレスンがない日だったので、怖がるスタッフを定時で帰らせて、自分も逃げるように帰るところだったのだそうだ。だったらどうせなら一〇番でもしてくれれば笑える事態になっていたかもしれないのだが、ただでさえ忙しい地域課の連中に気まずい思いをさせるのは忍びない。

彼女を丁重に宥めて帰路につくのを見送ってから、俺は事務所の裏手にある駐車場を見た。

俺の勘は当たっていた。予想していた車が白線で区切ったスペースを二つ使って我が物顔に停まっていたのだ。

黒いトヨタ・キャバリエはいかにも捜査車両という雰囲気を漂わせていた。パツと見た感じは同じでも一般車と警察車両には細かい相違点があつて、俺にとつては 覆面パトカーです と標識を掲げて走っているに等しい。それ以前に特に人気があつた訳でもないキャバリエに乗り続けている一般人はまずいないだろうが。

同じように、すでに退役している筈の骨董品の捜査車両に乗り続ける物好きもそうはいない。俺が知る唯一の該当者の名は桑原幸一という。

俺は階段を上がった。

待合室を設ける余分なスペースなどないので、俺の事務所の前には知り合いの病院のリニューアルで出た余り物のベンチが代わりに置いてある。一坪にも満たないそのスペースに手持無沙汰な面持ちで突っ立っていたのは、墓石のようなダークグレーのスーツを着た痩身の男だった。猫背を強調するかのように肩をすぼめて、スラッ

クスのポケットに手をつ突っ込んで親指だけを外に出している。針金を擦り合わせた人形のような体躯と、身体の異常を疑いたくなる土気色の顔は減量に失敗したボクサーを連想させた。

「こんなところで捜査責任者が油を売っていられるとは、県警はよほど人材が有り余っているらしいな、警部」

「……油を売るのが仕事のおまえに言われたくない」

「俺が仕事をしなくても困るのは俺だけだ。あんたが仕事をしないのは税金の無駄遣いだ」

「確かにそうだな」

俺が上がってくるのは足音で分かっていたのだろう。桑原に驚いた様子はなかった。お世辞にも手入れが行き届いているとは言えないボサボサの天然パーマ。アイロニカルな笑みを絶やさない目許と魔女のそれを思い起こさせる細い鷲鼻。最後に会ったときと比べて幾分老けたように見えたが、そもそも、この男は若い頃から歳相応に見られたことがない。

どうしてこの男がここにいるのか。理由は一つしかない。糸島のサナトリウムは警察の監視下にあったのだ。考えてみれば当然のことだった。木戸が指摘したようにケチな強請り屋が殺された程度の事件に桑原を宛てたということは、警察が原岡修三の介入を予期していたことになる。当然、出入りする人間はすべて洗うだろう。

「俺が何の事件の捜査責任者をやっているというんだ？」

「しらばっくれるなよ。須崎埠頭でルポライターが殺された事件は、あんたが担当しているんだろう？」

「どうして、おまえがそんな事を知っている」

「俺は福岡県警の熱心なサポーターなんだよ。不祥事で辞職させられた後でもね」

「そいつは驚いた」

何が可笑しいのか、桑原は言った後に小さくせせら笑った。歯茎を剥き出しにする残忍そうな笑顔はモデルの娘たちを震え上がらせるに足るものだった。

「一体、何の用だ？」

「話を聞きたい。署まで御同行願おう。俺が担当する事件を知っているなら、何の件かを説明する必要はないな？」

「それそろ来る頃だろうと思っていたよ」

「素直で結構だ」

任意同行である以上、従わなくてはならない義務はない。出頭を明日に引き延ばすことだって出来る。しかし、抵抗したところで得るものはなかった。警官との話し合いはどんなに遠回りをしたところで、必ず彼らの目指す結論に辿り着くようになっていくからだ。

俺は桑原と連れだって階下に降りた。桑原は当たり前のように俺にキャバリエの助手席に乗るように言った。言われなくても俺は酒を飲んでいた。ギシツと音がするドアを開けて安っぽいビニールレザーのシートに身体を滑り込ませた。

「何故、こんな骨董品に乗り続けているんだ？」

「装備課がロクな車を回さないからだ。トヨタばかり回そうとする」

「こいつだってトヨタだろ？」

「元はシヴォレーだ。コルヴェットか、せめてカマロを用意してくれるなら乗り換えないでもない」

「そんな力ネ、県警にある訳ないだろう」

桑原は返事をしなかった。俺は桑原の許可を取らずにJPSに火をつけた。パッケージを差し出すと桑原は当たり前のような手つきで一本引き抜いて、ダッシュボードの備え付けのライターで火をつけた。

「そういえば、相棒はどうしたんだ？」

俺の質問に桑原は目を瞬かせた。

「……相棒？」

「いつも連れてる紛い物の仏像のことさ」

「成富のことか。おまえを待ってる間に腹が減ったから、マクドナルドにハンバーガーを買いに行かせた」

「相棒つてのは、あんたの小間使いじゃないんだぞ」

「他に役に立たないんだから、仕方がなかるう」

桑原はつまらなそうに鼻を鳴らした。

成富というのは県警捜査一課に所属する、螺髪のようなクリクリのパンチパーマがトレードマークの男だ。フルネームは成富茂実。実は俺の同期でその人となりはよく知っている。やり手で知られる桑原のパートナーを長年務めていることを誇りに思っているフシがあるが、真つ当な神経の持ち主では桑原の部下は務まらないから宛がわれているということに本人だけが気付いていない。

「ハンバーガーを待たなくていいのか？」

「構わんよ。車が無くなつていれば署に戻ったことくらい分かるだろう。そうしたら、自分の足で帰ってくるさ」

桑原はさつさとエンジンに火を入れるとキャバリエを駐車場から出した。

「おい、警部」

ドアミラーに一瞬、マクドナルドの袋を持った茶色いスーツのずんぐりむっくりの男が映ったような気がした。だが、桑原がアクセルを緩める気配はまったくなかった。角度的には間違いなく見えていた筈なのだが。

「どうかしたか？」

「いいや、何も。現役るとき、あんたの相棒に抜擢されなかったことを警務課に感謝するべきだつてことに気付いただけさ」

「何故だ？」

桑原は本当に不思議そうに俺の顔を見た。

福岡県中央警察署は天神のど真ん中の一等地に建っている。

周囲を市役所や老舗の大丸百貨店、福岡銀行の本店ビル、済生会病院、天神中央公園を挟んでアクロス福岡などに取り囲まれていて、街の景観に沿う為かどうかは分からないが、出来損ないのアールデコのような官公庁にしては小洒落た外観をしているのが特徴だ。周りがことごとく高層なせいで四階建ての庁舎はどうしても足元に蹲る犬のようにいじけて見えるのだが、それと昨今、県警の筆頭警察署でありながら幹部人事や事件の取扱数の面で博多署の後塵を拝している事との間に相関関係があるかどうかは不明だ。

浦辺康利殺害事件の捜査本部は四階の講堂に設置されていた。入口に掲げられたおなじみの縦長の板には“須崎埠頭ラブホテルにおけるルポライター殺人事件捜査本部”と記されていた。この文言は板が位牌に似ているという理由で“戒名”と呼ばれるのだが、捜査本部が設置されるのが主に殺人事件であることを考えると不謹慎な冗談のような気がしてならない。

俺が入られたのは講堂の向かいにある、一〇数人が入ったら一杯になる程度の小さな会議室だった。長テーブルとスチールの椅子がコの字に配してあって、窓際には乱雑に消した痕があるホワイドボードがあった。ブラインドは下りていて外の様子は伺えない。壁にはとつくに終わった春の交通安全週間のポスターが貼ったままになっていて、涼やかな顔立ちをしたショートカットの女性タレント

が物憂げな表情で“誰かじゃなくて、あなたが守って”と訴えかけていた。

「取調室じゃないのか？」

俺の問いに桑原はシニカルに口許を歪めた。

「所轄の部屋を勝手に使うと煩いんだ」

「……あんたがそんなことに気を使う人間だとは知らなかった」

「余計な御世話だ。所轄の連中はプライドが高いんだよ。何かと言えば俺たちの拳げ足を取ろうとばかりしている。くだらない話だな。ここなら誰も文句を言わん」

「なるほどね」

所轄と本部の縄張り争いはテレビの中だけの出来事ではないが、力関係は首都圏と地方では大いに異なる。

一応、上位にあるのは県警側で、高圧的な態度を取りたがる県警関係者もいないではない。ただ、上層部をキャリア組が占める首都圏と違って叩き上げが多い地方警察は人間関係が入り組んでいて、迂闊に上下関係を主張すれば妙な所に軋轢を生みかねないという事情があるのだ。それが分かっているから、所轄署は県警と対等であることに必要以上にこだわる傾向がある。

俺はテーブルの奥の角の椅子に座らされた。桑原は俺の斜め前に腰を下ろして、自分の陣地を主張するように中間のところに灰皿を置いた。スチールの灰皿は被疑者と一緒に尋問を受けたかのように歪んでいて据わりが悪かった。禁煙タイムの張り紙はあったが時刻はとうに過ぎていたし、仮に時間内でも桑原にそれを守るような殊勝さがある筈はなかった。

「さて」

桑原はロングピースを口にした。車中のお返しのもりで手を出してみると、桑原は無表情でパッケージを差し出してきた。俺は一本引き抜いて自分のジッポで火をつけた。

「その前に警部、俺の立場をはっきりさせてくれないか？」

「立場？」

「そつだ。俺はどういう理由でここに連れてこられたのか、その説明を聞きたい。被疑者扱いならミランダ警告を聞かせて貰わなきゃならないからな」

「上社、おまえ、何かやらかしたのか？」

「覚えがないから聞いてるんだ」

「話を聞きたいと言っただろう。任意の事情聴取だ」

「何について？ まさか、五年前の徳永が射殺された件についてか？」

「おまえが相棒の女房を寝とつた件について、俺は何の興味もない。抱き心地が良かったかどうかについては多少興味があるが」

「由実子の？」

「他人の女房を名前で呼んだりするから、妙な噂を立てられるんだ」
桑原の垂れ気味の目許に深い皺が寄つた。

知らない人間が見れば親愛の笑みに見えなくもない。だが、常に絶やさないその笑みも、実のところは感情の伴わない冷笑以外の何物でもなかった。決して横暴でも陰険でもないこの男が誰からも嫌われる理由がここにある。

嫌っているのは俺も同じ筈だった。しかし、不思議な事に当の本人を目の前にしても腹が立ったりはしなかった。この男がしたこと理解を示している訳ではない。ただ、結局はすべては自分の責任だったのだという苦い自覚があるだけだ。

「質問がそれだけなら、さっそく本題に入らせて貰おう。おまえ、昨夜遅くに糸島の敬聖会が経営しているサナトリウムに顔を出しているな？」

「何のことだ？」

「おまえが女弁護士 of BMW で施設に入っただ現場は監視していた連中がちゃんと見てる。証拠の VTR もあるんだが、準備が面倒なんで手を掛けさせんでくれ」

「確かにそこには行つた。それが？」

「原岡修三と何を話した？」

「誰だ、それは？」

「手を掛けさせるなど言った筈だ」

桑原の笑みが深くなった。この男をよく知る人間なら浮かべる表情と実際の感情がまったく異なっていることも知っている。

「一緒にいた女弁護士　植村多香子の事務所は原岡興産の顧問を務めている。原岡修三自身の個人的な法律顧問でもある」

「そうかもしれない。しかし、それは俺が原岡某を訪ねたという証拠にはならない」

「無論、そうだ。しかし、おまえが彼の病室を訪ねたことは分かっているんだ」

言葉通りにとればただのこじつけにしか聞こえない。しかし、桑原は底の浅いブラフを使うような男ではなかった。何かしらの証拠を握っているのだ。

「サナトリウムにスパイを送り込んでいるのか？」

「たまたま、あそこの入院患者にウチの捜査員の大叔父がいてな。彼自身もかつては県警の関連会社に勤めていたことがあって、付き添いに見せかけて婦警を配置させてくれるように頼んだら引き受けてくれたんだ」

「抜かりがないな」

父と娘の間にどれだけの断絶が横たわっているようにとも、原岡修三の近辺が監視対象の筆頭であることに変わりはない。俺が捜査の指揮を執っていても似たような手段を模索しただろう。どうでもいいが今は婦人警官ではなく女性警官、略して女警と呼ばなくてはならないのだが、桑原がそんなことを気にするとは思えないので指摘するのはやめておいた。

俺はぼっかりと煙を吐きながら桑原の顔を見据えた。

さて、どこまで話したのか　そんなことを考えていると、桑原が俺の背後に目をやった。それと同時に騒々しく安普請のドアが開いた。

「警部！」

成富茂実は達磨のような丸々とした体軀を、季節外れのベージュのシアサッカーのスーツに包んでいた。ミラー越しにブラウンに見えたのは暗かったせいだろう。買ったときにはサイズは合っていたのだろうが、それ以降に太ったらしく、ジャケットのボタンを留めると腹周りが窮屈な感じだった。仏像呼ばわりの原因は主に髪型によるものとされているが、下膨れの面構えや腫れぼったい瞼もその印象を後押ししている。

桑原に対する不満と媚びが同居する眼差しは、俺の姿を認めると一瞬で尊大なものに変わった。ある意味、分かりやすい男だ。

「遅かったな」

桑原は独り言のような素っ気なさで呟いた。

「お言葉ですが……あのビルからここまで結構あります。これでも走ってきたんですよ」

「そうか。ダイエットの足しになっているといいな。頼んだものは？」

「はっ？ はい、こちらに……」

成富は言いかけた言葉を飲み込み、提げていたマクドナルドの袋をテーブルに置いた。桑原がいるところまで持っていけないのはこの男なりの抵抗なのかもしれない。

仕方がないので俺が腰を上げて袋を引き寄せてやった。桑原は無造作な手つきで中身を取り出し、入っていたホットコーヒーのカップを自分と俺の前にそれぞれ置いた。俺の分が買ってあった筈はないので、目の前にあるのは成富の分だったことになる。

「どうした、早く飲まないと冷めて不味くなるぞ？」

「あ、ああ……」

警官だった時も、警官を辞めてからも他人に恨まれる理由には事欠かない人生を送っている俺だが、食べ物への恨みが一番恐ろしいのは経験的に事実だ。

俺は成富にカップを勧めてみた。

「走ってきて喉渴いてるだろ。どうだ？」

成富は三白眼で鼻を鳴らしたただけだった。仕方がないので飲み口のプルを起こして口に運んだ。桑原は何事もなかったような顔でコーヒーを啜っていた。

やがて、桑原は飲み終えたカップを脇にどけてタバコのお替りに火をつけた。俺はまだ飲み終えてなかったが、飲みたかった訳ではないし、そもそも俺はファストフードのコーヒーがあまり好きではないので半分ほど残した。背後で立ち上る怒りのオーラは徹底して無視した。

「さて……上社、原岡修三と何を話した？」

「今年のプレーオフの展望について、専門家の目から見た解説を求められたんだ」

「おまえ、いつから野球解説者になった？」

「県警にいた頃からだよ。堀内が二年で巨人の監督を辞めることを言い当てたこともある」

「そんなこと、就任した最初に分かってただろう」

「ふざけるなッ！」

怒鳴り声と同時にテーブルを激しく叩く音がした。俺は仏像を振り返った。

「いきなりどうした？ 男性更年期か？」

「やかましいッ、くだらないことを言うな！ おまえは警部に訊かれたことに答えればいいんだッ！」

目と口角を吊り上げた仏像にしては徳の足りない顔を見ながら、俺は成富の唾が飛んでこないように椅子の位置を少し変えた。

取調べのセオリーに則して言えば、被疑者を怒鳴りつけるなどして揺さぶるのが成富の役目、物静かな理解者然として安心感を与えて話を訊くのが桑原の役目ということになる。世に言う“良い警官、悪い警官”というやつだ。

桑原の口元が小さく動いた。苦笑したらしかった。

「成富、質問に戻っていいか？」

「ハッ、えーっと、あの……どうぞ」

「それで、おまえたちが原岡に呼ばれた理由は？」

「調査依頼があったんだ。最初は植村弁護士との知り合いが経営している興信所に持ち込まれた依頼だったんだが、ちよつと複雑な事情があるとかで俺に話が回ってきたのさ」

「事情つてのは何だ？」

「詳しいことは知らない。本人たちを呼んで直接訊いてくれ」

成富の怒気が膨らむ気配がしたが無視した。

そろそろ、何か実力行使に出てもおかしくないタイミングだった。考えられるのは足払いで俺が座っている椅子を蹴飛ばして達磨落としのように尻もちをつかせることだ。俺は椅子に浅く腰掛けて高々と脚を組んでいるので避けようがない。まあ、そうならなかったで、そのときに報復手段を考えるところでしょう。

「原岡修三から何を依頼された？」

「あんた、守秘義務つて知ってるか？」

「聞いたことはある。食ったことがないんで味は知らん」

「だろうな。原岡の娘の所在調査だ」

「娘？」

「ああ。一緒に住んでる二人じゃなくて、十七年前に家出した先妻の娘だ。名前は原岡香織。現在、三十六歳になる」

「十七年とはずいぶん経ってからの依頼だな。原岡はどうして今頃そんなことを？」

「しらばっくれるなよと言いつ返してやろうかと思った。しかし、言わなかった。」

「原岡香織はある事件の重要参考人として警察に追われている。はつきり言おう。須崎埠頭のラブホテルで起きた殺人事件だ。只事ではないと思った父親は慌てて娘と連絡をとろうとした。ところが、娘の居所はずつと以前に調べたときと変わってしまったので、連絡がとれない。そこで父親は探偵を雇って娘の足取りを追わせることにした」

「筋は通っているな」

「事実だからな」

「父親が掴んでいた原岡香織の居所は？」

「東京都墨田区東向島。詳しい番地は覚えていないが おがたやという弁当屋で住み込みで働いていたそう。但し、今はその弁当屋はない」

「どうしたんだ？」

「火事で焼け出されたそう。跡地にはどこぞのゼネコンの分譲マンションが建ってるらしい」

「なるほど、それで娘と連絡が取れない訳か」

そこで押し黙ると、桑原はタバコの火口の灰を灰皿の端で尖らせる作業に没頭し始めた。どうせすぐに燃え進んで形は崩れてしまうのだが、何故か、桑原はこの作業を丁寧に繰り返す癖がある。

浦辺康利の周辺を洗った結果として香織を重要参考人扱いしている以上、この程度のことは警察にとっても既知の事実の筈だ。初めて聞いたような顔をしているのは、どこまで知られているのかを伏せて俺の不安を煽る為だ。

すると、成富が思い切ったように口を開いた。

「だったら、おまえはどうして福岡でブラブラしてるんだ？」

「ブラブラ？」

「娘の足取りが途絶えたのが東京なら、そこから捜査するのが定石だろう」

「言われなくてもそうしているさ。東京に知り合いがいるんでね」

「じゃあ、おまえは何をしている？ ははあ、そうやって適当に仕事をしているふりをして、報酬を釣り上げようって腹か？」

「自分を基準に物を言わないでくれ。おまえがやってもいない捜査の報告書を提出して、担当課長に赤ペンで“この報告書はフィクションです。実在の人物、企業とは何の関係もありません”と書かれた逸話は有名なんだぞ」

「何だとッ」

成富の顔が一瞬で真っ赤になり、手が空中で何かを掴むような動

きををした。俺の襟首を締め上げてたくて仕方ないのだろう。桑原が小さく咳払いをしたが、成富の耳には届いていないようだった。

「じゃ、じゃあ、おまえはいったい何をやってるんだッ!」

「警察が原岡香織を追っているのなら、彼女が福岡にいる可能性も少なくない。俺はそつちを担当しているのさ」

「ほう……。おまえは自分が何を言ってるか、分かってるのか？ 捜査を妨害すると宣言しているんだぞ？」

「面白いことを言うな。原岡香織が被疑者として指名手配されていくというのなら、確かに俺は警察の邪魔をするかもしれない。しかし、彼女が参考人に過ぎないのなら、父親が探偵を使って彼女の居所を捜したところで何の問題もない筈だ」

「ふん、浦辺を殺したのはあの女に決まってるッ!」

「……成富、そこまでにしておけ」

桑原はタバコの煙を盛大に吐き出した。

ただ名前を呼んだだけのよう静かな口調だった。しかし、それは躰の行き届いた犬に向かって発せられたものと同じ効果を持っていた。静まり返った部屋の中で成富が唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。

「……警部？」

成富は恐る恐るという感じで桑原の方を向いた。桑原の目は相変わらず笑っていたが、口許は嘲るように歪んでいた。

「莫迦が、安直な手に引つ掛かりやがって。なるほどな、上社。」

おまえが素直に着いてきた理由が分かったよ」

「ほう？」

「我々が今現在、原岡香織に対してどれだけの情報を握っていて、どうという扱いをしているのか、それを知っておきたかった。そうだな？」

「1」明察」

営業用のスマイルを浮かべて見せると桑原は肩をすくめた。仏像は自分が失策を犯したことに悟りの境地とは程遠い狼狽ぶりを見せ

ていた。

「あのオ……警部？」

「しばらく黙ってる」

にべもない一言だった。俺は苦笑しながら新しいタバコに火をつけた。今度は自前のJPSだ。

「原岡香織は何故、指名手配されないんだ？」

俺の問いに桑原は小さく鼻を鳴らした。

「どつという意味だ？」

「被害者と原岡香織の間には密接な繋がりがある。現場からは彼女の指紋も出ている。他に怪しい人物も見当たらない。おまけに被害者共々、今、何処で何をしているのか、さっぱり分からないときている。指名手配するのに不都合はないだろう。まさか、原岡の親戚の政治屋が圧力をかけてきているのか？」

「それはない。今のところは、だが」

「だったら、何故？」

「その質問に答える義務はないんだが、いいだろう。問題は現場で発見された凶器だ」

「刃渡り一〇数センチのナイフで滅多刺し、と新聞には書いてあったな」

「その通りだ。返り血を浴びたのを洗い流したんだろうな、浴室からもべったり血液反応が出たんだが、ナイフはそこに無造作に転がっていたよ。ところが、そいつからは原岡香織の指紋が出なかった」

「手袋をしていたか、あるいは風呂場できっちり洗ったか」

「ナイフの柄についた指紋はボディソープで洗ったくらいじゃ落ちない。それ以前にナイフも血まみれのままに残されていたんだ」

「じゃあ、手袋説だろう」

「かもしれん。だが、その手袋は現場で発見されていない。凶器を残して手袋だけ持ち去る馬鹿がいると思うか？」

「動転していればあり得ない話じゃなかるうがな。しかし、不自然なのは事実だが、原岡香織を重参に留めるには根拠薄弱じゃないか

？」

「もう一つ、凶器に関して不自然な点がある。型番や製造番号から被疑者がナイフを購入したディスカウントストアを割り出した。あまり売れてるナイフじゃないらしくてな、POSの履歴から買われた日時まで分かったんで、当日の防犯カメラの映像をチェックすることも出来た」

「すごいじゃないか」

「そこに三〇代半ばの女が映っていればな。或いは被害者本人が。残念ながら映っていたのはどう見ても高校生くらいの若い女だった。顔の半分程度が隠れるサングラスとでかい麦わら帽子で顔が隠れていて、モニタージュを作るには至らなかった」

「警部、そいつはストローハットと言うんだよ。カメラに映ってないのに、どうして高校生と言えるんだ？」

「当該のレジの店員の証言だ。若い娘がナイフを買うことは珍しいので覚えていたそうさ。あと、女にしてはえらく背丈が高かったとも言っている」

「原岡香織の身長は一六〇センチ以上だぞ」

「そんなものじゃなかった。聞き込みに行った捜査員が一七二センチだそうだが、そいつとあまり変わらなかったらしい」

「じゃあ、彼女は娘が買ったナイフを持ち出したんだ」

「残念ながら原岡香織に子供はいない。少なくとも戸籍上は」

「内縁関係にある夫の連れ子とか？」

「おまえは依頼人の娘を殺人犯に仕立て上げたいのか？」

俺は桑原の顔を見た。冷え切った薄笑いからは感情は読み取れなかった。

「容疑が濃いという点で原岡香織がリストの筆頭であるという事実は変わらない。だが、被疑者と決めつけてしまうには不自然な点多過ぎる。それが彼女が指名手配されない理由だ」

「了解、警部。ちなみに防犯カメラの映像はどうなんだ？」

「そんなことはおまえには言えんよ。おまえの方は原岡香織の居所

に近づいているのか？」

同じく言えないと答えてやるうかと思った。

「残念ながら、彼女の影にも近づけていないというのが本当のところだ」

「なんだ、おまえに話を聞けば手間が省けると思ったのに」

「給料分は働いてくれ、警部」

「そうしよう。他に何か、知っていることはないか？」

俺は少し考えて、ないと答えた。

「……そうか。だったら、今日のところはもう帰っていいぞ」

「警部ッ、こいつを帰らせるんですかッ？」

成富はとんでもないとばかりに気色ばんだ。目が血走っていて仏像というよりは悪鬼の表情だった。

「何か問題があるか？」

「こいつのことですから、まだ喋ってないことがありますよ！ 留置場にブチ込んで吐かせるべきですッ！」

「お得意の力任せでか？」

桑原は初めて笑みを含まない目で部下を見据えた。

「それが……何か、問題ですか？」

「おまえがそうしたいんなら勝手にやってくれ。但し、俺を巻き込むな。特別公務員暴行陵虐で訴えられて年金をフイにするのは御免だ」

「警部……」

「ご苦労だったな、上社。今度、一緒にメシでもどうだ？」

「いい店がある。都合のいい日を連絡してくれ」

「そうしよう」

一瞬、裏があるのではないかと思ったが、桑原は俺から興味を失ったようにタバコの先を尖らせる作業に戻っていた。立ち上がると廊下に通じる通路に成富が立ちはだかっていた。

「帰っていいかな？」

「……好きにしる」

「警部の車でここまで来たんだが、帰りはどうすればいい？」

「俺が知るかッ！」

成富はまだ諦めきれない様子だったが、渋々という感じで身体を避けてドアまでの道を開けた。誰にへつらい、誰をいたぶればいいかについてだけは敏感なこの男が上司の意向に逆らえる筈はなかった。

俺は会議室を出た。それほど長く話したつもりはなかったが、もうそろそろ日付が変わろうとしていた。

廊下を通り抜けてエレベータの前に立つと背後から声を掛けられた。

「上社さんじゃないですか？」

「……ああ、大沢か。久しぶりだな」

声をかけてきたのは大沢隆之という俺の一期後輩に当たる男だった。特練員と呼ばれる県警所属の剣道エリートだ。身長一八〇センチの俺が見上げなくてはならないほどの長身で、その圧倒的な高さとりーちを生かした左諸手上段からの打ち下ろしが必殺の武器だった。

「こんなところで何やってるんだ？」

「こんなところはないでしょう。先輩だって五年前までは同じ釜の飯を食ってたんですよ」

「それはそうだが」

大沢は俺が辞めるのと同じくらいに競技生活から引退して、後進の指導に当たることになった筈だった。特練員は逮捕術の教官職に就くのが通例で、現場に配属されることはあまりない。

俺の疑問は顔に出ていたらしかった。大沢は“拳王”の仇名を頂戴した厳つい顔にバツが悪そうな笑みを浮かべた。既製品で間に合う体格ではないのでスーツはすべてオーダーで仕立てていると言っていたが、清潔感のあるブルーサージのスーツは窮屈で肩身が狭そうに見えた。

「私生活でちょっと問題を起こしちゃいましたね。あちこちたらい回しにされて、今は県警の刑事総務課にいるんですよ」

「そうか……。だったら、今日はどうしてここに？」

「今、ここに帳場が立ってるでしょう。その応援ですよ。先輩はどうして？」

「その帳場絡みだよ。詳しいことは言えないが」

「へえ……」

エレベーターが上がってきて、忙しない表情の若い男が降りてきた。見るからに刑事と言う風貌の男だった。そいつは大沢を見上げるとペコリと頭を下げた。

「大沢さん、お疲れ様です。俺らの代わりに親不孝の傷害の現場に行ってくれたんですって？」

大沢は何でもないという風に小さく手を振った。大柄な体には不似合いな仕草だった。

「気にするなよ。帳場にいたって、どうせすることなんかないんだから。それにやったことだって、機捜との引き継ぎに立ち会っただけだし」

「そうっすか？」

大沢は若い刑事に引き継ぎの資料は刑事課に届けてあると言った。刑事は大沢に礼を言って、それからようやく俺に気付いたように怪訝そうな顔をしたが、何も言わずに捜査本部に入って行った。

俺と大沢はエレベーターに乗った。

「親不孝通りで何かあったのか？」

「ああ、クラブの……って、踊る方のクラブですけど、そのオーナーが何者かに顔の形が変わるくらいまで殴られましたね。意識不明の重体なんです」

「……いつの話だ？」

「発見されたのは夕方でしたっけ。第一発見者は店の従業員の女の子。閉まつてる筈の鍵が開いてたんで恐る恐る入ってみたら、オーナーが血まみれで床に転がっていたんだそうです。犯行時刻ははっきりしないんですけど、午後二時過ぎにビルの管理人がスプリンクラーの点検に入ったときにはいなかったそうですから、その後でし

「ようね」

「ちなみに店の名前は？」

「えーっと、アクア、でしたっけ」

不意に体温が二、三度ほど下がったような気がした。

大沢は二階でエレベーターを降りた。閉まるドア越しに何か言ったようだったが、何と言ったのかは聞き取れなかった。主に大沢の声が高く聞き取りづらいからだが、仮に明瞭に聞き取れる環境だったとしても、今の俺の耳に入ってきたかどうかは甚だ疑問だった。

アクアが入っているビルの周辺は物々しい雰囲気にも包まれていた。片側一車線の手狭な通りを塞ぐように捜査車両やパトカーが並び、制服警官や私服の捜査員がビルに出入りしているのが見えた。事情を把握出来ていない今の段階で現場検証はやらない筈だが、傷害事件の初動捜査にしては投入されている人数が多いのは気になる。このころだ。傷害致死、或いは殺人を視野に入れているのかもしれない。そして、そうであるなら警察は井上の容態をかなり悲観的に見ていることになる。

細長いペンシルビルの各フロアにはテナントは一軒ずつしかなく、他に用事がある振りをして現場に近づくのは困難だった。そうでなくとも警官の中には見知った顔がちらほらしている。このころ出ていけば良くて質問攻め、悪ければ関わりを疑われて中央署に逆戻りする羽目になりかねない。

そんな中、道向かいの自動販売機の前でコーヒーを啜る一際見知った顔があった。

「よう、忙しそうだな」

コーデュロイのカーキのジャケットにTシャツ、ブーツカットのデニムという、およそ警官らしからぬ出で立ちのその男がこっちを向いた。左腕には“機捜”の腕章が留められている。野口という初動捜査を専門にする機動捜査隊の人間だった。俺とは機動隊時代の同僚に当たる。

「龍さんじゃないっすか。何やってんすか？」

「野暮用だよ」

「またまた、相変わらず飲み歩いてんでしょ？」

「当たらずとも遠からずだな。傷害事件だった？」

「そうなんスよ。知ってるんスか？」

「四階のアクアって店だろ」

「さすが、耳が早いっスねえ」

スーサー煩い奴だ。歳は俺とさして違わないのだが、体育会系の学生のような言葉づかいは相変わらずだ。

「龍さん、ここにはよく来るんスか？」

「いや、そうでもない。ただ、オーナーの井上とは顔見知りだね。道ですれ違えば挨拶する程度の仲だ」

「へえ」

野口は感嘆したように目を丸くした。何に感嘆したのかはよく分からない。

「だったら龍さん、井上の交遊関係について何か知らないッスか？」

「たとえば？」

「誰かの恨みを買ってなかったか、とか」

「どうだろうな。少なくとも、商売に関して誰かと揉めてるってことはなかったと思うが」

「そうッスか……」

口から出まかせだが強ち嘘でもない。経営に関する実態がどうであれ、飲み屋としてのアクアは特別にトラブルを抱えるような店ではなかったし、井上の接客態度にも問題らしきものは見当たらなかった。ジントニックが薄いとキレル客がいれば話は別だが。

「井上の容態は？」

「医者の話だと左の眼窩骨折と頬骨の陥没、左の上腕がぼつきり。肋骨も半分くらい折れてたし、左膝もひよっとしたら複雑骨折してるかもしれないって言ってたっスね。あと、全身にかなりの打撲」

「……よく生きてたな。運ばれたのは何処の病院だ？」

「行っても、当分は面会謝絶っスよ？」

「だからって知らん顔も出来んさ。井上の彼女とも顔見知りだしな」

「ああ、そういうこと。敬聖会病院っすよ」

「あんな地の果てに？」

「西区のじゃなくて、早良区にある昔の本院。市立の急患センターが手一杯だからってそっちに回されたみたいっす。そう言えば龍さんちの近所じゃないっすか？」

「そうだな」

俺は野口に礼を言ってその場を離れた。

敬聖会早良病院は樋井川沿いを西新から六本松方面に向かう途中にある。ごく大雑把に言えば俺のマンションの近所だが、実際には野口が言うほど近くでもない。

医療法人としての敬聖会が設立されたのは戦後間もなくだそうだが、当時からグループの総本山だっただけあって、白亜の建物には歴史と風格が特売日に分けてやれそうなほど備わっていた。

尤も、それは施設全体が老朽化に直面していることと同義でもあり、本院としての機能が西区に移転してからはその傾向に拍車がかかっているように見えた。おまけにすぐ近くに市立の救急急患センターもあり、救急病院としてのアイデンティティも怪しくなっている。

俺は救急外来用のエントランスをくぐった。

外来の待合室は深夜にしてはひどくごった返していた。とはいえ、その半数近くを占めるのは救急車で運ばれてくる急患ではなく、救急外来と時間外診療の区別がつかない不届き者たちのようだった。火がついたように泣き叫ぶ子供が緊迫感を煽ってはいるが、場の雰囲気は概ねのんびりと弛緩しきったものだ。

そんな待合室の奥まった角に目当ての人物が座っていた。栗色の長い紙を後ろで束ねて、ノーメイクを隠す為か、アンバランスに大きな黒いセルフレームをかけている。寒くもないのにしっかりと自

分の身体をかき抱く姿は夕べ以上に小柄に見えた。

「エミちゃん、だったかな？」

彼女はハツと顔を上げた。すぐに思い出してくれたらしく、僅かに表情が和らいだ。俺と井上の関係が良好なものだという勘違いにつけ込むことに良心の呵責を感じないではなかったが、この仕事で最初に覚えることはそれを上手にごまかす術だった。

「今晚は。えーっと……上社さんでしたっけ？」

そうだと答えた。どうしてここへという質問には、店の前にいた警官に聞いたと答えた。彼女が脇に置いていた大振りな鞆を避けてくれたので、俺はそこに腰を降ろした。

「災難だったね」

「はい……」

俺は井上の容態を訊いた。下顎の骨も砕けていたことを除けば、内容は野口が教えてくれたこととほとんど同じだった。尤もそれだけ殴られたにも関わらず脳挫傷は起こしておらず、重傷には違いないが命に別条はないとのことだった。

「誰がこんなことを……」

エミは齒ぎしりしりそうな顔をしていた。恋人が大怪我を負わされても泣き崩れるでもなく、怒りを露わに出来るタイプの女なのだ。

「心当たりはないのかい？」

「警察の人にも訊かれましたけど、まったく……。そりゃあ、トオルもあんな感じだし、昔はいろいろヤンチャしてたとは思うけど。でも、あたしと付き合い始めてからは真面目にお店やってたし、ケンカもしなくなっただし、あんな目に遭わされるような事はなかったんです」

エミの自分を抱きしめる手に微かに力が籠った。

「怨恨や商売上の争いだけが襲われる原因とは限らないさ」

「……どういう意味ですか？」

「例えば、口止めだな。一つ訊きたいことがある。君が井上を見つけた時、店の中はどんな状態だった？」

「まるで酔っ払いが暴れた後みたいにめっちゃくちゃでした」

「家探しをしたような跡は？」

「はつきりそうとは言えませんが。ただ、カウンターの奥にキッチンと兼用の小部屋があるんですけど、そのの袋戸とかロッカー代わりに使ってる戸棚の中身が引っ張り出されてました」

「やっぱりな」

「……やっぱり？」

俺はこれから話すことは警察には内密にと念押しした。エミは小さく頷いた。

「君の恋人の店が、実質的には岸川という男のものだったことは知っているかい？」

「知ってます。ヤスさんのことですよね？」

「キシカワ・インヴェステイションという探偵事務所を営んでいた男だ。ところがこの岸川ってのは偽名でね。本名は浦辺康利という」

「浦辺……？」

エミの眉根に深い皺が寄った。

「何処かで聞いたような気がするんですけど」

「おそらくテレビじゃないかな。ニュースで騒いでた筈だから。ほら、一週間前に須崎埠頭のラブホテルで殺人事件があったらどう？」

「ああ、あれですか……って、あれ、ヤスさんなんですか？」

俺は彼女の口の前に手をかざした。エミは慌てたように口許に手をやった。

「そうなんだあ……でも、それとタオルが襲われたことと、どういふ関係があるんですか？」

「俺は今日、ある調査に絡んで岸川が事務所代わりに使ってたマンションに行ってきたんだ。ところがそこはもぬけの空だった。近所の住人の話では引越しが行われたのはここ数日の話らしい」

「でも、それじゃ計算合いませんよね？」

「そうなんだ。岸川が生前に業者に依頼していたなんてことがない

限り、奴に代わって部屋の中の荷物を運び出した人間がいるってことになる」

「ですよね……。ひょっとしてトオルを襲ったのも？」

「そうじゃないかと俺は考えている。岸川が出回り先に何かを保管していたり、私物を置いていたとしたら、同じ奴がそれを回収してきた可能性が出てくる。実際は様子を見に来ただけかもしれないが」

俺はそこで言葉を切った。

「井上が昼間に店に出てきて何をやってたかは分からない。だが、彼はそいつと 或いはそいつらと出くわしてしまった。両者の間でどんなやりとりがあったのかは想像するしかないが、結果からすると、あまり友好的なものではなかったらしい」

本当は井上が岸川の強請り屋稼業にも関わっていた可能性もある。そうであれば尚のこと、岸川の痕跡を消したがつている人間からすれば井上を病院送りにする理由が増える。エミには井上が店以外にやっていた商売はなかったかというソフトな訊き方をしたが、エミは沈んだ声でよく分からないと言っただけだった。

「ねえ、上社さん……あたしも一つ、訊いていいですか？」

「何だい？」

「トオルの本名のこと、知ってましたか？」

俺はエミの顔を見た。嘘をつく必要はなかった。

「知ってたよ。井上徹、本名は石川徹。昔、クラブやディスコを中心にマリファナや脱法ドラッグを売り捌いていたことがある。俺とはその頃に関わりがあった」

エミは俺を軽く睨んだ。

「やっぱり、上社さんって警察の人だったんですね」

「元が付くがね。どうして分かった？」

「そんな感じがしたんです。あたしも昔はヤンチャしてて、警察の人って何となく分かるの」

「現役の頃から、逆のことしか言われたことがないがな。いつぞや、占い好きのキャバ嬢に一番合ってそうな仕事は何かって訊いたら

LEON の表紙だつて言われたよ」

「そうかも」

驚いたことにエミは小さく吹き出していた。口調も少しくだけてきていた。

「彼氏が自分を騙していたっていうのに、君はずいぶん気丈なんだな」

「名前なんてどうでもいいもの。タオルはタオルだし。それに、誰だって人に知られたくない過去の一つや二つ、あるでしょ？」

「確かにそうだな」

顔を見合わせて互いに小さく笑った。石川徹という男の人生に何の共感も同情も抱くつもりはなかったが、この弾力に富んだ心を持つ女を前にして、彼が過去を封じて新しい名前で生きようとした心情は理解できるような気がした。

エミはそういえばと言つて、バッグからJPSのパッケージと釣り銭を取り出した。夕べ、受け取り損なったものだ。今さらどうでもよかったが礼を言つて受け取った。

「ねえ、上社さん。タオルを襲った連中のこと、何か分かつてるんですか？」

「残念ながら、今のところは何も分かつていない。　　そうだ、君は岸川が最後に店に来た一週間前の夜、店にいたか？」

「タオルが店を開ける日は大体いますけど。えっと、確か、珍しく女の子を連れてきてたんじゃなかったかな？」

「女の子？」

「ええ、背の高い、ちょっとキツめの顔立ちの子。日頃から女には興味ないなんて言ってるくせに、すっごくキレイな子だったからびっくりしたわ」

「歳はどれくらいだった？」

「二十歳　　うん、そのくらいじゃないかな。でも、タオルはあれは女子高生じゃないかって言つてたわ」

「女子高生？」

「トオルってそういうの、何となく分かるらしいの。女の子の年齢当てクイズみたいなのがあったら優勝できるなんて言ってたし。そんなクイズないけど」

浦辺康利の命を奪ったナイフを買ったのは背が高い若い女だった。そして、似た女をアクアに同伴した夜、浦辺は殺害されている。関連があると思えるべきだろう。

「石川さんのご家族の方ですか？」

会話が途切れるのを待っていたようなタイミングで、緑色の手術着姿の若い医師が外来患者の間を縫って近づいてきた。

エミは力強くそうだと答えた。医師は患者を安心させる為に向けた職業的な微笑を浮かべた。そばかすの多い丸顔に団子鼻、二重瞼のまん丸い目。殺伐とした救急救命ではなく小児科の方が似合いそうな柔和な雰囲気を漂わせている。

「担当医の榊原です。石川さんの症状のご説明があるのですが……そちらの方は？」

榊原と名乗った医師は俺に言った。医師の顔を凝視しないで済んだのは警官時代に積んだ鍛錬の賜物だった。

「単なる付き添いです。石川さんとは知り合いでしてね」

「そうですね。申し訳ありません、患者さんのプライバシーに関わることなので、部外の方にはお話し難いのですが……」

「構いませんよ。どうぞ、お気遣いなく」

榊原医師は俺に小さく会釈すると、一般病棟へ繋がる廊下の途中にある灯りのついた小部屋のドアを指差した。エミは俺の方をチラリと見たが心細いという感じではなかった。

彼女は医師と並んで歩いていった。俺は二人の後ろ姿を見送った。小柄なエミと並べばそれなりの身長に見えるが、榊原医師の後ろ姿は男にしてはずいぶんと小柄で、その割に横幅は人並みにあった。運動とあまり縁のない人生を歩んできたことは歩き方を見るだけで充分に伝わってきた。

敬聖会のホームページに医師の顔写真は載っていない。なので、

今の男が榊原真奈の兄、榊原祐輔であるかどうかは断定できない。
しかし、仮に二人が兄妹だとしたらこんな似ていない兄妹もいな
いだろうと思われた。

第22章

22

翌朝、多香子が欠伸を噛み殺しながら電話を掛けてきたときには、俺はとつくに起き出して浦辺康利のアパートを張り込む為に住吉にいた。

早朝に裏路地に突っ立っている訳にはいかないので、俺はアパートの玄関側を捉えるアングルにトランスミッター付きのC Dカメラをセットして、那珂川沿いのコインパーキングに停めたZの車内でモニタと睨めっこをしていた。BGMは知り合いの紹介で手に入れたばかりの ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ のサントラ、お伴は眠気覚ましを兼ねて中洲のカフェで買ったエスプレッソだ。ZシーターのZはシートがリクライニングしないので窮屈だが、眠ってしまわないという効果はある。

「ふわぁ……。ずいぶん早起きじゃない」

色気もそっけもない大欠伸に苦笑いが洩れそうになった。

「もう八時だぞ。と言うか、俺はあんたが起き抜けだったことの方が驚きだよ」

「どうして?」

「いや……別に」

多香子の勤め先は九時が始業時間だと聞いている。彼女の住まいは福岡空港近くの半道橋だが法律事務所は道が混み合う大手門にあるので、通勤にはどう考えても三〇分はかかる。僅か三〇分で四十路女の身支度が整う筈はないのだが。

「何時から張り込んでるのよ?」

「六時を少し過ぎた頃からだ。朝刊がそれくらいの時間に配られるという話なんでね」

「朝刊？」

俺は浦辺のアパートを張り込むに至った経緯を簡単に説明した。ちなみにこの界隈の配達時間を教えてくれたのは住吉通りを挟んだ向かいの地区に住んでいる猪俣だ。朝が早い相撲部屋の生活リズムが未だに抜けないらしく、少しくらい遅く寝ても朝の五時には目が覚めてしまうのだそうだ。

「で、韓流スターは現れたの？」

「まだだ。一〇時まで待つて現れないようなら、別の方法を考えなきゃならんだらう」

「気の長い話ね」

「まっただ。ところで用件は何だ？」

「ご挨拶ね。ご所望の書類が届いたから連絡してあげたのに」

「桐島沙耶香の住民票か？」

「戸籍謄本よ。桐島沙耶香の本籍地が熊本ってことが分かったんで、現地の法律事務所にいる知り合いに頼んで謄本をあげて貰っていただいた。それがついさっき、ファックスで届いたのよ」

「ありがたい話だな。礼を言っておいてくれ」

「私には？」

俺は鼻白みそうになるのを堪えて礼を言った。

「事務所の一階のセレクトショップの店長に預けておいてくれ」

「オツケー。というか、張り込み中で暇なんでしょう。読んであげてもいいわよ？」

「仕事はいいのか？」

「今日、何曜日？」

「……おや？」

今日は土曜日だった。厚化粧の多香子が朝から余裕をかましていられる訳だ。曜日の感覚に乏しいのは自由業の職業病、と言いたいところだが、警官だった頃も似たようなものだった。犯罪者は日曜

祝日を避けて犯行に及んだりしないからだ。

多香子は始めていいかと言った。俺はいいと答えた。録音はしなくても後で謄本を見れば事足りるだろう。

「えーっと、名前は桐島沙耶香、一九七六年六月二八日生まれ。三十四歳。現住所は福岡市東区千早。本籍は熊本県熊本市武蔵ヶ丘。家族は両親と弟が一人。結婚歴なし。附票によれば転籍の形跡もなし」

附票とは要するに戸籍の更新履歴だ。転籍云々というのは遠隔地に引っ越した際に本籍地を移すことだが、その際に身分条項が記載事項に引き継がれない為、婚姻歴を隠したい結婚詐欺師などに悪用されることがよくある。

「住民票の移動の履歴は？」

「七年前に今の住所に引っ越すまで動かした形跡はないわね。本人は、だけど」

「どういう意味だ？」

「両親は彼女が転出するよりずっと前に熊本を離れているわ。現住所は愛媛県松山市食場町。愛媛は母親の生まれ故郷みたいね。一方、弟はちよつと珍しいところに住んでるわ。何処だと思う？」

「クイズなら別の機会にしてくれ。睡眠時間が短くて頭が回らないんだ」

「佐世保刑務所よ。収容分類はYB級」

「犯罪傾向の進んだ若年再犯者か。何をやらかしたんだ？」

「押し込み強盗よ。桐島雄一郎、当時二〇歳。十二年前、遊ぶ金欲しさに貸金業の老人宅に押し入って夫妻を刃物で刺して殺害。現金二〇〇〇万円と車を強奪。逃げるときに追いつがった息子を撥ねて全治六カ月の重症を負わせているわ。他にも夫妻の娘を盗んだベントに乗せて連れ回しているわね。途中で合流した遊び仲間と一緒に、ほとんど寝かせずにレイプし続けたらしいわ」

多香子の口調は淡々としていた。痛ましい事件だからと言っていちいち心を揺らされては検察官は務まらない。

「その後には？」

「一審で無期懲役。検察、弁護側双方が量刑不当で控訴して二審で死刑判決。弁護側は上告したけど棄却されて判決確定」

「そつちじゃない。残された桐島家の話だ」

「お決まりの一家離散コースよ」

「だろうな」

事件が起こった時にクローズアップされるのは被害者とその遺族の悲しみだが、負けず劣らず悲惨な運命を辿るのが加害者の家族であることは黙殺されがちだ。少年事件で保護者が責任を問われるのは仕方ないとしても、責任の所在を問うのが酷なケースであつても“犯人の家族”は糾弾され、地域社会を追われることになる。

「同期の嫁ぎ先のお姑さんがそういう噂話に詳しくてね。それによると一家は夜逃げ同然で出て行つたらしいわ。父親が貰えた僅かばかりの退職金と家を買つたお金は、知り合いの弁護士を通じて慰謝料の弁済に充てたつて話。本当は残りの一家三人で奥さんの実家がある土地に引越す予定だったらしいんだけど、娘は付き合っていた男と別れたくないと言い張つて熊本に残つたらしいわ」

「両親の消息は？」

「死亡届は出てないわね。でも、連絡先を知つていそうな人物はご近所には皆無。娘の方は何年かして熊本のソープランド街で見つたという人がいたみたいだけど、真偽の程は不明」

「それが何故、福岡に？」

「私に言われても分からないわよ、そんなこと。熊本のソープ街より中洲の方が稼げると思つたんじゃない？」

「可能性はあるな。しかし、彼女は福岡では医療法人の事務長の秘書として働いている。そういう下地はあつたのか？」

「どうかしらね。ただ、彼女が通つてた女子高は偏差値の高いところじゃなかつたみたいよ。制服のスカートがやけに短いことで有名だったそうだけど」

「……その二つに何か関係があるのか？」

「別に」

俺は一度だけ多香子の高校の時の写真を見たことがある。多香子や由実子を通った高校は非常に厳しい校風だったそうで、時代の差を考慮してもお世辞にも可愛らしいとは言えない制服だった上に、柔道選手だった多香子は男子も顔負けの短髪に銀縁の眼鏡、大柄な身体という、今で言う非モテ路線のど真ん中を突っ走っていた。彼女にとってチャラチャラした外見の女子高イコール馬鹿という図式は、コーラを飲んだらゲップが出るのと同じくらい当然のことなのだ。

「桐島沙耶香の最終学歴はミニスカ女子高で間違いないのか？」

「同期のお姑さん情報によればそうみたいね。高校を出てからは近所のコンビニでバイトしてたという話があるわ」

「医療系の専門学校に通っていたとかいう話は？」

「戸籍謄本にはそこまで載ってないから分からないわ。そうそう、同期が桐島沙耶香の高校の卒業アルバムも手に入れてくれてるの。十五年前のものだから役に立つかどうか分からないけど、メールで送るわね」

「そうしてくれ」

通話が切れてすぐにメールが届いた。添付ファイルは携帯電話のカメラで接写した若い女のバストショットだった。俺は可能な限りで拡大してそれに見入った。

クラスに一人は必ずいる優等生タイプ。黒髪はきつちりとした三つ編み、銀縁眼鏡の奥の腫れぼったい目許、鼻先がちよつと上を向いた細く短い鼻梁、典型的なおちよぼ口。顔全体や首回りはほっそりしていて、お世辞にも発育が良さそうな感じには見えない。

無論、昨今の整形手術の技術は中年男の想像を遥かに超えたところへ達している。このどちらかと言えば貧相な顔立ちの少女をベテイ・ブープに変えてしまうことも不可能ではないのだろう。彼女と彼女の家族を襲った不幸を鑑みても、姿形を変えて過去を消し去りたいと思っても不思議はないのかもしれない。

だが、それを差し引いても、写真の中の少女と俺が見た桐島沙耶香が同一人物とは思えなかった。

薄い靄のようにぼんやりとしていた疑問が急速に輪郭を持ち始めていた。

高田泰明と桐島沙耶香。二人に共通するのは熊谷幹夫と浅からぬ繋がりを持っていること。そして、赤の他人になりすまして生活していること。単に名前を偽るだけでなく戸籍まで手に入れて。

そのうちの一人の正体が浦辺康利だったからと言って、もう一人の正体を原岡香織と断定するのは早計の誹りを免れないだろう。しかし、疑うに足ることに間違いはない。調べる価値は充分にある。

それと同時に、まったく別の事柄がみせた奇妙な一致が、なかなか治らない指先の逆剥けのように俺を苛立たせていた。浦辺殺害に使われたナイフを買った若い女。浦辺が殺害された夜に奴がアクアに連れてきた女。どちらにも共通しているのは背が高くて、見ようによつては高校生にも見えること。

俺の知る中で該当者は一人しかいない。榊原真奈だ。

無論、これも関係があると決めつける訳にはいかない。浦辺と真奈を繋ぐ証拠は何もないし、背が高くて大人びている女子高生は何も真奈の専売特許ではない。だが、単なる偶然と捨て置くことも出来なかった。

それらはまるでまるつきりピースが足りていないジグソーパズルのようだった。まったく違うタッチで描かれた絵柄が同じ枠の中に

ポツンと浮いている。

何処から手をつけるべきか　すっかりぬるくなつたエスプレッソを啜りながら考えを巡らせていると、モニタの中に動きがあった。CCDは二階の外廊下の突き当たりに積み上げてあつた荷物の中に潜ませてあつた。浦辺の二〇六号室は二階の一番奥なので、来訪者はカメラに向かつて歩いてくる形になる。顔をしっかりと捉えらるるアングルにセットするのは難儀だったが、怪しまれないように急いでやった割には大きなズレはなかつた。

現れたのは顔の半分が隠れるような大きなサングラスをかけた女だつた。

茶色がかつたサラサラのショートカットにツンと立つた小さな鼻先。俯き加減で口を真一文字に結んでいて、機嫌か、あるいは具合が悪そうに見える。控えめにフリルのついたワインレッドのブラウス、ベージュのジャケットを手に持ち、同じ色の膝丈のタイトスカート。グレーのストッキングに包まれた脚はなかなかの形をしていた。足元はよく見えなかつたが高いヒールを履いている感じではない。目安になるようにあらかじめ映っておいた自分との比較では、身長は一六〇センチ台後半から一七〇センチといったところだつた。「……………ん？」

何かが俺の勘に障つた。

女は部屋の前で肩に提げたトートバッグを下ろすと、中からキーケースを取り出し、淀みのない慣れた仕種で二〇六号室の鍵を開けた。周囲を用心深く睥睨しながら新聞受けの朝刊を掴み取つて、必要最小限しかドアを開けずに中に身体を滑り込ませた。

俺は映像を巻き戻して、感じた違和感の正体を探つた。

答えはすぐに出た。歩き方だ。

性別を偽つても、男女の歩き方には骨格の関係で大きな違いが出る。具体的には男は歩くときは肩が動き、女は腰が動くというものだ。女のそれを大袈裟にやるといわゆるモンロー・ウォークというやつになる。多少、意図的に腰を振っているフシはあつたものの、

現れた人物の歩き方は間違いなく男のそれだった。

俺はZを降りてアパートに向かった。路地を歩くと結構な大回りを強いられるところだが、他所様の敷地をショートカットすれば三〇秒で到着できることは確認済みだった。

さすがに早朝からヤミ金の取り立て屋に見えるのは拙いだろうというところで、俺は手持ちの中で一番地味なダークブラウンのスーツで身を固めていた。念の為にウエリントンの伊達眼鏡も用意していたが、ルームミラーで見たらメタボ検診に引っ掛かったクラーケ・ケントのようだったので、熟慮の末、胸ポケットに押し込むことにした。使い込んだビジネスバッグを手に持ち、CCDからの映像を映すモニタを小脇に抱える。形が似ているので遠目にはタブレット端末を持っていているように見えるだろう。一昔前はこの手のものをどう偽装するかは頭の悩ませどころだった。いい時代になったものだ。

二〇六号室から一番死角になるところ、すなわち、階下の管理入室の前で俺はターゲットが下りてくるのを待った。朝から真面目に仕事をするようには見えなかったので顔を出したりしないだろうというのは主な理由だが、出てきたならそれはそれでもよかった。管理入室を訪れた不動産屋を装うのに不都合はないからだ。

女 男が部屋を出てきたのはおよそ一〇分後のことだった。

部屋の中で外していたサングラスを掛け忘れていて、ターゲットの横顔が見えた。長い睫毛と切れ長の目許。件の韓流スターに似ているかどうかは意見の分かれるところだが、全体的に顔の起伏に欠けるものの、それが却って大陸系の凛々しい雰囲気を作り出しているという点では似ている部類に入るだろう。

俺は持ち出したSDカードからプリントした画像を確認した。凌辱されて苦悶に歪んでいることとメイクの有無を差し引いても、二人が同一人物であることは間違いなかった。

男はひどく硬い表情でサングラスを掛けた。開けるときと違ってぞんざいな手つきで鍵を閉じると、少し荒々しい足音を立てながら降りてきた。

こちらは見ずにそのまま路地を歩き出したので、俺は尾行を開始した。

ごく大雑把に分けて、尾行には二種類のやり方がある。相手に気付かれないようにやるか、公然とやるかだ。

前者は一般的な尾行で、後者は尾行対象が自分に監視がついていることを知っていたり、あるいは監視されていることを知らしめて圧力をかける場合に用いられる。実は昨夜のこともあって、桑原が俺に似たような監視をつけるのではと思っていただけだが、その様子はなかった。俺の居所は知れていて、必要ならいつでも呼び出していたぶることが出来るからだ。

後者でやつてもそれほど差し障りはない。もし、相手が車で来ていたならば乗り込む前に声を掛けるつもりだったからだ。ただ、その前に出来るだけの情報を集めておけるのはチャンスと言えるだろう。身元くらいは確認しておきたいところだ。

ターゲットは住吉通りまで歩くと道路を渡り、六本松経由で別府・荒江方面へ向かう路線バスに乗った。

俺も何食わぬ顔で同じバスに乗り込んだ。郊外へ向かうバスの車内は空いていて、俺はターゲットの真後ろの席に座った。ここまではよくある光景なので特に警戒された感じはなかった。ターゲットはバスに乗るときに“nimoca”という西鉄が発行する非接触式ICカードを使ったが、だから日常的にバスを使っているとは限らない。滅多に乗らない俺でも電子マネー代わりに持っているくらいだからだ。

バスが走り出すとターゲットはラインストーンでデコレーションされた携帯電話を開いた。俺は不自然にならない最大のところまで背伸びをして画面を覗いた。

待ち受け画像はそのものずばりの高田泰明　浦辺康利の顔写真だった。

恋人同士の場合、得てしてツーショットのものを使うことが多いような気がするが、隣にターゲット本人の姿はなかった。よく見る

と画面の中の浦辺の視線はレンズから外れていたし、特にカメラに意識を向けている感じでもなかった。ひよつとしたら本人の同意なく撮られたものかもしれない。浦辺の出自を考えれば日常的に写真を撮られることを避けていたとしても不思議はない。

メールチェックを済ませると、ターゲットは携帯電話を閉じて盛大な溜め息をついた。吐息の響きが若干低いことを除けば、外見と性別が違うことを疑わせる様子はまったくなかった。

バスは渡辺通一丁目の交差点を通り過ぎ、西鉄薬院駅の高架下を通り過ぎた。

桜坂下のバス停を通り過ぎたところで、ターゲットが再び携帯電話を手を取った。車内での通話はご遠慮くださいとのアナウンスを無視して電話をかけた。

「もしもし、エルモですけど」

俺は耳を疑った。最近の子供には親の常識を疑いたくなる素っ頓狂な名前を散見するが、ターゲットはどう見ても二〇代の半ばは過ぎていた。無論、それ以前にも我が子に奇妙な名前をつけたがる親はいたが。

しかし、会話の内容に聞き耳を立てるうちに思い違いであることが分かってきた。電話は勤め先への「体調が優れないから今日も休む」という内容の連絡だった。エルモは源氏名だろう。

スピーカーの向こうからは明らかなおカマ声で体調を心配する声がかしていた。福岡にも全国的に有名な店から地元の穴場まで大小のおカマバーがある。もし、ターゲットを見失ったらそれらを風潰しにあたる羽目になることを考えると、心地よいバスの振動に弛緩しかけていた神経に緊張が戻ってきた。

ターゲットは六本松でバスを降りた。俺はカードを出すのに手間どった振りです少時間稼いでからバスを降りた。その間にエルモは横断歩道を渡って路地の方に入っていった。後一つ先のバス停で降りれば俺のマンションの近くだったが、彼女が向かったのは反対方面の大濠公園に向かう別の道だった。

俺は一〇メートルほど離れて後に続いた。

この辺りはかつて、この地に九州大学の六本松キャンパスがあった頃は学生街として賑わっていた地域だ。今でも安い居酒屋や若者向けの店が名残りのように店を構えているし、すぐ近くには大濠高校という男子校や小中学校もあるのだが、やはり、当時の喧騒には及ばない。

それでも未だにアパートは多く、土曜の午前中だというのに人通りはそれなりにあった。俺にとっては好都合だった。タブレットをビジネスバッグに放り込み、ジャケットを手に持ってウエリントンを掛けた。少しでも印象を変えておけば、後は直接目でもあわせない限りはそうそう印象に残ることもない。

エルモは学生向けの安アパートが立ち並ぶ一画を通り抜けて、比較的高層なマンションが立ち並ぶ一画に差し掛かった。途中で何度か携帯電話に視線を落として何かを確認しているようだったが、背後の俺に気づいている様子はなかった。普通の人間は誰かに尾行されていることなど考慮しないものなのだ。

このまま自宅に向かってくれると身元の確認が出来るのだが、などと考えていると、エルモは道路沿いのマンションの一階にある小さな花屋に入ってしまった。

出迎えた四〇歳くらいの小綺麗な女が親しげに声をかけて、エルモもそれまでよりも幾分明るい表情でそれに応えた。俺は花屋の前を通り過ぎてから道路を渡って戻り、訪問先を探している不動産屋の振りをしながらターゲットを監視した。

二人は馴染みの間柄のようで、鉢植えを眺めながら親しげに会話を交わっていた。やがて、エルモは一際大きなガーベラの鉢植えを仔細に眺めて満足そうになつてから、伝票らしきものに書き込みをし始めた。その間にオーナーの女がレジの上の戸棚に手を伸ばし、茶色の封筒を引っ張り出した。

二人の会話は道向かいまでは聞こえなかった。しかし、オーナーが手にした封筒をどうするのかと訊いて、エルモが少し逡巡してか

ら受け取ることにしたのは分かった。見える範囲で言えば宛て名の類はなく中身はそれなりの厚さ、封筒自体は使い込んだ感じで真新しいものではなかった。パツと見た感じはOL風のエルモが持つと何の違和感もなかった。

それから数分話してエルモは花屋を後にした。そのまま、道路を俺の方に渡ってきたので、一瞬、尾行に気づかれたのかと思った。

いずれ、どこかのタイミングでこの女 いや、男とは直接対峙する必要がある。それが今でも構わない。そう思ってエルモに視線を戻した、その瞬間のことだった。

車の接近にまったく気づかなかったのは、そこが元々車の往来が多いというだけが理由ではなかった。エルモに襲い掛かった黒い車体が発していたのはエンジン音とは異なる唸り ハイブリッドエンジンのモーター音。

ハイブリッドカーがモーターだけの走行時、静粛性が高すぎて歩行者が車の接近に気づかないケースは少なくないという。日本車叩きの側面はあるにしても、アメリカでは最低騒音の導入の話もあったそうだ。

(悪用すれば人を轢き殺すときに使えるんじゃないか?)

酔って俺にそう言ったのは猪俣だった。自分がやると言うのではなく、逆恨みした多重債務者に命を狙われる可能性について話しているときにそう言ったのだ。

ドンッ!

鈍く重い音がして、エルモの細い身体が糸が切れた操り人形のように不恰好に舞った。

獲物を視界に捉えてからはアクセル全開だったに違いなく、ボンネットで一度跳ねた身体がフロントガラスにぶつかり、運転席側に

ずれながら道路に振り落とされるまでプリウスのスピードが鈍った様子はなかった。むしろ、さらにスピードをあげつつあった。

いきなりのことで、俺は不覚にも身動きが取れなかった。目の前で起きたことの意味を理解できるまでのほんの少しの時間、俺の意識はまるでエルモが俺に手渡したかのように滑ってきた茶封筒に支配されていた。

とっさに走り去るプリウスのナンバープレートを見たのは警官として過ごした日々の訓練の賜物だろう。だが、プラスチックのカバーが掛けられていてナンバーは読み取れなかった。窓にはシールドが貼ってあって、角を曲がるときに車内を見ることが出来なかった。事故ではない。すべての鍵がこの封筒をであることを俺は理解した。そして、走り去ったプリウスの連中の仲間がすぐ近くにいるであろうことも。

とっさに周囲を見回した。いつの間にか出来た人垣。「救急車を呼べ！」と叫ぶ声。

ざわめく群衆の中に悲惨な事故を目の当たりにしたショックでもなく、他人の不幸と自分の娯楽の区別がつかない野次馬の眼差しでもない異質な光を湛えた眼を捜した。ひくひくと痙攣する被害者の身体やねじ曲がった手足ではなく、別の何かを捜す眼差しを。

いた。ショッキングな光景から頑なに目を逸らしながらこの場を離れようとする男が。目の端に俺と俺が手にした封筒を捉えながら、しかし、決して俺を正面から見ようとする。中肉中背、色白、黒縁の度の強そうな眼鏡、ニューヨーク・ヤンキースのキャップ、不潔そうな長髪、よれよれのモスグリーンのパーカー、青系のネルシャツ、ケミカルウォッシュのデニム。リュックサックを背負ってご丁寧に革の指抜きの手袋までしている。

福岡では昼間の北天神でしか見ない格好だ。変装であることは賭けても良かった。

歩み寄って声をかけたい衝動に駆られた。しかし、俺は小さく封筒をかざして見せただけです。脇の路地裏に駆け込んだ。他に仲間

がないとは限らない。

路地裏を駆け抜けて樋井川を渡り、城南区役所の前でタクシーを拾った。一度、七隈の方に行ってから都市高速を使って天神まで戻ってくれと言うと運転手は訝しそうな顔をしたが、福沢諭吉を先払いすると不二家のマスコットのようになんまりした顔で車をスタートさせた。

二人目だ、と俺の頭の中で誰かが言った。

浦辺康利　高田泰明と言うべきか　に連なる人間たち。奴の死後、高田の使いっ走りであり、ある意味では隠れ蓑だった井上徹が瀕死の重傷を負わされた。そして今、高田の恋人だったであろうエルモが白昼堂々、まるで見せしめのように無惨に撥ね飛ばされた。その理由は何か。

はつきりしたことは何も言えない。だが、手元にある封筒がその一端に繋がっていることは間違いない。エルモの命を狙っているだけならあんなところで凶行に及ぶ必要はないからだ。誰にも気づかれずにフツと姿を消させるチャンスは幾らでもあった。

エルモの命を狙った輩は、まぎれもなく彼女が預けていた封筒を手にするのを待っていた。俺の尾行中にご同輩の気配がなかった以上、あの花屋はマークされていたのだろう。そして、エルモはまんまと罠の中に足を踏み入れたのだ。

別のところで声を掛けていれば、悲劇は避けられたのだろうか
唐突にそんな疑問が脳裏をよぎった。

確かなことは何も言えなかった。

誰に追われているかというより、誰に目撃されているかが分からないので、俺は一度、大名の事務所に戻った。自宅に戻れない場合を考えて、常に数着の着替えを置いてあるのだ。

その中から俺はポロシャツとパーカー、チノパンツという全身ユニクロのコーデイネイトに着替えた。いつもの取立屋ルックもあったが、スーツ自体を着ていたくなかったのだ。スリクソンのキャップを被って擬装用に買い揃えたゴルフバッグを持てば、すっかり休日ゴルフアールに化けられた。残念ながら俺はゴルフの才能に恵まれておらず、 HALF で二〇〇という驚異的なスコアを叩いたことすらあるのだが、そんなことは見ただけでは分からない。

それから知り合いの個人タクシーを呼んだ。

「何処にいる？」

「北天神。いつもの寺の前で涼んでいる」

「サボっているの間違いだろ」

「俺は個人事業主だから、サボタージユってのは当て嵌まらないぜ」
「御託はいい。すぐに来てくれ。面倒なことになった」

「別れたカミさんが慰謝料の不払いを理由に殺し屋を送り込んできたのか？」

「だったらまだいいんだがな。コロシの現場を目撃しちまった。すぐに身元が割れるとは思えないが、しばらくの間、事務所に立ち寄

りたくない」

「おやおや」

俺は電話を切って、階下のセレクトショップに電話を掛けた。

「リュウさん、どうしたんすか？」

「しばらく留守にする。ドアに張り紙をしておくんで、誰か来たら
応対しておいてくれ」

「危ない人が来るんすか？」

「そういう輩は、俺が留守だと分かったら誰にも見つからないように消えるから心配しないでいい。普通の客だけ、もし、相手が希望したときは連絡先を控えておいてくれ。そうでないときは適当に謝っておいてくれればいい」

「了解。パソコンと金庫は？」

「俺がでかけたら、すぐに動かしておいてくれ」

「いつもの場所に？」

「ああ、いつもの場所に」

誰かが俺の事務所に侵入した場合、パソコンの中身は調べられると考えると間違いない。筐体そのものは貰い物なので未練はないが、データや履歴を調べられるのは面白くない。ロックを掛けておいたところで持ち出されたらアウトだ。

ちなみに　いつもの場所　とは俺と店主の符丁で、彼のもう一つの商売であるヒップホップのトラックメイカーの作業で使うスタジオのことだ。いつもの言いながら、俺は一度も足を踏み入れたことはない。

店主お勧めのレザージャケットとデニムを必ず買うことを約束して電話を切った。それから貼り紙を用意し、おそらくこの事務所で一番の値打ちのあるアンディー・ウォーホルのリトグラフと一番価値がない探偵業の届出証を抱き合わせてロッカーの上に投げ上げて、滅多に使わない非常階段からビルを出た。

この階段は隣に建った立体駐車場のせいで道路に面したところが窄まっていて、いざというときの脱出経路としては甚だ不安が残る

のだが、非常口から立体駐車場の建物にこっそり忍び込めるというメリットがある。運転手の朽木はそのことを知っているので、俺が事務所に呼ぶと最初から駐車場の出口で待っている。

俺の姿を見つけると、お馴染みの行灯とメーターがなければ絶対にタクシーとは思われないブリティッシュグリーン色のミニ・クーパースが短いクラクションを鳴らした。

「遅えぞ」

「悪い、準備に手間取った」

助手席に乗り込んで、俺は早良署交通課の橋の携帯電話を鳴らした。

「……ふあい」

忘れていた。この男の午前中は普通の人間の早朝だった。

「知らせておきたいことがあるが、今でもいいか。それとも後にした方がいいか？」

「あんたがそういう言い方をするってことは、聞いておいた方が良さそうだね。どうしたんだい？」

「六本松、ひよっとしたら住所は大濠になるかもしれないが、ついさつき、轢き逃げ事故が起こった。加害車両は旧型のプリウス、ボディカラーは黒。窓にシールドが貼ってあって、残念ながら載っていた連中の顔は見えない」

「そこ、ウチの管轄じゃないけどね。ナンバーは？」

「そいつも読めなかった」

「何やってんの？」

橋の声に露骨な嘲りが混じった。悔しいが何も言い返せない。

「それで？」

「轢き逃げじゃない。明らかな殺人だ」

「根拠は？」

「現場検証で分かると思うが、ブレーキ痕はまったく残っていない。それどころか、被害者に向かって加速している」

「被害者は何者？」

「分らん。実はそれを教えて欲しくておまえに電話したんだ。情報料は言い値で払う」

「珍しいこともあるもんだね。明日あたり、台風が来るんじゃないの？」

この男に足元を見られるのは嫌だったが、エルモの身元を知るには橋に調べさせるのが一番確実で手っ取り早い。

「分かったらメールするよ。てか、あんたはどうして現場に居合わせたの？」

「偶然だ」

「ふうん」

明らかに信用していない響きだったが、気にはしなかった。お互いに職務上話せないラインの存在は理解している筈だった。橋はマイクにこれ見よがしの欠伸を送り込んでから電話を切った。

「ややこしいことになってるようだな」

朽木はニヒルな笑いを見せた。白いワイシャツに濃紺のヴェストとストラックスという運転手のお仕着せも、あみだに被った帽子と寺島進によく似たヤクザっぽい笑みの前ではまったく効果がない。

「まあね。いつものところによってくれ」

「あいよ」

ミニは狭い裏路地とは思えないロケットスタートで走り出した。

熊谷幹夫の隠れ家を探す仕事をしていながら、実は俺にも他人にあまり知らせていない隠れ家がある。と言っても、ちゃんと福岡市の固定資産台帳に俺の名義で載っているの、調べようと思えば調べられるのだが。

須崎埠頭の西側に広がる福岡市中央卸売市場、通称、長浜市場の西側に小さく半島状にせり出した土地がある。福岡市の花見の名所である西公園や荒津埠頭、博多湾への出口にあたる部分にはヨット

や近海に漁に出る漁船の為の港、規模が小さいが造船区画などがあり、その頭上を千鳥橋ジャンクションで分岐した都市高速道路が海に沿って走っている。

その橋脚の袂の一带にも民家があり、俺の実家もその近くにあった。母親が世を去るまでは人が住んでいたが今は空き家になっていて、すぐ近くにもう一軒持っている借家に住む老婆に、賃料をまける代わりに維持管理を頼んで辛うじて廃墟と化すのを防いでいる。誰かに貸すか、いつそのこと売ってしまえばいいのだろうか、母親の終の住家を手放すのは忍びないというセンチメンタルな理由で今に至っている。

偏屈で扱いは難しいが仕事は手を抜かない主義の隣人のおかげで久しぶりに入った実家は快適な状態に維持されていた。

俺は居間の窓を開け放って風を入れて、生前の母親のお気に入りだったカウチを窓際に引き寄せた。俺には幾分小さいが身体が収まらないほどではない。小柄だった母親はよくこのカウチとクッションに埋もれて本を読んでいた。

隣家を含めて不動産などの財産を持ったのはずいぶん後の話で、俺が幼少の頃はお世辞にも裕福とは言えない母子家庭だった。そんな我が家に好きな本を買うような贅沢が許される筈もなく、母親はよく俺の手を引いて図書館に通っていた。ミステリから純文学、果ては哲学書まで何でも読む乱読家で、その血筋は今の俺に間違いなく引き継がれている。

そうとは言っても、最近の俺は本屋に行っても手に取るだけで買いたい求めることは減った。買いたくなる本がないというよりは一度読んだらそれで十分そうだからというのが理由だ。同じ本を何度も読む習性も母親譲りで、繰り返し読んで読めない本は駄作というのが俺の本に対する考え方だ。

晩年の母親が読んでいたのは吉川英治の「宮本武蔵」で、何故かそれを原作にした井上雄彦の漫画も全巻揃えてある。彼女の死後も新刊が出ると買い求め、仏壇の横の本棚に収めているので最新刊ま

であるのだ。

俺はその一冊を手に取り、パラパラとページを繰った。殺伐とした剣豪漫画とはいえ、のんびりと漫画を読む時間と秋の日差し、潮風の匂いは心を和ませるに十分だった。

だが、つい先ほどの惨劇を思い出すとそんな気分はあっさりと吹き飛んでしまった。俺は漫画本を元に戻して一時の逃避から現実に戻ることにした。

茶封筒の中身はA4の用紙の綴りと一枚のCD-R、一枚のMOディスクだった。

MOディスクは最近でこそ見かけなくなったが、リライタブルのメディアとしては抜群の安定感と保存性を持つていて、今でも官公庁や病院などでは記録の保管に用いられている。ディスクそのものが剥き出しのCD-Rなどと違ってプラスチックのハードケースに収められているのも信頼性の高さの一つだ。尤もドライブを所有していない人間は少なく、俺の知り合いでコンピュータに詳しくそうな面々でも持っているかどうかは怪しかった。どうしても必要ならパーツ屋で中古のドライブを手に入れなくてはなるまい。

CD-Rには乱雑な字で“BU”とあった。順当に考えれば“Backup”だろう。何処でも見られないMOの代わりにコピーが用意されていた可能性はあった。どちらにもラベルの類は貼られておらず、中身を類推することは出来なかった。

綴りは病院の電子カルテをプリントアウトしたものだだった。

カルテに書かれていることの大半は門外漢の俺には理解できない内容だった。拾い読みして理解出来たのは患者の名前は山口和弘、年齢は五十九歳。病名は急性腹膜炎。二〇〇九年二月十二日の深夜自宅で急激な腹痛を訴えて、病院に搬送されて処置を受けている。だが、緊急の開腹手術の際にショック症状を起こして死亡。医師法で言うところの異常死に当たるかどうかは書かれておらず不明だが、カルテの備考欄には警察に届けがなされて保全手続きがとられたことが記載されていた。担当医の名前は村松俊二。

カルテを見る人間にとっては既知のことだからか、病院の名前などはカルテには書かれていなかった。俺がそれが判別できたのは最終ページにあった院長所見の欄に“榊原誠一”という署名があったからだ。聖会総合病院の院長であり、榊原真奈の父親である男の名前だ。

これが何の意味を持つのか。説明してくれたのは綴りの最後のページだった。毎日新聞の電子版のプリントアウトだ。

記事の日付は二〇〇九年四月十六日。社会面を表す「社会」という記号があつて、その下に「西区の総合病院 患者の死亡に人為的ミスを認める 担当医は三月に死亡」という見出しがあつた。

福岡市の医療法人敬聖会（榊原誠一院長）は十五日、同法人が経営する敬聖会早良病院に緊急搬送された五十九歳の男性患者が手術中に死亡した件について、担当医の人為的なミスを認め、患者の遺族に謝罪と補償を申し入れた。

敬聖会の広報担当者によると、担当医が投薬を指示するにあたって検査結果の数値を見誤り、通常の数倍の量を技師に指示した。患者はアナフィラキシーショックを起こして昏睡状態に陥り、三時間後に死亡した。

福岡県警は遺族の申し立てを受けて業務上過失致死での立件を視野に調査を進めていたが、三月に担当医が心筋梗塞で死亡している為、立件を見送っている。

尚、担当医は同院の副院長だったが、医療機器メーカーとの癒着で病院に損害を与えた疑いがあるとして、敬聖会が背任罪での告訴を検討していたことも分かっている。

榊原院長は記者会見で「素行、及び医師としての能力に疑問のある人物を責任者に据えていたことは、管理者である自分の責任。大変、申し訳なかった」と述べている。

責任は認める。だが、責任者はすでにこの世にない。

あり得ないことではない。自らのミスで患者を死なせたことに苦悩して、その結果として心臓にアクシデントを迎えることもないとは言えない。だが、一般的な見方をすれば“タイミングが良すぎないか？”ということになるだろう。

スマートフォンの画面でも敬聖会のホームページを見ることは出来るが、どのみち、CD-Rの中身を見るのに普通のパソコンが必要だった。

俺は外に出て、隣家の縁側に近寄った。目当ての部屋は昼間だというのにしっかりとカーテンが閉じられていたが、それは部屋の主が在宅の証拠だった。留守にすると彼女の祖母が勝手に足を踏み入れて、窓を思いつきり開け放ってしまうからだ。

寝ている可能性もあるので控えめに窓ガラスをノックしてみた。少し時間を置いてから、カーテンが目の幅程度に開かれた。俺の姿を認めると、窓越しに分かるほど憤然とした雰囲気を漂わせながら一番端のサッシを指差した。

そのサッシだけ鍵が掛かっていなかった。俺は縁側から室内に入った。

「もつ……原稿の追い込みで寝不足なんだから、変な時間に来ないでよ」

「悪かったな」

部屋の主はベッドの上で大きな枕を抱いて寝ていた。ブランケットは足元に蹴り落とされていて、あられない寝姿が丸見えだった。尤もあられないのは寝姿だけではなかった。丈が短くて腹が丸出しのタンクトップにローライズのショートパンツ。下着はつけておらず、豊かな胸元には悩ましい突起が浮き出している。アッシュブラウンの緩やかに波打つ長い髪、くつきりとした二重瞼と瞬きしたら風が起きそうな長い睫毛、滅多に日光を浴びていないに違いない白い肌。学生時代は陸上の短距離選手だったそうで、脚は引き締

まった美しいラインを維持している。

どう考えても単なる知り合いの四〇男に見せていい姿ではない。だが、恵美里がそんなことを気にする筈はなかった。彼女はBと略称される美少年や美青年がくんずほぐれつに絡まり合っている漫画の売れっ子作家で、そういう連中の常として三次元の男には興味がないのだ。当の本人は三次元の男にかなりモテそうなるルックスなので勿体ないと俺は思うのだが、需要と供給は必ずしも一致しないということなのだろう。

「で、ナニ？」

「パソコンを貸してくれ。使っていないやつがあれば更に良い」

「んなのないよ。アレ使って」

面倒くさそうに示されたのは部屋の隅っこのラックに据えられた最新型のマックプロだった。服に金を惜しんでも執筆用具には惜しまない主義らしく、恵美里のマックは常にその時代の最先端のスペックを誇っている。俺としては美少年や美青年がくんずほぐれつに絡まり合っている漫画の原稿料でその費用が捻出できるという事実には驚くしかない。

電源を入れてCD-Rをセットした。ウィンドウズとの操作性の違いに四苦八苦しなながら、収められていた画像ファイルを開くことに成功した。

「うっわ、ナニこれ？」

俺の背後に近寄ってきた恵美里が言った。こいつは俺をぬいぐるみのクマか何かだと思っっているので平気で密着してくる。今も背中に二つのたわわな脂肪の塊の感触がする。

「何だと思う？」

「……おっさんの死体」

「正解」

二〇インチのディスプレイいっぱいに表示されたのは表情の削げ落ちた壮年の男のバストショットだった。

血色はすでに生命を保つには足りておらず、肌は青白かった。死

後硬直の期間も過ぎているようで、表情筋は完全に力を失っている。こうなると不思議なもので、生前は人によって大きく違う筈の顔立ちという奴がそれほど違って見えなくなる。この男も丸顔で押し出しの強そうな感じと推測できる程度で、特徴はむしろ、見事なバーコード状に禿げ上がった額や寝技系の格闘技をやっていた証拠の耳たぶの変形の方にあつた。

「コレ、誰？」

「さてね。おっと、こいつは」

「ナニ？」

俺は恵美里に画像をズームする方法を訊いた。恵美里は返事の代わりに俺の肩越しにマウスに手を伸ばした。おかげで脂肪の塊が肩にずしりと押し掛かった。

「えっと、どの辺？」

「喉の辺りだ。よく見ろ、首をぐるりと回る青緑色の線があるだろう」

「何なの、コレ？」

「索状痕。首を紐やコードなどで締められた痕だ。溝になつてるから索溝とも言つ」

「自殺したの？」

「違うな。首吊りの場合、線は首に対して斜めに入る。紐が身体の重さに引つ張られるからな。こいつはほぼ水平に入ってる」

「殺されたってこと？」

「おそらく」

他の写真も見た。全部で十六枚あり、同一の遺体を様々な角度から撮影したものだつた。身長は一六五センチ程度、小太りでガ二股左の膝に手術痕がある。靱帯か半月板を傷めたことがあるのだろう。ご丁寧に裏返して背中側も撮影してあつた。腰の辺りに広く鬱血の痕があるのは、生前に尻もちをつくなどして腰を強打したことを示している。いわゆる生活反応という代物で、これによって死体の損傷が生前のものか、死後につけられたものかを判別することができ

る。

「……変だな」

「どしたの？」

最初一枚で自分の守備範囲でないことが分かったせいか、恵美里は俺の背中を離れていた。片手に缶コーヒー、片手にヴァージニア・スリム。年齢不詳な顔立ちと蓮つ葉な仕草が奇妙なバランスを作り出している。

ようやく自分の恰好があまりにだらしないことに気付いたようで、恵美里は胸に乱暴な字で FUR NAECHSTES MAL OHNE ITALIEN と書かれたブルーのTシャツとデニムに着替えていた。問題はその着替えを俺の真後ろでやったことだが、モニタの反射を介さなくても俺は真つ正面からこいつの裸を見たことがあるので、今さら慌てるほどのこともない。どうでもいいが、Tシャツのメッセージは 次はイタリア抜きでやるうぜ という意味だ。ドイツの酔っ払いが日本人に投げつける定番の不謹慎ジョークだというのはつい最近知った。

「写真の角度に見覚えがあるんだ。この撮り方は司法解剖の前に死体の状況を一通り記録しておくときのやり方だ」

「そうなの？」

死体の状態によって扱いは異なるのですべてのケースで同じ方法がとられる訳ではないが、司法解剖にはきちんと定められた手順が存在する。解剖医が死体を切り開く前に死体を撮影して状態を記録するのもその一つだ。

「じゃあ、この写真は司法解剖された人のつてこと？」

「だいたいだが、どうもそうじゃないようだ。それなりの規模の医療関係の施設らしいが、俺の記憶にある限りでは福岡県内で司法解剖を請け負っている医大の何処でもない」

「どういうこと？」

「監察医希望の誰かが死体写真の撮り方の予行演習をしたのかもな」
そんな筈は勿論ない。写っているのが病死か事故死した人間のも

のならその可能性もまったく否定はできないが、写っているのは絞殺死体だ。

専門の人間なら他に何かを見つけ出せるのかもしれないが、門外漢の俺に分かることはそれ以上はなかった。俺はファイルを閉じて、敬聖会のホームページにアクセスした。

院長自ら認めたとはいえ不祥事を進んで喧伝する筈もなく、村松医師による医療過誤に関する記述はホームページの何処にもなかった。念の為にニュースサイトも漁ってみたが、事件そのものが一年以上も前の話で、それらしきニュースはないか、ヒットしてもアクセス先では期限切れで削除されたりしていた。

「十二搜してんの？」

「西区の病院で起きた医療過誤事件。手術中に患者に薬を適正量の何倍かぶち込んで死なせてしまったらしいんだが、当の執刀医が病院が責任を認める直前に心臓麻痺で死んでるんだ。どうもタイミングが良すぎる気がしてな」

「医者の名前が分かってるんなら、それで検索してみれば？」

「無名の個人だぞ。新聞記事でも名前は伏せられてる」

「かもしれないけど、フェイスブックとかやってたら意外とググったときに検索に引っ掛かったりするんのよ。あたし、それが嫌で退会したんだから」

「へえ」

インターネット上でのコミュニケーションに興味がないので進んで自分ではやらない俺だが、失踪人がチェックされていると思わずにアクセスしていることがたまにある、という理由でメジャーなソーシャルネットワークにはそれぞれアカウントを持っている。プロフィールはすべて架空だが。

それとはかく、やってみる価値はありそうだった。俺は検索窓に“村松俊二”と打った。

「村松俊二さんのフェイスブック、だつてよ？」

「……そら怖ろしい時代だな」

俺は自分のアカウントでフェイスブックにアクセスし、当該ユーザーのページを閲覧した。

村松俊二、居住地は福岡県福岡市、未婚、血液型はA型、出身地は福岡県直方市、誕生日は一九五九年一月一日、勤務先は医療法人敬聖会福岡総合病院、救命救急科。友だちが少なかつたのか、あるいは周囲にフェイスブックをやっている人間がいなかったのか、友達に登録されている人間はいない。村松自身も最初期に書き込みをした以外はほぼ放置状態にあつたようだ。

それはどうでも良かった。俺の目を釘づけにしたのはフェイスブックにおいて本名の公開と同様に求められている本人の顔写真だった。

そこに映る村松俊二はついさっきまで見ていた死体写真の男にひどく似ていた。

資料を読みに戻るまでもなく、村松俊二の死因は心筋梗塞だった筈だ。首を絞めて血圧を測る新しいやり方が開発されていない限り、その先はMOに収められているであろう、他の資料をあたる必要があった。

「恵美里、おまえ、MODライブを持っていそうな知り合いはいないか？」

「あかし、持ってるけど」

恵美里は事も無げに言った。

「……そうなのか？」

「昔、まだネット経由で大きな画像データとか送れなかった頃、編集部に原稿送るときに使ってたんだよね。あかし、CD-Rってイマイチ好きになれなくて。再利用も出来ないし」

「ドライブは使えるのか？」

「繋げるの、待っててくれるなら」

是非もなかった。恵美里が部屋の隅に積み上げられた機材類の段ボール箱を漁り始めるのを見てから、俺は実家にMOディスクを取りに戻った。

何となく構図が見え始めていた。

敬聖会病院で医療過誤事件が起きた。記事によれば死因は投薬ミスによるアナフィラキシー・ショックとの事だったが、そこには発

表されていない秘密があるらしい。それを隠蔽する為に口封じとして村松医師は絞殺された。何と言っても現場は病院だ。死亡診断書を偽造するのは容易い。ヤクザが医者を手懐けたがる理由の一つでもある。

それはともかく、そうやって真相は闇に葬られた 筈だった。浦辺康利に嗅ぎつけられるまでは。

勿論、不自然な点も残る。医療過誤を隠蔽しようとしたのならともかく、敬聖会はミスの存在を認めて遺族に謝罪しているし、補償に応じるとも言っている。殺人を犯してまで村松の口封じに走る理由は見当たらない。

だが、現実には村松は殺され、その上で彼に責任を押し付ける形で事態の收拾が図られている。そうする必要がどこにあったのか。

答えは一つしかない。医療ミスを犯したのは村松ではないのだ。

本当の当事者が誰かは定かではない。だが、その人物は敬聖会の経営陣にとってそれだけの事をするに足る重要人物なのだ。そして彼の あるいは彼女の 身代わりを立てるべく、同時期に業者との癒着で首が涼しくなっていた村松に白羽の矢が立てられた。告訴しないことと引き換えに。

ところが、その合意が何らかの形で破られた。

医療過誤の真相もそうだが、何よりも身代わりを引き受けたという事実が村松に経営陣と取引する新たな材料を与える結果となった。村松が約束を反故にしても告訴するなど開き直ったのは想像に難くない。それどころか、更なる要求を突きつけた可能性すらある。

そして、引き際を見誤った脅迫者の常として、村松俊二は殺害された。

今のところは仮説に過ぎないが、大きく外してはいない自信はある。そして、浦辺がこの一件で敬聖会を強請っていたのであれば、MOデイスクの中身は医療過誤事件の真相に迫るものである筈だ。

部屋に戻ると、恵美里はラックの下段に据えられたマックの本体にコードを繋げようと四つん這いで機材と格闘していた。くびれた

腰と大きく張り出した尻のコントラストはそこらのグラビアアイドル程度では太刀打ちできない色香を備えている。

「出来たか？」

「もう少し。 オツケ、入れてみて」

「了解」

俺はMOディスクを卓上のドライブのスリットに挿し込んだ。紛らわしい言動がわざとか、それとも天然でやっているのかは俺には分からない。

CD-Rで学んだ操作法のおかげでMOの中身を見るのは簡単だった。

収録されていたのはPDF形式のファイルが二つ、同じファイル名で見たことのない拡張子がついたファイルが二つ。綴りにも入っていた毎日新聞のネット版の記事、それとは別に当時の新聞記事を書キヤナで取り込んだもの。内容はほとんど変わらない。画像ファイルだけを集めたフォルダもあり、中身は村松の死体を写した十六枚の写真だった。

PDFファイルはそれぞれ 20090212 e-karte

MURAMATSU と 20090212 e-karte

YSAKAKIBARA とあった。村松はともかく、もう片方は何のことかと思っただが、ファイルを開いてみるに分かった。綴りに入っていた山口某の電子カルテと内容はまったく同じで、唯一、担当医の項目だけが 榊原祐輔 になっていたのだ。

医療法人敬聖会を営む榊原夫妻の一人息子。榊原真奈の兄。敬聖会の理事であり、早良区にある旧本院で救急救命に携わっている。

ほぼ同じ内容で担当医だけが違う二通のカルテ。それが指し示すのは唯一つ、カルテのすり替えだ。

電子カルテは真正性の確保が義務付けられているので簡単に改竄は出来ない仕様になっている筈だが、同じ内容のカルテを二通作ることなら出来るだろう。まして、敬聖会は医療ミスの存在そのもの

を争っている訳ではない。仮に裁判になってカルテの提出を求められたとしても、記載内容の是非を問われることはあっても、別の一通の存在を感じられる可能性は限りなく低い。

脳裏に夕べ出会った誠実そうな医師の姿が浮かんだ。医師としての能力を疑うようなところはなかったが、勿論、そんなことは見た目では分からない。ただ、仮に彼がミスをして患者を死なせたとしても、殺人を犯してまで保身に走るタイプには見えなかった。あくまでも俺が受けた印象に過ぎないが。

見たことのない拡張子のファイルは当然のように開くことすら出来なかった。

「何だろね」

「さあな。カルテの元データだと思うが」

「どうして、こんな変な拡張子になってるの？」

「電子カルテには統一の規格が存在しないと聞いている。オリジナルのシステムが使われていれば、不思議なことじゃなかるうな」

「へえ」

恵美里がまた手を伸ばして、そのファイルをテキスト形式で開いた。案の定、数字の羅列を見せられただけだった。専用のシステムを介さなければカルテとして表示することは出来ないのだろう。新たな事実が隠されているというよりは、あくまでもPDFのカルテの真正性を担保する為に添えられたと考えるべきだ。

但し、それが指し示す事実も存在する。カルテの流出に関わったのは現場で端末を扱う人間ではなく、病院の医療情報システムそのものに関わる人間だ。問題はそんな人物と浦辺の繋がりだが、それを指し示す情報はMOには収められていなかった。

浦辺が殺された理由がこの脅迫にあるのなら、被疑者は敬聖会の関係者か、その人物から依頼を受けた人間ということになる。

地方都市に過ぎないこの街にも殺人を請け負うプロは少数だが存在するという。だが、携わったのは闇社会の専門家ではない。あくまでも昼間の顔を持つ連中だ。プロはわざわざ人目や防犯カメラの

あるラブホテルで事に及んだりしない。やるならまるでフツと消えてしまったように誰にも気づかれずに消すか、あるいは事故に見せかける。

そういう意味では、エルモを殺した連中もプロとは言えない。MOを収めた封筒を回収して、尚且つ、彼女を黙らせる方法は幾らでもあった筈だ。誰かに対する見せしめの意図があったとしてもやり方が雑過ぎる。

容疑者リストの筆頭に浮かぶのは、今や事務長という要職に収まっている元公安課の警官だ。現場に残る指紋の主と彼の秘書が同一人物であれば、容疑は一層濃いものになる。

だが、熊谷幹夫は浦辺康利の飼い主でもあった可能性が高い。敬聖会における熊谷の本当の職務は不明だが、脅迫の被害者側の一員であり、同時に加害者の黒幕であるという立場は容易に解せるものではなかった。

いずれにしても、このMOは事件の構図を暴く為に不可欠なものだった。それはつまり、俺の身边には置いておけないことを意味する。

「恵美里、おまえにこのMOを預けても構わないか？」

「へっ？」

恵美里は急に素っ頓狂な声をあげた。

「どうしてあたし？」

「他に適当な相手が見つからないからさ。おまえなら俺との繋がり疑われることはない」

「繋がったことあるじゃん。一回だけ」

「そういう意味じゃない」

恵美里が男嫌い　三次元の男が嫌いなだけでレズではないのだそうだが　になったのには、ちよつと複雑な事情がある。本人も恐怖心を克服しようとしていた時期があつて、そんなときに一度だけ、俺は彼女を抱いたことがある。残念ながら彼女が出した結論は「おかげであんまり怖くなくなっただけ、そんなに無理して関わら

なくてもいい」というものだったが。

「リュウさんの頼みなら、いいよ」

「悪いな」

「いいって言ってるじゃん」

恵美里は目を細めてニツコリと笑った。俺は俺の身に万が一のことがあつたらMOデイスクを県警捜査一課の桑原という警部に渡すように言った。恵美里は目を丸くした。

「そんなにヤバいの、コレ？」

「これだけが原因とは言い切れないが、すでに四人が死んでいる。

一人はさっきのオツサンだ」

「あんまり絵の参考にはならなかったな」

「だったら、これはどうだ？ おまえのストライクゾーンだと思うが」

俺は例のエルモが浅黒い肌の男に組み敷かれている画像を見せた。片方もまた、ついさっき殺されたことは言わなかったが。

恵美里はオーバーに溜め息をついた。

「ああ、こういうのね」

「興味なさそうだな」

「ヤラれてる方は綺麗だからいいけど、ヤッてる方がイヤ。ムキムキだし腹も出てるし、なんか、いかにもオラオラ系ですって感じで」「そういうものか？」

「美女と野獣の組み合わせってあるけどさ、あれは最後はお互いが理解し合うから美しいのよ。これってムリヤリじゃん。まあ、男の人がこういうの好きなのは、何となく分かるけどね」

「……意味が分からんな。おまえが描いてる漫画でも、合意じゃないセックスの場面は結構あるだろう」

「んー、どう言えばいいのかな。あたし、男が女を力で屈服させるっていう図式が嫌いな。この人、女じゃないけどさ。そういうの、何て言うんだっけ？ マチ」

「マチズモ。男性優位主義、男性誇示主義ともいうな」

「そう、それぞれ。あたしの漫画は男と男だからお互いは一応対等だけど、男と女はそうはいかないもん」

「この二人は男と男だが？」

「図式としての話。もういい、リュウさんも所詮は男ってことよね。

あれっ？」

「どうした？」

「うん……。このヤラれてる方、見覚えがあるなって思ってた」

「エルモという源氏名で何処かのオカマバーに勤めていたらしい。

おまえ、オカマバーなんかに入りにしているのか？」

「まさか。でも、エルモちゃんは知ってるわ。オフ会で会ったこと

ある」

「オフ会？」

いや、オフ会が何であるかくらいは俺だって知っている。ネット上の繋がりを持っている連中が実際に集まる会合のことだ。不本意だが福岡のランチに関するブログのオフ会に参加したこともある。まだ警官だった頃だが、ある捜査で関係者と極秘に接触する必要に迫られたら、向こうからその場を指定されたのだ。

ちなみに若い男女が主体の集まりでのオッサン二人組は、まるでシヨットバーの酒棚に置かれた一升瓶並みに場違い極まりなかった。接触を秘匿出来たのかどうか、俺は知らない。

「B L仲間のオフ会でね。あたしは地元作家ってことで招待されただけだよ。……うん、間違いないわ。これ、あたしが知ってるエルモちゃんだ」

「エルモが勤めていたのはどの店だ？」

「だから、勤めてた店は知らないってば。彼女と会ったのは春吉にあるラピスラズリってガールズバー。彼女、常連だったみたいよ」

「ガールズバーの？」

「場所を考えてよ。あの辺にあるガールズバーが普通の店な訳ないじゃん」

「なるほど」

中洲の川向かい、中央区春吉にはラブホテル街とは別に世間あまり知られていないもう一つの顔がある。実はあの界隈は同性愛者向けの酒場のメッカなのだ。俺が知っているだけでも一〇数件のゲイバーやレズビアンバーがある。

恵美里はブラウザを立ち上げて、ラピスラズリの所在地のマークを入れた春吉の地図をプリントしてくれた。

「看板なんか出てないからね」

「助かるよ。礼を言う」

「ナニよ、急に。それより……」

「どうした？」

「ホントに大丈夫なの？」

恵美里は上目遣いに俺の顔を覗き込んできた。間近で見ると眼差しが濡れているようで、俺は少しだけ鼓動が早くなるのを感じた。

生活習慣や趣味嗜好に多少問題はあるが、これで男嫌いでなければ引く手数多なのは間違いない。だが、それを勿体ないと思うのは、彼女が言うところの男性優位主義的な思考に違いなかった。

俺は恵美里の頬に軽くキスをしてから彼女の部屋を後にした。

実家の居間に戻って、買い置きを生温い缶コーヒーを啜りながら熊谷のマセラッティの位置を確認した。

事務長という仕事に土日は関係ないらしく、マセラッティは今日も西区の敬聖会総合病院に停まっていた。夕べ、桐島沙耶香のマンションを出たのは午前二時。それでも朝は早く、八時には冷泉町の自宅を出て都市高速経由で仕事に向かっている。

一昨日の夕方に真奈にGPS発信機を渡して、あと数時間でバッテリーの限界である四十八時間が経過する。外付けのソーラーパネルも一緒に渡してあって、真奈が車のリアトレイに上手くパネルを置いてくれていれば、昼間に充電することで持続時間を延ばすことは出来る。それでも、一度電池切れを起こせば設定がリセットされてしまうので、いつまでこの形で熊谷の足取りを監視できるかは不透明だった。

俺はしばらくの間、この二日間で熊谷が立ち寄った場所をリストアップする作業に没頭した。

結論から言うと、桐島沙耶香と食事に行ったのと彼女を家に送った以外に特に怪しい動きはなかった。無論、熊谷の家は中洲の目と鼻の先であり、自宅に車を置いて徒歩で移動している可能性は少なからずある。そうでなくても、タクシーを使っていればGPS発信機で動きは追えない。

結局、簡便な器械とパートタイムの追尾者だけで満足な結果が得られる筈はないのだ。俺はアプリを閉じてソファの背に身体を預けた。

勘違いしそうになるが、敬聖会の医療過誤隠蔽と村松医師殺害の真相を明るみに出すことも、その証拠を狙ってエルモを撥ね飛ばした犯人を捕まえることも、おそらく似たような理由で井上徹に重傷を負わせた犯人を捕まえることも、何よりも発端である浦辺康利殺害事件を解決することも、そのいずれも俺の仕事ではない。それは警察の仕事だ。俺がやるべきことは依頼人のリクエストに応えること。つまり、十七年前に失踪し、今、福岡に戻ってきているであろう彼の娘を捜し出すことだ。そして、俺はようやく彼女の影の端っこを踏むに至った。

問題はその先だった。

俺が知る桐島沙耶香が本物の桐島沙耶香でないことを証明するのはそれほど難しくないだろう。彼女の写真を持って熊本に行き、弟が事件を起こした当時を知っていそうな人物を訪ね歩けば、必要な証言はすぐに得られる筈だ。

だが、それは彼女が桐島沙耶香ではない証拠ではあっても、原岡香織であるという証拠にはならない。そして、それを証明するのは実はかなり難儀なことだった。

手っ取り早いのは桐島沙耶香の指紋を採取して 近しい誰かを抱き込めば大して難しくない 警察の指紋データバンクと照合することだ。組織を追われた野良犬にもツテは存在していて、その程度のことを頼める人間の心当たりはある。無理なら橋にカネを払ってやらせることも出来る。

だが、その選択肢は浮かんだ瞬間に消えた。最悪の場合、俺自身の手で原岡香織を警察に突き出すことになるからだ。

声を録音して父親に聴かせるという手もある。だが、一〇数年の歳月を経た娘の声が原岡修三の記憶と重なるかどうかは不安の残るところだ。耳の記憶は舌に次いで主観に惑わされやすい。大して当

てには出来ないだろう。

浦辺の手の甲の傷のようにはつきりとした物的証拠でもない限り、彼女に何かを認めさせることは困難だろう。だが、俺は原岡香織の身体的な特徴については何も知らないに等しい。二人の共通点は身長が一六〇センチ前後であることと立派なバストを持っていることだが、それは何も二人だけに許されたものでもない。

意外な形の手詰まりに溜め息が洩れた。参ったな、これは

陽が傾き始めていて、外は夕焼けの赤い光に満ちていた。

基本的に俺は八時間睡眠主義なので、寝不足なのは間違いないかった。だが、考え事の最中に寝落ちするほど自分が疲れているとは思っていなかった。

眠りの世界から俺の意識を引きずりだしたのは携帯電話の着信音だった。音楽にすると何故か聞き逃すので、俺の着信音は色気も素っ気もない電子音だ。電話の主は東京の進藤だった。

「待たせて悪いな」

「お疲れみたいだね。今、いいかい？」

実物が目の前にいたら襟首を掴んでしまいそんな無駄に快活な声。彼の責任では勿論ないが。

「いいよ。何か分かったのか？」

「柏木照美に会ってきた。それと、ウチのスタッフがようやく縮刷版の記事に辿り着いた。どっちから報告した方がいい？」

「おがたやの関係者の話から聞こう」

缶コーヒーの残りを一息に空けた。最初から生温いコーヒーにも利点はある。冷めて不味くなるということがないからだ。

「最初に断っておくけど、照美ちゃんは」

「照美ちゃん？」

「可愛いお婆さんだったんだ。山吹色のプリントドレスがよく似合

つててね。それはともかく、彼女は病床の身だった。有り体に言っちゃえばアルツハイマーってヤツでね。記憶はかなり曖昧だったことを理解しておいて貰う必要があるんだ」

「初っ端から気分が萎える話だな」

「まあね。でも、例の火事についてはなかなか興味深い話が聞けた。あのとき、照美ちゃんはおがたやの工場から二区画離れたところにある自宅にいてね。柏木家は弁当工場の仕事には関わってなかったから、丑三つ時でがつつり寝てたんだそうさ」

「最初の話では、罹災したのは工場が動き出す前だったな」

「深夜三時より少し前。縮刷版にはそう書いてあったそうだよ」

「それで？」

「騒ぎ出したのは柏木の先代で、類焼の危険があるからって照美ちゃんも叩き起こされた。で、何かと外に出たらおがたやが吉原炎上並みに燃えてたんで、慌てて近づけるところまで様子を見に行っただんだそうさ。そこまではいいかい？」

俺はいいと答えた。

「とは言っても、彼女が現場に行ったときにはすでに消火活動の真っ最中で、ただ茫然と見てるしかなかったんだそうさ。ところが、そこで救急隊が火災現場から幼子を抱えて逃げてきた女性を保護した。女性の名前はカオリ」

「やっぱりそうだったか」

おがたや火災の生き残りは原岡香織だった。意外ではない。そうでなければ、桐島沙耶香になり替わっているあの女は誰だという話になる。

「……ところが、話はそう簡単じゃないんだな」

進藤は勿体ぶった口調で言った。

「どつという意味だ？」

「今の話は病院で付き添ってる照美ちゃんの娘、当時はまだ小学生だったそうだが、彼女にもウラをとってある。おかしな点は特にない。ただ一点を除いてね」

「……悪いが睡眠不足気味で、期待感を煽られてもいい反応をしてやれそうにない。手短にまとめてくれないか」

仕事も出来るし人柄も悪くないのだが、話が回りくどいのと妙に芝居がかっているのがこの男の欠点だ。進藤は俺の苦情に気を悪くした様子もなく「そりゃ悪かったね」と詫びた。

「リュウさん、あんたが追ってる女はハラオカカオリ。間違いないね？」

「ああ。それが？」

「婆さんもそう言った。親戚に原岡姓がいるらしくて、その地名に引っ掛けて彼女を新橋のカオリちゃんと呼んでいたそうだ。ところが娘はそうじゃなかったと言い出した。同じカオリさんでも違う人だったとね」

「……おがたやにはカオリという名前の従業員が二人いたということか？」

「そういうことになるね。確かにカオリなんてそう珍しい名前じゃない。僕の従妹にもいるし」

「俺の知り合いのスナツクのママにも一人いる。それで？」

「お義母さんのコネで、当時の捜査資料を横流しして貰えそうだった話はしたよね。残念ながら持ち出し不可だったんでその場で読んできたんだけど、生存者の名前が載ってた。一応、彼女たちが搬送された近くの救急病院にも行って、その当時から勤めてる先生にも話を訊いてウラもとった。彼女の名前は原岡香織じゃなかった」

「誰なんだ？」

「サカキバラカオリ、だそうだよ。ちなみに一緒に助かった子供の名前はマナっていうらしいね」

「……何だと？」

字面が浮かぶのに少し時間が掛かった。榊原佳織とその娘、榊原真奈。何故、その二人の名前がここに出てくるのだ？

懸命に捜してくれた進藤のところのスタッフには申し訳ないが、火災のたった二人の生存者の名前が知れた今、縮刷版の内容は大して役に立ちそうなものではなかった。

進藤もそれは分かっているようで、苦笑いを噛み殺すような声で念の為にファックスでマイクロフィルムのプリントを送ると言った。俺の事務所に送られても困るので、送り先は多香子の事務所にして貰った。

「ああ、前に福岡に行ったときに一緒に飲んだ女弁護士さん？」

「……いつの間にそんな交友を深めたんだ？」

「何言つてんの。リュウさんが不機嫌そうに途中でフケるから、仕方なく残された者同士で飲んだだけじゃないか」

「ああ、そうか。ついでに東京までお持ち帰りしてくれれば良かったのに」

「またまた、そんなこと言つてさ」

二年程前、所用で来福した進藤と飯を食いに行ったことがあるのだが、間の悪いことに同じ店で多香子の事務所の懇親会が開かれていて、下戸のくせに珍しく酔っ払った多香子が俺たちのテーブルに来て絡んだことがある。進藤は持ち前の愛想の良さを最大限に発揮して、弁護士のかくせに意外と人見知りの多香子とあつという間に打ち解けてしまったのだが、そうなるとその場に俺の居場所がなくなるのは当然の帰結というものだ。

「じゃあ、こつちは引き続き、東京での原岡香織の足取り調査つてことでいいんだね？」

俺はそうしてくれと答えた。

「いささか、というか、かなり予想外の結果だったからな。正直、まだうまく理解できん」

「無理もないけどね」

進藤は小さく笑って電話を切った。

また一つ、パズルに新たなピースが加わった。 榊原佳織 榊原

真奈のママの妹。そして、熊谷幹夫のかつての恋人。

真奈は病死と聞いていたが、権藤が聞き込んできた話によれば榊原佳織の死因は自殺とのことだった。熊谷はそれを苦にして仕事を手につかなくなり、果ては無断欠勤して自ら退職する道を選んだのだという。

だが、それよりも衝撃だったのは真奈が敬聖会の経営者夫妻の実の娘ではなかったことだ。そうであれば兄と全く似ていないのも合点がいく。

(……そんな上等なモンじゃないわ)

思い出したのは、俺の事務所を訪ねてきたときの真奈の吐き捨てるような一言だった。あれは確か、彼女を敬聖会の院長令嬢と呼んだときのリアクションだった。

真奈は自分の出生について知っているのだろうか。

おそらく知っているだろうと俺は思った。特に根拠はなかったが。

住吉に停めつ放しになっていたZは、夕方になって朽木とその仲間たちが運んで来てくれた。昼間はあまり営業意欲のないタクシー運転手である朽木は、夜は代行運転のドライバーもやっているのだ。尤もこの男の収入の大半はそれらではなく、福岡市内に数十か所も所有しているコインパーキングからの収益で占められている。俺がZを突っ込んだパーキングもその一つで、俺は精算用の特別なカードを持たされているのでどれだけ停めても一回千円以上取られることはない。その代わり、今回のように移動を頼む度に車の手入れについて説教を喰らう羽目になるが。

「ATオイル、ちゃんと替えとけよ。馬鹿みたいにパワーがあるんだ。当然、そこにストレスが溜まるし、劣化したらロスも出る」

「はいはい」

「返事は一回でいい」

他のことには万事いい加減な朽木だが車に関しては人一倍煩い。まあ、こういう知人でもないかと車を単なる移動手段としか考えていない俺のような人間は、自分の車を動いて当然の家電扱いしてしまっ。

やはりどう見てもタクシーには見えないミニの後ろ姿を見送つてから、俺は原岡修三の携帯電話を鳴らした。夕べと違って一〇数コール待たされた後、聞き覚えのない声の年配の女が出た。

「申し訳ありません、旦那様は検査でお疲れになって、おやすみになっています」

「そうですか。あなたは？」

「週末だけ、お世話させて戴いている者です」

「夫人は？」

「今日のご自宅においでになる筈です」

通いのヘルパーは、それが雇い主であつても原岡を旦那様とは呼ばないだろう。声の調子からも原岡の邸に勤めているか、かつて勤めていた人間のニュアンスが感じられた。

礼を言つて電話を切り、ここにも置いてある着替えの中からパウダブルのシャツ、朱色と濃紺のレジメンタルタイ、ピンストライプのダークグレイのスリーピース・スーツ、ダークブラウンのチャッカブーツを選んだ。人相がいまいちであることを除けば銀行員でも通じそうな格好だ。

日頃の俺を知る人間が見れば忍び笑いを浮かべるに違いなかつたが、気にするほどのことではない。これから俺は当地きつての実業家の当主夫人を訪問するのだ。

俺はZを出して東区の香住ヶ丘に向かつた。

西公園から香椎界隈へは大した距離ではないが、夕方のラッシュユ時の香椎近辺はかなり混雑することを覚悟しなくてはならない。だが、週末の土曜日ということだと思つたよりは早く目的地に辿り着いた。途中、ちんたら走る他県ナンバーのせいでノロノロ運転の車列に路線バスが猛烈なクラクションを浴びせていたが、そんな光景はこの街では渋滞のうちに入らない。

国道三号線を和白方面に曲がり、狭苦しい小道を抜けて小高い丘の坂道を上つた。原岡邸はその頂上付近にあつて、眼下には博多湾と玄界灘へ向かつて伸びていく西戸崎、その先端の志賀島が一望できる。場所柄もあつて敷地は大して広くないが、煉瓦色の外壁に囲まれた洋館風の建物はそれを補つて余りある威容を備えていた。

俺は道路脇の狭いスペースにZを違法駐車して、銅板に Har

a o k a と彫られた表札の脇のインターホンのボタンを押した。郵便受けには原岡修三・洋子夫妻の他、絵里と百合という名前があった。原岡修三の実子は香織だけで、二人は後妻の連れ子だと原岡本人から聞かされている。

居留守かと思えるほど待たされたが、根負けしたような渋い声がスピーカーから聞こえた。

「どうされたんですか？」

洋子は突然の来訪にも特に驚いた様子を見せなかった。付き添いの女が俺の電話を報告していたのだろう。そして、いずれ、俺がやつてくることも予想していた筈だ。

「幾つか、お話しを訊かせて戴きたいことがあるんです。ご主人の前では伺い難いことがありますね」

「私は主人に隠し事などありませんわ」

「俺の方にあるんですよ。ショッキングな事実を暴き出して、ご主人の心臓を止めた犯人扱いされるのは本意ではありませんので」

短い沈黙。微かに舌打ちに似た音が聞こえたような気がした。

「……でしたら、アポイントをとるくらいの礼儀は見せて戴いてもよろしいのでは？」

「残念ですが、それは売り物ではないので、
今度は長い沈黙だった。」

「……お恥ずかしい話ですけど、部屋を少し散らかしておりますの。主人の付き添いで家の事に手が回らなくて。片付ける間、少しお待ち戴けるかしら？」

「構いませんよ。外にいます」

「お客様にそんな無礼を働くほど、私は礼儀知らずではありませんわ」

予想していたインターホンの受話器を叩きつける音はせず、代わりに門扉のロックが外れるカチリという音がした。俺は暗褐色の門扉を押し開けて邸内に入った。

原岡邸は斜面を造成して建てられていて、母屋までは割と長い階

段が続いていた。俺はそれを上った。

庭は半分くらいまでは元々の地面だが、その先は階下に設けられた車庫の上に土を敷いているようだった。そのせいだろうが生垣の背丈はあまり高くなく、外壁の上に張り巡らされた鉄製の柵とその合間に設えられたアンティーク調の逆矛の飾りが見え隠れしている。建物は二階建てで、そのうちの一つの窓が開いていた。バタバタしている気配からするとそこが洋子の私室らしい。

玄関ドアの脇にある窓にこちらの様子を窺う人影が見えた。顔は見えないが仕草は小さな子供っぽかった。尤もこの家には子供はいない筈なのだが。

建物の玄関に呼び鈴らしきものはなかった。申し訳程度にノックして一枚板の重いドアを開けた。

洋館風の外観に相応しく、広々とした玄関ホールは二階までの吹き抜けの空間になっていた。天井に何列も配された細長い天窓の明かりに満たされていて、壁際の階段を上がっていくと二階の両翼を繋ぐ渡り廊下に繋がっている。壁には磨き上げられたローズウツドの羽目板、床には英国調の幾何学的なデザインの絨毯。玄関ドアの真上には小さいながらステンドグラスまであり、広間の床の真ん中あたりに赤や青、黄色の光がわだかまっていた。

「あんたが探偵？」

広間に面したドアの影から薄い声がした。

立っていたのは少しくせのある笑い方をする二〇代半ばくらいの女だった。窓から外を窺っていた人影は彼女だろう。華奢な体の線がはつきり出るベージュの長袖のニットにダークブラウンのロングスカートという格好で、腰まである茶色の髪を無造作に束ねている。にんまりと笑うと不自然に真っ赤な唇が横に広がった。

「そうだが？」

「聞いてたのとぜんぜん違うわ。エリはすごくお洒落な人だって言っていたのに」

「エリ？」

「お姉ちゃんよ。あたしはユリ。花のユリと同じ字」

問われ慣れているような自己紹介だった。

「お姉さんはどんな字を書くんだった？」

「絵の里。音が似てるだけで字はまったく関係ないの。名前を考え
てくれたのはお父さん」

「お父さん？」

「お父様じゃない方。響きとか語呂だけでつけたんじゃないかな」
「あり得る話だな」

彼女は絨毯の模様を辿るようにまっすぐこちらに向かってきた。
歩き方は典型的なモデル歩き、いわゆるキャットウォークだった。
様になっていないことはなかったが、俺の隣人のレッスン場にはい
くらでもいるレベルだ。

俺にぶつかると一歩手前で足を止め、百合は不満そうな表情で俺の
頭から爪先まで何度も視線を往復させた。

「変なの」

「この格好じゃまずいかな？」

「まずくはないけど。でも、お父様の会社の人と同じだもん。つま
んないわ」

「お姉さんには評判いいんだろう？」

「絵里つてば、もともと男の人のスーツ姿が好きなのよね」

「君は？」

「あたしは別に。　ねえ、あんた、お母様に用があつて来たんで
しょ？　お父様に内緒で訊きたい事があるってホント？」

「盗み聞きしたのか？」

「お母様の声が大きかったから聞こえただけよッ！」

百合は子供のようにぶつと頬を膨らませた。そんな筈はない。内
線で会話しているときに他の子機をこっそり繋げば会話を盗み聞き
できる構造なのだ。

上目遣いで睨む百合の表情は年齢よりも大幅に幼稚に見えた。俺
の胸板めがけて拳を振り上げたそんな感じだったが、実際には手は

動かなかった。代わりに百合は固く握った拳を口元に近づけ、ピンと立てた親指の先を神経質そうに噛んだ。

「……あなた、あのクソつたれのアバズレ女を捜してるんだって？」

「誰のことだ？」

「しらばつくないで。香織のことよ！」

「呼び捨てはともかく、アバズレ呼ばわりは酷いな。血は繋がって
いないにしても、君のお姉さんだろう？」

「あんなの、あたしのオネエじゃないわ！ あいつのせいであたし
がどんな目にあつたと思ってるのよ！」

「どんな目に遭つたんだ？」

「それは……」

言葉は続かなかった。苛立ちはすべて右手の親指の先に集中して
いつていた。どうやらそれは癖らしく、親指の爪は爪の役割を果た
せる状態ではなかった。

「……失礼致します。あなたはウチの娘をいたぶる為にいらつしや
つたのですか？」

騒ぎを聞きつけたように二階の廊下に原岡洋子が姿を見せた。娘
と同じくほっそりした身体をハイネックのニットとロングスカート
に包んでいて、服が娘よりも落ち着いた色合いであることを除けば、
二人は驚くほど似ていた。

「そんなつもりはありませんでした」

「そうですか。では、お話とやらを伺いますのでこちらへ。百
合」

百合はほんの少しだけ身体を横方向にずらした。行為の意味はす
ぐに分かった。俺の影に隠れたのだ。しかし、俺が母親の方を向い
たことで小細工はあっさり無駄になった。百合は母親に何か答えた
ようだったが、声がかすれて言葉になっっていなかった。

「お薬は飲んだの？」

百合は小さく頷いた。うな垂れたの方が適切かもしれない。

「……はい」

「だったら、自分の部屋で休んでいなさい。いいわね」

一瞬、百合が反抗の意思を示すように顔をあげた。

しかし、母親がもう一度部屋に戻るように命じると渋々引き下がった。母親の声音は二人が未だにインターホン越しに話しているかのような余所余所しさに満ちていた。娘の口から洩れる低い唸り声は母親の耳に届いていないようだった。

娘が広間を出て行くと、母親は何事もなかったように優雅に会釈して踵を返した。俺はそれに着いていくしかなかった。

通されたのは二階の左翼の突き当りにある小さな部屋だった。窓からは建物の裏手に広がる斜面と、その途中にあるバスケットボールのゴールが置かれた小さなスペースが見えた。家具はスカンジナビアン家具の小さなコーヒーターブルとロッキングチェア、アンティークのライティングデスク、本棚が二棹、小さなサイドボードが一つ。サイドボードの上には家族で撮ったと思われる写真が収められたフォトスタンドがある。写っている人影は五つ。

洋子はインターホンの受話器を取り上げ、紅茶を二人分持つてくるように言った。それから、ロッキングチェアに浅く腰掛けた。

「俺は何処に座ればいいんです？」

「私の私室ですけど、人を入れること自体が減多にありませんの。すぐに椅子を用意させますわ」

「コーヒーターブルでも構いませんが」

「飲み物は何処に置けばよろしいのかしら？」

「手で持てばいいんじゃないですか」

彼女は何事もなかったようにインターホンに椅子を持ってくるように告げた。家政婦があらかじめ待っていたような速さで素っ気ないデザインの椅子を運び込んだ。その後ろに順番待ちしていたように、別の家政婦が白磁のポットとティーカップを運んできた。

家政婦たちが退出すると洋子が優雅な手つきでカップに紅茶を注

いだ。俺は礼を言っただけで口には運んだ。

「良い紅茶ですね。フォション？ フォートソン・メイナム？」

「フォションのダージリンですね。あなた、紅茶の味がお分かりになるの？」

「知っている高級ブランドがその二つというだけです。飲んだことがあるのはリプトンとトワイニングだけです。ああ、そうだ。ハロズブランドのやつも誰かにイギリス土産を買ったことがありませんでしたっけ」

洋子は孤児院を訪れた良家の夫人のような戸惑った視線を俺に向けた。

「……先程は不快な思いをさせて、申し訳ありませんでしたね」

「何のことですか？」

「百合のことですわ」

洋子は深い溜め息をついた。

「親戚中の大人たちがあの子をあんな風にしてしまったのです。奈津子が死んで、それと同じ頃に主人の両親も相次いで亡くなって、ひよっとしたら財産の分け前が転がり込んでくるかもしれないと期待したのでしょうか。そこにまったく縁も所縁もない女が子供を二人も連れて乗り込んできたんですもの。誰だって財産目当てだって言いますわ。おまけに香織さんが家を出てしまっただけで、それまで私たちのせいにされてしまいました」

「それだけですわ？」

「どういう意味かしら？」

「先ほど、百合さんは「香織さんのせいで自分がどんな目に遭わされたか」と言っておられました。失礼ですが、百合さんはお幾つですか？」

「先月、二十七歳になりました」

「ということは、香織さんが駆け落ちした当時、百合さんはまだ小学生でした。香織さんは箱崎埠頭や小戸のヨットハーバーあたりで夜遊びに明け暮れていて、小学生が起きている時間に家に居ついて

いたとは考えにくい。義理の妹の心に深い傷を負わせるほどの関わりはなかったのではないでしょうか。ついでに言えば、香織さんの反抗心は主にお父上に向けられていた筈です。あなた方母子ではなく」

「主人は最高の猟犬を雇ったようですわね」

洋子は薄い笑みを俺に向けた。病的なところこそないものの、笑いは娘とそっくりだった。

「その通りです。香織さんは絵里や百合とは生活のリズムがまったく違っていましたし、なかなか信じて貰えないことですが、私たちと香織さんの関係は他人が言うほど悪いものでもなかったのです」

彼女の夫は娘の家出の理由を後妻とその娘たちとの不仲に求めていた。これはどちらの言うことが正しいかという問題ではない。誰だつて自分に不都合な部分は無意識に話から端折るものだし、自分の非を誰かに転嫁してうやむやにしようとするものだ。

「では、どうして？」

「主人の弟の息子、百合から言えば義理の従兄にあたる男性が、親戚の寄り合いで叔母たちがいつものように絵里と百合に嫌味を浴びせていたのを一喝したのが始まりでした。歳は香織さんと同じですからやや離れていましたが、彼が百合が大好きだった男性のタレントに雰囲気似ていたことや、何と言ってもそれまで針の筵でしかなかった場所で守って貰えたことで、百合はすっかりその従兄に夢中になりました。あの子が二〇歳のときのことですが」

洋子はカップを口に運ぼうとして、急に意欲を失ったようにテーブルに戻した。

「あなたならその後のことは予想できるのではありませんか、上社さん？」

「すべては仕組まれた芝居だったのではないですか。彼女たちを苛め続けたところで財産が転がり込んでくる可能性は低いということに、親類の誰かが気付いたんでしょう」

「その通りです。ですが、芝居が問題ではなかったのです。最後まで

でちゃんと演じきつてくれていれば」

「そうはならなかったんですね？」

「ええ。その従兄というのは確かに見栄えのする顔とモデルばりのスタイルの持ち主でしたが、仕事の面ではまったく使い物にならない男だったのです。当時は原岡興産の関連会社の一つで営業の仕事をしていたのですが成績は最悪、やっっていることと言えば同僚の女性に手を出すことだけ。しかし、一族の人間ということで処分も出来ないという状態でした」

「親戚一同はよくそんな男を時期当主に担ごうと思いましたがね」

「そんな男だから御し易いと踏んだのでしよう。とにかく、二人の交際は始まってしまい、主人も私もとりあえずは様子を見ようと言っていたのです。しかし、馬脚を現わすのにそれほど時間はかかりませんでした。百合が詳しいことを話しませんので詳細は分かりませんが、私の耳に入ってきただけで五人の女性と不貞の關係になりました。その度に百合は彼に詰め寄り、彼も一時の気の迷いと平謝りして元の鞘に収まるということが繰り返されました。しかし、百合もそこまで愚かな娘ではありません。彼の会社に入社したばかりの受付嬢に手を出し、あまつさえ、妊娠までさせてしまったこと、關係を続けていくことを諦めたのです」

「それがどうして、百合さんの憎しみを香織さんに向けさせることに？」

「その男が別れ際に香織さんの名前を出したのですよ。おまえたちが追い出さなければ俺は香織と結婚するつもりだった、と。勿論、二人の間にそんな約束はありませんでしたし、主人の話によれば香織さんは従兄弟の中でも、特にその男を蛇蝎のように嫌っていたそうなのですが」

「なるほど」

女は男の手酷い裏切りに遭っても、その男ではなく相手の女に憎しみを向ける。そうしなければ自分が惨めだからだ。

「それ以来、あの子はすっかり変わってしまいました。外に出るこ

とを極端に嫌うようになり、大学を出てせっかく就職した会社も辞めてしまいました。病院にすら行きたがらないので、精神科のお医者様に往診をお願いしている有様です」

「どれくらい、そうなのですか？」

「二十二のときからですから、もう五年になりますわ」

「だったら、誰が彼女にキャットウォークを教えたのです？」

キャットウォークの意味が分からなかったのか、洋子は小さく首を傾げた。俺は百合が披露したモデル歩きのことだと説明した。

「絵里が教えたでしょう。百合は主人は勿論、私にも心を閉ざしたままですが、姉の絵里にだけは心を許しているのです。まあ、それも体調と心の状態が良いときに限られますが」

「お姉さんはモデルを？」

「いえ」

洋子の口許に笑みが浮かんだ。会って初めて見る可笑しそうな笑みだった。

「絵里にファッションモデルは勤まりませんわ。クイーンサイズの専門店でしたら別ですけどね。絵里は天神にあるモデルプロダクションで經理の仕事をしているのです」

「……ほう、どちらの？」

「マリーゴールドといったかしら」

「なるほど」

灯台もと暗しとはこのことだ。それは笠原美代子が経営する、俺の事務所のお隣さんだった。ちなみにマリーゴールドの花言葉は“悲しみ”や“嫉妬”だし、メキシコでは死者の日の祝祭を彩る花であるなどあまり縁起の良い花ではないのだが、笠原は語感の良さと花そのものの美しさで決めたそうで特に気にしてはいないらしい。

「そろそろ、本題に入りませんか？」

洋子はとうとう口をつけなかったカップをテーブルの隅に追いやった。俺は少しぬるくなった紅茶を一息に飲み干した。

「主人に内緒で私に訊きたいことがある、とおっしゃいましたわね。」

香織さんの家出に関する説明は主人がしていると聞いておりますが？」

「内緒という点はさほど問題ではないのですがね。しかし、ご主人が同席されている場では伺いにくい話なのは確かです。あなたは香織さんが家を出て看護学校の寮に入るのを後押ししたそうですが、それは本当ですか？」

「そうだったかしら。……ああ、そうです。病院の実習があると帰りが遅くなるとかで、それなら学校に近いところに住んだ方が安心だと思ったのです」

「それはあなたの考えですか？ それとも、家を出たいと思っていた香織さんがでっち上げた理屈ですか？」

「どうだったかしら。もう十何年も前のことで、申し訳ありませんがよく覚えていないのです。それがどうかしたのですか？」

「いいえ。では、本題に入りましょう。香織さんが駆け落ちした当時、彼女とお会いになったことがありますか？」

「……ありませんわ」

「では、当時、彼女とはまったく連絡はとられていなかった？」

「そうです。特に連絡をとる必要もありませんでした。香織さんもお子扱いいしていい歳ではありませんでしたからね」

「では、彼女が東京で発見されてからは？」

「それについては、主人がお話している筈ですが。彼女が東京で見つかった後、所用で横浜に行く機会があったので、ついでと言っでは何ですが自分の目で様子を確かめようと思ったのです。結局、主人にバレてひどく怒られました」

「では、その後は？」

「ありません。ある筈がないでしょう？」

「それはどうでしょうか。あなたはご結婚なさる以前は、会社で原岡氏の秘書をお勤めになつていたと聞いています。そのあなたが、せっかく見つけた香織さんの所在をそのまま放置したとは考えにくいのですがね」

「何故です？」

「原岡家の財産問題ですよ。原岡氏にもしものことがあって相続が発生した場合、香織さんを除いて話を進めることは出来ない筈です。原岡氏が彼女の相続権を剥奪していない限り。しかし、一昨日の様子だとそうはなっていないようですね」

「どういう意味でしょう？」

洋子の目つきが札付きの総会屋を見るような厳しいものになった。夫の引退後は彼女も原岡家の事業には一切携わっていないという話だったが、そういう表情をすると夫よりもビジネスライクな人物にも見えた。

「失礼ですが、そんなことが香織さんの行方を捜すのに関係あるのですか？」

「直接的にはありませんし、あなた方が香織さんの帰宅を望まないことを非難するつもりもありません。幾ばくかでも財産がある家庭なら普通にある話です」

「……でしたら、どうしてそんなことを？」

「最初の話に戻りますが、俺はあなたと香織さんの間に何らかの接触があつたのではないかと思つて居るのです。おそらくはご主人が香織さんを放置することを決めた後に」

「そんなことをする必要が何処にあるのですか？ 連絡を取る必要が生じたときに、また捜せば済むことじゃありませんか」

「原岡氏はそんな無能な秘書を傍に置いておられたのですか？」

洋子は俺に何か言い返そうとしたが、言葉は出てこなかった。

俺はタバコを取り出して目顔で吸う許可を求めた。洋子は静かな足どりでサイドボードへ歩いていき、灰皿を持って戻ってきた。浅く腰掛けたのは同じだったが、今度は優雅に脚を組んだ。

「私も一本戴いてもいいかしら。主人が嫌うので家にはタバコを置いていないんですの」

「ジョン・プレイヤー・スペシャルですが？」

「前の夫が同じものを吸っていました」

パッケージから一本振り出してやると洋子はフィルターを摘んで引き抜き、慣れた仕種で口に啜えた。俺は身を乗り出して火をつけてやった。

「上社さん、あなたは私が申し上げた言葉を信じておられるのですか？」

「何をです？」

「私たちと香織さんの仲が決して悪くはなかったことです」

「信じていますよ。少なくとも、あなたが香織さんに悪感情を抱いていない証拠がありますから」

洋子は俺の視線を追った。サイドボードの上のフォトスタンドには五人が写っている。原岡修三と洋子夫妻。絵里と百合の姉妹。そして、原岡香織。夫も出入りしない私室に嫌いな先妻の娘が写った写真を飾る理由は何処にもない。

洋子は深い溜め息と共にクリーム色の煙を吐き出した。

「少し、昔話をして構いませんこと？」

「伺いましょう」

洋子はゆっくりとタバコを燻らせてから、半分以上残った吸いさを灰皿に丁寧押し付けて火を消した。

「香織さんの実の母親　奈津子と私は親友でした。高校の同級生だったのですが、友だちになったのは大学を出て主人の会社に同期入社してからのことです。今のように女性の社会進出が盛んな時代ではありませんでしたから、二人とも総務課でお茶くみやコピー取り、電話番みたいなことばかりやらされていましたわ。そのうち、私は社長室に異動して、奈津子は女性としては初の営業部配属になりました。当時、まだ立ち上げたばかりの飲食店部門で女性向けのカフェレストランの企画が出て、そこに抜擢されたのです」

一息つくためか、洋子はすっかりぬるくなった紅茶を一口飲んだ。「企画は大当たりして、奈津子は主任を通り越して飲食店部門のマネージャーに昇格しました。おそらく、その頃に主人に見初められたのでしょう。私は社長室にいましたので主人の動向は逐一耳に入

つてきますし、それと奈津子のスケジュールが何となく噛み合っていることも薄々感じていました。それでも、二人が結婚するのは本当に直前まで内密で、発表されたときには社内は大騒動でしたわ」「そうでしょうね」

「私は主人と奈津子が結婚する前の年に結婚していて、二人で同じ年に子供を産んで、子供同士も自分たちと同じように同級生にしようと話していました。残念ながら私の最初の子供は流産してしまって、その計画はご破算になってしまいました。寂しさを紛らわすという訳ではありませんけど、私はこの家に来ては香織さんと遊んであげていました。周囲の人からは乳母みたいだと言われたものです。結局、絵里を授かったのは、香織さんが生まれたのに七年も遅れてのことでした」

「先妻の奈津子さんがお亡くなりになったのは？」

「今から二十五年前です。香織さんは小学校の五年生でした。葬儀には大勢の弔問客がいらしたのですが、彼女は気丈にも人前では泣きませんでした。その代わり、自分の部屋で泣き疲れるまで泣いて眠るのを繰り返していたようです。ですが」

洋子は写真立てにもう一度目をやった。過ぎ去った日々を懐かしむような遠い目をしていた。

「葬儀の三日後のことです。お手伝いの女性から私に電話がありました。奈津子が死んでからというもの、香織さんが何も食べようとしないということです。彼女たちも何とか食べさせようとしたらしいのですが、香織さんは父親に似て意固地なところがあって、そうやって周囲から言われると余計に反発して手がつけられなくなっていました。主人はその頃から家庭内のことについては何の役にも立たない人でした。九州男児にはそういう人って多いと思いませんか？」

「かもしれませんか」

「とにかく、手を貸してくれと言われて私はこの家に駆けつけました。奈津子の代わりをしてあげられるのは自分しかいないと、ずい

ぶんな使命感を感じていたことをよく覚えていますわ。でも、彼女は話すら聞いてくれようとしませんでした。考えてみれば当然のことです。私は母親の友だちでしかないのですから」

「では、交渉は不調に？」

「そうなるつもりでした。私も半分諦めて別のアプローチを考えようと、一旦部屋を出ようとしましたのです。ところがそのとき、急に香織さんのお腹がものすごい音を立てて鳴ったのです。本当に、部屋中に響くくらいの大きな音がしました」

「香織さんは？」

「堰を切ったように大声で泣き始めましたわ。葬儀の間や人前ではあれほど我慢していたのに……。後で聞いたところによると恥ずかしいやら情けないやらで、何が何だか分からなくなったそうです。私は香織さんをそっと抱きしめて「それでいいのよ、それはお母さんがあなたが生きてることを教えてくれてるのよ」と言いました」

「いい話ですね」

皮肉な口調にならないように注意して言った。しかし、洋子は辛いことを思い出したように眉間に深い皺を寄せた。

「ですから、後に私と主人の結婚が決まった時、私は彼女は祝福してくれるものだと思込んでいたのです。しかし、周囲の誰かが、私たちが奈津子が生きている間から関係があったと香織さんに吹き込んだらしいのですね。勿論、私は嘘だと言いました。しかし、多感な時期だったこともあって、彼女は完全には信じてくれなかったようです。主人の態度にも問題があったのですが」

「ほう？」

「ああいう人ですから、ちゃんと説明せずに頭ごなしに怒鳴りつけてしまったのです。香織さんは決定的に主人に背を向けてしまいました。私は何とか二人の間を取り持とうとしたのですが」

「なるほど。しかし、それならば尚のこと、あなたが駆け落ち当時の香織さんとまったく関わり合いになっっていなかったというのは信じられないのですが」

洋子は柔らかい笑みを浮かべた。

「……あなたに嘘は通じないようですね。そう、私は香織さんが福岡を離れる数日前に彼女と会っています。東京に言つて以降に会っていないのは本当ですが。所在だけでも定期的に掴んでおくべきだと思いましたが、そうするにはそれなりのお金が必要ですし、それは主人に内緒で私に動かせる額ではなかったのです」

「最後にお会いされたとき、どんなことを話されましたか？」

「会ったのは博多駅近くのファミリーレストランでほんの〇〇分程度ですから、会話は殆どありませんでした。私が元気にしているのかとか、お金の面で困っていないか、などといったことを幾つか訊いて、香織さんがいつものようにボソボソと答えるといった感じでした。駆け落ちするなんてことはまったく話題になりませんでした」
「ではその当時、香織さんが妊娠五ヶ月だったことはご存知ですか？」

短い沈黙。

「……ええ。聞かされていました」

「父親は？」

「それは頑なに言おうとしませんでした。産むつもりなのかと訊いたら「そのつもりだ」と言いましたので、だったら相手は付き合っている浦辺くんなのだろうという、肯定も否定もしない曖昧な顔をするだけで」

「当時、二人の間には肉体関係がなかったフシがあります」

「そうなのですか？」

洋子は心底意外そうな顔をした。

「では、どうして二人は連れ立って福岡を出ていったのですか？」

「そこが今一つ、理解に苦しむところなのですがね」

平野弥生の説を採れば香織の子供の父親は浦辺康利ではない。彼の性癖も　バイセクシャルである可能性があるにせよ　その説を後押ししている。それでも周囲は二人を恋人同士だと認識していたし、それは恋愛感情というよりは友情に近いものだったのかもし

れない。

「……ですが、一つだけ確かなことがあります」

洋子は急に苦いものを噛み潰したように顔をしかめた。

「何ですか？」

「香織さんの子供は生まれていないということですよ」

「どういうことですか？」

「先ほど、東京に様子を見に行つたと申しましたが、そのときに香織さんが働いていたお弁当屋さんの店先で、彼女が他の従業員の女性が抱いている赤ん坊の顔を覗き込んでいる場面に出くわしたのです。遠くからなので内容は聞き取れませんでしたけれど、同僚らしい背の高いきれいな女性が物影になつたところでお乳をあげていて、香織さんがそれをとて複雑そうな表情で見つめていました。私はそれを見て、自分のときのことを思い出しました。生まれていれば、香織さんの子供もちょうどそれくらいだった筈ですよ」

「なるほど」

流産か墮胎かはともかく、香織の子供が生まれていない可能性は確かにある。桐島沙耶香のマンションに十六から十七歳の子供が同居していれば、熊谷幹夫もそんなに長く居座ることは出来ないだろう。

では、その赤ん坊とは誰だったのか。ついさつき仕入れた情報によれば、それは榊原真奈である可能性が高い。

俺は他に何か、覚えていることがないかと訊いた。しかし、洋子はすぐには思い出せないと答えた。彼女は細い腕に似合いの細い腕時計に視線を落とした。

「すみません、百合の診察にお医者様がいらつしやる時間なので、そろそろお引き取り願えませんでしょうか。思い出したことがあれば、こちらから連絡させていただきますわ」

「分かりました。ああ、そうだ。ついでと言つては何ですが、この家には香織さんの写真は残っていませんか？」

「主人が渡した資料に入っていたのではないのですか？」

「あれが直近の写真なのは確かですが、出来れば他のものも拝見しておきたいので」

俺が求めているのは香織の身体的な特徴を捉えた写真だった。できれば耳がはつきり写っているものが欲しい。指紋や声紋まではいかないが、耳の形というのは本人確認の材料の一つなのだ。だが、洋子は表情を曇らせた。

「香織さんは女の子には珍しく、あまり写真が好きではなかったで……。ですが、主人の書斎にやら残っているかもしれない。後で捜しておきます。それでよろしいかしら？」

俺は構わないと答えた。それ以上、洋子に訊けそうなことは見当たらなかった。俺は礼を言っただけで辞去することにした。

「香織さんは見つかりそうなのですか？」

「すでに尻尾を踏めそうなところまで来ていますよ」

「そうですか……。早く見つかるといいのですが」

「本当にそう思っているんですか？」

「どういう意味ですか？」

「お忘れのようですね。彼女は殺人事件の重要な関係者なのです。見つかるということはそのまま、刑務所送りになる可能性があるのです」

「香織さんが人を殺すなんて……。あり得ませんわ」

断言している割には、洋子の声は最初と同じように感情の起伏に乏しかった。

そうであればいいのですが、と俺は答えて原岡邸を後にした。二階の母親の部屋の反対側の窓から粘つく視線を感じたような気がしたが、ブラインドのせいだ。百合の姿は見えなかった。

セレクトショップの店主に電話を入れて事務所の来客状況を訊いた。今のところ、それらしき人物は現れていないとのことだった。

俺がいくら目立つ風貌をしていてもわずか数時間で正体が割れる筈はない。事務所への出入りを控えたのは杞憂、と言うよりビビりすぎだと言う者もいるだろう。それは分かっている。だが、相手は白昼堂々と凶行に及ぶことも辞さない連中だ。向こうの出方が分かるまでは用心に越したことはない。

Zをビルの裏の立体駐車場に突っ込んで、出掛けたときと逆の経路で事務所がある三階に上がった。すっかり夜の帳が下りて暗くなつた中を、足音を忍ばせてビルの非常階段を上っていく姿は怪しいことこの上ない。

モデルプロダクションに週末は関係ないようで、マリーゴールドは平常通りに営業していた。今の時間は夜の部のウォーキングレットスの真っ最中で、講師の声と手拍子、床を叩くりズミカルなヒールの音が聞こえてくる。

俺は申し訳程度にノックして事務所のドアを開けた。

「あら、リュウさん。どうしたの？」

顔馴染みの事務の女が声をかけてきた。

苗字は知らなかったが、彼女が皆からエリと呼ばれていることは知っていた。ずんぐりとした体躯と愛嬌のある団子鼻、肌が弱いと

いう理由で化粧をしないのをカバーする丸眼鏡がトレードマークだ。可愛らしい色が苦手とかで、いつも青系の素っ気ないデザインの力ジュアルな装いをしている。ドラえもんみたいだなとひそかに思っているのだが、俺は自称フェミニストなのでそんなことは口に出せない。

「ちょうど良かった。君に用事があるんだ」

「あたしに？」

「ああ。コーヒーをくれないか」

「うちは喫茶店じゃないんですけど？」

俺は手近な椅子に腰を下ろした。絵里は苦笑いしながらマグカップにコーヒーを注いでくれた。

「で、用事ってなあに？」

「君は原岡興産の社長令嬢だそうだな」

予想に反して絵里の表情はそれほど変わらなかった。むしろ、面白がる様に丸い目をさらに丸くして見せた。

「どう、香織お姉ちゃんは見つかりそう？」

「そう遠くないうちに」

「リュウさんってやっぱりすごいのね」

「やっぱり？」

「うちの社長にリュウさんのことを訊いたの。付き合い長いんですよ？」

「付き合いと言えるほどの関係がある訳じゃないがね」

「この社長の笠原美代子と知り合ったのは俺がまだ駆け出しの警官だった頃だから、過ぎた時間だけは確かに長い。」

今では京塚昌子ばりの肝っ玉母さんの笠原も当時はモデル時代の名残りのようなものを持っていて、自称カメラマンのストーカーにまとわりつかれていたのだ。それを笠原の友人の彼氏の友人である俺が追っ払ったのがくされ縁の始まりだ。一緒に飲み歩いていた時期があったせいで恋愛関係を疑われることもあるのだが、俺はある作家の言葉に倣って 仕事に義理を持ち込まない 友情にセック

スを持ち込まない 音楽にコンピュータを持ち込まない の三
ない主義を標榜しているの、笠原と寝たことはない。スマートフォ
ンに搭載されている音楽プレーヤー機能も使っていない。

絵里は口元に握った手を当ててくつくつと笑った。

「お父様と弁護士の方が「お姉ちゃんを捜すのに誰を雇うのか」
って話をしてるとき、リュウさんの名前が出たときはびっくりした
わ」

「君もその場にいたのか。反対はしなかったのか？」

「どうして？」

「俺が香織を連れ戻したら、君たち母娘の財産の取り分が減るだろ
う」

「あたしは財産なんてまったくあてにしてないから。だからほら、
こうやって仕事して自活してるでしょ。ホントは家も出たいんだけ
ど」

「どうして出ないんだ？」

「妹のことがあるから。百合とは会った？」

「玄関まで迎えに出てくれたよ」

「あの子、知らない車が来るとそうやって見に行くのよね。ひよっ
としたら、今でもケイスケが迎えに来るって思ってるのかも」

「ケイスケ？」

「従兄のロクデナシ。ママが話さなかった？」

俺は聞いたと答えた。絵里はそこにいない男を嘲笑うかのように
口元を歪めた。

「訊きたいことはそれだけ？」

「お姉さんについて、知っていることがあれば」

「特にないわ。歳が離れてるし、ママが再婚してあの家に住むよう
になった頃って、あっちはほとんど家にいなかったから」

「仲は良かったのか？」

「あたしは好きだったわ。その前からよく遊んでもらってたしね。
でも、向こうはどうだったんだろ」

「苛められたりは？」

「そういうのはなかったわ。お父様にはすごく反抗してたけど」

「普通、坊主が憎ければ袈裟まで憎いものだがな」

「あたしもそう思う。けど、香織お姉ちゃんはそういうのなかったわ。今考えたらすごいことだよな」

絵里は顔の半分で感心して、残りの半分で困惑するという器用な真似をしてみせた。他に何か訊いておくべきことがないかと考えた
が、特に思いつかなかった。俺はコーヒートの礼を言っ立ち上がる
うとした。

ふと、ずっと抱えている疑問が脳裏をよぎった。

「そういえば、一つ訊いておくことがある。君は自分の父親が俺を
雇うことを誰かに話したか？」

「社長には話したわ。だから その場にいたスタッフも聞いている
といえば聞いているわね。ウチの社長、声大きいから」

「違う。他には？」

「モデル見習いの子が一人いたから、その子もかな。それがどうか
したの？」

「いや、大したことじゃないんだが」

絵里を含めて四人いるスタッフは全員顔見知りだ。目当ての人物
がいるとすればその場にいたモデルということになる。

「よかつたら、その子が誰か、教えてくれないか？」

「最近スカウトされてレッスンに通い始めたばかりの子よ？」

「それは問題じゃないんだ」

不可解そうな表情ながら、絵里は自社のウェブサイトを開いて画
面を俺の方に向けてくれた。所属モデル一覧のページを開いて、サ
ムネイルの最後の方の一つをクリックすると凛とした顔立ちの黒髪
の少女の顔がアップになった。

「この子よ。綺麗でしょ」

「ああ。誰がスカウトしたんだ？」

「社長が天神地下街で。すっごくお気に入りみたい。ちょっと笑顔

が硬いけどね」

俺は画面に大写しになった少女の顔に見入った。メイクで幾分派手になっているが、それは榊原真奈以外の誰でもなかった。

マリーゴールドを出て何気なく自分の事務所立ち寄りそうだったが、特に用事がないことを思い出してそのまま非常階段を下りた。そのうち、こちらでの出入りが当たり前になりそうだった。

俺はZを置く為に自宅に向かった。店に入れてもらえればの話だが、ラピスラズリでは酒を飲まずにやりすぎせないかもしれないからだ。途中、別府橋通りが事故渋滞で流れが悪いのを利用して橋に電話をかけた。

「頼んだ情報は？」

「電話しようと思ってたところ。せつかちだなあ」

「悪かったな」

「いいけど。じゃあ、被害者の身元から。名前は近藤遼一、二十五歳。住所は中央区小笹。職業は飲食店従業員。犯歴なし。ただ、昔付き合っていた相手が覚醒剤所持で逮捕されたことがあって、そのときに取調べを受けてる。指紋もそのときのが残ってた」

「身元はそこから？」

「そうだね。原付の免許は持ってたけど、写真はまったくの別人だったそうだから。女装趣味があつたことは知ってる？」

「俺が見たときはちよつと派手目のOLにしか見えなかった。勤め先は分かっているのか？」

「中洲にある ヴァフレスカ ってショーパブ。オカマバーっていったほうがいいのかな」

「どつちも似たようなものさ。家族は？」

「出身は鹿児島県で、今夜にも両親が身元の確認の為に出てくるってさ。性癖をめぐって父親とはひどい不仲だったらしくてね。福岡に出てきたのも事実上勘当されたかららしい」

「交友関係は？」

「一つ、面白い　って言っちゃいけないだろうけど、不思議な事実が発覚してる。バッグの中の携帯電話が奇跡的に無事でね。連絡先を調べる為に開けてみたんだけど、待受画面に先週、須崎のラブホテルで殺された男の写真が使われていたんだ」

「浦辺某とかいう男だな」

「よく知ってるね？」

俺は答えなかった。質問が電波の途中で宙ぶらりんになった。

「……この前、僕に問い合わせてきたことと、何か関係があるの？」

「自分で調べてみたらどうだ。面白い事実が浮かび上がってくるかもしれないぜ」

長い沈黙があった。

「　　ねえ、ヤバイ話じゃないだろうね？」

「何のことだ？」

「捜査情報の漏洩とか、ややこしい話じゃないだろうねって言うてるのさ」

「大丈夫だよ。何があっても、おまえから聞いたなんて言わない」

「……頼むよ？」

「分かってる。ところで情報料だが　」

「二万円でもいいよ。さっさと振り込んで」

橋はそれだけ言うとそそくさと電話を切った。

少なくとも五万、下手をすれば一〇万円以上吹っかけてくる可能性もあったのだが、自分の尻がすっぽりと便器にはまり込んでいることに気づいたようだった。尤もそれでも橋がゴネたら、エルモに関する情報の出処が奴の不倫相手の西署の交通課員だということに灰めすという手もあったのだが。俺が橋の身辺調査を済ませていることを奴は知らない。

それはともかく、これで警察も浦辺康利という男の別の顔に一步步近づくことになった。エルモの身辺から高田泰明の存在が浮かび上がり、そこから高田と浦辺が同一人物だと知れるのにもう少し時間

は必要だろうか。

俺は村木という男の携帯電話を鳴らした。偶然にもヴァフレスカのオーナーは俺の中洲交番時代の知り合いだった。

「……おう、どうした」

「久しぶりだな。今日、おまえの店の従業員が轢き殺された。知っているか？」

「聞いてる。さっき、警察から電話があった。エルモがウチの店の名刺を持ってたんだ」

「聞きたいことがある。彼女と親しかった人間を紹介してくれ」

「店長をやってるサヨリって女を訪ねる。こっちからも電話してく」

それだけ言って電話は切れた。ぶっきらぼうで力の抜けた口調からは、彼が従業員の死を悼んでいるのかどうかは分からなかった。

渋滞を通り抜けて自宅の駐車場に辿り着いた。俺はZを突っ込んで滅多に使わないカバーを掛けた。着慣れないダークスーツを普段の格好に替えたい気もしたが、今日一日くらいは変装　　というほどのものでもないが　　をしておいた方がいいだろう。

朽木を呼ぼうかと思ったが、面倒なので別府橋通りに出て流しのタクシーを拾った。二つある目的地はどちらも中洲とその近辺にある。

中洲では老舗の部類に入るニューハーフ・ショーパブ　ヴァフレスカ　は中洲四丁目の那珂川沿いの雑居ビルの七階にあった。二人乗れば満員の小さなエレベータを降りると、廊下の突き当たりには扇情的な紫色の看板の灯りが点っていた。凝ったブロック体の　W a l e w s k a　の下にカタカナで　ヴァフレスカ　と記してある。

村木はフランス文学好きを自称していて、本当はルイ十五世の公妾の名前を載いて　ポンパドール　としたかったのだそうだ。しかし、有名なパン屋に使われていたので仕方なくナポレオン・ボナパルトの愛人の名を載いたという訳だ。尤も読みは間違っていて正確にはヴァレフスカなのだが、気付いたのが看板が出来上がった後

で、作り直す予算もなかったという理由で現在まで放置されている。こざわりと言ってもその程度のこと、その程度の店だった。

店内はフランス文学というよりは出来の悪い宝塚のセットという趣だった。豪華なシャンデリアのクリスタルは鈍く曇っていて、店全体がぼんやりとした光で満たされていた。それなりのレベルのクラブの後に居抜きで入っているのでインテリアは高級品揃いだ、何もかもが月日と共に擦り切れてしまった印象は否めない。店の奥にはご自慢のステージがあつて、LEDライトの照明機材や吊り下げ式のスピーカーの姿が見える。

九時を少し回ったところでまだ客の姿はなく、ホステスたちと呼んでいいのか、疑問は残るが　は控室にいるようだった。ステージで入念に踊りのチェックでもやっているのではと漠然と思っていたのだが、考えてみればショーは毎日のことであり、直前までリハーサルに追われる必要はないのだろう。それに今、汗をかいたらせつかく塗りたくった分厚いメイクが台無しだ。

カウンターの中に一つ、人影があつた。俺が声を掛ける前に向こうが先に口を開いた。

「　いらっしやい。オーナーから話は聞いてるわ」

気だるげな喋り方はマツコ・デラックスを連想させたが、体軀は逆に女でもそうはいないほど華奢だった。黒いドレスは濃い青の生地が暗がりですう見えただけだったが、一瞬、喪服に見えてドキリとさせられた。ショーパブのママという世間的なイメージから、俺はもうちよつと化け物じみたキワモノを想像していたのだが、彼女は口さえ開かなければ普通の厚化粧の中年女にしか見えなかった。彼女はサヨリと名乗り、俺は朽木と名乗った。非常事態に偽名として使うことは本人公認で、俺は朽木三郎名義の名刺まで持っている。

サヨリの向かいのスツールに腰を下ろした。サヨリは条件反射のような滑らかな手つきで俺の前にビールの小瓶とグラスと紫色のカットガラスの灰皿を並べた。手酌で注ごうとしたら手の甲を軽くは

たかれた。

「あんた、警察の人？」

「元がつくがね。今は個人でやってる」

「探偵さんってこと？」

「胡散臭いことは分かっているが、そうだ」

サヨリは名刺をくれといった。俺は持っていないと答えた。そう遠くないうちに警察が聞き込みにくることが分かっているのに証拠を残す訳にはいかない。

「いいけど。で、話って何なの？」

「エルモ 近藤遼一のこと聞いたか？」

「聞いたわ。あの子の身元引受人はあたしだからね」

「逮捕歴はない筈だが？」

「自分で何かしたことはないわよ。でも、付き合ってた男がロクでもない奴でさ。シャブで捕まっただけど、そのときに巻き添えであの子もパクられて。まあ、尿検査では何も出なかったんだけど、ああいうときってあたしたちみたいなのは苛められるんだよね。なかなか解放してもらえなかっただけじゃなくて、証拠もなしにパクったくせに身元保証人がいないと釈放できないとか言われて」

「不当逮捕だと騒げばいい」

「そんなことして、誰があたしたちみたいのを助けてくれるの？」

正しいのはサヨリの方だった。俺の現役時代にも被疑者がマイノリティだというだけですべての手続きが雑になったり、明らかかな差別対応をする警官は少なからずいた。それ以前もそうだったし、今もそうなのだろう。理由は簡単。世論に騒がれる心配がないからだ。話を戻してもいいか？」

サヨリは返事の代わりに細い肩をほんのちよつとだけ竦めてみせた。

「エルモには恋人がいた。高田泰明という男だ」

「ヤスさんね。知ってるわ」

「何をやっている男だ？」

「さあ？」

俺がジッと顔を見つめると、サヨリは慌てたように胸の前で小さく手のひらを振った。仕種だけを見ればまったく女にしか見えない。「うっん、違うの。意地悪してる訳じゃなくて、本当に知らないのよ。エルモにずいぶん根掘り葉掘り訊いたんだけど、当の本人も詳しいことは知らされてなかったみたい」

「高田はこの店の常連だったのか？」

「そうだけど、エルモと知り合ったのはここじゃないわ。あの子、店が終わった後とか休みの日に飲み歩くのが好きで、ヤスさんとは何処かのバーで声を掛けられて意気投合したとか言ってたわね」

「春吉辺りで？」

「たぶんね」

ホモセクシユアルの男が女装趣味のニューハーフをナンパするところが普通のバーで起こる可能性は限りなくゼロに近い。同好の土が集まる場所での話と考えるべきだ。

「ヤスさんって細いけどワイルドな感じで、エルモの超ストライクゾーンだったらしくてね。アタックしたのはあの子の方からだったみたい」

「そう言われても、俺は最近の高田を見ていないんだ。写真はないのか？」

「ないわ。ヤスさん、写真嫌いだったから」

「そいつは残念だな」

言葉と裏腹にそれほど残念ではなかった。警察はそのうちにここに捜査員を寄越すだろうが、話を聞くべき相手が警察への根強い不信感を持っている上に、大した物的な手掛かりがないのでは先を辿るのは困難だからだ。捜査の失敗を願う訳ではないが、俺としては少しでも時間の猶予が欲しい。

「ところで 少し訊き難いことを訊くが、構わないか？」

「何でもいいわよ。今まで、幾らでも訊かれてきたから」

「こいつを見てくれ」

俺は例のフォトスタンドの画像をサヨリに見せた。サヨリの眉間を深い皺が割った。

「これ、何？」

「あるところで見つけた。組み敷かれているのはエルモに間違いないな？」

「……ないわね。相手の男、誰？」

「それを訊きたいんだ。高田ではないよな？」

「そうね。ヤスさん、こんなに腕太くないし、太ってもいないし。あたし、一回だけお腹に触ったことあるけど、ホント、画用紙みたいにペツタンコなんだもん」

「だとすると可能性は二つだ。一つ、エルモには高田以外に男がいた。二つ、誰かがエルモを犯して写真を撮った」

「最初の二つはないわ。エルモはヤスさんに首ったけだったんだもの」

「すると誰か、エルモを狙っていた人物がいるということか」

「まあ、そうかもしれないけど……」

「何か、気になることでも？」

「朽木さんだったっけ。あんだ、ひよつとしてウチのお客さんを疑ってない？」

「この店の客だけを疑ってはいない。だが、客である可能性も捨てていない」

「何言ってるのか、イマイチ分かんないけど。でも、ウチの店のお客さんでこんな身体の人いたかなあ……？」

「確かに特徴のある男だな」

対比物がエルモの肢体だけなので正確なところは分からないが、エルモの身長が百六十五センチ程度だとしても、男は少なくともその二周り以上の大柄な体格の持ち主だった。全身がよく日焼けして浅黒く、腹は確かに太鼓腹一歩手前くらいの大きさではあったが、筋肉の隆起の仕方は明らかにジムでトレーニングを積んでいる人間のそれだ。

タトゥやピアスなどの目立つ特徴はない。だが、これが服を着ていてもやはり目立つことに変わりはないだろう。それがサヨリの記憶にないということは、この男はこの店には出入りしていなかったということになる。

サヨリはセーラムを啜えて火をつけた。場末のスナックのママのような蓮っ葉な啜え方が多香子のそれによく似ていて、こんなときだというのにお堅い顔をした多香子が水商売をやっているところを想像してしまった。さぞかし無愛想なホステスになるに違いない。

「こんな写真撮って、どうするつもりだったんだろ？」

プカリと煙が宙に舞った。

「合意のセックスじゃないのなら、脅し目的だろうな」

誰が何の為に？

それが例のMOに関わることなら、エルモに隠し場所を白状させる為だったと考えるべきだろう。エルモが恋人の死を知らなかったとすれば「この写真を高田に見せる」という脅しは成立する。フォトスタンドに写真を送ってみせることで脅しが本気だと知らしめる意味があったのかもしれない。

屈服したエルモはMOを預けていた花屋のことをしゃべった。だが、それは他人が代理で受け取りに行けるようなものではない。一方、脅迫者の側も花屋を襲撃してMOを奪還するほどの強硬手段にも訴えられない。そこでエルモを花屋に行かせて自分たちは近くでチャンスを待った。MOを奪い返し、事情と自分たちの顔を知るエルモを消すチャンス。

「エルモの　近藤遼一の葬式には出るのか？」

俺の問いにサヨリは侮蔑の笑みで応えた。

「そんなこと出来る訳ないじゃない。エルモのお父さんは、エルモが年頃になってもジャニーズ系のアイドルにしか興味を示さなかったのを気味悪がって、納屋で一晩中折檻したような人なのよ。あたたちなんかが行ったって、息子を汚染した病原菌みたいな目で見られるのが関の山だわ」

「そういう人間らしいな。しかし、だからこそ参列するのも悪くないんじゃないか。誰の無理解で息子が故郷を追われて非業の最期を遂げたのか、教えてやれるだろうに」

「他人事だからって勝手なこと言わないで」

「確かにそうだな。悪かった。話を聞かせてくれてありがとう」

「どういたしまして。あ、お代は貰わなくていいってオーナーに言われてるから」

俺が財布を取り出そうとしたのを見てサヨリは言った。俺はその言葉を無視して三千円をカウンターに置いた。

「だから」

「飲み代は喜んで御馳走になるよ。これは香典だ。残念ながら、俺にはエルモの墓前に手を合わせる機会は巡ってきそうにない。あんたが預かっておいてくれ」

「そんな機会、あたしにだってこないわよ」

「きたらの話でいいさ」

慫然とした表情のサヨリにそう言って、俺はヴァフレス力を後にした。

中洲大通りにあるラーメン屋で遅い夕食を済ませてから、俺は国体道路沿いのカフェに入って、ずいぶんと更新された形跡のないレズビアンバーのサイトを見ながら電話をかけた。

「はい、バー・ラピスラズリです！」

電話に出たのはハスキーな声の女だった。喉の奥に引っかかるような擦れ具合は風邪によるものかもしれないし、酒灼けによるものかもしれない。

恵美里に名前を出して話を進めることも考えたが、彼女とてこの店の常連という訳ではない。俺はエルモを話の切り口にすることにした。

「失礼、そちらにエルモさんはいらっしゃっていますか？」

「いらっしゃってえ？」

女は少しヒステリックな笑い声をあげた。電波を介してアルコールの匂いが伝わってきたような気がした。ケラケラと勘に障る笑い声をしばらくやり過ごした。

「ごめんなさい、そんな言葉遣いする人、うちのお客さんにいないからびつくりしちゃったあ。あんた、誰？」

「調査会社の者です」

「チヨウサガイシャ？」

「分かりやすく言えば探偵です」

「ワオ！」

女の声のテンションが上がった。

「あたし、推理小説好きよ。最近のじゃなくて古いやつ。ほら、学校の図書館とかにずらーっと並んでるみたい。エラリー・クイーンとか、ファイロ・ヴァンスとか。で、探偵さんがリョウちゃんに何の用？」

さて、どう出たものか。迷うほどのことではなかった。酔っ払いを相手に低姿勢の正攻法は無駄に時間がかかるだけだからだ。

「なるほど、彼女は本名で呼ばれているのか」

「えっ？」

「推理小説が好きなら、探偵の質問が常に誘導尋問になっていることも知ってる筈だな？」

短い沈黙があった。電話の向こうで小さく息を呑む気配がした。

舌打ちをしたのかもしれない。

「……そりゃ、エルモってお店での名前だからね。別に変じゃないでしょ？ なによ、そんなことで上手く話を訊き出したとも言いたいのか？」

「彼女が自分の仕事のことを話すほどの常連だということも分かったよ。君のところのような店の客は人一倍プライバシーに煩いだろうに」

長い沈黙があった。切られるかと思っただが、通話は繋がったままだった。

「ねえ、悪いんだけど忙しいの。用がないなら切るわよ」

「用はあるよ。切りたければ切っても構わないが、その場合、俺がそちらに行くことになる」

「うちに？ あんたが？」

「何か問題が？」

「うち、ノンケの人、お断りなだけ」

「ホームページには男性の入店も可、とあるぜ？」

サイトには 当店はレズビアン&バイセクシャル向けのバーです

が男性の入店もOK（冷やかし厳禁！）とあった。

「冷やかしはお断りって書いてあるでしょ」

「そんなつもりはないよ」

「ふん、そう言いながら、いざとなったらゴミでも見るような目であたしたちを見るのよ、あんたたちは」

「そんなつもりはないと言ってるだろう？」

「ついさっきの似たような会話の記憶が俺を苛立たせた。そして、それは向こうに伝わったようだった。女は小馬鹿にするように小さく息を吐いた。

「でたでた、どうして男ってこうなんだろ」

「何のことだ？」

「最初は優しい言葉とか態度ですり寄ってくるくせに、ちょっと思い通りにならないとコロツと態度を変えるって言ってるの！」

女が言っていることは微妙に意味が通っていないかった。それがアルコールのせいか、セクシャルマイノリティ故の警戒心のせいか、或いは、彼女がエルモに何らかの感情を抱いているせいかは分からない。勘では最後の一つ以外は当てはまるような気がした。

「それが女に宗旨替えをした理由か？」

「関係ないでしょ。あんたにあたしの何が分かるのよ？」

「宗旨替えという言葉の意味が分かる程度には教養がある、ということかな。本を読むのが好きというのはまんざら嘘じゃないらしい」

女は短い沈黙の後、これみよがしの溜め息をついた。

「……あんた、ホントにやなヤツね。まるで刑事みたい」

「外れてはいない。その昔、県警の薬物対策課にいたことがある」

「ヤクブツタイサクカ？」

女はおうむ返しに言った。言葉の意味が脳に染み渡るのに少し時間がかかったようだった。

「そこ、シャブとかハツパとか……」

「LSD、向精神薬、エクスタシー。その他、様々な違法薬物を取り締まる部署だ」

「ねえ、あんた、リヨウちゃんに何の用事があるの？」

俺はエルモが薬物に絡んでいるとは一言も言っていない。だが、意図的に誤解を招くように話を進めたことは認める。

勿体ぶるかのように俺は薄い吐息をついてみせた。

「彼女に用があるというよりは、彼女の知り合いの男に用があると
言った方がいいんだがね」

「オトコ？」

「高田という男だ。おたくにも出入りしている筈だが」

まったくの当てずっぽうだが、ラピスラズリがバイセクシャルでもOKの店なら二人の出会いの場だった可能性はある。

「タカダ……ヤスさんのこと？」

「下の名前は泰明だ」

「ああ、ヤスさんなら時々来るけど……ヤスさんが何をしたの？」

「推理小説が好きなら、それを洩らせないことは分かっているだろう？」

「ふーんだ、ケチ！」

「褒め言葉と受け取っておこう。それより、君からは直接話を訊く必要があるな。特別に入店許可を出してくれないか？」

「しょうがないなあ。他のお客さんの迷惑にならないようにしてよ？」

「俺は人畜無害で通っているんだ」

「嘘くさ」

俺は店の場所を訊いた。女は説明の後、分からなくなったら迎えに行くとも言ってくれた。最初は若い女かと思ったが、そういう物言いや気遣いはそれなりに年嵩にも感じられた。

「迷子にならないように努力する」

「あたしとしては迷子になってくれた方がいいんだけど。ところで
あんた、名前は？」

「金田一耕輔」

「えーっ」

「何か問題が？」

「あたし、横溝さん嫌いな。こっちに来るまでに、もうちょっとマシな探偵になってて」

俺は考えておくと答えて電話を切った。

ラピスラズリはホテル街の北側、那珂川沿いの打ちっぱなしのコンクリートの壁が剥き出しになった雑居ビルの五階にあった。

薄汚れたエレベーターホールに面した一坪ほどのスペースは床も壁も古びたタイル張りで、壁にはレゲエやヒップホップ系のイベントのポスターが所狭しと貼られていた。前のものを剥がさず上から新しいポスターを重ねて貼ってあるせいで、告知目的というより壁のモザイク装飾のように見えた。イベントに詳しい人間でなければどれが直近のものかを見分けるのは不可能だろう。

「いらっしやいませー！」

テンションの高い嬌声に迎えられて、俺は足を踏み入れた。

細長く狭い店内にはタバコの煙が倦んだ空気と交じり合って満ちていた。隠れ家と言うより巢窟という呼び名がぴったり薄暗く、バックバーの横の壁に青いネオンで描かれた“BAR”の文字や申し訳程度に点されたピンスポット、奥の壁に掲げられている液晶テレビの深海の映像が放つ青い光が明かりのすべてだった。最初は白かったであろう壁は来客が残していったと思しきサインやイラストで埋められている。著名人のものであるかどうかははっきりしない。騒がしいクラブミュージックが難聴必至の大音量で鳴っていることを想像していたのだが、流れていたのはシールズ・アンド・クロフツの Summer Breeze だった。

カウンターの中に三人いるスタッフは全員若い女で、それぞれ色とデザインは違うがオフショルダーの豹柄のカットソーに中折れのハットという点は共通していた。カウンターには一〇席ほどのスツールが並んでいて、狭い通路を挟んだ背後には壁に沿ってベンチ型のソファアが並べて設えてあった。スツールは奥から半分ほどが埋

まっている。

ソファに間に小さなテーブルがあるだけで酒を飲むには不向きな造りだったが、その使用目的は座っている連中が教えてくれた。禁欲的な顔をした黒髪の年嵩の女が、甘い顔立ちの若い女と身体全体を絡め合うような勢いでいちゃついていたのだ。その隣ではOL風の若い女が二人、隣の様子を済ました顔で眺めている。二人の体の距離は節度を保っていたが、その手はプラトニッククラブを卒業したばかりの中学生のようにしつかりと重ねられていた。

当然のことだが、ソファの一组を除いた客たちの視線が俺に集中した。俺はそれに曖昧な笑みを返ししながら、空いていた一番手前のスツールに腰を下ろした。しばらく注がれていた視線は程なく離れていった。俺に興味がある訳ではないからだ。彼女たちはただ、俺という異物が自分に害をもたらすかを知りたいだけだった。

「ひよつとして、金田一さん？」

三人の中では一番年嵩の女が俺の前に立った。電話で聞いた声だった。俺はそうだと答えた。

女は身を乗り出すように俺に顔を近づけた。

「小説とか映画では見たことあるけど、本物の探偵なんて初めて見たわ」

「何事にも最初があり、見識を新たにするのはいいことさ。まあ、現実の探偵は小説や映画に比べると、ずいぶん非カラフルな日常を送っているがね」

「そうなの？」

「残念ながら」

女は片頬に笑窪を浮かべた。カットソーの胸元は大きく開いて中身が丸見えだったが、残念なことにポリウムはあまりなかった。首から提げたストラップの先のプラスチックの名札には Kei と記してあった。目の周りが赤らんではいるが、先ほどの会話で見せた酔っ払いの危うさと口調の剣呑さは消え失せていた。

「ケイさんと呼べばいいのかな？」

「さん付けは照れるな。ちゃんのほうがいい。由来は何だか分かる、名探偵さん？」

「本名じゃないのか？」

「本当の名前はおばあちゃんみたいで、あんまり好きじゃないんだ。だから、普段からケイって名乗ってるの」

「当てたら？」

「あんたの質問に答えてあげる。どう？」

「ヒントは？」

「あたしのお気に入りのボトルがあるの。それがヒントよ。ねえ、一杯戴いてもいい？」

「どうぞ。俺も同じものを」

ケイはよく分からない鼻唄を歌いながらバックバーからボトルを手に取って戻ってきた。ブッシュミルズのブラックブッシュだった。ロックグラスを二つ、二人の間に置いて氷を落とし、ボトルから琥珀色の液体を並々と注いだ。

「乾杯」

グラスの縁をそつと合わせた。俺はそつと舐めるように口をつけた。ケイはソフトドリンクを飲むような勢いでブラックブッシュを喉に流し込んだ。

「どうして横溝が嫌いなんだ？」

「嫌いってほどじゃないわ。ただ、金田一耕輔って探偵としてはどうかなって思うだけ。殺人防御率って知ってる？」

「聞いたことなら」

古今東西の探偵小説の著名な一〇作品において、主人公の探偵が事件にかかわって以降に起きた殺人の件数を作品数（この場合は一〇）で割ったものを、野球の投手の防御率にかけて“殺人防御率”という。雑誌の企画で考案された数字で、要するに探偵がいかに次の犠牲者が出る前に事件を解決出来るかという指標だ。金田一耕輔はこの数字がぶつちぎりに悪い。

「タイトルのつけ方のセンスは好きなんだけどな。

病院坂の首縊

りの家　なんて、そうそう思いつくものじゃないと思わない？」

「　犬神家の一族　もそうだな。あれは他のどんな名前でも締まらない」

「確かにそうよね」

ケイはグラスをぐいと呷った。顔はメイクで若く見せられても喉のあたりの皺は隠せない。三〇歳は超えている筈だ。

「君はどんなジャンルが好みなんだ？」

「女性作家の翻訳物で、どちらかと言えば本格ミステリかな。最近のコージーミステリは読まないな」

「アガサ・クリステイ、ドロシー・L・セイヤーズ、ミネット・ウォルターズ、P・D・ジェイムズ、スー・グラフトン、サラ・パレツキー。そんなところか？」

「……大体。あと、シャーロット・マクラウドとかキャロル・オコネル、マーガレット・ミラーってとこね」

「ずいぶんとマイナーな作家を知ってるな」

「まあね。そういうあんたは？」

「俺は本屋で目に付いた本を適当に手に取るといった感じだな。しかし、一つだけポリシーがある」

「何？」

「ベストセラーは読まない。くだらないのが多いんでね。世界の中で寝言を叫ぶくらいなら、新聞の訃報欄を読んでいた方がマシだ」

ケイは小さく吹き出した。

それからしばらくケイが適当なミステリを挙げ、俺が読んだことがあるかどうかを答えた。彼女が挙げたものの八割前後は読んだことがあった。彼女は感嘆の声をあげた。

「すごい。ちよつと感心しちゃった」

「時間を潰すのは俺の仕事の不可避の部分でね。音楽を聴くか、本を読むのが手っ取り早いんだ」

「音楽は何を聴くの？」

「演歌以外なら何でも。好んで聴くのはジャズ」

「へえ……。金田一にしては洒落てるわね」

「緋の着物に袴、ソフト帽って訳にはいかないさ。それを言うなら、君だってお堅い法医学者には見えないぜ、ミス・スカーペッタ」

「えっ？」

「当たり前だろ？」

ケイはまじまじと俺の顔を見た。俺は半分ほどになったグラスを掲げてみせた。

「主人公のケイ・スカーペッタと恋人の元FBI心理分析官がロンドンのホテルで飲んでるシーンで始まるのは 接触 だったな。そのシーンで飲んでいたのがブラックブッシュ。お気に入りになったのか、その後の作品でも度々出てくる」

「正解。よく分かったわね？」

「日本で売れる翻訳ミステリというのは意外と少ない。女性作家となれば尚のことだ。それなのに君はあれだけ売れた 検屍官 シリーズのパトリシア・コーンウェルを挙げなかった。日本ではマイナーな作家を何人も挙げたのにな」

ケイは外人がやるように大げさに肩を竦めた。

「ゲームはあたしの負けね。いいわ、質問に答えてあげる。リョウちゃんとヤスさんに用があるんだったわね？」

「ああ。しばらく来ていないという話だったな」

「いつつきりだったけ？」

問いは俺に向けられたものではなかった。ケイの隣に立っていたキツネのような面長な女がここ一ヶ月は見えていないと答えた。一番向こうの丸顔の女はカウンター越しに男の二人連れと話し込んでいた。傍目にはガールズバーの従業員とそれを口説こうとしている普通の男性客の姿にしか見えない。

「エルモの本名を知っているなら、いずれ耳に入ることだから知らせておこう。残念な知らせだがね。エルモ 近藤遼一は今日の昼ごろ、交通事故で亡くなった」

「えーっ！」

「そうなんですか!？」

隣のキツネ女も加わってきた。名札には Nagisa と記してあった。

「ヤスさんはそのことを？」

「テレビのニュースで名前が出ているから、見ていれば気付いているかもしれない。だが、連絡がとれないんだ」

取れる筈は勿論ない。いかに日本の携帯電話が高性能でも涅槃まで電波は届かないからだ。

「それで、あたしに訊きたいことって？」

「ここ以外で高田が出入りしているような店を知りたい」

「そういうことね……。親不孝のアクアは？」

「行ってみた。ここしばらく、姿を見せていないそうだ」

「だったらどこかな……。ピアノツシモは？」

「何処だ、その店は？」

「博多川沿いのショットバーよ。うちみたいなカジュアルな店じゃない、ちゃんとした。何て言うんだっけ、ああいうの」

「オーセンティック？」

「そう、それ！」

九州最大の歓楽街、中洲はその名の通りに那珂川に浮かぶ中州状の島なのだが、それによって川が分流されたうちの一口にも満たない支流の部分にだけ博多川の別称がある。川向かいは下川端商店街で、どちらかと言えば中洲の静かな裏側といった趣だ。

「高田はそこに出入りしていたのか？」

「うん、ウチに来る前にそこで適当に飲んでくるって感じで。ヤスさんってウイスキー大好きなんだけど、ウチはホラ、こういうお店だからあんまり種類置いてないから」

「ブラックブッシュがあるの？」

「あれはあたしの趣味」

ケイは悪戯っぽい笑みを浮かべた。確かにバックバーにはテキーラやウオトカ、ラムといった大騒ぎしながら飲むのに向いた酒が多

く並んでいた。ウイスキーが寡黙な酒という訳ではないと個人的には思うが、やはりこの手の店では敬遠される。

「ここへはいつも、エルモと二人で？」

「ううん、そんなことないわ。一人で来ることもあったし、熊本から出てきたっていう従妹の女の人と一緒にこともあったし」

「従妹？」

「なんていったっけ？」

質問はまたしても隣のナギサに向けたものだった。いつもそういう役回りなのか、ナギサはよどみなく「カオリさんですね」と答えた。

「それはこの女か？」

俺は桐島沙耶香の顔写真を二人に見せた。ケイは間違いないと言った。

「でも、先にこの店に出入りするようになったのはカオリさんの方ですよ」

ナギサが口を挟んだ。

「そうだったっけ？」

「ええ。そっか、ケイさんはもう一個の系列店の方が長いから。最初、ナギサさんが誰かの紹介でウチに来て、しばらく来なくなってたんですけど、一年くらい経ってからかな……ヤスさんと連れ立って来られるようになったんです。それ以降はお一人でも復活って感じですね」

「カオリはいつ頃からここに出入りしている？」

「あたしがここで働き始めた頃だから……三年前くらいかな」

ナギサは他の客に呼ばれて注文を取りに行った。俺はケイに向かって声を潜めた。

「一つ、訊きにくいことを訊いてもいいか？」

「どうぞ、金田一さん」

「高田はホモセクシャルだったのか、それともバイセクシャルだったのか？」

ケイの目が点になり、次の瞬間、彼女は弾けるように笑いだした。他の客の視線が吸い寄せられるように集まったが、ケイが何でもないとしように手を振るとすぐに散っていった。

俺はケイの笑いが収まるのを待った。

「あー、おかしい」

「……俺はそんなに変なことを言ったか？」

「そういう訳じゃないわ。そんなにはつきり訊く人がいないだけ。さすが金田一さんね」

「褒められているのか？」

「勿論よ。質問の答えだけ」

ケイはすつと声をひそめた。

「ヤスさんはホモよ。女にはまったく興味はないって言ってた。昔はバイだったみたいだけどね」

ケイの口調にはうつすらと嫌悪感がにじんでいた。ノンケの俺にはいつしよくたに見える同性愛者の性的嗜好にも実際には細かい隔たりがあつて、お互いに相容れない部分があるらしい。

「カオリはどうなんだ？」

「ウチに来るくらいだからノーマルじゃないんじゃないですか？」

戻ってきたナギサの言葉にケイが少し不服そうな顔をした。

「男嫌いとは言つてたけど、ピアノとまでは言えないんじゃないかな。あたし、ちょっと前に酔つた勢いで迫つてみたことあるんだけど、上手くかわされちゃつたのよね。まあ、半分冗談だったんだけど」

「その割には、さつきは名前も思い出せない風だったか？」

「あたし、人の名前覚えるの苦手なの」

ケイは苦笑いとも照れ笑いともつかない曖昧な笑みを浮かべた。スタッフの手前、出来ればカオリに迫つた話はせずにやり過ごしたかつたのだろう。

「誰か、仲良くしていた人間はいないのか？」

「特にいなかったわ。常連さんと盛り上がることはたまにあつたけ

ど、基本的に一人で来て、空いてれば一番奥のスツールに座ってお酒飲みながら本読んだり、あたしたちと雑談したりするくらい」

「だったら、ここでなくても良さそうなものだな」

「うちに来るお客さんがみんな、ノルウェイの森 を歌いに来てる訳じゃないわ」

回りくどい物言いだったと言わんとするところは分かった。 I once had a girl, Or should I say she once had me。同名の小説のおかげで恋愛の名曲扱いされているが、あの曲はナンパして女の部屋に行ったら肩すかしを喰わされた男の歌だ。

カオリ 桐島沙耶香について、他に分かっていることがないかと訊いてみたが、予想通りに彼女は個人情報に関わることはほとんど何も話していなかった。普通の店ならイベントの招待状や年賀状を送るのに住所と名前を聞かれたりもするが、そういう店でもない。一つだけ分かったことは、二人のときに浦辺が彼女を「カオリ」と呼んでいることだった。だが、それだけで桐島沙耶香の偽装を論破できるものでもなかった。

スマートフォンで地図でピアニッシモの場所を確認して、ナギサにも一杯御馳走してからラピスラズリを後にした。ケイは店の外まで見送りに来た。

「……ねえ？」

「何だ？」

「あんだ、あたしが店に来るなって言ったらどうするつもりだった？」

「何もしないさ。俺が店に怒鳴り込んで客と他の従業員を叩き出した後、君を壁に手をつかせて後ろから犯すような真似をしたとでも思っているのか？」

「うっん、あんたはそんなことしなれと思うけど」

「君に俺の何が分かるんだ？」

女は小さく笑って「また来てね」と言った。俺は少し迷ったが、

また来ると答えてエレベータに乗った。

ケイが教えてくれたバーに行く為に、国体道路に出て中洲へと逆戻りした。春吉橋を渡って少し歩き、中洲大通りの入り口で南新地と反対側に折れた。

中洲を南北に貫くこの通りはともかく、それ以外の路地は歓楽街という割にはけばけばしくもなければ明るくもない。ネオンや看板の人工的な灯りが暗がりには浮かんで見える風景は迷路を連想させるほどだ。中洲は大した広さではないが、細い路地が入り組んでいるので不案内な人間にとっては文字通りのラビリンスだろう。

ピアニツシモ は上川端のアーケードに繋がる橋の袂から少し歩いたところにあった。確実に俺よりも年嵩の古びた雑居ビルの地下で、短い廊下の突き当たりにあるドアの古びた看板には古くさい書体で P I A N I S S I M O の文字が踊っていた。

ドアを開けるとカウベルが軽やかに鳴った。

店内にはスツールが五席のカウンターと二つのテーブル席があったが、客の姿はなかった。柔らかい色合いの間接照明に満たされていて、この手の老舗にありがちな重厚さという名の息苦しさは感じられない。流れているのはゼロニアス・モンク・クインテット。

浦辺康利がこういう店に通っていたというのはいささか意外だったが、それは俺の勝手な先入観というものだろう。

「いらっしやいませ」

老齡のバーテンダーが恭しく頭を垂れた。慇懃無礼さを感じさせない仕草だった。豊かな白髪と皺の多い浅黒い顔をしていて、パナマハットを被らせたら渡辺貞夫のそっくりさんでも通用しそうだった。彼は静かな手つきでコースターと灰皿を俺の前に置いた。

「何になさいますか？」

「ラフロイグの一〇年をシングルで」

「飲み方はどうなさいますか？」

「ストレート、ノー・チエイサー」

バーテンダーは目を瞬かせてから、合点がいったように笑みを浮かべた。CDデッキの前にはモンクの *Straight No Chaser* のCDが立て掛けてあった。

「畏まりました」

シヨットグラスが用意され、バーテンダーがラフロイグのボトルを静かに傾けている間、俺はバックバーに並ぶボトルを眺めた。あべき酒がすべてあつて、必要のない酒は一本もない端正なセレクションだった。敢えて言うなら 電気ブラン が遊び心が過ぎる感が否めないが、この国産初のブランデーベースのリキュールが好きという物好きは確かにいる。俺の周りだと権藤康臣がそうだ。

「どうぞ」

琥珀色の液体で満たされた小さなグラスと、カシユーナッツを盛った同じくらい小さな皿が現れた。

俺はラフロイグを少し口に含み、舌の上でゆっくり転がした。シヨットグラスに入ってくるからと言って一息に空ける必要はどこにもない。そんな勿体ないことをする理由もない。

この酒は俺のファーストチョイスで、他人と一緒に酒を飲む必要がないときにはこれをオーダーすることになっている。人によっては消毒液だの正露丸だのと口を極めて非難する独特のヨード臭があつて、決して万人受けする酒ではないが、慣れてしまえば逆に癖になるところがある。無愛想な女のようなとっつきにくさの奥にある口当たりと深い味わいは、わずか一〇年の若い酒とは思えないほ

どだ。

「美味しい」

「ありがとうございます」

やがてモンクの演奏が終わり、バーテンダーがCDを替えた。今度はビル・エヴァンスだった。トリオではなくソロのもので、流れ始めたのは *here's that rainy day* だった。

「どなたかのご紹介ですか？」

詮索しているというよりは会話の切り口として訊いたような口調だった。俺は飲み干したグラスを掲げてお替りを頼んだ。

「高田という男にこの店のことを聞いたことがあるんだ。一緒に来る機会はなかったが、近くを通りかかって、ふと、思い出してね」

「高田様……ですか？」

「ひよつとしたら、岸川と名乗っていたかもしれない」

「ああ、岸川様ですか。ちょっとお痩せになった、目つきの鋭い」

「その男だ。岸川ってのは奴の仕事上の名前だね。通りがいいからって、そっちの名前を名乗ることがあるんだ」

俺の前に新しいグラスが置かれた。

「奴はよく来ていたのかい？」

「そうですね。多いときは週に二度ほど。そう言えば、近頃はお見えになられていませんか」

「来られないだろうね」

バーテンダーは何か不穏な物を感じたように眉を顰めた。

「何か、おありになったんですか？ 身体の調子があまり優れないようなことをおっしゃってましたが」

「死んだよ」

「……えっ？」

プツンとスイッチが切れたような沈黙。俺はJPSに火をつけた。「ご病気か何かで、ですか？」

「残念ながら違うね。一週間ほど前、須崎埠頭のラブホテルで殺人事件があつたのは知っているかい？」

「ニュースで拝見しました。ですが、被害者の方のお名前は違っていたように記憶しております。何といわれましたかね？」

「浦辺。浦辺康利」

「そんなお名前でした。それが 岸川様なんですか？」

「浦辺が本名だ。三つの名前を使い分けていたんだ」

「そうでしたか……。それで、あなたは？ 警察の方ですか？」

「元、ね。今はフリーでやってる」

俺は自分の名刺を渡した。バーテンダーはそこで思い出したように自分の名刺を寄越した。表の看板と同じ書体で記された店名の下に 伊東崇 とあつた。惜しい。一文字違えば T SQUARE のフロントマンと同じだ。

「奴について聞かせて欲しいんだ。どんなことを話していたか。誰か、一緒に来る人間はいなかったか」

「申し訳ございません、お客様の個人的な事柄についてお話しするのはこの仕事のタブーです。お分かり頂けると思いますが」

「奴はもう、この世の人間じゃないぜ？」

「そういう問題ではございません」

柔らかい口調だったが断固とした拒絶だった。俺はしばらくの間、伊藤の顔を眺めてから、ラフロイグの残りを飲み干した。

「そう言うだろうと思つたよ。幾らだ？」

「三〇〇〇円戴きます。ご理解下さつて感謝します」

「大袈裟に言われるようなことじゃないさ」

代金を払い、小さなグラスで貰つた水を飲み干して、俺はスツールを降りた。最後まで恭しい会釈を受けながら店を出た。

実を言えば、ドアを開けた瞬間に浦辺の話が聞ける可能性は半分以上だと思つていた。あまりにも真つ当なバーだったからだ。真つ当な店の真つ当なバーテンダーは口が堅くなくては務まらない。

しかし、ここで生前の浦辺に繋がる糸が切れたことは事実だった。

ひよつとしたら、浦辺はここにも香織を同伴していたかもしれない、上手くいけば彼女の擬装を剥ぎ取る材料が手に入っていたかもしれない。それが捕らぬ狸の皮算用であることは自覚しているが、行き止まりを突き付けられるのはやはりいい気分はしない。

今日は帰って風呂に入り、明日から心機一転といくか。

そんな考えを抱きながら階段を上ろうとしたとき、地下へ下りてくる階段の上の方から呂律の怪しい大声が聞こえてきた。

「何よお、ここの地下に、アタシの知り合いの店があるって、言ってるじゃん」

「いや、だから、そんなとこに行かなくてもいいじゃん。それよりも……ホラ、約束だろ。早く二人つきりになれるところにさ」

「えーっ？ もうー、タカハシさんったら、なーに言ってるのよお。ねえ、そんなにアタシとセックスしたいのお？」

「オイッ、声が大きいって！」

酔った女の語尾は男の抑えた怒声に飲み込まれた。姿は見えなくても階下に降りてくる踊り場で揉み合いになっていることは間違いない。なかつた。

ここまで露骨ではなくても、似たような光景は中洲でも決して珍しくない。おそらく、日本全国の何処の盛り場でも同じことだろう。さて、どうしたものか。

ビルの地下にピアニツシモ以外の店はない。つまり、戻ったところで鉢合わせするのは避けられなかった。俺は顔を伏せて通り過ぎるつもりで階段に足をかけた。

だが、次の瞬間に俺はその場で凍りついた。男と揉み合っているワインレッドのワンピース姿の女が榊原真奈だったからだ。

「んー、いいよお。約束だし。でも、もう一杯だけ飲ませて。ねっ？」

「仕方ねえなあ。じゃあ、途中で酒買って行こうぜ。それでいいだろ？」

「えーっ？」

真奈はすっかり酔っ払っていて、表情筋はアルコールで溶け崩れたようにだらしく緩んでしまっていた。メイクは不似合いに濃く、特に横広にニンマリと広がった真っ赤な唇は食虫植物の花弁を連想させた。

何故、彼女がここにいるのか。何をしているのか。相手のタカハシなる男は誰なのか。そもそも、ピアノシモが真奈の知り合いの店とはどういうことなのか。

疑問は幾つも浮かんだ。しかし、やるべきことはそれを晴らすことではなかった。

「何をしている？」

俺の声は低い。分類としてはいわゆるバリトンというやつで、しかも錆を含んだ掠れ声なので余計に低く聞こえる。間違っても千の風に乗って など歌えない声だ。その声がより一層冷えて低くなっているのを感じた。

二人は俺の方を向いた。真奈は夜道の看板でも見るような曖昧な顔で。タカハシは不意の闖入者への苛立ちを露わにして。

「んだよ、てめえに関係ねえだろ」

「関係ないとは言えない。おまえが連れているその女は高校生だろう？」

「えっ？」

相手の男がギョツとしたような顔で俺を見た。

身長はおそよ百六十五センチ、メタボリック症候群間違いなしのだらしない体型をしているが、口調からして歳はそれほどいいない。常に頬の内側の肉を噛んでいそうな下膨れに銀縁の細い眼鏡。今の季節には少し早いグレンチェックのスーツの仕立ては悪くなかった。だが、さっきからの運動のせいで着崩れて皺が寄り始めていた。

俺は階段を一段上がった。タカハシは後ずさるように身体を仰け反らせた。

「て、てめえに関係あるのかよ!？」

「大ありさ。彼女は俺の知り合いでね。名前は榊原真奈。紅華学園の二年生。医療法人敬聖会の理事長夫妻の御令嬢でもある。そうだろう、タカハシ?」

呼び捨てにされてタカハシの顔が紅潮した。

「だったらどうなんだよ。俺たちは合意の上でやってんだ。邪魔すんな!」

「残念ながら、合意があるかどうかは淫行の成立要件じゃないんだ。県青少年保護育成条例違反、並びに未成年者飲酒禁止法違反。初犯なら懲役一年六ヶ月、執行猶予三年といったところかな」

「てめえ……警察か」

「元、な」

今日は何度、この自己紹介をしたか分からなくなってきた。ちなみに懲役云々の数字は適当に挙げたものだが、実態とそう離れた数字でもない。

タカハシの真っ赤な顔が、やがて無表情に近いものになった。やる気ならそれでも構わない。俺は肩を小さく上下させて身体の余計な力を抜いた。

「このまま彼女を置いて立ち去るなら、事は荒立てないでおいでやる。南新地で一発抜いて帰るなり、Gate'sの裏のDVD屋で無修正モノを買って帰るなり、好きなようにしろ」

「……てめえ、いい加減にしねえとフルボッコにすんぞ」

「やれるものならな」

階段を三段挟んで、俺とタカハシは対峙した。真奈は相変わらず事情が呑み込めないような顔をして辺りをキョロキョロと見回している。

「もう一度だけ警告してやる。彼女をおいて大人しく帰れ　うおつとおツ!」

その瞬間、俺は階段を踏み外し、とつさに引いた右足が一段下にながった。膝でバランスをとったので転倒はしなかったが、大きくよろけて身体が泳いだ。

次の瞬間。

「うらああああッ！」

チャンスと見たのか、奇声をあげてタカハシの身体が躍った。莫迦が、こんな安直な誘いに引つ掛かるとは。

俺は身体を沈め、下半身のバネを生かして突っ込んでくるタカハシを身体ごといなした。

目標物を失ったタカハシは踏鞴を踏んだが、階段上でバランスなど取れる筈もない。それでも手摺を掴んで持ち堪えようとする巨体に後ろから追い討ちの蹴りを入れた。タカハシは為す術もなく転落していった。

安普請のビルの廊下に地響きを立てて肉の塊が転がった。だが、辛うじて受身をとれたのか、タカハシはよろよろと立ち上がった。

「……つくしよう、てめえ」

「まだ生きてるのか」

俺は階段を降りて、タカハシの胸板に蝶野正洋ばりのケンカキックを叩き込んだ。木村健吾が何度訂正されてもテレビ中継でヤクザキックと言いつづけたフロントハイキック。

そのまま、体重を掛けてタカハシの身体をコンクリートの壁に縫いつけた。再び地響き。

「……かはッ！」

蹴られた胸より背中が壁にぶち当たって呼吸困難に陥ったようだった。俺はそれでも容赦なく胸倉を掴み、力任せに何度も壁にどやしつめた。吐き出される息の臭さに顔を背けたくなるのを我慢して繰り返すと、タカハシの顔が徐々に青白くなってきた。

「ちょ、ちよっと、分かった、ギブ！ ギブギブッ！」

「ギブ？ 何をくれるんだ？」

最後にもう一度、全体重を乗せてタカハシの身体を壁に叩きつけた。タカハシはその場にずるずるとへたり込んだ。

俺はタカハシのはだけたジャケットの内ポケットからグッチの長財布を抜いた。カードポケットからクレジットカードを引き抜く。

名義人はタカハシタクヤ。他にも身分証明書らしきものを捜したが
運転免許証は入っていないかった。

代わりにセキュリティのカードキーを兼ねた職員証が出てきた。
同じく高橋拓哉名義。何処かで見たようなデザインだと思ったら、
多香子が糸島のサナトリウムに出入りするのに持たされている敬聖
会発行のカードと同じだった。システム管理課・主任の肩書と
瓶底眼鏡を掛けた高橋の写真が貼ってある。

「理事長夫妻の娘に手を出すとは、おまえさん、意外と野心家なん
だな。婿養子の座でも狙っているのか？」

「……んな訳、ねえだろ」

高橋拓哉は恨みがましい目で俺を見返してきた。

「あの女は？」

俺は階段の踊り場を振り返った。真奈は壁際にしゃがみこんで大
人しくしていた。眠ってはいないようだが、自力で何かが出来ると
うな状態ではなさそうだった。

「どうする気だよ？」

タカハシはぜいぜいと荒い息を吐きながら言った。

この男には聞くべきことが幾らでもあったがこんな場所で尋問で
もないし、真奈を放っておく訳にもいかない。やむを得ず、後で話
を訊きに行くと言って財布を返してやった。

俺がそれ以上、手を出してこないと分かると、高橋は一度壁にも
たれるように座ってから、潤滑油の切れたからくり人形のようにぎ
こちなく立ち上がった。

「断つとくが、誘ったのは……俺じゃねえよ。あつちが、ヤラせて
やるから、頼みを聞いてくれと言ったんだぜ」

「頼み？」

「ああ。自分ちの病院のデータベースから、カルテのファイルを引
っこ抜けてさ。……何考えてんのか分かんねえけど、まあ、ヤラ
せてくれるんだったら、言うこと聞いてやってもいいかなって。け
ど、畜生　こんな目に遭わされるんなら、話に乗るんじゃないかつ

た」

「運が悪かったな」

「ああ……。あんたもあの女に、ヤラせてやるから、俺を痛めつけろって頼まれたのか？」

共犯者を求めるような卑屈な目をして高橋は口許を歪めた。

「ああ、そうだ」

俺はニツコリ笑って見せてから、高橋の鳩尾に渾身の右フックを叩き込んだ。

「てか、ムカつくんだけど？」

恵美里は切れ長の拗ねた目で俺を睨んでいた。頬をプツと膨らませた表情は意外と可愛らしかったが、その間、ずっと脇腹の肉をつねられていてはそんなことも言っていられない。

「何が？」

「そりゃあさ、あたしはリュウさんに一回しかさせてあげたことないよ？ でも、目の前で若い子をお持ち帰りさせたら、やっぱり良い気持ちしないわ」

「……俺がいつ、女をお持ち帰りしたんだ？」

「酔い潰れた女の子、タクシーで家に連れてきてるじゃん。あれがお持ち帰りじゃなかったら何なの？」

「他に連れていけるところがなかったんだ」

「ふん。あんな若い子がリュウさんのストライクゾーンだなんて知らなかった」

「冗談はよせ。俺にはコースが低すぎる」

「バットが届く範囲なら打てないボールはないとか、その気になればワンバンでも打てるとか豪語してなかった？」

そんな戯言を言ったような記憶もなくはない。勿論、酔った席での話だが。

本当の俺にそんなイチロー並みのバッティングなんか出来はしな

い。それどころか、インハイの打ちごろのストレートですら凡打しかねないへボつぷりなのだ。そうでなければ、かつての同居人が去った後に浮いた話一つない生活なんか送っていないし、何よりも由実子のSOSを読み違えたりしない。

ピアニツシモ前での騒動から一時間後、俺は港の実家に真奈を運んでいた。

本来なら二人ともあの場所から運び出すべきだった。特に高橋については少々やり過ぎた感があつて、特に後先考えずに腹をぶん殴つたのは拙かった。二人はあの場所に現れる前に料理と酒をたんまりと胃袋に収めてきていた訳で、当然の帰結として店の前のタイル貼りの床がえらいことになってしまったのだ。

それでも、意識が朦朧となつて座り込んでしまった真奈と自分の汚物の中をのたうち回る高橋を天秤に欠けた場合、後者の選択肢はなかった。もし、騒ぎを聞きつけて伊藤が顔を出していたら彼に手伝つて貰つたかもしれないのだが、店の防音がよほどしつかりしているのか、あるいはピアノをキース・ジャレットあたりに替えてしまったのか、出てくる様子はまったくなかった。

結局、朽木に連絡して大型のタクシーを回して貰い、俺はほうほうの体でその場を離れたのだった。

急性アルコール中毒を起こしていそうな気配もなかったので、真奈を居間に敷いた布団に寝かせて、俺は隣家の恵美里の部屋を訪ねていた。

漫画家という人種に世間が向ける期待に背かず、恵美里の主な活動時間は深夜から夜明け前にかけてだ。事実、俺が縁側のサッシを開けた時には風呂上がりやしどけない格好。ピンクの大判のタオルをターバンのように巻いて、柔らかいパイル地のショートパンツを履いて、上半身は素っ裸。で、一番搾りの缶を片手に昨夜に描き上げたばかりの原稿と睨めっこをしていた。

普通の女なら大騒ぎされるか、デスク上の物が顔面めがけて飛んでくるところだが、Fried PrideのSmoke on

the water を口ずさみながら、平然と「お疲れー」とほざくところはさすが恵美里だ。

「で？ あたしに何の用？ まさか、連れ込んだ女の子の服を着替えさせる、なんて言うんじゃないよね？」

「それもある。俺では手に負えんからな」

「何がよ？」

「一応、姪の友だちなんだ。迂闊なことは出来んのさ」

「へえ……。何か、フクザツな事情がありそうね」

「話すと長くなるんでな。今度、時間があるときに説明する」

「いいけど」

恵美里は半乾きの長い髪を掻き上げた。さすがにTシャツを着てくれているので目にやり場には困らずにいるが、無駄に艶のある仕種であることには変わりがない。

「ところでさつき、それも、って言ったよね？」

「そうなんだ。こいつを見てくれ」

俺はアルミニウム製のアタッシュケースを恵美里に見せた。恵美里はヒュウと短い口笛を吹いた。

「おっとオ、ゼロハリじゃん。さすがリュウさん、渋いの持ってるね」

「俺のじゃない。真奈が座り込んでた傍らにあったんだ」

「彼女のってこと？」

「女子高生が持ち歩くような代物じゃなからう。一緒にいた男が彼女を支える為に床に置いたんだと思う」

「どうしてそれがここに？」

「出掛けの駄賃ってやつだよ」

それは嘘だが、真奈のものではないと知りつつ持ち帰ったのは違和感を感じたからだ。高橋が仕事帰りだった可能性はあるにせよ、ゼロハリバートンのアタッシュケースは若い男がデートの際に持ち歩くような代物ではなかった。

「中身は？」

「ロックが掛かって開かない」

「そういうこと」

恵美里はデスクに向き直り、小物を入れている抽斗からヘアピンを取り出した。どこで習ったのか、恵美里はすぐに鍵屋に就職できるほどピッキングの技術に優れている。俺もディスクタンブラー錠くらいは外せるが、彼女にはとても敵わない。

アタッシェケースが開くのに一〇秒も掛からなかった。中にはD ELLのラップトップとその付属品が収められていた。

恵美里はアタッシェケースからラップトップを取り出すと手際良く電源コードを繋ぎ、自分のパソコンのような手つきで起動に取り掛かった。その間、俺に出来ることは何もなかった。立ち上がって冷蔵庫に自分の分のビールと恵美里のお替りを取りに行った。

「そう言えば、相手の男は敬聖会のシステム管理課とかいう部署の主任だ。となると、仕事用のパソコンを持ち歩いても不思議はないな」

「んな訳ないじゃん」

一刀両断に俺の意見を切り捨てて、恵美里はビールをぐくりと飲んだ。

「どうしてだ？」

「リュウさん、警察にいたとき、自分のパソコンで仕事していいって言われてた？」

それ以前に俺は報告書を書くとき以外はキーボードに触らない刑事だったので、その他のことは大概は徳永がやっていた。詳しいことは分からないが、京都か何処だかの警察でファイル共有ソフトを通じて捜査情報が洩れたという事件を受けて、私物のパソコンを持ち込まないように言われた記憶はある。

「病院も一緒だよ。ウイルスに感染する危険があるから、私物なんか絶対使わせてくれない」

「仕事用に病院から支給されたものだとしたら？」

「そんなもの、家に持って帰っていい訳ないじゃん」

恵美里の言う通りだった。となると、ますます高橋がデートにパソコンを持ってきた理由が分からなくなる。

そこではたと思い当たった。高橋は俺に何と言った？

「例のMOに入っていた電子カルテのデータだが、それを病院のコンピュータから盗んだのはこのノートの持ち主だ。そして、身体を餌にそれをやらせたのは、俺の家で寝ている女子高生だ」

「へえ、そうなんだ。でも、それとこれと関係あるの？」

「カルテの内容を検討していたとか」

「プリントアウトして持ってけば済むことじゃん」

「そうだな」

二人の間にもどろいという約束があるにせよ、カルテの話はやはりデートの場ですることではないだろう。これまでと別のデータを入手したのなら話は別だが。しかし、附属品を見渡してもMOのドライブの姿はなかった。

「うっわ、やっぱりダメだ。セキュリティが掛かってる」

恵美里は天井を仰いだ。

「破れないのか？」

「簡単に言わないでよ。あたしは別にハッカーって訳じゃないんだから」

「それは分かってるけどな」

仕方がない。何をやっていったのかについては、明日にでも高橋本人を締め上げるしかなさそうだった。

それから俺は盛大にブツクサ言う恵美里を宥めて、真奈をワンピースからスウェットに着替えさせて貰った。

俺だつてその気になれば女の着替えくらいさせることは出来る。ブラジャーだけは外した経験はあっても着けさせたことはないの、あまり上手くいかないかもしれないが。

「スタイル良いね、あの子。胸はぺったんこだけど」

「おまえが大き過ぎるんだよ、恵美里」

「そうかなあ？」

恵美里は両手でたわわな胸を抱えて上下に揺らしてみせた。まったく、この女は。

「リュウさん、おっぱいはちっさい方が好きなの？」

「どうでもいい」

「またあ、男の人っておっぱい大好きなんじゃないの？」

「嫌いじゃないさ。ただ、大きさはどうでもいい。見る分には大きい方がいいかもしれないが」

「じゃあ、この子とあたしなら、あたしにもチャンスはあるってこと？」

「バットを振る気なんかないくせに何を言ってる」

どちらが俺のストライクかと言われれば恵美里の方だが、俺は相手が自分のストライクかどうかよりは自分が相手のストライクであるかどうかにかこだわる方なので、いわゆる“好みのタイプ”というやつには煩くないのだ。

「あの子、ここで寝させていいの？」

「まだ文句があるのか？」

「そうじゃなくて。外泊なんかさせていいのって言ってるの。娘が帰ってこないとかいって親が搜索願なんか出したら大変だよ？」

「そもそも、彼女は男と外泊するつもりだったんだ。アリバイ工作くらいしてきているだろうさ」

「だといいけど」

工作を頼まれたであろう人物の筆頭はおそらく由真だ。だが、彼女にそれを確認するのは憚られた。もし違っていたら余計なことを知らせるだけでなく、二人の友情にヒビを入れることになりかねないからだ。

「それにしても可愛い子だね」

「ああ。寝ていれば天使だ」

「起きたら？」

「さあな」

小悪魔程度で済めばいい。

だが、叔父と言つてもいい関係の男の隠れ家を捜し、その一方で自分の身体を餌に男を誑かしてカルテを盗み出した少女に“小”を付けていいかどうかは考えどころだった。おまけに彼女の背後には浦辺康利との繋がりも見え隠れしている。一緒にアクアに現れた若い女。浦辺を刺した凶器を買った女子高生らしき女。そして、中洲のオーセンティック・バー。

すやすやと寝息を立てる真奈を残して、俺たちは居間に移動した。恵美里の部屋から持つてきた缶ビールを傾けながら、俺は差し支えのある固有名詞だけ伏せながら事の経緯を説明した。その中で東京の弁当屋が罹災した際の生き残りが俺が捜している女ではなく、同じカオリという名を持つ別の女であったことと、その娘がどうやら隣で寝ているスリーピング・ビューティーであることを話すと、恵美里の眉間に深い皺が寄った。

「ねえ、そのもう一人のカオリ」

「榊原佳織」

「そう、その人だけど、どうして東京なんかに来たの？」

「どうしてだろうな」

単なる偶然か。そうかもしれない。そうではないのかもしれない。恵美里は小さなあくびをして、他に何もなければ仕事に戻ると言うて出て行った。

俺はカウチにどっかりと腰を下ろしてビールの残りをちびちびと飲んだ。

襖は閉めていないので真奈の寝姿は丸見えだった。寝返りを打ったときに羽根布団がはだけて、今はそれを抱き枕のように抱え込んでいる。アルコールを摂つての睡眠は深いものにはならないことが多いのだが、彼女に寝苦しそうにしている気配はなかった。

真奈によれば熊谷幹夫と榊原佳織は恋仲にあったという話だ。それがいつ頃の話で、どれくらい続いた関係かは定かではないが。そ

して、熊谷は最愛の女の死に落胆して気力を失い、それを遠因として警察を去っている。それが十四年前。

おがた屋の火災も同じ年に起こっている。だが、榊原佳織はそこでは死んでいない。

つまり、彼女が自殺したのは 表向きは病死ということになっているようだが 福岡に帰ってきてからということになる。真奈が今現在、福岡にいることからすれば不可思議なことではなかった。戸籍に関してはおそらく実母の死後、今の両親の養子になったのだろう。これもまた、特に不可思議な話ではない。

問題は榊原佳織が東京に行っていた理由と、帰郷後に一人娘を残して自殺した理由だ。そして、同じ弁当屋にいたもう一人の力オリ 原岡香織との関係。

電話をかけるには甚だ不適當な時間だと分かっていたが、俺は進藤敦志の携帯電話を鳴らした。結婚して六年で五人の子持ちという夫婦仲の良さなので、週末の夜は事に励んでいる可能性もあった。もしそうだったら、細君の好物という やまや の辛子明太子をお詫びに送ってやることにしよう。

進藤は一〇コールで電話に出た。声は欠伸混じりだったが、眠っていた訳ではなさそうだった。

「どうしたの、こんな時間に？」

「朝イチで取り掛かって欲しい調査があるんだ。原岡香織の追跡調査とは別に」

「榊原佳織の身元調査ならとつくに始めてるよ」

「えっ？」

「ターゲットだと思ってた生き残りが違う人物だったんだ。引き続き、ターゲットを追うのは当然だけど、違った方が何者なのかを調べるとも当然さ」

「さすが、伊達にあの進藤女史に婿養子に迎えられた訳じゃないな」「褒められてる気がしないんだけど？」

電波を介して苦笑いが伝わってきた。全国規模の大手のトップク

ラスの調査員だった彼を強引に引き入れ、自分の愛娘をけしかけて娘婿にしてしまった女傑の話は一部の業界関係者の間で伝説となっている。

「捜査報告書で当時の関係者の所在はだいたい掴めてる。明日にはそれなりの報告が出来ると思うよ」

「恩に着る。ちなみに今、何してた？」

「奥さんのお誘いを断ろうと難儀してた。電話をくれて助かったよ。俺は夫人の為に辛子明太子を、進藤本人の為に次回の来福の予習用に風俗情報誌の詰め合わせを送ることを約束して電話を切った。

よくもそれだけ子種を無駄撃ちする余力があるものだと感じるべきか、だからこそその子沢山だと納得するべきかは迷いどころだった。

翌朝、俺を浅い眠りから引き戻したのは原岡修三からの電話だった。薄ぼんやりした視界に入る古い柱時計の針は午前五時を指し示していた。

「もしもし、お早うございます」

「起きていたのか」

「ええ、まあ」

年寄りには朝が早いのが相場とは言え、電話を掛けるには非常識な時間だった。だが、依頼人に文句を言っても始まらない。

「どうしました？」

「いや、夕べ、電話をくれていたそうだが、検査の薬が少々効き過ぎてな。たった今、置き手紙を見たんだ」

「そうでしたか」

薬の効き過ぎという言葉に不思議なデジャヴを感じた。すぐにそれが榊原祐輔が起こしたとされる医療事故のことだと思い当たった。

「……香織は見つかりそうかね？」

原岡は吐息混じりに言った。

「ずいぶんと単刀直入ですね」

「昔は歳をとれば、幾らかは我慢強くなれるだろうと思っていたんだがね。実際に歳をとってみて、それは逆だということがよく分かったよ」

「なるほど。現在の状況ですが、お嬢さんである可能性のある人物を見つめました」

「本当か？」

「まだ、確証はありませんが。目下、本人確認の方法を考えているところです」

「どういう意味だ？」

俺は香織が偽造戸籍で他人になりすましている可能性があること、その人物が本物でないことを証明するのはさして難しくないこと、しかし、彼女が香織であることを認めさせるのは容易でないことを説明した。指紋による確認には警察の手を借りねばならず、それはそのまま香織を警察に引き渡す結果になることも付け加えた。

「難儀な話だな」

「まったくです。とりあえず、奥さんに香織さんの写真を一枚でも多く集めて貰うように頼んでいます」

「写真？」

「耳を比べるんですよ」

人間の身体は成長や老化、病気、ダイエット、その他、様々な要因で形状を変化させる。だが、一定の年齢以降になると怪我による損傷などの外的要因以外では形が変わらない部位が存在する。耳朶、医学用語では耳介とも言うが、要するに耳たぶだ。個人識別に使用することが指紋や声紋に比べると知られておらず、防犯カメラの映像から個人を特定する際にしばしば決め手になる部位だ。

「そんなものか」

「耳の形状というのは遺伝しやすいので、DNAや血液型といった科学的な親子鑑定が一般的になる前は、親子鑑定の材料として用いられていたという話もあるそうです」

「だったら、わしのと奈津子の写真も必要じゃないのか？」

原岡は静かな声で言った。しかし、声に潜む興奮を隠し切れてはいなかった。無理もないことだ。

「お借りできるのでしたら、是非」

「すぐに用意させる。他に必要なものはないか？」

「差し当たってすぐにはありませんね。それより一つ、報告しておかなくてはならないことがあります」

俺は一昨日の電話の後、警察に事情聴取を受けたことを話した。

警察が今のところ、彼の娘を殺人犯と断定できていないらしいという話は原岡をひどく勇気づけたようだった。

「だから言ったんだ。香織はそんなことをする娘じゃないと！」

「落ち着いて下さい。まだ、容疑が晴れた訳じゃありませんよ。現場に香織さんの指紋が残っていることは間違いないんですから」

「凶器からは香織の指紋が出なかったと言ったじゃないか」

「そうです。しかし、ナイフに指紋を残さない方法は幾らでもあります。それに気になることもありますのでね」

「……何がだ？」

「桑原警部の態度ですよ。ヤツは必要もないのにペラペラと捜査の内幕を口にするような人間じゃないんです。俺に凶器のナイフの話や、それを買った若い女の話をしたのには裏がある筈です」

「裏？　どんな？」

「それが分からないから苦労しているんですよ。トラックレースでこっちは一周先行しているつもりですが、いつの間にか追い越されていて、気がついたときには周回遅れにされているかもしれませんが」

「皆まで言うな。わしに捜査の状況を問い合わせるといっただな？」

「ご賢察で」

「世辞はいらん。わしは君に娘の居所の調査を頼んだんだぞ。それなのに、わしが働かされるとはどういうことだ？」

不機嫌そうな物言いと裏腹に、原岡の声には張りが出始めている。一刻も早く電話を切って、県警上層部にいる知人とやらと連絡を取りたがっているようだった。

「一つだけ。お話をされる際に、こちら側が掴んでいる情報を知られないように気をつけて下さい。香織さんが偽造戸籍で暮らしてい

る可能性などは、警察はまだ掴んでいない可能性もありますので」「そんなことは言われんでも分かっとなるよ。自分が話そうと思ってることを相手を知っていると、人の口は途端に重くなるものだ」「よくご存じで」「これでも商売人だ。腹の探り合いの経験だけは特売日に分けてやれるほどある。だが、考えてみたら今日は日曜だな」「警察は二十四時間、年中無休ですよ」「勿論、そうだ」

原岡は挨拶もそこそこに電話を切った。こんな時間に叩き起こされる知人とやらにほんの少しだけ同情を覚えた。

それから少しの間、ぼんやりと考え事をしているうちに眠ってしまったようだった。次に俺を現実に戻したのは、悪霊を祓う祈禱師ばりの勢いで俺の両肩を揺らす恵美里だった。

「待て、ムチ打ちになったらどうする？」

「んなこと言ってる場合じゃないって。あの子、いなくなってるわよ？」

「あの子？」

目の前に大きく目を見開いた恵美里の顔が迫っている。俺はかなり深く寝入っていたようで、恵美里は俺を揺り起こしたせいで大きく肩で息をしていた。どうでもいいが、カウチに深々と腰掛ける俺に前のめりで恵美里が覆い被さっている様子は、誰の目にも俺が迫られている図にしか見えない筈だ。

「出て行ったのか？」

「そうじゃないの。誰かに誘拐されたんじゃないかなければ」

「誰がそんなことを？」

「あたしが知る訳ないじゃん」

くだらない言葉遊びはさておき、俺は真奈を寝かせた和室の方を見た。確かにそこに横たわっている筈の少女の姿はなく、壁にハン

ガーで架けておいたワインレッドのワンピースもなかった。布団は丁寧に敷布団と掛け布団を別にして畳んであって、その上に少し雑な袖畳みではあったが、彼女に着せたスウェットの上下も置かれていた。

それどころか、彼女はカウチの上で寝てしまった俺に薄手のブラケットを掛けてくれてもいた。俺の寝相が良くないせいで足元にわだかまってしまうていたが。

「ずいぶん賤の行き届いた娘だな」

「んなことで感心してる場合じゃないっしょ。逃げられちゃってさ」

「逃げられたんじゃない。そもそも、他に連れていける場所がなかったからここに連れてきただけで、捕まえてきた訳でも監禁していい訳でもないんだ」

「屁理屈はいいけど。どうするつもりなの？」

「どうもしないさ」

目を覚ましたら適当な場所に送っていくつもりではあったし、その際に聞ける話があれば聞いておこうとは思っていたが、彼女の意に沿わないことをするつもりは最初からなかった。そして、おそらく真奈は何も話してくれないだろうと思っていた。逃げられないように方策を講じなかったのはそういう考えだったからだ。早々と逃げ出されたのは予想外だったが。

「それで、おまえは何をしに来たんだ？」

俺が訊くと恵美里は大袈裟に肩をすくめた。

「用がなきや来ちゃいけないの？ お祖母ちゃんが朝ごはんが出来たから起こしてこいって。あたしはもう寝るから食べないけど。」

それと、あれ」

指差された先には和室の卓袱台があつて、その上にはラップトップのコンピュータが鎮座していた。すでに起動していてウィンドウズの初期画面が表示されている。

「高橋のパソコンか？」

「そう。セキュリティ外すのに徹夜しちゃったわ」

「おまえ、仕事は？」

「一晩寝かせての最終チェックだし、そんなんで大幅な描き直ししなきゃならないような雑な仕事してないから。でもさ、大変だったんだよ？ 指紋認証はセーフモードで起動すりゃクリア出来るって知ってたけど、パスワードチェッカーぶち込むのに時間掛かってさ」

「悪いが何を言ってるのか、俺にはよく分からん。ただ、おまえが苦労してくれたんだってことはよく分かる」

恵美里はまじまじと俺の目を覗き込んできた。

「褒めてんの？」

「勿論」

「ありがと。ウチらが普通のカップルだったら、このままりユウさんを押し倒してムフフだよなー」

「俺はそれでも構わんが？」

「あたしが構うの。いい加減眠いんで、説明させて貰っていい？」

恵美里はそこでようやく俺の上からどくと、卓袱台までいってどかりと胡坐をかいて座った。おれも立ち上がって彼女の背後からモニタを覗き込んだ。

「えーっと、先に結論から言っちゃうと、このパソコンはまだ買ったばかりの新品。システムの復元に残ってたバックアップの一番古いのが二〇日前だから、まあ、どんなに前でも買って一ヶ月以内」

「それで？」

「まア、どんなパソコンだって最初は買ったばかりだけどさ。その割には変なソフトばかり入っててね。ルートキットとか」

「何だ、それは？」

「平たく言えば、他人のコンピュータに侵入して悪さをする為のソフト。他にもクラッキング支援ツールとか。その一方で普通のコンピュータに入ってるワードとかエクセルとか、そういったのは潔く取っ払ってあるわ」

「それはつまり、このラップトップはハッカー用として特化してるってことか？」

「クラッカー用。言葉は正しく」

「へいへい」

我々、コンピュータ関係における一般人は両者の違いをあまり気にしないが、ハッキングという言葉、及び行為には悪意はないとされ、悪意を持って他人のコンピュータに侵入したり破壊工作を行うことをクラッキング、それを行う者をクラッカーと呼ぶ。

「高橋拓哉はクラッカーということか？」

「違ってたらこんなコンピュータを用意したりしないですよ。でも、ログを見る限りでは大手のネットワークに侵入したりはしてないみたいね。記録にあるのは……地元のイントラネットに忍び込んだのが一回だけ。おやおや、シスアド権限を乗っ取ってシステムクラッシュさせてるじゃん」

「おまえさんの独り言から分かる単語だけ拾ってみたんだが、それはつまり、高橋が誰かのコンピュータをぶっ壊したってことか？」

「概ね正解。物理的に破損させたんじゃないくて、システムを起動できないようにしたんだろうけど。っと、その前にサーバのデータをバックアップごと吹っ飛ばしてる。あーあ、こりゃ、やられた側は外部にバックアップを持ってなかったら大損害だね」

「何処の会社が運用してるネットか、分からないか？」

「分かると思う。えーっと KEISEI KAI - SYSTEM
って……あれっ？ ケイセイカイって？」

俺と恵美里は顔を見合わせた。

「あの敬聖会だろうな。ちなみに実行に移したのはいつだ？」

「二〇一〇年一〇月〇二日二〇時三〇分。昨日の夜だね。何処でネットに繋いだのかまでは分からないけど」

高橋拓哉はわざわざ専用のコンピュータを用意して、外部から自分の勤務先のコンピュータシステムに対して破壊工作を行っている。何の為に？

答えは本人に訊くしかなさそうだった。

「さて、せっかくだから朝飯を御馳走になるとするか。ちなみにメ

「ニューは？」

「ご飯、味噌汁、鰯の味醂干しの焼いたヤツ、納豆、味付のり。味噌汁の具はお豆腐とわかめ」

「日本伝統の朝ごはんだな」

「そう？ あたしは食べ飽きてるけど。たまにはトーストとオムレツが食べたい」

「今度、都合が合うときに御馳走するよ。ホテルの前泊付きで」

「添い寝は？」

「さつき、自分が構うとか言ってたか？」

恵美里は顔をしかめて舌を出し、それから自室に戻っていった。

俺はそれを見送ってから、腹ごしらえをする為に彼女の家の居間に上がり込んだ。

原岡が言ったように今日は日曜日で敬聖会総合病院の外来は休診であり、普通に考えればシステム管理課も休みの可能性が高かった。だが、せつかくの休みに高橋拓哉が休日出勤していることについて、俺には二つの理由で確信に近いものを抱いていた。一つには夕べ、奴が敬聖会のシステムに何らかの攻撃をしたのであれば今朝から病院は大騒ぎになっている筈で、システム管理を担う部署の高橋が安穩としていられる訳がないからだ。もう一つはいわゆる“犯人は現場に戻ってくる”という放火魔の心理に似た作用で、病院の外からシステムに危害を加えた高橋はその効果を確かめずにいられないだろうという読みがあった。

俺の読みは外れていなかったようで、目の前では救急外来の受付職員の若い女がシステム管理課に電話を掛けてくれていた。

「すみません、システム管理課の高橋主任にお客様がお見えなんですけど。……はい、GEエンジニアリングの野口様とおっしゃってますが」

俺が差し出した名刺に視線を走らせながら、受付嬢はちらちらと俺の身なりに目を配っていた。

飲み屋やバーなどでたまたま隣の席に座っただけの相手に名刺をくれる人間というのは結構いて、俺はそれらの中で使えそうなものを選んで名刺入れに忍ばせている。GE何とかの野口某もそういう

一人だ。残念なことに野口氏の顔はまったく思い出せないのだが、つまりはその程度の印象しか与えない人物ということだ。GEが何の略で、何をしている会社かは名刺からは読み取ることが出来ない。まさか、ゼネラル・エレクトロニクスではないだろうと思うが。

「申し訳ございません、ただ今、高橋は取り込んでおりまして……。申し訳ございませんが、後日、改めてアポイントをとってからお出で下さい」

受付嬢はいかにも申し訳なさそうな表情で言った。

「そいつは困ったな。こちらも至急の用事なんです」

「生憎ですが」

「そうですか、仕方ないな。では、高橋主任にこう伝えて戴けませんか。先日、お預かりしたDELLのラップトップの件ですが、と」

「はあ……」

受付嬢は困惑しながら、もう一度、受話器を手に取った。俺はその間にその場を離れ、ロビーの隅にある自動販売機で缶コーヒーを買った。

敬聖会総合病院の救急外来は総合管理棟の隣の七階建ての建物で、ハーフミラーに覆われた外観は他の棟よりも無機質な感じだった。緩やかで長いスロープが大きな屋根の付いた車寄せに繋がっていて、その気になれば救急車を四台は横づけに出来るだろう。

処置室に繋がる扉の物々しさと裏腹に、ガラス張りのロビーは整然とした空間だった。三階まで吹き抜けになったエントランスホールといい、観葉植物をパーテーション代わりに多用するところといい、原岡が入院しているサナトリウムの造りと共通する部分がある。休日の午前中だからという訳でもあるまいが、ロビーは閑散としていて人影はほんの僅かだった。

「申し訳ございません、野口様」

受付嬢の声がした。自分を呼んでいるのだと気付くのに少し時間が必要だった。

「はい？」

「その」「受付嬢は床に張られた色テープを指差した。「赤いテープに沿って、総合管理棟に向かわれて下さい。高橋主任は最上階のコーヒールoungeにいるそうです」

「了解です」

取り込み中じゃなかったのかという指摘はやめておいた。俺は記入を求められた入館受付簿に野口の名前を残して、テープに沿って歩き出した。

コーヒールoungeは入院患者やその家族、見舞客などが使う為の施設で、職員食堂ではなかった。だからだろう、客の姿はほとんどなく、窓際のテーブル席に何組かの見舞客の団体がいるだけだ。

目当ての人物はそれから出来るだけ遠ざかるうとするように奥まった角のテーブル席に陣取っていた。医師や看護師と違って白衣を着る必要はないらしく、ポロシャツとスラックスの上にコーデュロイのカーキのジャケットを羽織っている。不機嫌なブルドッグのような顔は昨夜、ピアノニッシモの前で見た男に間違いなかった。

「タバは眠れたか？」

声を掛けると太った身体が小さく跳ねた。夏の夜に部屋に迷い込んできた蚊を見るような眼が俺を見据えた。胃の辺りに手が痛々しく添えられている。

「んな訳ねえだろ。くそっ、思いっきりぶん殴りやがって」

「酔ってたんで手加減出来なかったんだ」

出来たとしても、おそろしくしなかっただろうが。

「何の用だ、野口さん？」

俺は黙って自分の名刺を高橋に見せた。

「カミヤシロ？ あんた、受付で」

「あんなところで本名を名乗る訳ないだろう」

高橋の目が訝しげに細まった。

「もう一度訊くぞ。何の用だ？」

「これを返しにきたんだ。高い物なんだろう？」

俺は手にしていたゼロハリバートンをテーブルに置いた。高橋は手を出していいものかと俺の目とケースを交互に見てから、ひったくるような手つきで自分の方に引き寄せた。

次の瞬間、高橋の眉間を深い皺が割った。

「……中身は？」

「DELLのラップトップのことか？ あれはこつちで預かっている。犯罪に使われた物かもしれんからな」

「何の証拠があるんだよ？」

「あのコンピュータが買ったばかりで、その割にはルートキットだのクラッキング支援ツールだのといった怪しいソフトが満載だった。それを使って地元のイントラネットに侵入した形跡がある。あと、そこで相手のサーバのデータを抹消した上に起動できないようにした形跡もあったな」

恵美里の受け売りの事実を並べ立ててやると、紅潮していた高橋の顔が表情を失った。

「セキュリティはちゃんと掛けてた筈だぞ？」

「人が仕掛けたものは人によって破られる。そんなことも知らないのか？」

「くそっ、どこまで調べたんだ？」

「おまえが忍び込んだイントラネットがこの物だってことまでかな。どうでもいいが、壊れたシステムを復旧させるのもおまえの仕事だろう。こんなところで油を売ってていいのか？」

「えっ？」

高橋が俺の顔をまじまじと見た。そして、待ち望んだ逆転のカードを引いたギャンブラーのような不敵な笑みを浮かべた。

「別にいいんだ。壊れちゃいないからな」

「ほう？」

「つまんねえ因縁を吹っ掛けるのはやめてくれよ。あれはクラッキングのシミュレーションをしてただけで、実際に侵入なんかしちゃいない。どうしてもやっただけで言い張るなら、被害を受けたってと

「ころを捜してこいよ！」

勢いよくまくし立てると高橋はせいぜいと荒い息を吐いた。喉の周りの贅肉のせいで錆びた肉挽き器を回しているような音がした。

俺は冷たい笑みを浮かべてみせた。

「それで言い逃れたつもりか？」

「……何だと？」

「おまえは俺が被害に遭った会社なり、人物なりを特定できていないことに気付いた。さすがだと褒めてやってもいい。だが、その後が戴けないな。その言い方だと壊したサーバが他にあると言っているようなものさ」

「証拠があるのかよ？」

「証拠はない。だが、おまえに訊くことは出来る。何なら昨日の続きをやってもいい」

「こんなところで暴れたら警備員に摘み出されるぞ」

「そうだろうな。だが、おまえが昨日、誰を酔っ払わせてお持ち帰りするつもりだったのかをここの経営者が知ったら、おまえも摘み出されるだろうよ」

高橋がハツとしたような顔で俺を睨んだ。その表情がじわじわと歪んでいき、観念したような仏頂面になった。

「くそっ、どうしろって言うんだ？」

「ここじゃ何だから、二人で話せるところに行こうか」

さらなる当て擦りに高橋は顔をしかめた。

コーヒー代を払い、高橋は重い足どりで歩き出した。ラウンジに来る途中で確認しておいたところによればシステム管理課はこの棟の四階にある。向かっているのはどうやらそこらしかった。

「そういえば、お姫様から連絡はあったのか？」

高橋は懸命に俺を無視するように無言だった。人目はなかったのに力尽くで生意気な態度を挫いてやってもよかったが、そこまでする必要もないように思えた。

エレベータに乗っても高橋はしゃべらなかつた。なので、質問を

変えてみた。

「夕べはあれからどうしたんだ？」

また無言。だが、今度は長く続かなかった。

「奥にあった店から人が出てきた。白髪頭の爺さんで、俺を見てどうしたのかって。俺は知らない男にいきなり殴られたって。あんだ、あの店の客だったんだろ。爺さんがプロレスラーみたいな大男だったかって訊くんで、俺はそうだって言っただんだ」

半分振り返った高橋の目は俺を小馬鹿にするように薄い半目になっていた。

「そうしたら爺さん、怒りまくって「警察呼ぶ！」って言い出してさ。まあ、警察は俺もまずいんで断ったけどな。だけど、爺さんはあんたの名前も住所も分かっているから「店の前を汚して逃げたツケは絶対払わせる！」って息巻いてたぜ」

「そりゃ、おつかないな」

ピアニツシモは真奈が知っている店という話だった。

ということは伊藤と真奈は知り合いであり、その少女を毒牙に掛けようとしたのが目の前の肉ダルマだと知っていれば伊藤の態度も違った筈だった。まあ、いずれにしても店の前を汚して無断で立ち去ったのは事実だ。然るべき補償を求められたら真摯に対応せざるを得ない。

「ここだ。入れよ」

高橋はスラックスのポケットに手をつこんだまま、首をグイッと倒して システム管理課 と記された部屋に入るように言った。

システム管理課のオフィスは整然とした印象の院内とは裏腹にひどく雑然としていた。広さはおよそ二〇坪ほどで、その半分は金属製のラックに詰め込まれたサーバとその補器類で占領されていた。残りの半分は四つのデスクと壁際に並ぶデスクトップが占めている。キーボードを置く台には分厚いマニュアルやファイルが堆く積み上げられていて、まともな作業が出来る環境とは思えなかった。

それでも精密機械が置いてあるだけあって掃除は行き届いていて、

空調も他のところよりも一段と効いているようだった。高橋にとつては天国のような環境だろうが、普通の女性にとつては冷蔵庫で仕事をしているに等しいだろう。

高橋の他に出勤しているスタッフはおらず、高橋は他のメンバーのものより一回り大きな椅子に腰を下ろし、少し迷ってから隣の机の椅子を俺に薦めた。

「おまえ、今日は休みじゃなかったのか？」

俺の質問に高橋は目を瞬かせた。今となつてはどうでもいいことだが、高橋が壊したサーバが敬聖会病院のものでないのなら、俺の読みは大きく外れていたことになる。

「休みだけど、日曜はいつも出てきてる。家にいてもすることねえしな。ここだとエアコンは効いてるし、ネットも繋ぎ放題だし。メシ食いに行くのもエレベータに乗ればすぐだしな」

「ある意味、悠々自適という訳か」

「エロ動画だけは見られないけどな。一応、アクセス制御が掛かってるんで。まあ、外そうと思えばいつでも外せるけど、いちいち面倒くさいし」

「若い割に自堕落だな。おまえ、幾つだ？」

「……今年、二十八だ。それがどうかしたのかよ？」

「その歳で主任か。大したものだ」

「他にまともに仕事できる奴がいねえつてだけさ。……んだよ、褒めたって殴られた恨みが消える訳じゃねえぞ」

「そんなつもりはない」

そうは言いつつ、褒めそやかしてやれば簡単に落ちそうな隙が見え隠れしている。少しばかりイキがついても根は甘ちゃんの世間知らずなのだ。そうでなければ、いい歳をした大人がちょっと大人びている程度の女子高生の誘惑に簡単に乗せられたりはしない筈だ。「さて、時間もないんで質問に映らせて貰おう。おまえ、あのパソコンを使ってどこのサーバをぶっ壊したんだ？」

「知らねえよ」

「ラップトップに残されてたデータによれば、イントラネットは KEI SEI KAI - SYSTEM となっていたそうだ」

「知らねえって言ってるだろ」

「答えたくないのか？ それとも、答えられない理由があるのか？」

「……知らねえ。ただ、それだけだ」

高橋は唇を噛み締めてプイツとそっぽを向いた。子供じみた仕草だったが、意に沿わないからへそを曲げているといった単純な態度ではなさそうだった。

再び、力尽くで口を割らせなくなる誘惑が湧き上がってきた。だが、この男には別のことで役に立って貰わなくてはならない。仲良くなる必要はないが不必要な傷を負わせるのは避けるべきだ。

「言いたくないならそれはいい。おまえのパソコンをもっと調べれば何か出てくるだろうからな。じゃあ、次の質問だ。おまえは榊原真奈から何を頼まれていたんだ？」

「それは昨日、言っただろ」

「自分ちの病院のデータベースからカルテのファイルを引っこ抜け、だったか。誰のカルテだ？」

「知らねえ」

今度は見過ごすわけにはいかない。俺は爪先で高橋の脛を蹴飛ばした。

「いつてえ！」

高橋は身体を折り曲げて脛を抱え込んだ。警官時代からの習慣で俺は服装が許す限りは安全靴を履くことにしている。今もそうなので蹴られたところは相当痛かった筈だ。

「次は股間を蹴飛ばすぞ。誰のカルテだ？」

「……くそつ。この病院に村松って医者がいたんだけど、そいつのカルテだよ」

「村松俊二のことか？」

「あんだ、あいつと知り合いなのかよ？」

「知ってるってだけだ。真奈は村松のカルテを盗み出して何をする

つもりだったんだ?」

「そこまでは知らねえ。本当だって。いや、俺だって一応訊いたんだぜ? でも、彼女がそれは秘密だって言うからさ」

「彼女が言ったから、ハイそうですかって訳か。いくらやらせてくれるからって不用心が過ぎるんじゃないのか。コンピュータからデータを持ち出せば立派な窃盗罪だ」

「分かってるさ、そんなこと。余計なお世話だって!」

確かに俺が言っていることはただのお節介に過ぎない。

「それはおまえでなくては持ち出せないものなのか?」

「医者ならプリントの指示は出せる。それぞれの診察室の端末から印刷のアイコンをクリックするだけだから。ただ、電子カルテのサーバに繋がってるプリンタが事務局にしかないから、誰の目にも触れずってわけにはいかねえ」

「それをおまえならノーチエックということか」

「まあな」

高橋の声に自慢げな響きが混じった。

「だが、それじゃいろいろと不便じゃないのか? いちいち事務局までプリントアウトしたものを取りに行ったり、持ってきて貰ったりするだけで余計な人手が要る」

「そんなことはないさ。電子カルテってのはペーパーレス化が前提だから。見ようと思えばどの端末からでも閲覧できるものをわざわざ印刷する必要はあんまりない。転院する患者の分か、どこかに提出する必要があつた場合くらいだな。だから、プリンタが事務局にしかないんだ」

「なるほどね。盗み出したのはそれだけか?」

「何がだ?」

「真奈に頼まれて持ち出したカルテは村松のものだけか、と訊いているんだ」

「あ、ああ。そうだ」

「カルテのバックアップがある筈だな」

俺が言うと高橋はしばらく押し黙っていたが、やがて、デスクの抽斗からUSBメモリを取り出した。

「こいつに入ってる。元のデータとPDF」

「PDFをプリントアウトしてくれ」

無表情に頷くと、高橋はUSBを壁際のマシンの一つに差し込み、マウスを操作し始めた。すぐに遠くでブウンという音がして紙が吐き出されてきた。

「ほらよ。これでいいのか？」

高橋はA4の用紙を差し出しながら俺を恨みがましく睨みつけた。カルテの詳細を読むのは後にしてポケットに押し込んだ。

「このこと、真奈に言うのかよ？」

高橋は顎が胸にめり込まんばかりにうなだれていた。

「何故、俺がそんなことをあの子に報告しなければならぬ？」

「いや、別に……」

「誰にも内緒よ、とでも言われてたのか。まあ、そうだろうな。どうした、そんなにヤラせて貰い損なったのが悔しいのか？」

次の瞬間、俺はこの男を舐め過ぎていたことを思い知らされた。

バネ仕掛けの人形のような勢いで立ち上がった高橋が俺の胸倉を両手を締め上げてきたからだ。

「……てめえ、いい加減にしろよ」

高橋の声は押し殺したように低く、小刻みに震えていた。

「俺と真奈の関係は、おまえみたいな下衆野郎が勘ぐってるものは違うんだ！ くそっ、それなのに」

「俺は何も勘ぐっていない。ヤルのどこのという話をしたのはおまえ自身だ」

「煩え！」

肉団子のような太った手は関節が白くなるほど強く握り締められていた。スーツの胸元に皺が寄るのは気になったが、胸倉を掴まれること自体は我慢できないほど不快なものではなかった。高橋が真奈に対して特別な感情を抱いていることは明らかで、俺がそれを侮

辱したのも確かだったからだ。

熱を帯びた目がしばらく俺を見上げていた。だが、その熱はあまり長続きしなかった。感情を飲み込むような深呼吸を繰り返しながら、高橋は手を離れた。

「……帰れよ」

「そうだな。今日はこれくらいにしておこう」

「今日も明日もねえよ。てめえとは何も話さねえ」

「好きにしる。だが、出掛けの駄賃に一つだけやって貰いたいことがある」

「ああ？」

高橋は訝しげに俺を見た。俺は敬聖会の人事データから桐島沙耶香に関するものをプリントしてくれと頼んだ。

「誰だよ、それ？」

「事務長の秘書だ。そんな肩書かどうかは知らんが」

「どうして、そんな女のデータが必要なんだ？」

「俺にとってはそっちが本筋でね。おまえや真奈のことは周辺事実みたいなものなのさ。素直に協力してくれば、おまえさんたちの間柄を邪魔せずに済むかもしれない」

剣呑な眼差しが俺を見上げた。高橋はしばらく迷っている素振りを見せていたが、やがて、黙ってコンピュータを操作し始めた。五分と経たずにプリンタが紙を吐き出し、高橋は俺の棟にそれを押し付けると、そのまま足早に部屋を出て行った。

主が立ち去ったシステム管理課の部屋の中で、俺はしばらく考えを巡らせた。

高橋拓哉がデータベースから抜き取ったのは村松医師のカルテだけだという。では、榊原祐輔が起こした医療事故のカルテを持ち出したのは誰なのか。俺はぼんやりと浦辺と敬聖会のコンピュータを繋ぐ鍵は真奈ではないかと思っていたが、そうではないらしい。無論、高橋が嘘をついている可能性は依然としてあるのだが。

高橋が座っていた大きめの肘掛椅子に腰を下ろし、貰った二つの書類を見比べた。どちらも同じくらいの興味があつたが、さすがの俺も同時に読むことは出来ない。

まずは桐島沙耶香の人事データに取り掛かった。

桐島沙耶香、一九七六年六月二十八日生まれ。住所は福岡市東区千早四丁目。当然のことだが、この辺りの項目は多香子が手に入れてくれた戸籍謄本と同じだった。最終学歴は熊本修学館女子高等学校。多香子が言うところのミニスカ女子高だろうが、それにしても校名が堅いような気がしなくもない。まあ、そんなことはどうだっていいが。

敬聖会に就職したのは七年前の二〇〇三年三月。職務経歴書

という書類によれば一ヶ月の研修の後、総合医療支援センターという部署に配属されている。職種は医療ソーシャルワーカー。彼女は

主事の助手としてそこで一年働いている。

翌年の四月には業務管理課へ異動。この課は九月に同課と医療情報課に分割されており、その際に桐島沙耶香は医療情報課に異動している。同時に主任に昇格。高橋がそうであるように敬聖会が若手の昇進に積極的なだけかもしれない。だが、それでも転職から僅か二年目での昇進は大抜擢と言つていいだろう。

その翌年の四月に現部署である事務局に異動。肩書は主任のままだったが事務長付とされていた。敬聖会に秘書という職分はないようで、その後は現在に至るまで彼女の肩書は変わっていない。

保有資格の欄には原動機付自転車の運転免許しかなかった。検定の類も一切保持していないようだ。資格を持つていふことと実務で使い物になるかどうかはまったく別の話だが、資格ブームといわれる昨今では珍しいと言つてもいいかもしれない。

一般の人事データにあまりない項目で目を引いたのは 前職 という欄があることだった。但し、医師や看護師のように人材の移動が多い業界だということを考えればおかしなことではないのかもしれない。桐島沙耶香は敬聖会に入る前は横浜にある医療法人仁優会で働いており、そこでもソーシャルワーカーだったらしい。

他に特筆すべきは、彼女が医療情報課時代に戒告処分を受けていることだ。別名を譴責ともいうこの処分は公務員にとっては一番軽いもので、始末書を提出して、後は神妙な顔をして上司の説教を聞き流してしまえば済むものなのだが、民間においてどうなのかは俺にはよく分からない。

処分理由は 業務範囲を越えたコンピュータの使用 というものだった。だが、具体的に何をやったかまでは書かれていない。高橋と同じように一〇〇パーセントの犯罪行為だった可能性もあるし、業務用のパソコンを使って内職をしていただけかもしれない。

人事データはそのくらいだったが、高橋は別のファイルも呼び出していた。職員の健康診断のデータだ。

それによれば桐島沙耶香の身長は一六一センチ、体重は五〇キログラム。

血液型はB型Rh⁺。視力はあまり良くないらしく、矯正して左右ともようやく〇・八。血圧がやや低めなのと胃下垂気味であることを除けば健康状態に問題はなさそうだが、医師所見には 飲酒、喫煙を控えて睡眠時間の確保を とある。既往症の類は自己申告なし。書類にはレントゲン写真もあつたが、それを見て素人に分かることはほとんどない。強いて言えば胸に詰め物の影はなく、立派なバストは自前だということが分かる程度だ。マンモグラフィの検査結果もあつて 特に問題なし と書かれている。経産婦であるかどうかはレントゲンには写らないし、子宮頸がんの検査結果にも出産経験の有無までは書かれていない。

当然のことだが、整形手術に関わることは何も書かれていなかった。

「……さて、と」

俺は椅子から立って、窓際のキッチンにあるコーヒーマーカーのスイッチを入れた。豆はレトルトの小さなパック入りのさして美味そうなものでもなかったが、勝手に飲むのだから文句を言ったら罰が当たるだろう。

どれだけ資料を読み込んだところで、桐島沙耶香という女の実像に近付いているという実感は得られなかった。前職の横浜云々はウラを取っておく必要があるので、その旨を進藤の携帯電話宛てにメールで送った。

淹れたコーヒーを手に椅子に戻り、村松のカルテを取り出して広げた。コーヒーは意外に美味かった。

書式は例の二通のカルテと同じだった。

患者名は村松俊二、五十二歳。初診は六年前の一〇月二日。場所は系列診療所の敬聖会病院野間クリニク。定期の健康診断で不整脈が出たことによる再検査。その際にも異常が見つかり、以後、野間クリニクの副院長である斉藤武彦医師が主治医となっている。

治療は投薬が中心で、検査は約三ヶ月ごとに定期的に行われていた。変化があつたのは三年前の夏のことだ。八月十五日の午後、村松

は重篤な心筋梗塞に見舞われている。自宅で学会用の資料を作っていた際に発作を起こしたが、居合わせた斉藤医師により救命されている。彼は村松の大学の後輩でもあり、資料作りの手伝いの為に村松家にいたらしい。カルテにこういった前後の経緯や人間関係まで書き込まれているのは不自然な気がしたが、後で事実関係が問題になった場合のことを考えてのことかもしれない。

その後、ステント手術を経て三ヶ月後に職場復帰。病状は安定していたようで、その後、特に異常が見つかったり、発作を起こして病院に担ぎ込まれた形跡はない。

ところが去年の三月二十二日、村松は心筋梗塞を再発させて死亡。その二日前から調子が悪かったとして、クリニックに隣接するビジネスホテルに宿泊して検査を受けている。当日の夕方、患者は猛烈な胸の痛みを訴えてクリニックに連絡し、急いで搬送されたが救命の甲斐なく死亡。

ホテルに泊まっていたのは、クリニックに入院施設がない為の措置とある。こういうケースは珍しいが、例がない訳ではない。俺の知り合いでも元上司の権藤が持病の痔を悪化させた時、天神にある行きつけの診療所にしか行かないと言い張った挙げ句、すぐ近くにあった西鉄グランドホテルの部屋を病室代わりにしたことがある。だが、どう考えても不自然な点があった。念の為にスマートフォンのカレンダーで確認したが、村松の死亡当日は日曜日。しかも、その年の春分の日である三月二〇日から土曜日を挟みでの三連休の最終日だった。心臓疾患の患者を何かあってもすぐに対処できない場所に受け入れるには、あまりにも不安の残る日程だ。

順当に考えれば、村松がホテルに泊まっていたのは病気の為ではなく、例の医療事故に関してマスコミの追及から逃れる為だろう。その最中に心筋梗塞を起こした。連絡を受けた医師が駆け付けて処置したが間に合わなかった。

あり得る話だし、たとえば誰かがタイミングの良すぎる村松の死に疑問を抱いても、反証を試みることは難しいだろう。村松俊二の遺

体写真が無ければの話だが。

そしてもう一つ、不可解な事実を見つけた。再検査の初診から三年前に起こした一度目の発作、その後の回復期の治療に至るまで、村松の主治医は一貫して斉藤医師だった。他の医師が診察したことは一度もない。

それなのに村松の最後を看取り、死亡診断書を書いたのは別の人物だったのだ。斉藤医師に連絡がつかなかった為にたまたまクリニツクの近隣にいた医師が駆け付けた、とされている。医師の名は榊原誠一。

敬聖会総合病院のトップに立つ人物が何故、このタイミングでたまたま現場近くに居合わせたのか。

真奈に持たせたGPS発信機の最初の記録は平尾浄水の市動植物園の近くだった。確かに平尾の丘陵地を下って山荘通りから高宮通りを突っ走れば、野間まで大して時間は掛からないだろう。だが、その程度の範囲内に他の敬聖会の医師がいなかったとは考えにくい。実際のところ、井尻の六つ角まで下れば敬聖会の井尻分院があるのだ。

俺は高橋が電源を入れっ放しにしていたパソコンに近寄り、敬聖会のホームページを開いた。リンク集を見ると各関連病院やクリニックの一覧があり、野間クリニックのページもあった。そこを開いて病院案内のページを見たが、院長は武藤、副院長は玉城なる人物だった。

本院のページに戻ってサイト内検索をかけると、斉藤は本院の胸部循環器科の医長に収まっていた。彼が医師としての力量がどの程度かは分からないが、いかに抜擢人事の多い敬聖会においても診療所の副院長から本院医長への昇進は不自然と言わざるを得ないだろう。

村松俊二を殺害したのは榊原家の人間なのか。

そうかもしれない。そうではないのかもしれない。一つだけ言えることがあるとすれば、仮に誰がやったとしても、隠蔽工作には榊

原麻子が関わっているということだ。院長は所詮は入り婿であり、人事権は理事長である彼女が握っている筈だからだ。

真奈は両親と兄の医療事故に端を発する血生臭い所業について、どれくらいのことを知っているのだろうか。そして、このカルテを手に入れて何をするつもりなのか。

実は答えは一つしかない。仮に真奈の手元に俺が持っているMOの中身と同じものがあるのだとしたら、やれることは一つしかないからだ。

だが、それには重大な疑問がつきまとう。彼女は何の為に兄の過失を白日の下に晒そうとしているのだろうか。

いや、それだけではない。その隠蔽工作までも表沙汰にすることは、村松俊二の死の真相を明らかにすることだった。そうなれば、兄だけでなく彼女の両親もただでは済まない。

彼女をそこまで駆り立てる昏い衝動の正体とはいったい何なのか。

そんな上等なモンじゃないわ。

俺に令嬢呼ばわりされたときの真奈の台詞が脳裏に甦った。

かれこれ三〇分以上もシステム管理課に居座っているが、高橋拓哉は戻ってくる様子はまったくなかった。

再び、つけっぱなしのデスクトップに近寄って、見よう見真似で院内情報管理システム を起動してみた。システムは誰でも使えるものではなく、パスワードを入力する画面もあったのだが、高橋が自分のパスワードを入力していたので問題はなかった。

俺は村松の人事データを呼び出してみた。

村松俊二は福岡医科大学を卒業後、附属病院の胸部心臓外科に二〇年勤務。その後、短期的に幾つかの病院を渡り歩いて、八年前に敬聖会本院の循環器外科に副院長待遇で移ってきている。その二年後にアメリカに一年間留学し、帰国後に早良病院の副院長に就任。死亡するまでその地位にあった。早良病院では人員の関係から救急救命にも携わっており、同科の責任者も兼任していたようだ。

医師の人事データには桐島沙耶香のような一般職員はない 特記事項 という項目があったが、村松のその欄は空白だった。試しに呼び出してみた他の何人かの医師のデータでは、そこには過去の医療事故の有無、係争中の裁判の有無、その他、問題行動の類が記されていた。

院長の記者会見によれば、村松俊二は医療機器メーカーとの癒着が疑われている筈だった。だが、そんな記述はデータのどこにもな

かった。彼が榊原祐輔の医療ミスの身代わりを引き受けたのであれば、その取引の一環として記録が抹消された可能性は高い。

他に何か変わった記述はないかとデータを眺めると、面白い記述があった。村松俊二を敬聖会に連れてきたのは院長の榊原誠一だった。二人は福岡医科大の先輩後輩　村松が院長の二学年上で、転職の身元保証人も院長自らが引き受けている。

俺は続けて榊原誠一のデータを呼び出してみた。

彼も福岡医科大出身だったが、当時の専門科目の記録はなかった。医科大と敬聖会は提携関係か何かにあるようで、三〇年前に研修医として当時の本院である早良病院に勤務している。この時点ではまだ結婚前だったらしく、苗字は旧姓の矢野となっている。二十七年前、二十七歳の若さで副院長待遇で移籍。息子の年齢からするとこの時期にはすでに妻の麻子と結婚していた筈だ。結婚したから敬聖会に移ったと言う方が適切かもしれないが。

その後、二年間のアメリカ留学を経て宗像にある分院の院長に就任。本院の院長に就任したのは十二年前。

不思議なことに彼のデータには一貫して専門科目の記載がなかった。その代わりと言っては何だが、頻繁に母校の研究室に出入りしている形跡があった。民間病院の院長が臨床医でないのはいささか不自然だが、彼の場合は敬聖会に移った理由は転職ではなく、大病院ゆえに院長が事実上の名誉職になっていればおかしいとまでは言えないのかもしれない。

こうなると、他の関係者のデータも見ずにいられなかった。俺はまず、榊原麻子のデータを呼び出した。

榊原麻子、年齢は夫の二つ上の五十六歳。彼女もまた福岡医科大の出身だった。専門は内科（内分泌）とある。敬聖会病院は糖尿病の治療に力を注いでいる病院だという話を多香子が雑談の中で話している、本院には糖尿病患者の専門病棟まであるという。理事長がその関連の専門医なら納得できる話だ。

大学卒業後は附属病院に進まず、当時の敬聖会本院の内科に勤務

経営者の娘という立場にしては出世は遅く、内科主任の肩書がついたのは三〇歳を過ぎてからだだった。夫がいきなり副院長だったのは対照的だ。その後は内科医長を経て本院副院長。理事長職にある現在もその肩書を持っている。

続いて、榊原祐輔。だが、そこで俺の覗き見はストップされた。そのデータが 閲覧不可 となっていたからだ。どうということなのか。

榊原家の人間のデータがすべて見られないというのなら分かる。だが、榊原夫妻のデータは問題なく見られるのに、どうして一人息子のデータだけが見られないのか。そもそも、誰がその措置を講じたのか。

高橋が戻ってきたら制限を解除して貰わなければなるまい。そんなことを考えていると課室のドアがノックされた。

高橋ならノックなどする筈がない。俺は慌てて院内情報管理システムを閉じようとしたが、終了のさせ方が分からなかった。やむを得ずモニタの電源を切った。本体の電源を落とさなければ支障はない筈だ。

「失礼します。高橋主任、いらつしやいますか？」

ドアが開かれ、静かなアルトヴォイスが入ってきた。壁際に並んだデスクトップからも離れていたかったが、その時間はなかった。俺は高橋に待たされて所在なさそうにしている業者を演じることにした。

だが、入ってきた女と目を合わせたとき、俺の小芝居が上手くいっていたかどうかは甚だ怪しいものだった。地味なパンツスーツの上からでも肉感的な身体のラインが分かるその女が桐島沙耶香だったからだ。

どうして彼女がここにいるのか。今朝、ここに来る前に確認したときには熊谷のマセラッティは冷泉町の自宅マンションに停まっていた。昨日の夕方の割と早い時間に帰宅して以降、ずっとそうだったらしい。無論、だから熊谷が外出していないことにはなら

ないし、それ以前に熊谷が休みの日は彼女もそうだとは限らない。

そういえば、今頃になって井芹から尾行の報告が入っていないことを思い出した。だがそもそも、奴は昨日は中洲のガールズバーの撮影とかで尾行できるのは夕方からと言っていた。尾行自体をしていないことも考えられる。

「……えーつと、主任は席を外しておられますよ」

俺は言った。声は裏返っていない。だが、驚きを隠そうとして声が平板になるのは避けられなかった。結果としてかなりぼそぼそとした喋り方になった筈だ。

桐島沙耶香は少し怪訝そうな顔をしたが、すぐにチャームスクールで学んできたような卒のない微笑に切り替わった。丸顔で目鼻立ちの整った女の常として、翳を感じさせない柔らかな微笑だった。

「あら、高橋はどちらに行っただんでしょう？」

「さてね。少し歩いてくるから、としか言われませんでした」

「まあ、お客様がいらしてるのに、そんな失礼なことを？」

「最近の若い人には困ったものです」

「そんなことをおっしゃるほど、お歳には見えませんか？」

桐島沙耶香は小さな握りこぶしを手に当てて、おかしそうに目を細めた。健康診断で酒と煙草を注意されていたことから漠然と抱いていたイメージとは裏腹に、声は涼やかで落ち着いていて、耳に心地良いものだった。

俺は脳裏に原岡香織の顔を思い浮かべた。顔の輪郭などの重なる部分がないではないが、体型の大きな違いも含めて、二人を並べて同一人物と判断する人間はまずいないだろう。俺も先に疑いを持っていなければ、無意識のうちの可能性を除外していたかもしれない。歳相応のメイクの濃さや技術などもあるので素顔でどうかは未知数だが、全体で見れば整形手術の技術を褒めるべきレベルだった。くびれたウエストはダイエットの賜物か。

「失礼ですけど、どちら様ですか？」

入館証に合わせてGEエンジンニアリングの野口を名乗るべきか、

それとも、本名でいくべきか。桐島沙耶香とはいずれどこかのタイミングで接触する必要はあったが、まだ、その段階ではないと俺は考えていた。だが、逢ってしまったからには仕方がない。

「こういうものです」

俺は自分の名刺を渡した。彼女は興味深そうに表書きに目を走らせた。

「あら、探偵さんなんですか？」

「胡散臭く聞こえることは分かっていますが、そうです」

「そんなこと、思ってませんわ」

桐島沙耶香は笑みを深くした。疑っているようにも見えないし、面白がっているようにも見えない。

「探偵さんが高橋主任に何の御用なのかしら？」

「それは言えませんね。守秘義務に関わることです」

高橋に呼ばれた理由を創作する時間的な余裕はなかった。拙いところはすべて守秘義務で乗り切るしかなさそうだった。

「あなた方の仕事でもそうでしょうか？」

「わたしの仕事をご存じのような言い方をなさるのね？」

「病院の仕事というざっくりとした括りで言っただけですがね。こちらでは何のお仕事を？」

「事務局というところに。そこで事務長付きの秘書をやっております」

「熊谷氏のことですね」

「熊谷をご存知なんですか？」

「彼は警察出身ですよ。俺もそうなので　と言っても面識はないのですが」

権藤に見せられた資料や周辺人物の話聞いていくうちに、熊谷幹夫に関する当時の記憶が甦ってはきていた。だが、やはり年齢が一回り違つ上に、俺が県警に入った頃には熊谷はすでに公安課に移っていた。思い出せたのも大半は捜査課時代の熊谷を知る古株の連中に聞かされた噂話程度の内容だった。

「秘書のあなたがおられるということは、熊谷氏もこちらに？」

「いえ、熊谷は本日はお休みを戴いておりますわ。わたしも本当は休みなんですけど、いろいろと仕事が溜まっていて。それを片付けに出てきているんです」

「サービス休日出勤というヤツですか」

「そんなところかしら。ところが事務局の端末の調子がちょっとおかしくなったもので、それで主任に診て貰おうと思って」

「そんなことは電話で言えばいいのではないですか？」

彼女は俺が何を言っているのか分からないように目を瞬かせた。

しかし、すぐに小さく口許を歪めて誰かを小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「高橋主任とお話しになったんでしたら、彼が気難し屋だっことはお分かりでしょう。電話で呼びつけられたりしたら、何を言い出すか、分かったものではないんです」

「そうですか？ 意外と素直なところもあるようですが」

胃袋に右フックを喰らったりしたら特に。

「それは上社さん、あなたが男性だからじゃないかしら。わたしたちにはかなり横柄ですもの」

「彼のことが嫌いなんですか？」

「……大きな声じゃ言えませんが」

「気が合いますね。実は俺もそうなんです」

「まあ？」

共犯者を求めるような悪戯っぽい笑みは、妙齡の女性のものというよりは子供っぽさを感じさせた。

高橋がいないのであれば用はないということで、桐島沙耶香はデスクに伝言のメモを残して部屋を出て行った。俺はそのメモのコピーをとってデスクに貼り、直筆の方は畳んでメモ帳に挟んだ。指紋照合と筆跡鑑定の為だ。前者には制約があり、後者も本人確認の手段としてはかなり弱い。後になって手に入れておけばよかったと後悔するのは三流の仕事だ。

俺はシステム管理課を出て桐島沙耶香の後を追った。彼女はエレベータが来るのを待っていた。

「あら、主任を待たなくてもいいんですの？」

「どうも戻ってくる気配がありませんのでね。それにそろそろ昼飯の時間だ」

「そんな時間ですのね。一日三食、きちんと食べられていますか？」
意外な質問だった。だが、ここは病院だ。そういう話題に転じてもおかしくないのかもしれない。

「残念ながら、朝飯を食うことはほとんどありませんね。一人暮らしの上に料理がまったく出来ないのです」

「失礼ですけど、ご結婚は？」

「したことはありませんけどね。あなたは？」

「食事の話？ それとも、結婚の話？」

「お好きな方で」

彼女はクスツと笑った。

「わたしも朝は食べませんね。一人暮らしはあなたと一緒にですけど、料理は出来ますわ。けれど、朝はそんな時間もありませんし」
「なるほど」

嘘をついていなければという前提ではあるが、千早の彼女のマンションに同居の家族はいないらしい。だとすると、やはり原岡香織の子供はこの世に生を受けていないのか。

エレベータが来た。俺と彼女は一緒に乗り込み、彼女は何も言わずに一階のボタンを押した。

「昼は上のラウンジで？ それとも、別に社員食堂があるんですか？」

「ラウンジは軽食だけですからお昼には向いていませんわ。職員食堂がありますけど、今日のメニューはあまり好きじゃないものだったんで。売店もお休みだし、しょうがないから、ダイエットがてらにお昼は抜こうかなって思ってますけど」

「外出は出来ないんですか？」

彼女は首を横に振った。

「今日は出勤じゃないんでそういう制約はありませんわ。元々、禁止されてもいないんですけどね。ただ、外に出ようにも足がないんです。通勤は車じゃないもので」

「だったら、ご一緒しませんか？」

「えっ？」

「姪浜駅のすぐ近くで知り合いがイタリアンの店をやっていましたね。ずいぶん前から顔を出すと約束していたんですが、守れていないんです」

苦しい言い訳のようだがまんざら嘘でもない。俺が所有する警固のビルでやっていたイタリアンの店が半年前に西区に移転していて、その招待状が届いているのだ。事実関係と異なるのは呼ばれているのは夜のダイナーコースだったことだが、その程度の違いはとうとうでも誤魔化せる。

桐島沙耶香は俺をからかうような笑みを見せた。

「あら、上社さんって「女だからイタリアンで誘えばオーケー」みたいな安易な発想をされる方なんですか？」

「安易というよりは貧困といった方が正解かな。割と小洒落た店舗えらしくて、いい歳をした厳ついオッサンが一人でイタリアンというのもちよっと場違いかなという感じなんですよ。助けて戴けるとありがたいのですがね」

「面白い誘い方をされるんですね」

桐島沙耶香は握りこぶしを口許に寄せて、喉の奥でおかしそうに笑った。

エレベーターが一階に着いた。俺は救急外来棟から移ってきたのでここは初めてだったが、休日の物音一つしないガランとしたロビーは、実際以上に広大な空間に思えた。

「すみません、パソコンを閉じてきますから、一〇分ほど待っていて戴けますか？」

俺は構わないと答えた。

受付などがある区画の裏に入って行く桐島沙耶香の後ろ姿を眺めながら、俺は心の中で盛大な溜め息をついた。本来、調査対象者と直接の接触はこの仕事ではタブーとされている。相手が警戒すればそれだけで調査にマイナスに働くからだ。

だが、この状況になってしまったからには後戻りは出来なかった。本来の目的は秘匿しつつ、本人の周辺から情報を取るしかないだろう。

従って、彼女を食事に誘ったのも調査の一環であり、決してナンパではない。俺は自分にそう言い聞かせた。誰に向かって言い訳をしているのかは自分でもよく分からなかった。

福岡のイタリアンレストランはその多くがいわゆる街の洋食屋のようなこじんまりした個人経営の店で、大名にあった頃のトラットリア・ジャツロヴェルデもその一つだった。移転後もさして店構えは変わっていないだろうと高を括っていたのだが、海が近く自然も豊かな糸島半島に近付いたせいか、いかにも若い女性に受けそうなオーガニックを前面に打ち出した店に変貌していた。他のテーブルを埋めているのは女性客ばかりで、男は俺の他には精悍な顔をした長身のウェイターが一人いるだけだった。奇しくも沙耶香を誘った口実が的を得た形になった訳だが、素直に喜べないのも事実だ。「あらら、リュウさんも隅に置けないわね。こちらの美人は？」

イタリア人とのハーフという触れ込みのオーナー、マリアはここぞとばかりに俺を冷やかした。本当はクォーターで、しかも彼女の祖母はシリア人なのだが、そんなことは黙っていれば誰にも分からない。

だが、困った。出会ったばかりの彼女を友達と紹介するのも馴れ馴れしいし、しかし、仕事の関係者でもない。調査対象者だとは口が裂けても言えない。

助け船は沙耶香が出してくれた。といっても特に口を挟んだ訳ではない。優雅な微笑を浮かべて会釈してみせただけだ。

ウェイターが注文を取りに来た。俺はさっとメニューに目を通し

て、三つある昼のランチコースの真ん中を選んだ。無骨な警官上がりの俺でもレディファーストという言葉を知らない訳ではない。ただ、俺が決めないと沙耶香が決めにくいと思っただからだ。

「ワインはいかがされますか？」

ウェイターが言った。

「俺は車だから要らないよ。君は？」

「わたしも遠慮しますわ。まだ仕事が残っているので」

「ノンアルコールのビールもあるようだが？」

「あんなものを飲むくらいなら水道水を飲んだ方がマシって、いつもうちのボスが言ってます」

「熊谷氏が？」

「ええ。わたしも同意見。上社さんは？」

「同じく」

沙耶香は悪戯っぽい笑みを浮かべていた。一般に整形手術をする表情が乏しくなるといって、くるくると様相を変える彼女の笑顔を見ているとその俗説を疑いたくなる。

一瞬、俺は目の前の女が自分が追っている。そして、警察も殺人事件の重要参考人として追い掛けている女だということは何かの間違いだと思いついた。先入観と同じく、近い感情を持つことは事実を見る目を曇らせることがある。自分で言うのもなんだが良くない兆候だった。

食事を終えて、俺は敬聖会病院まで桐島沙耶香を送った。

「これからまた仕事なのか？」

「まあね」

沙耶香は小さく肩をすくめた。ずいぶんと話したおかげで口調はすっかりくだけていた。

「夜はまた用事があるから、それまでに片付けないと」

「ほっ？」

特に意味を込めたつもりはなかったのだが、沙耶香はそう受け取らなかつたようだった。柔らかく丸みを帯びた頤を少し上げて、からかうような目で俺を見た。

「デートじゃないわよ」

「そんなことは言つてないさ」

「あら、そう？　そういう勘繰りかと期待してたんだけど？」

「だったら、応えた方がいいのか？」

沙耶香は弾けるように笑った。

「ざーんねん、呼び出しはうちのボスから。今日の夜、医師会のお偉方と食事があつてね。爺さんばかりで華がないから同席しろ、だつて」

「綺麗どころという訳か」

「そんなに綺麗でもないけど。丸顔パンパンのおばさんだもの」

「ご謙遜を」

「ありがと。機会があつたら、またご飯に誘つてね」

「会合が終わつた後は？」

沙耶香は少し驚いたように目を見開いた。

「あなた、意外とせっかちなのね。たぶん遅くなるし、明日も仕事だから無理よ」

「そいつは残念だな」

「焦らなくてもチャンスの神様は来るわ。足が速いらしいから頑張らなきゃいけないと思うけど」

「馬鹿正直に競走なんかしないさ。胃をはって転ばせてから取り押さえるよ」

「悪党」

「ありがと。最高の褒め言葉だ」

彼女は喉の奥で笑いながらZの助手席から降りた。それからもう一度、礼を言う為に上半身だけ車内に入ってきた。

「お話できて楽しかったわ。ご馳走様」

予想外に顔が近づいてきて驚かされたが、沙耶香は艶のある意味

ありげな笑みを残して去っていった。夜間飛行の残り香がふんわりと俺の鼻孔をくすぐった。

食事中も往復の車中も、特に中身のある話はしなかった。俺は彼女のことは何も知らないことになっているので迂闊なことは言えないからだ。

気をつけたのは、自己紹介をされる前に彼女を名前で呼ばないようにしたことだ。

内偵捜査で犯しがちなミス之最たるものが、事前の調査や捜査資料で読んで知っていることを口走ること、かく言う俺も薬対に配属されたばかりの駆け出しの頃に大麻密売で内偵中のクラブで中心人物のマネージャーの本名を口走るといふ大チョンボをやらかしたことがある。無線で会話をモニタしていた権藤が即座に強制捜査を決定してくれたので大事には至らなかったが、おかげで学生時代に浮気がバレたとき以来のこつてり絞られる羽目になった。

それはともかく、初対面で相手の身元に関することを根掘り葉掘り訊くことも出来ず、事件に関わる話を振って警戒心を持たれるのも避けざるを得なかった。

結果として、会話の内容は彼女がとても興味を示した探偵という仕事の裏話と、彼女のボス 熊谷幹夫に関することだった。だが、それもあくまで敬聖会総合病院の事務長という表の顔に関する内容であり、経営コンサルタントとしての別の顔や、キシカワ・インヴェステイゲーションの実質的所有者という裏の顔の話にはかすりもしなかった。

だが、探偵の話の中で俺は一つだけ釣り球を投げておいた。現在、請け負っている仕事の依頼人と会う為に敬聖会のサナトリウムを訪れた話をしたのだ。守秘義務という錦の御旗の下に依頼人に名前は明かさなかったが。

調べようと思えば調べられるわよ？

沙耶香は幾分挑戦的な口調でそう言った。

無論、そうだ。俺と多香子の深夜の来訪はサナトリウムの入館記録に残っている筈だし、俺の顔は監視モニタだけでなく、病棟入口に常駐する看護士兼ガードマンの筋肉ダルマに見られている。原岡洋子が一緒にいた以上、招いたのが原岡修三なのは明らかだ。

俺は敬聖会を後にして、市内中心部に向かってZを走らせた。日曜日でマリノアシティの辺りが渋滞しているらしく、今宿新道はひどく流れが悪かった。CDは昨日の朝から入れっ放しのブエナビスタで、再生ボタンを押すと Amor De Loca Juventud が流れ出した。俺にこのCDを教えてくれた知り合いは若き日の狂った愛 と訳していたが、狂ったという割にはずいぶんと牧歌的なメロディのような気がする。

東京の調査については進藤の報告待ち、原岡香織の本人確認については原岡洋子が用意してくれる写真待ち、警察の捜査状況については原岡修三の連絡待ちだった。その間、原岡修三の依頼に関して俺に出来ることは何もなかった。なので、俺は真奈の件 熊谷幹夫の隠れ家捜しに取り掛かることにした。

マセラッティは相変わらず熊谷のマンションに停まったままだった。俺は井芹の携帯電話を鳴らした。ところが電話は繋がらず、おかけになった電話は電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため というお定まりのメッセージを聞かされただけだった。電池切れか、それとも地下のスタジオにでも籠っているのか。あるいはいつもの場所か。

俺は赤坂の中央区役所裏のパーキング 例によって朽木の所有にZを突っ込み、新天町商店街まで歩いて老舗のパチンコ屋に入った。

カネがあるときはここで銀色の玉を眺めながら瞑想するのが井芹の日常だ。カネがないときは自宅のクローゼットに据え付けてある中古の機種を打つことで我慢しているらしい。だったら普段から自宅でやればカネもかからないだろうと俺は思うのだが、そう言う

井芹は露骨に馬鹿にした顔で「あんたはギャンブラーの魂が分からないんだよ」などと生意気なことをほざく。

だが、井芹の指摘の通り、俺にギャンブルの資質が欠けているのは事実だ。競馬のG?で十五連敗したこともあるし、パチンコで勝ったこともほとんどない。学生時代はマージャンやポーカードで遣い稼ぎをしていたが、あれは金を賭けていても勝敗そのものは純粹に技術と心理の読み合いで決まるので博打の才能とは関係ないのだ。店内には難聴になりそうな金属的な騒音と、それを後押しするようなBGM、プロレスのリングアナウンサーのような籠った声のアナウンスが鳴り響いていた。何を言っているのかはまったく聞き取れなかった。狭苦しい店内に詰め込めるだけの台が置かれているので、ずらりと並んだ客と客の間を歩くだけでも一苦労だった。

だが、店内を一周しても井芹の寝癖頭は見当たらなかった。ギャンブラーの常としてジंकウスに煩い井芹はよそのホールには滅多に行かない筈だった。だとすると、他の用事なのか。

「あら、リュウさん。お久しぶり！」

「おう、久しぶり」

声をかけてきたのはナツキという名の顔見知りのホステスだった。女性を侍らせて酒を飲む意味がよく分からないので、避けられない事情でもない限りは俺はスナックやキャバクラに行かないのだが、自分の持ちビルのテナントとなればまったく顔を出さない訳にもいかない。

「どうしたの？」

「井芹を捜してるんだ。あの野郎、電話に出やがらない」

「井芹さん？　そういえばさっき、奥さんが慌てて店を出て行ってたけど？」

「カミさんが？」

驚くべきことだが井芹は既婚者だ。但し、二人の間を離婚届の用紙がヒラヒラしてはいるが。

「どこに行ったんだ？」

「警察とか言ってたけど。何かあったのかな？」

「どうだろうな」

井芹の細君、和歌子の電話番号は知っていた。俺は店の外に出て彼女の携帯電話を鳴らした。一度、着信拒否で切れたがすぐにコールバックが掛かってきた。

「ごめんなさい、スマホに変えたばかりで操作に慣れてないの」

和歌子はせかせかせかした口調で言った。凄腕のエステティシャンという話だが、この忙しなさで声を掛けられたら施術されている側はさぞ落ち着かないだろう。まあ、仕事るときは違うのかもしれないが。

「どうかしたの？」

「それは俺の台詞だよ。警察に呼び出されたんだって？」

「どこで聞いたの、そんなこと？」

「俺は地獄耳なんだよ。どうした、何かあったのか？」

俺が和歌子のことを気にするのは彼女が恵美里の親友だからで、井芹の細君だからではない。どうでもいいが、彼女の男を見る目はエステティシャンとしての腕前に遠く及ばず、いわゆる 問題のある男に惹かれる女は、一生問題のある男に惹かれ続ける という定説を見事に体現している。最高で六股を掛けていたホスト崩れを追い払ってやった直後に都落ちしてきた風俗写真家 井芹健二のことだ と付き合い始めたとき聞いたときは激しい脱力感に襲われたものだ。

「リュウさん、今、何処にいるの？」

和歌子の声は硬かった。

「おまえさんたちの行きつけのパチンコ屋の前だ」

「良かった、そんなに遠くないわ。ねえ、一緒に病院まで行ってくれない？」

「いったいどうしたんだ？」

「ケンちゃんが大怪我して入院しちゃったのよ。ヤクザが何かに絡まれたらしいんだけど、意識不明なの」

「……何だと？」

背筋が急速に冷えていくのを感じた。

副業というわけでもないが、井芹は福岡に拠点を置くアダルトブイデオの製作プロダクションにも出入りしている。基本的に素人を起用した作品ばかりなのでヤクザと揉めることは少ないと聞いているが、ときには美人局まがいの女を引つ掛けてしまうこともあり、その為に地元のヤクザをケツ持ちにしている筈だ。

その井芹がヤクザに絡まれるまではともかく、大怪我を負わされるところというのは不可解な話だった。飲み屋で泥酔してトラブルを起こした程度ならケツ持ちも介入しないだろうが、井芹は注射のアルコール消毒で負けるほどの下戸だ。女とねんごろになって揉めるほどの甲斐性もない。

夕べ、井芹は何をしていたのか。

「すぐに行く」

俺はそう答えて電話を切った。

井芹健二が収容されたのは博多区と大野城市の境にある個人病院だった。日曜日でも閑散とした光景だろうと想像していたのだが、当番制の休日診療の日にあたるとかで、あまり広くない待合室は患者でごった返していた。

井芹の細君、和歌子は俺の姿を見つけると立ち上がって大きく手を振った。病院にはあまり相応しくない仕草で、隣に座っていた老婆がギョツとしたような顔で彼女を見上げていた。

「ああ、リュウさん、来てくれたんだ！」

「来ると約束しただろ」

和歌子は泣き笑いのような顔で何度もうなずいた。学生時代はスキー部だったそうだが、当時の雪焼けの名残りのように肌が浅黒く、おまけにただでさえメリハリのある顔立ちにキツチリとメイクをするので、まるつきり東南アジア方面の女性にしか見えない。実際に街を歩いていて前触れもなくタイ語やベトナム語で話しかけられたり、フィリピンを旅行中に現地の男性に唐突に求婚されたという逸話も聞いたことがある。

「井芹は？」

「いま、集中治療室。面会謝絶で会わせて貰えないの」

「おまえ、一応、家族だろう？」

「一応って何よ」

プツと頬を膨らませる和歌子の腕を軽く叩いて、彼女の隣に腰を下ろした。

「……よかった、リュウさんが来てくれて。一人だと心配で押しつぶされそうだったの」

「容態は？」

「命に別状はないって話。だけど、ずいぶん頭を殴られてるみたいで、脳挫傷を起こしてるかもしれないらしいの。それで意識が戻らないんだろって」

「設備の整った病院に移して貰った方がいいかもな」

「さつき、先生にそう言ってみたわ。今、受け入れてくれそうな病院と話して貰ってる」

気丈に振舞っていて語尾は震えていた。無理もあるまい。

「奴は何をしていたんだ？」

「分からないわ。このところ、あんまり連絡を取ってなかったから。リュウさんは何か聞いていないの？」

俺の仕事をさせていたことを話すべきか、ほんの少しだけ迷ったが、嘘をつく訳にはいかない。俺は一昨日から井芹にある人物の素行調査をさせていたことを話した。但し、昨日は奴の本業があった為にアルバイトはそれが終わってからという話になっていて、終わったという連絡も途中経過の報告もなかったことも付け加えた。

「連絡しろって言ってもしないのよね、あいつ」

「まあな。警察は？」

「いるわ。あそこ」

和歌子は目線で待合室の隅を示した。俺はこの場でもう一人浮いているブルーサージのスーツ姿の男に近寄った。

「おまえが担当か、村上？」

椅子に座って高々と脚を組んでいた男が俺を見上げた。驚いている様子はまったくくない。

「お久しぶりです、先輩」

「先輩はよせ。俺はもう警官じゃない」

「ああ、そうですね」

村上恭吾はほとんど表情のない顔で俺を見ていた。面長な柔らかい顔立ち。くつきりとした涼しげな目許とスツと通る鼻筋。本人は地毛の色だと言いつけるが、少し癖のある栗色の長髪には相応の金と手間が掛かっている筈だ。

だが、ジャニーズにいてもおかしくないほどの優男なのに、この男は常に仏頂面で温かみをあまり感じさせない。そのせいか、話しているときとひどく精巧に出来た人形と接しているような錯覚に陥ることがある。

俺は村上の隣の腰を下ろした。

「何があつた？」

「どうして、それを先輩に話さなきゃならないんです？」

「昔のよしみだ」

「驚きましたね。僕を薬対に引つ張つておいて、自分だけさつさと辞めたくせに」

「好きで辞めたんじゃないさ。それに、おまえを引つ張つたのは俺じゃない。徳永だ」

「そうですねっけ？」

すつとぼけてみせたが、俺と村上は少なくとも一〇回以上は同じ会話を繰り返している。要するに当て擦りなのだ。

俺が警官を辞める一年前、博多署の捜査課で抜群の検挙率を誇る有望な若手を薬物対策課に引つ張ろうと言いつ出したのは徳永真司だった。率直なところ、俺はあまり興味はなかつたのだが、課内の若手の出来の悪さに辟易していた徳永は課長の権藤に直談判し、権藤の人脈の広さを駆使して本当に村上を薬対に配属させてしまったのだ。

ところが当の本人はその一年後に麻薬中毒者に撃たれて殉職。教育係という不似合いな立場にあつた俺もその直後に警察を去つた。それでも、権藤が薬対にいる間は何とか持ちこたえたのだが、後任の新課長と折り合いが悪く、二年前に別の部署に転属になつたとい

う噂を耳にしていた。

だが、博多署に戻っていたとは知らなかった。

「被害者と先輩の関係は？」

「俺は奴の細君の知り合いなんだ。そのよしみで井芹に仕事を頼むこともあった」

「あつた？」

村上の感情の読めない目が俺に向けられた。日中には薄暗い待合室の隅っこで俺と村上はしばし、互いの目の色を探り合った。

「……まあ、いいでしょう。今朝、午前六時三〇分に一一〇番通報があつたんです。名前は伏せますが、通報者は博多区日の出町在住の一般女性です」

「内容は？」

「雑餉隈の飲み屋街に血まみれの男が倒れている、というものでした。通報者は博多駅構内の販売関係の仕事をしていて、出勤途中だったそうです。現場は入り組んだ路地の奥でしたが、通報者の自宅から南福岡駅に行く近道だそうです」

「被害者の状況は？」

「外傷のほとんどは打撲ですね。但し、頬や頸部に刃物を押し付けたような軽い切創があります。あと、手のひらと膝、手首に擦過傷、下腹部に軽度の火傷」

「どういうことだ？」

「手首を縛って吊るされて、刃物を押しつけられたり、下腹部にライターを近づけたりして脅されたと考えるのが妥当でしょう。とは言っても、怪我の度合いを見る限りでは暴行の大半は殴る蹴るだったんでしょうが。その後、被害者は何らかの方法で脱出。手のひらと膝の怪我は四つん這いで動き回ったときのものでしょうね」

俺はチラリと和歌子を見た。村上の声が低いのもあって会話の内容は聞こえていないようだった。心配だが口を挟んではいけないと我慢しているのがありありと表情に浮かんでいた。察しの良い女なのだ。

「井芹の容態は？」

「意識不明の重体。頭蓋骨折を起こしているかもしれないという話でしたが、担ぎ込まれてから六時間以上経った今でも開頭手術に至っていないところを見ると、そこまでのことはないのかもしれない」

「病院側はそういう情報を開示しないのか？」

「この院長、大の警察嫌いですね。昔、ある事件の被疑者が大怪我して、というか、させられてここに担ぎ込まれたことがあるんですが、公安課の連中が強引に転院の手続きをして連れて行っちゃったことがあるらしいんですよ」

「そんなこと、別に珍しくもなからうに」

「被疑者が院長の息子じゃなかったら、そうなんでしょうね。まあ、公安側はそれもあって、被疑者の引き離しにかかったんでしょいうけど」

「なるほど。加害者の割り出しは？」

「それが進んでいたら、僕はここにいませんよ」

村上は小さく肩をすくめた。確かにその通りだった。

「おまえの話だと井芹はそんなに長い距離を動ける状況じゃなさそうだ。だとしたら、奴が暴行を受けた場所を特定するのはさして難しくないんじゃないのか」

「僕もそう言ったんですがね。ところがうちの課長、そんなことは意識を取り戻した被害者から訊けばいいと言って、鑑識の出勤を許可しなかったんです。経費の無駄遣いだとか言って」

「博多署の刑事課長は誰だ？」

「柳沢警部を知ってますか？」

「知ってる。刑事部長の腰ぎんちゃくだ」

それだけではなく、去年まで県警副本部長だった警察庁キャリアの従兄でもあった筈だ。おかげで捜査のミスがあっても誰も奴の責任を指摘できないし、それどころか、会議の場でも所轄署の一課長にも関わらず、県警本部のお偉方よりも大きな顔をしている。せめて、それに見合う実力があれば というのが柳沢の人物評に必ず

出てくるフレーズで、その程度の男だった。

「もし、井芹が意識を取り戻さなかったら、どうやって現場を割り出すつもりなんだろうな。初動捜査の落ち度を叩かれることくらい、いくらあの莫迦でも分かるだろうに」

「先輩からそう言っただけで貰えると思ってるんですがね」

村上は呆れたように息を吐いた。そう言われても、俺はすでに警察の人間ですらない。

「それで、肝心の井芹が目覚めます見込みは？」

「どうなんでしょうね。さっきも言ったように、病院側からは何も教えて貰えませんから」

「すると何だ、おまえは奴が意識を取り戻すまでここで待ってるつもりなのか？」

「さすがにずつつてことはないと思いますけどね。でも、交代要員が来なかつたら、そういうことになるかもしれない」

「……おまえ、そんなにやる気のない警官だったのか？」

「誰かさんたちのせいで、僕は上層部から面倒くさいヤツ扱いされてるんですよ。そんな僕に上司の命令に背いて何が出来るって言うんですか。」

被害者の所持、見ます？」

「そんなものを俺に見せてもいいのか？」

「部外者に見せるなという指示は出てませんので」

村上は長い脚をほどくとスツと立ち上がった。雑誌の表紙ばりの均整の取れた立ち姿はどう見ても警官のものではなかった。

俺は村上の後に続いた。和歌子が自分はどうすればいいのかという顔をしたので、手ぶりで一緒に来るように呼んだ。村上はチラリと和歌子の方を見ただけで何も言わなかった。

駐車場には捜査車両仕様の黒いトヨタ・クラウンが停まっていた。パツと見た感じは同じでも一般車と警察車両には細かい相違点があって、元警官の俺にとっては 覆面パトカーです と標識を掲げて走っているのに等しい。

村上はラゲッジから取り出した小さなビニールの袋の中身をトラ

ンクリッドの上に並べた。

「これだけか？」

「ですけど？」

澄ました顔　　だろう、おそらく　　の村上は今度は大袈裟に肩をすくめた。たったそれだけの仕草だったが、意外と筋肉質の均整のとれた体つきなのがスーツの上からでも分かる。

トランクリッドに並べられたのは携帯電話のハンスフリーキット、カラビナでベルトのガイドに留められるようになっていて鍵束、携帯用の灰皿、すっかり潰れてしまったしんせいのパッケージ、ほとんどガスが残っていない使い捨てライター、小銭が少々といったところだった。

「携帯電話と財布はなかったんですか？」

和歌子が言った。村上は頷いただけだった。

「ハンスフリーキットがブルゾンのポケットに残ってましたけど、ご主人はバイクに乗られるんですか？」

「ええ、モトクロスっていうのかしら、ダートレースに使うみたいなバイクに乗ってましたけど」

「車種とナンバーは分かりますか？」

「家に帰れば……」

村上は自分の名刺に携帯電話の番号を書き込んで「分かったら連絡を」と言って渡した　　ほんの少しだが、被害者の家族を気遣うのに相応しい笑みを添えて。

「ハンスフリーを使うのがバイク乗りだけとは限らんだろう」

口を挟んだ俺を村上はチラッと見た。

「コードの特定の場所に擦ったような痕がありましたね。ちょうど顎の横くらいの長さ、フルフェイスを被るとチンガードの部分なんです。途中についでコントローラも素手で触ってもつかないような擦り傷がついてまして」

「大した観察眼だな」

「先輩に教わったんですよ。刑事に必要なのは観察力と洞察力だっ

て

「そんなこと言ったか？」

言ったような気もする。確か、権藤に言われたことの受け売りだ。「ところで実際の話、おまえさんの親分はこの事件をどう見てるんだ？」

「どうなんでしょうね。財布と携帯電話が無くなってから、物取りの犯行と考えているんじゃないですか？」

「監禁されていた可能性すらあるのに？」

「あの親爺、もうやる気がないんですよ。副本部長が他所の県警に行っちゃって、自分を県警本部の上の方に引っぱり上げさせる目算が狂っちゃいましたんで。定年まで今か、今と同じくらいのポストに居られればいいですけど、敵も多いですからね」

「そんなの、一〇〇パーセントの私情じゃないですか！」

「困ったものです」

和歌子の抗議を村上は身も蓋もなくやり過ぎした。

彼女の手前、口には出来ないが、警察がこの件にそれほど興味を示さないのは俺にとっては悪いことばかりではなかった。井芹が熊谷幹夫の動向を監視していたことが分かれば、当然、彼らの目がそれをやらせていた俺に向く。最悪の場合、しばらく身動きが取れなくなる可能性もあった。

「で、おまえの見立ては？」

「……この状況で、僕に何が分かるって言うんです？」

「まだ、俺に話してないことがあるだろう。上司が無能でやる気がないからって、おまえがそれに従って大人しく病院のロビーに座ってる筈がない」

「リュウさん、どういう意味？」

和歌子が口を挟んできた。しかし、俺は差し当たって彼女には答えなかった。

「しょうがないですね」

そう言って、村上はポケットから別のビニール袋を取り出した。

皺だらけのレシートと思しき紙が一枚、丁寧に皺を伸ばした状態で収められていた。

「何だ、これは？」

「被害者のジーンズのポケットに突っ込んであったんです。高速道路の領収書ですね」

「何処のだ？」

「久留米インターチェンジ。昨日の夜、午後一〇時二五分に料金を支払ってますね。こんな時間に久留米に何の用事があったのやら」

「……さあな。ちなみにこれはどうして他の証拠と別になってるんだ？」

「入手経路が違いますんでね。被害者のジーンズのポケットに押し込まれていたのを、脱がせた看護師が見つけて僕にくれたんです」

「その看護師は知り合いなのか？」

「まさか」

澄ました顔をする村上をしばらく睨んでやったが、反応はまったくなかった。どうしてこの男は警官なんかやっているのだろう。中洲でホストクラブに勤めればあつという間にナンバーワンになれるだろうに。

村上は俺のことなど気にする素振りも見せず、和歌子に向かって井芹に久留米在住の知り合いや仕事の関係者がいないかと訊いた。

和歌子はあちらのタウン誌の仕事をしたことはあるが、特に親しい付き合いをしている人間はいなかった筈だと答えた。

俺が知っている範囲でも、井芹に久留米を始めとする筑後地方に知り合いがいるという話は聞いたことがない。一人だけ、和歌子に隠れて付き合い合っていた風俗嬢がいたが、その女はとっくの昔に引退して結婚してしまっている。「彼女を思い出すからあっち方面には行きたくない」などとセンチメンタルなことをほざく井芹をさんざん馬鹿にしたことがあるので間違いない。

「だったら、どうして井芹さんは久留米に行っていたんでしょうね？」

村上是繰り返して言った。誰に向かつて言っているのか分からない口調だったが、俺に当て擦りをしているのは間違いなかった。

「分かった、何か判明したら連絡する」

「当然ですよ。その為に話したんだし、これだって見せたんですから」

村上はレシートをポケットに戻すと待合室に戻った。俺と和歌子はその場に残された。

「とりあえず、井芹が目を覚ますのを祈るしかないな」

「そうね……っていうかりユウさん、心当たりがあるんでしょう？」

「何が？」

唐突な指摘に狼狽しなかったのは経験の賜物と言っていていいだろう。だが、和歌子は確信したような表情を崩さなかった。

「あるんでしょう？」

「……ああ。井芹と久留米の間には一つだけ繋がりがあある。奴自身というよりは俺が奴に追わせていた男とだが」

「やっぱりそうなんだ？」

「ああ。どうして分かった？」

「女の勘ってヤツかしらね。あたしがそういうの鋭いの、知ってるでしょ。リュウさんがエミリと寝たのも当てたし」

「そうだったか？」

恵美里の俺に対する微妙な態度の変化で見抜いたらしいのだが、あの時はひどくバツの悪い思いをさせられた。女の感覚的な察知力に比べれば、探偵や刑事の洞察力など風邪をひいた犬の嗅覚に等しい。

熊谷幹夫の出身地は福岡県久留米市野中町。熊谷総合企画の取締役でもある熊谷の両親は今でも同地在住になっている。権藤がくれた資料は古いものだったので二人が健在なのかどうかは不明だが、少なくとも奴の実家が久留米に現存する可能性は高い。

「行くの、久留米？」

「そうだな。高速を使えば一時間もかからない」

「あたしも行く」

「おまえが？」

「歳つい中年のオッサンが一人だと目立つけど、夫婦の二人連れならそんなに目立たないわ。でしょ？」

「そうか？」

闇金の取立屋と東南アジア女の二人連れは他のどんな組み合わせよりも目立つような気がするが、取り合わせ自体はそれほど不自然なものでもない。それに反対したところで和歌子が聞き入れるとも思えなかった。

俺は和歌子を助手席に乗せて、一番近場の都市高速ランプに向かってZを走らせた。

「熊谷幹夫!？」

その名前が出ると和歌子は素つ頓狂な声を上げた。あまり話したくなかったのだが、彼女の夫に誰を追わせていたのかを白状させられたのだ。

俺は手足の指では足りないくらいの人間の弱みを握っていて、必要があればそれを利用することも辞さないが、俺の弱みを握っている人間はそう多くない。和歌子はその少ない人間の一人だった。ネタの出所は主に恵美里だ。あいつは何故か、この女に尋常ではないほど心を許していて何でも喋ってしまうのだ。

「どうしておまえが奴を知ってる？」

「ウチの店、あそこのお得意さんだもの」

「コンサル会社の？」

「そう。実際に担当してるのはボスじゃなくて、清里くんっていうスタッフだけだね」

「あの会社は熊谷の個人事務所じゃないのか？」

「最初はそうだったんじゃない？ でも、今はボスは別の仕事してるから」

「敬聖会の事務長」

和歌子は小さくうなずいた。

「でも、そっちも何してるのか、よくわかんないって話を聞いたこ

とあるわ」

「事務長というからには事務方の親分だろう」

「うーん、そこがちょっと違うのよねえ。ややこしいんだけど、事務方のトップには別に事務局長つてのがいてね。敬聖会の先代 榊原惣之助の代から仕えてる三島さんつていうお爺ちゃん。いわゆる番頭さんね」

そういえば、桐島沙耶香の職務経歴を見ていく中で事務局という部署が出てきた。確か、現在も所属している筈だ。俺は単純に自部署のトップ専属の秘書扱いなのだろうと思っていたが違うらしい。

「じゃあ、熊谷事務長は何をしているんだ？」

「そこまで知らないわよ。ただ、敬聖会の実質的なトップは理事長 夫妻じゃなくて、熊谷さんだつて話を聞いたことがあるわ」

「どういう意味だ？」

「あそこの敷地の一番奥に特別病棟つてのがあるの。ちょっとしたホテルみたいな造りで、警察の事情聴取とか受けそうになった人が緊急入院するところらしいんだけどね。あと、普通の病院においそれと入院できない人とか」

和歌子は口許をゆがめて意味ありげに笑った。指しているのはいわゆる暴力団関係者だ。

「それが？」

「あれ、事務長の独断で建てられたつて噂でね。理事会ではずいぶん反対意見が出て、理事長の榊原 なんていったつけ？」

「榊原麻子」

「そうそう、その麻子さんは特に反対だったらしいわ。無駄遣いもいいとこだし、反社会勢力に手を貸してるなんてことになったら病院の評判が落ちるつて。でも、結局、理事会は建設を了承したらしいわ」

「理事長権限とかで却下出来なかったのか？」

「どうなのかな。最終的には満場一致だったつて話だから、理事会の外で話がついたんでしょうね」

「なるほどね。しかし、おまえはどうしてそんなことに詳しいんだ？」

「異業種交流会ってのがあってね。熊谷さんとこの主催のパーティで敬聖会の理事の一人と仲良くなって、その人から聞いたのよ」

「便利なものだな」

「顔が売れて仕事が舞い込むかもよ。連れてってあげようか？」

「考えておく」

行く気などさらさらなかった。顔が広いことは探偵の能力の一つだが、それと顔が売れていることは意味が違う。

車は九州自動車道をひた走っていた。都市高速二号線から大宰府インターチェンジに接続しているので、事実上、ノンストップで久留米まで三〇分程度で行ける。その昔、まだ両者が連結していなかった頃は空港近くのランプで三号線バイパスに降りねばならず、ひどく時間が掛かったものだ。

「それで、どうして健二に熊谷さんの後を追わせていたの？」

本題はそこだが、真奈の名前を出すのは憚られた。俺は彼女の名前だけを伏せて、熊谷の隠れ家捜しの仕事を請け負っていたことを話した。

「隠れ家？」

「胡散臭く聞こえることは分かってる。だが、依頼人がそう言うんでね」

「その隠れ家とやらが久留米にあるの？」

「それはどうだか分からないな。だが、福岡市内にそれらしき物件が見当たらないのは事実だな。GPS発信機をつけただけのたった三日の調査なんで、確証を持っては言えないがね」

「でも、そうじゃなきゃ、健二も襲われたりしないでしょ」

「まあな。おそらく、井芹はつけていった先で何かを見たんだろう。そして、へマをして見つかってしまった」

「へマって言わないでよ」

「悪い」

和歌子は少し険のある目つきで俺を睨んだ。俺は素直に謝った。

「……まあ、いいわ。ドジ踏んだのは事実だものね。でも、健二はどうして雑餉隈に捨てられてたんだろ？」

「脅しだらうな。他に説明がつかない。井芹自身というよりは、雇い主である俺に対してだろうが」

「これ以上、自分の後を付け回したら命はないぞって？」「多分な」

井芹は自分の背後関係を白状しただろうか。

おそらくしただろう。そうでなければ開放される筈がないからだ。村上は井芹の肘や膝の擦過傷を逃げ出したときのものだろうと言っていたが、監禁場所から自力で脱出できていながら、その後に意識を回復できない状態に陥るとは考え難い。井芹はすべてを白状させられた上であの場所に捨てられたのだ。

それを警告だと判断するのもそれなりの理由はある。

俺がこの事件に関わってからすでに三人の犠牲者が出ている。一人目は井上徹、本名は石川徹。二人目はエルモ、本名は近藤遼一。そして、三人目が井芹健二。

だが、この三人の被害状況は共通点があるようで、実は三人全員に通じるものがない。井上とエルモは浦辺康利、高田泰明の関係者だ。だが、井芹は違う。一方、井上と井芹は殴る蹴るの暴行を受け、意識が戻らないほどの重傷を負わされているが殺されてはいない。エルモは明らかに意図を持って殺害されている。

構図を読み取るには情報が不足しすぎていて仮説しか立てられないが、その仮説によれば井上と井芹を襲った連中と、エルモをハイブリッドカーでひき殺したのは別の連中である可能性が高い。捜査では犯行の手口の類似性は重要な要素で、井上・井芹のケースとエルモのケースではそこがあまりに違い過ぎているのだ。

だが、そうであれば別の懸念が出てくる。井上と井芹に暴行を加えたのが熊谷の手の者であるとすれば、それは浦辺康利が行っていたであろう脅迫、つまり、榊原祐輔の医療ミスと村松俊二の死に関

する二つの隠蔽工作に関わることだろう。敬聖会の事務長という熊谷の立ち位置からすれば、奴は隠蔽工作を維持する側に立っていない。なくてはならない。

だが、現実には脅迫行為を行っていた浦辺は熊谷が事実上所有する会社の人間だ。確証はないが浦辺に隠れ蓑となる戸籍を用意したのも熊谷である可能性が高いし、更に言えば、自分の秘書である桐島沙耶香にサポートもさせている。

つまり、熊谷は脅迫する側とされる側の両方の陣地に足をついてある種の出来レースを演じているのだ。そんなことをしなければならぬ理由は分からないが。

しばらくの間、黙って考えを巡らせていると、和歌子は演奏の終わったドナルド・フレイゲンの *The Nightfly* をセルジオ・メンデスの *Timeless* に変えた。オープニング・トラックの *Mas Que Nada* のメロウなピアノの前奏に続く軽快なパーカッションがスピーカーを揺らした。

「しっかし、あっさりと捕まった上にペラペラ喋らされるなんて、わが夫ながらなっさけない奴ねえ」

さつき、俺がへま呼ばわりしたときには怒ったくせに情け容赦ない言い草だった。まあ、自分は言うのは構わないが他人に言われるのは気に食わない事柄というのはある。

「そう言うな。誰だって暴力に晒されれば、格好のいいことばかり言っていられやしないさ」

「リュウさんも？」

「俺は痛いのが嫌いだね。まあ、そのときでも、口からでまかせの一つや二つは混ぜ込むだろうが」

「そうよね」

井芹の口から俺の存在が洩れたのは仕方がない。ただ、それが意味するところに熊谷幹夫が辿りつくにはそれなりの時間が掛かる筈だ。そして、井芹が雑餉隈に放置されたのが今朝早くであれば、それに十分な時間が経っていた。

俺は事務所階下のセレクトショップに電話を入れた。

「はいはい？」

店主の声は朗らかだった。それで俺の疑問の答えは聞いたようなものだった。

「来客は？」

「ありませんね。念の為、上の階の人たちにも声は掛けといたんですが、それらしい話はありません。リュウさんがよく使ってる裏階段から侵入されたらちよつと分かりませんが」

「あの階段のドアは外からは開かない。ドアノブ自体がないから俺が使う非常階段のドアはその目的上、施錠はされておらず、中からは押すだけで開けることが出来る。だがそれでは防犯上の都合があるのでドアの外にはノブが取り付けられておらず、手を引っ掛けられるような出っ張りの類も存在しない。外から開ける場合の為に磁石を仕込んだ取っ手が用意されてはいるが、それも踊り場の鉄柵の足元の金属板にカモフラージュしてある上に荷物をごちゃごちゃと積んであるので、まず気づかれることはない。

ちなみに俺の事務所はビルの三階の一番奥にある上に、一階から二階、二階から三階に上がる階段が一繋がりになっていない為、日中に近づこうとすればテナントの住人の誰かの目に触れてしまう。しかも、お隣のモデルプロダクションは女性の出入りが多いので独自に防犯カメラを設置していて、ビルの入り口と三階に上がる階段の脇には警告のメッセージ板まで設えてある。

「本当に誰か来るんですかあ？」

店主はいかにも疑わしそくに言った。

「分からんな。来て欲しいのか？」

「そういう訳じゃないですけど。まあ、ちいネエは自慢の少林寺拳法の見せ所だつて一人で盛り上がってますけどね」

「ほう？」

「あいつ、リュウさんにいいとこ見せてデートに連れてって貰うんだって張り切ってますよ」

ちいネエ 本名はちづるといふ。苗字は知らない。は店長の従姉だか又従姉だかに当たる古株の店員だ。信じられないくらい男運が悪く、今も離婚調停中の夫と勤労意欲に欠ける恋人を抱えて生活に四苦八苦している。

アパレル業界に多い三十代半ばにしては若々しい容貌の持ち主で、趣味も同じように若く、週末近くになると派手な化粧をして夜な夜なクラブ通いを続けている。俺が市内に幾つかの不動産を持っていてそこそこの収入があることを知ってから、何かと秋波を送り続けられているが、俺はジャズを馬鹿にする女とは付き合わない主義なので相手にはしていない。

「そんなことしなくても、デートならいつでも付き合おうと伝えてくれ。尤も、親不孝通りのクラブ巡りは勘弁して貰いたいが」

「そう伝えときますよ。 えっ、あ、リュウさん、ちょっと待ってください」

店主は受話器を押さえて、その向こうで誰かと話した。少しの揉み合いの気配の後、サバサバした喋り方の女と相手が代わった。

「もしもし、リュウさん？ あたし、ちづるですけど」

「久しぶりだな。旦那は元気か？」

「相変わらずって感じ。もう、やり直しなんか出来っこないんだから、さっさとハンコ押せばいいのにな。 って、そういう話じゃなくて。ついさっき、リュウさんどこにお客さんが来てたわよ」

「誰だ？」

「えーっと、名刺くれたんだけど……。大沢隆之さん、だって。県警の人。知ってる？」

「昔の後輩だよ。何の用か、言っていたか？」

「ううん、いないんじゃないって。来たことだけ伝えてくれって言ってたわ」

誰が表れると予想していたわけでもないが、大沢の来訪は大きく予想を外れていた。

一昨日の夜、中央署で偶然出くわしたただけだが、それで懐かしく

なって訪ねてきたのだろうか。あり得ないことではない。尤も、奴は俺と同じで仲のいい同僚とでもプライベートではあまり付き合わない男だった。

大沢の携帯電話の番号はまだメモリに残してあった。俺はそれを鳴らした。

「もしもし、先輩ですか？」

重苦しい緞帳を想像させる物静かな声。この男が声を荒げたところを俺は数回しか見たことがない。

「ウチに来たそうだが、ちよつと出掛けていてな。どうした？」

「先輩、一昨日の親不孝通りの傷害事件の被害者とお知り合いだそうですね？」

誰が喋ったと問う必要はなかった。機捜の野口も捜査会議には出る筈だし、そこで被害者の交友関係が話題に上れば俺の名前を出すのは当然のことだ。問題はそこではない。

「どうして、それをおまえが訊いてくるんだ、大沢？」

大沢は浦辺康利殺害事件の捜査本部に手伝いに来ている身だ。井上の傷害事件で機動捜査隊との引継ぎに立ち会ったのは中央署の人手不足によるもので、大沢が正式に捜査陣に加わっているからではない。

「実は……井上とは個人的に知り合いなんですよ」

「おまえと奴が？」

「ええ。正確に言うと、井上の彼女のエミちゃんが知り合いなんですけどね。彼女、昼の仕事で看護師をやったことがあって、ウチの娘の担当だったんです」

「由加里ちゃんのこと？」

大沢には離婚した細君との間に一人娘がいる。心臓に重い障害を抱えていて、成長も同じ年の子供に比べて大きく遅れていると聞いている。俺の記憶に間違いがなければ今年で一〇歳になる筈だが、最期に見舞った四年前もとても六歳には見えなかった。

「先輩も奴と知り合いだって聞いて、事件について何かご存知じゃ

ないかなって思ってた……」

「そういうことか」

だが、話してやれることは何もなかった。仮にあったとしても大沢に話しても何にもならない。この男に捜査権がある訳ではないのだ。

「悪いな。俺もそんなに深い付き合いだった訳じゃないんだ」

「そうですか、分かりました。あの……先輩？」

「何だ？」

「今度、一緒にメシでもどうですか。いろいろ話したいこともあり
ますし」

「考えておくよ」

何か言いたそうな歯切れの悪い沈黙があった。だが、大沢は「また電話します」と言っただけで電話を切った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1473r/>

雨の中の薔薇

2011年9月26日03時11分発行